やまぎと

会報１４号（２０００年冬号）

お知らせ

行事

スキー合宿in野沢　２月26日（土）～27日（日）
シャクナゲの宴　５月12日（土）～13日（日）

会報

21世紀より、年度に１冊でお届けします。

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会

秋の夜　山で一泊しました。

外は木枯らしが吹き
葉を落とした木の枝が　ギイギイ鳴っていました。
ランタンのろうそくのあかりで本を読むことも
街では味わえない　山での楽しみです。

遠くの山には　もう初雪が降り
星明かりの中でも　白くなっているのがわかります。

揺れる枝の上に　翼をたたんだミミズクが　静かにとまっていました。

テントの布までとおすような輝きが　ふたつ。

21期　竹中　Ｂｉｎ

目　　次

＊表紙 …… 21期　竹中　敏
＊「やまざと」によせて …… 会長15期　奥名　正啓　3
＊行事お知らせ …… 4
＊特集　犀奥＆ベルクハイム …… 5
　Ｑ＆Ａ、35周年記念誌復刻（ＢＨ13号、林　正一） …… 9
　高三郎標柱設置作業 …… 15期　舟田　節子　12
　現役バイト隊 …… 43期西脇幹雄、43期加藤菜就、45期深作良太　16
　2000年度小屋作業報告 …… 43期　矢田部　桂　19
　2000年秋　山小屋酒場 …… 13期　辰野　隆義　20
　ワンゲルセカンドハウス …… by　せっちゃん　22
　山渓　84.9　犀川源流の山々を縦走 …… 28期　畠山　潤　25
　「白山－ＢＨ」ＰＷ …… 30期　野田　和裕　26
　夏合宿　白山・ＢＨParty　ＢＨ33～37号復刻 …… 37期　山本　英男　49
＊特集　花・星・人in南竜 …… 54
　15奥名　０田村　４高田　８伊予　11井上　11青柳　13吉田　15高村
　15松林　15上馬　15鈴木　15佐野　15間所　15宇野　17宇野　15舟田
　18大西
＊同期会報告 …… ３西尾皓史　９鍋島武　13柴田茂樹　36奥出聡美　74
＊オブラチナヤ山登頂記 …… ７期　村田　泰恵　81
＊私の山スキーの楽しみ方 …… 26期　畠山　潤　87
＊夢・風を掴んで空へ・遠くまで飛びたい。 …… ３期　登内　郁夫　90
＊西枇杷島町水害報告 …… 37期　柴田　祐介　98
＊白山麓　出作りの村の記録 …… 11期　長岡　正利　102
＊白山のオコジョ …… 15期　上馬　康生　105
＊ＯＢ通信 …… 107
＊顧問のひとり言 …… 顧問　前田　達男　114
＊現役情報　夏合宿　秋のＰＷ …… 115
＊ネパール日記 …… 43期矢田部　桂　43期清水　健作　117
＊ＯＢ会会計報告 …… 23期　鳥越　伸博　125
付録　ＯＢ会報送付者名簿　2000年度現役名簿（42期～45期）

「やまざと」にそえて

ＯＢ会会長　15期　奥名　正啓

ＯＢの皆様いかがおすごしでしょうか。

いよいよ2000年も終わりを告げ、21世紀の幕開けとなりました。ふだんの生活においては、西暦より和暦に慣れ親しんでいるため、そう画期的なこととも思えないという方も結構多いのではないでしょうか。同じものでも見る人によっては随分と違った見え方をするものです。

ヤツデという植物は皆さんご存じでしょう。生育地沿岸とありますが、そう、北向きの便所の横などによく植えられている手のひらのような葉っぱをしたやつです。秋も終わり頃になると、丸いボールのような白い花をつけます。どちらかというと目立たないのですが、香りが強く、活動の鈍った虫でもおびき寄せられるのでしょうか。また、その香りで、臭い消しにとして便所のそばに植えたのでしょうか。

ヤツデというから８つに葉が裂けているものと思っていませんか。近くに必ずありますからよく見て下さい。実際には８つに裂けているものはありません。もともと先の尖った楕円形のような葉の両脇が裂けて３つに分かれ、その両端の外側が裂けて５つに分かれ…というふうに裂けて、７つ９つとなっていきます。したがって８つにはなりません。これはつい最近図鑑で知ったことで、実際に見てみると、なるほどその通りでした。最も多いのが７つと９つのようで、平均すれば８となるので、ヤツデと名付けたというのは、本当やらこじつけやら分かりません。最初に名付けた人がぱっと見て、８つと思ったのかもしれません。

本当によく見ないと、思っていた通りかどうかわかりませんね。まして、あやふやにしか捕らえていない事については、よくよく確かめてみる必要があります。私の周りにはもちろん、皆さんの周りにも、そんなことがたくさんあるに違いありません。

さて、我がＯＢ会は、皆さんにはどのように見えているでしょうか。もちろん一人一人皆違った見方をしているでしょうし、取り組みや思い入れも違うでしょう。思想団体や、宗教ではないのですから、それはそれで当たり前だと思っています。

でも、もう一度、ＯＢ会というものを見つめ直してみて下さい。思ってもいなかった新しい側面を見いだすかもしれません。あるいは、かつて密かに埋めておいた楽しい宝物が見つけられるかもしれません。

20深田 19栂　20久富　23鳥越　43加藤　16北川　13辰野

15舟田　43西脇　43深山　43奥野　43矢田部　43杉村

43阿納　43井澤　43小倉　43清水　15奥名　43谷上

【10月28日　新橋「こうや」にて
ＯＢ役員と、現役３回生（43期）
懇親会　現役３回生は全員】

☆☆　スキー合宿ｉｎ野沢　☆☆

（第４回ＯＢスキー合宿）

◉日時　平成13年２月26日（土）～27日（日）

◉お宿　野沢温泉　リゾートハウスふるさと

長野県下高井郡野沢温泉村6556

☎０２６９－８５－２２４１

◉申し込み　２月15日までに、メール、電話、郵便、いずれかで事務局まで。

☆☆　シャクナゲの宴　☆☆

２１世紀イベント

♪高三郎の尾根の麓の　倉谷の流れ　オロロがとれる
一度おいでよ　わが　ベルクハイムへ
オッハイヤーオッハイヤーオッハイヤー
鳴るは　ライライヨー　ライライヨー♪

ＫＵＷＶの汗が一番しみこんでいる山、高三郎。その麓、倉谷に建つベルクハイム。

「高三郎」「倉谷」「ベルクハイム」…どのキーワードで検索（？）してみても、金大ワンゲルが、筆頭にでてくるはずです。そして、リンクされてくる思い出の数々。

ワンゲル部員である限り、それらは、その時代時代の変遷の中にありながらも、みなさんの青春時代に重なってきました。

今、金沢の街も、お城も、変わりつつあります。ＩＴ革命は便利な一方、走らされている気がします。ますます変わり、走るであろう21世紀に、変わらないままの自然が、時間が、金沢の奥に残されています。

カモシカやサルが、シャクナゲやユキツバキ、カタクリやキクザキイチリンソウが、昔からのお馴染みさんを迎えてくれます。

そう、世界遺産なんて目じゃない！

我々には、ベルクハイムがあるのだ！！

✷一番美しい季節にお誘い。

✷ダム湖周辺路が、この冬ダム管理事務所により整備されています。

✷金曜日より参加であれば、資材搬入ボートに便乗できます。

✷倉谷特製　山菜メニューでお迎え。

✷いわずもがな、高三郎のベストシーズン。シャクナゲをかきわけた後は残雪の下にのぞいているかもしれない標柱をお確かめ下さい。

◉日時　平成13年５月12日（土）～13日（日）

11日（金）は資材運び兼前夜祭

出入りは自由。参加希望者の中で配車をします。

◉集合・解散　犀川ダム　（希望者は小立野工学部キャンパス）

◉参加費　３０００円　　差し入れ歓迎

◉申し込み　４月上旬　再度公告します。参加の場合、参加日程、交通手段などを提示の締切までにお知らせ下さい。

◉やること　ベルクハイムに泊まる。山菜宴会（パーティー）。

イワナの骨酒がでるかは、釣り師次第。

あと、何でも自由…釣り、昼寝、登山、散策、…etc.

少し、お手伝い…ペンキ塗り？（参加者の人数、資質により検討）

☀☀☀特集　犀奥＆ベルクハイム☀☀☀

【２０００年秋小屋作業
９月５日（火）～７日（木）】

角田	矢田部	奥野	西	山本	西脇	加藤清水	谷村	日野福
渡	竹内		日向	中川	深作		松山	村河原
								井澤

ここは某大ワンゲル部室。合宿コースを検討中。彼、彼女達は中高年ステッキ軍団の列なす山はもう意中にない。クマに会っても人には会わない…そんな日本の秘境に浸かってみたい。

あるではないか！国立公園白山から、ブナの樹海を越えて延びている北方稜線。深田百名山に惜しくも漏れた笈ケ岳を越えれば、その先には古都金沢が。夢二逃避行の温泉を浴び、きときと魚と、菊酒で打ち上げだ！

「どこ、問い合わせときましょう？」

「〇〇と、△△と…。そや、そこの地元は金沢大やろ。」

「そういえば、ちょっと読んだ資料の中に、高三郎山の麓に金大ワンゲルの非公開の山小屋があると…」

「山小屋？スゲエ！」

そう、どこの誰が、金大ワンゲルに、槍穂や剣の情報を問い合わせてくることがありましょう？

外部から見て、金大ワンゲルの「フィールド」は、白山とそこにつながる山々です。四季を通じて親しんでいる筈と思われている山域なのです。今も金沢の筋の通った山屋なら、「高三郎は、金大ワンゲルの山だ」と、答えてくれます。それほどに歴代部員の汗が、染み込んできた山域なのです。

その麓にあるベルクハイムは、「我々にも山小屋があったらなあ」の、創部以来の夢として建設されました。

「山小屋が欲しいなあ。テントより広いし、担いでいかんでいいし…。気兼ねなく騒いだり、のんびり好きなことしたり。傍に静かな山があって、スカイラインコースなんて一周がやれて、イワナ釣りが楽しめて、沢詰めもやれて、そんな場所にもてたら、もっといいな…」

人は手にしてしまうと、その良さが見えにくくなります。維持がたいへん、縛られる…（男と女の関係もそんなもの！）。

長いようで短い現役時代に、犀奥やベルクハイムの良さを知らずに、ＫＵＷＶを卒業してしまうのはあまりにもったいない。

さらには、事務局長が分析するに、もともと犀奥と、北ア他メジャー山岳は、対立する指向ではなく、メジャー山岳が「ハレ」に対しての「ケ」つまり「日常」として犀奥は位置していました。そうそうハレの山へ、時間も金も持つわけでなし…日常に親しめる山域、手軽にトレーニングもやれ、自然に浸れる…。何も地元に縛るためではなく、よりワンゲルの目的を達成するために開発されていったのです。実際、山行数が減っているのは、犀奥山域の欠落が主因のようです。

また、そうやって犀奥のよさ、部における位置づけが伝わらなくなったのは、部誌ベルクハイムの休刊に負うところ大です。手にするのは山岳メジャー雑誌ばかり、そこに載る山が山とインプットされていきます。

ついには「新道？旧道？」「砺倉？コシアゲ谷？」になってしまいました。

嘆いてばかりはいられません！
手にしているものの価値を知ってほしい！
そんな意図での特集です。

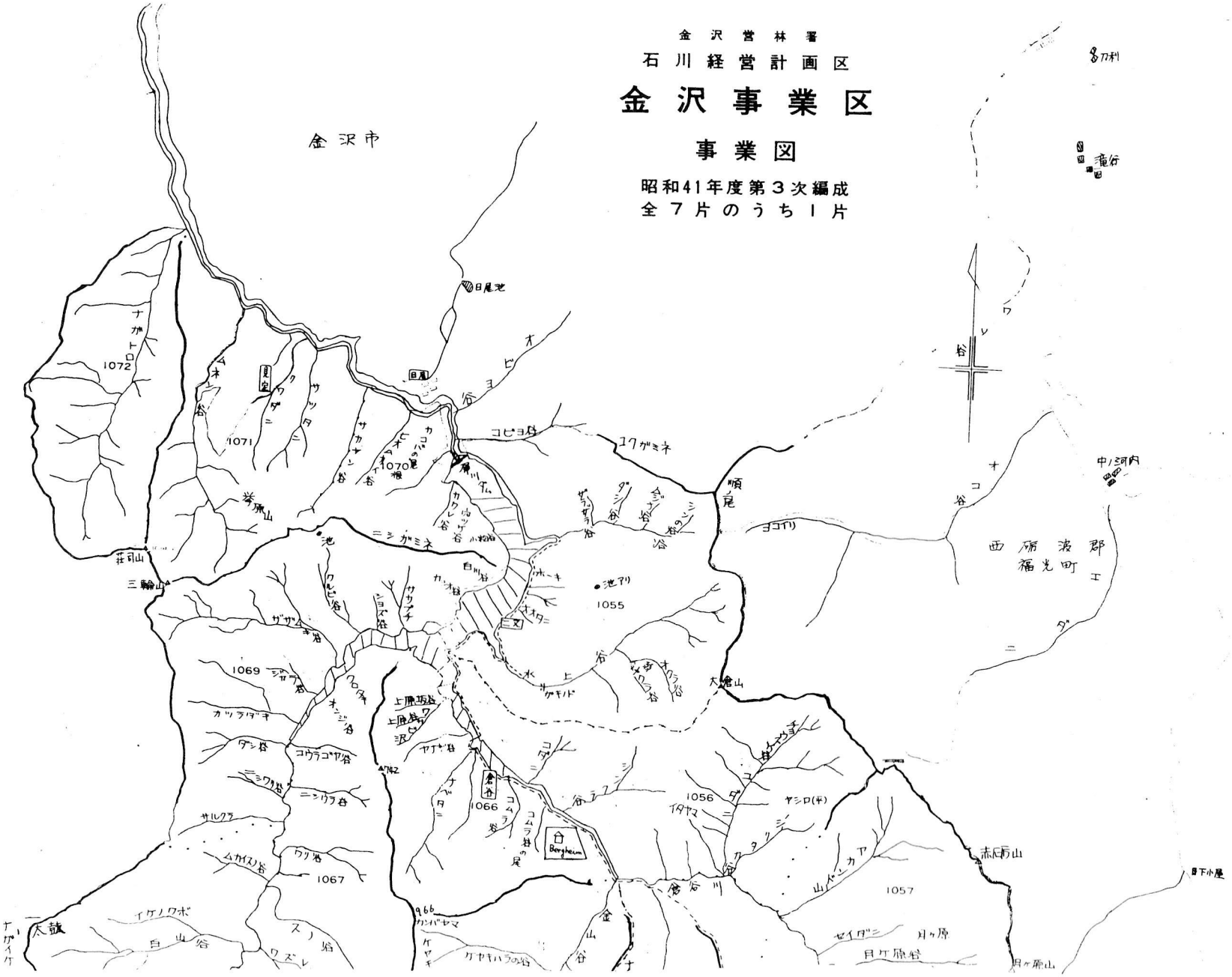
金沢営林署

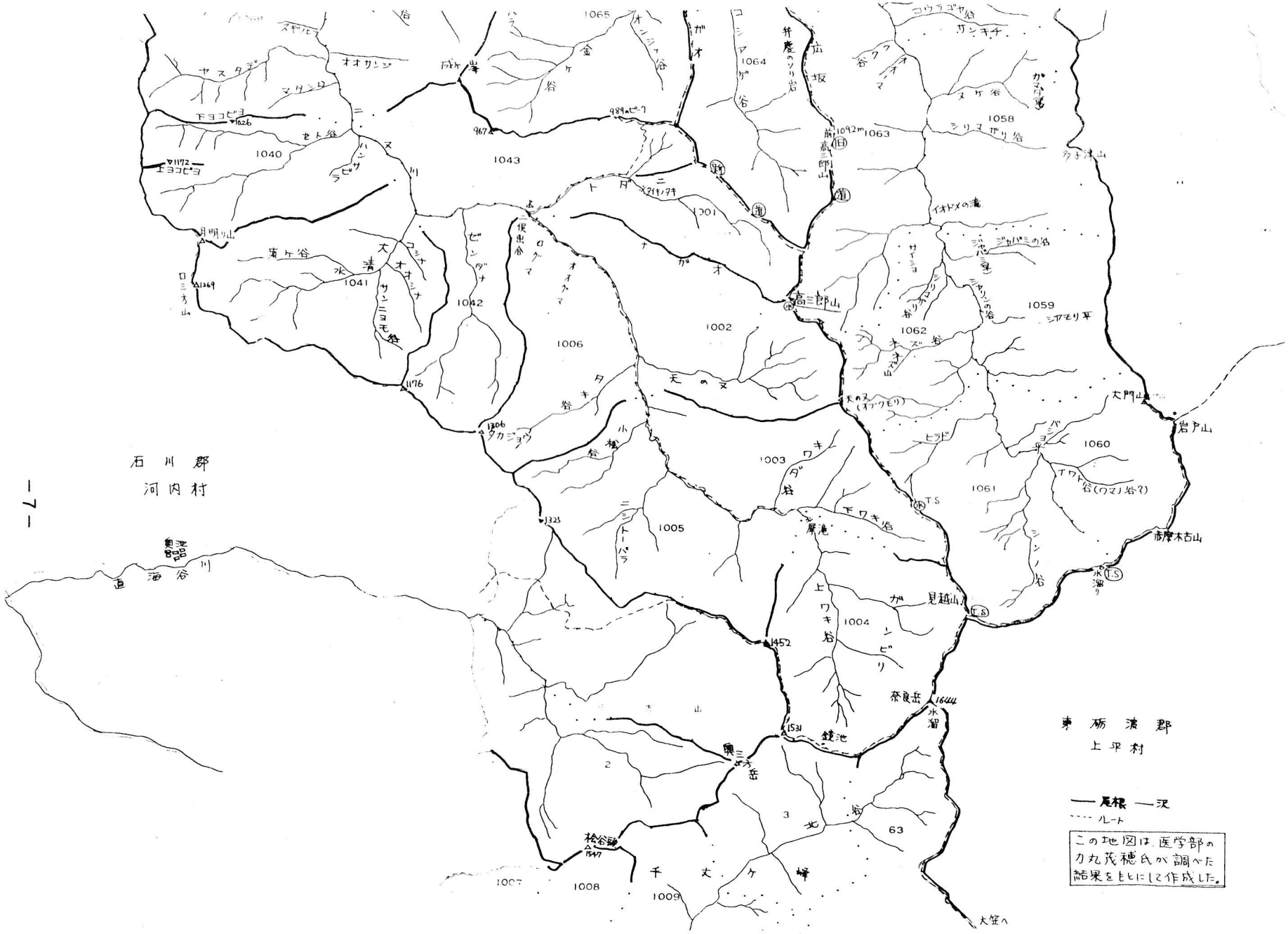
石川経営計画区

金沢事業区

事業図

昭和41年度第3次編成
全7片のうち1片





この地図は、医学部の力丸茂穂氏が調べた結果をもとにして作成した。

—— 尾根 —— 沢
---- ルート

Q．　ベルクハイムの命名は？

A．建設当時の学長により命名されました。これは部誌の名前も兼用です。

和訳すれば「やまざと」。それでＯＢ会報名も「やまざと」になっています。

Q．　どこに管理責任がある？

A．金沢大学学生部の所有物件です。経費調達・交渉・建設はワンゲル部が行いました。が、事故の際にも認識できるように、学生部内ワンゲル部が、対外的な立場です。

土地は営林署からの借用です。この賃貸料年3000円は、３年分一括で、学生部が払っています。

実質管理はワンゲル部であり、かつての小屋使用規定では、リーダー会への届け出による許可制となっていました。

なお35周年時に発足したＯＢ会は、顧問・会長・事務局長が、正式に学生部に挨拶に行っています。また、ＯＢ会報も以後必ず届けられています。これらは事故時にサポートできるＯＢ会をめざしての学生部への対応です。

Q．　なぜ、倉谷が選ばれたのですか？

A.「山小屋が欲しい！」は創部以来の夢でした。まともな部室がなかった時代でもあり、ワンゲル活動を行う野外拠点が欲しい…は、全部員の夢であったようです。その最難関は資材（資金）でした。

それが、犀川ダムの建設が決まり、倉谷の移転家屋を譲り受けられる…という、突然の解決をみることになりました。昭和38年、創部６年目のことです。

その移築先は？医王山は、有料化と俗化でバツ。国立公園に決まった白山は、あらゆる面で無理。当の倉谷周辺なら、今後の作業に便利、周囲の山が未開発の魅力。冬期使用が困難を除けば新しいホームグランド開発に最適の地と決定されました。さらには、現在地（実はお寺の跡）の高台が、平坦である、見晴らしがよい、雪崩の危険がない、河原から玉石・砂利などの運搬が楽、約百米の長さのホースで水がひけるなどの利点により選定されました。

保安林であったために、その解除、かつ正式借用ができたのは昭和39年７月です。

Q．　新道？旧道？

今、現役のみなさん達が整備しているシャクナゲ尾根の道を、「旧道」。倉谷からは、手前にある方の、ナガ・クラコシ尾根にある道を「新道」といいます。

「旧道」は倉谷に人が住んでいた時からあった従来の登山道。クラコシ尾根部分は、ワンゲルが切り開いたもので、「新道」と通称されています。

ベルクハイムが完成した翌年から、さっそく周辺の山の調査と開発が開始され、まず、高三郎が手掛けられました。

後の「新道」は、ナガ尾根部分（砺倉分岐まで）までが、ロボット雨量計設置のため、当時道がついたばかりでした。それは雨量計設置の作業員にきいて判明。部の方は金山谷をつめ、鉱山跡に至り 989ピークに至るＡルートを偵察中のことでした。

以後、判明した作業道をクラコシ尾根伝いに延ばして、高三郎へ至る道Ｄルートを完成させ「新道」としました。

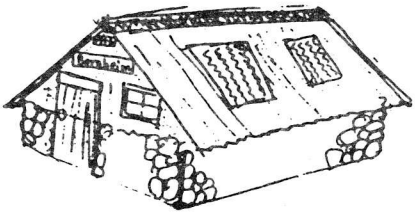
砺倉分岐からは沢へ下り、二俣川源流へのＣルートを開発。これが犀滝への道になります。

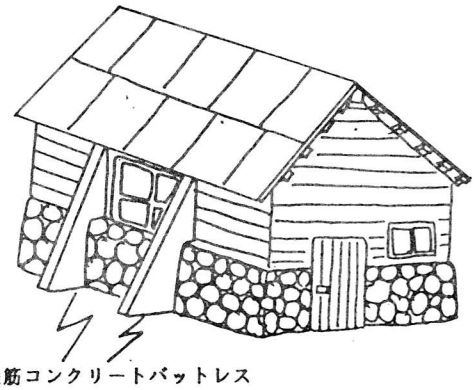
さらには、高三郎を越えて、見越－赤摩木古山－大門山－月ケ原－小屋のスカイラインコースも、考えられ、実際、見越との間には「ワンゲル平」の地名も残っています。

また、白山－ＢＨＰＷが完全縦走されてからの一時期、見越－奈良－奥三方－奥池の周遊コースが取り組まれていたこともあります。小屋作業以外に、頻繁に犀奥のＰＷがでていた頃でもあります。

そんな1980年代前半以降、時代の流れ、部員減、他諸々で、小屋作業は衰退の一歩をたどることになりました。

以上のように、「新道」に限らず、犀奥にあ





鉄筋コンクリートバットレス

る多くのルートは、金大ワンゲルが切り開いたり、あるいは修復して登山道としたものばかりなのです。

Q．　小屋の意義

A．初代小屋建設　　昭和39年　親方６期
　　全工費７万円（山小屋建設積立金、ＯＢ会寄付込み）
　二代目小屋建設　昭和49年　親方16期
　　全工費28万円（ＯＢ会カンパ）
　二代目大修復　　平成５年　親方36期
　　ＯＢ会58万円カンパ（138 名）

ＢＨ誌からざっと拾った数字です。その折々の現役が企画し、その時々のＯＢが資金援助をしてきました。山小屋は、現役とＯＢの協力の象徴でもあるのです。それが、小屋を大事にしていきたい理由の一つでもあります。

現在、新トレは高三郎を離れ、またダム周辺路の未整備から、小屋に入るのもＰＷ扱い（３週間前までに学生部への届け出が必要）となりました。年に１回、小屋作業時のみに入るという部員がほとんどのようです。

「時の流れ」…それは逆らいがたいものですが、ただ一律に流されている程馬鹿らしいことはありません。入りやすい情報、華やかな情報に流され、アイデンテティを失うのも愚かなことです。人生は短く、学生時代はもっと短い。ＫＵＷＶの情報が確かに伝わり、「もし、なかったら？」の問い掛けもしながら、中身濃い活動であってほしいと願います。

現在高三郎は、犀川源流自然環境保全地域に指定され、さらに厳重な、犀川源流森林生物遺伝資源保存林にも指定されました。日本でも第一級の豊かな自然があり、未来へ残すべき価値ある自然の残る地と認められたのです。

そんな第一級の地に、既得権で山小屋を構えているのが金大ワンゲルなのです。

ムクドリ

倉谷について

ＢＨ13号　35周年記念誌上p265

私達のクラブの山小屋は、懐かしい高三郎の麓、昔の倉谷部落の跡が今も残るところにある。その倉谷は、倶利伽羅の戦いに敗れた平家の落人が、月ケ原山を越えて逃れて住み着いたと言われている。そして江戸時代の初期には近くの成ケ峰あたりに金鉱脈が発見去れ、前田藩の金山として貢献するとともに繁栄するようになった。（金沢の有名な氷室饅頭は、夏でも雪の残っているところがあった倉谷で造られたとも考えられる。）金の他、銀や鉛も産出し、金沢城の鉛瓦まで作ったといわれ、鉱小屋や農家が合わせて二百戸もあったそうだ。鉱脈を掘り尽くし、一旦は閉山したが、明治に入って新しい鉱脈が見つかり、戸数四百、千人もの人が住む大きさとなった。今の堰堤の上流には鉱山を区切る門番があり、二輪の馬車が行き交い、轍がいつもついていたそうだ。山小屋の対岸に見える二つの黒い穴は採掘物を製錬した所で、煙が絶えなかったそうだ。

しかし、この繁栄も長続きはしなかった。製錬の煙は周辺の山を枯らし、鉱毒の出る川に魚は少なくなっていった。樹木のなくなった禿山は、洪水と雪崩となって人々を脅かした。そんな時、鉱夫と会社側とに賃金についての争議がもちあがった。鉱夫達が坑道を閉じたことで会社側は見切りをつけ、職を失った人々は次第に部落を離れていった。また昭和15年には、金山谷にあった採掘小屋が雪崩に押しつぶされ人が死んだ。そして葬式の時にまた雪崩が起こり、残っていた人までも死んだという事故があった。それよりこの鉱山は完全に廃鉱となり、人々もますます少なくなってしまった。

残った人々の主な仕事は炭焼きであった。雪の少ない半年間山に入って炭を焼き、冬になると炭俵や縄を編んで暮らしていた。その他春にはウドやワラビ、ゼンマイが採れ、屋根裏では蚕が飼われていた。一方谷間の狭い耕地である上に、冷たくて鉱毒のある水には米はできず、アワ、ソバ、アズキ等を栽培していた。そして取れた物を五箇山方面や金沢に送り出して生活していた。二又を通り拳原山を越えて熊走に出掛け、時には遠く土清水までも運んだそうだ。今でこそダムまでの広い道があるが、昔は月ケ原山を越えて富山の方へ行く方が便利で、そちらの方にもつながりがあった。

倉谷から少し下流に二又部落があり、さらに下流に日尾、見定という部落もあった。その二又には常設の分校があり、冬になると倉谷だけの冬期分校もできた。これらの部落のつながり

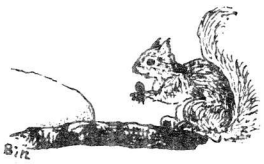
は深く、大きな血縁関係があった。冬、深い雪に閉ざされる部落は、食料不足や病気などの困難を克服しなければならなかった。病人がでたら背負子のようなもので担いで町まで運んでいったそうである。だから互いに助け合う生活であり、厳しい自然と戦いながら、一方ではその懐に抱かれて豊かな心を持った生活であった。しかし、昭和37年に着工した犀川ダム建設のため、二又部落は湖底に沈むことになり、ダムによって孤立化する倉谷の人々も、生まれ故郷を離れざるをえなくなってしまった。

ところで、今山小屋がある付近には寺があったそうだ。また私達が栗を取りに行く時に残っている鳥居や石段は神社の跡で、日吉神社といい、毎年５月15日と９月15日には祭りがあった。そこにはサルが祭ってあったという。倉谷ではサルが神であったらしい。しかし、一時サルが非常に多く出て、弁当を盗んだり、アワなどを食い荒らしたりするので人を雇って捕らえた事もあったという。また一昨年騒がれたクマも皆でよく猟に出掛けたそうで、大勢で追い詰め鉄砲を持った人が射ったという。クマは視力が劣るが耳がよく音には敏感だから、鈴を鳴らしたりするのは効果があるそうだ。またクマは噛み直すことはしないらしく、一度噛んだらなかなか離さない。だからクマを追い込む時は必ず帽子を被っていき、立ち向かってきたら帽子を投げてそれを噛ませればよかったという。それから８月から９月にかけて特に悩勝れるオロロは、ススキが多いと多く現れ、ススキを切っておくと少ないそうで、黒い色のものによくくっついて、白い色にはそれほどでもないということだ。

今残っている部落跡の家は丈夫な柱でできているけれども、深い雪に閉ざされたり、風雨にさらされたりしてつぶれてしまうだろう。しかし、一度は禿山になった林や緑は復活し、その中で豊かに生活していた人々の心が残っている倉谷。そして深くおおきな自然の愛を感じ取れる所に私達の山小屋があり、よく行けるのは幸せである。これからも大いに活用していくべきだと思う。

以上は、元倉谷の住民、現在林業事務所に勤務されている尾崎義雄さんの話をまとめたものである。

（編者注：その尾崎さんの息子さんが、スポーツ振興課の主査で、補助金のお世話になった尾崎敬志さんでした。）



（創立35周年記念誌　上巻　p14より）

私と金大ワンゲル

金沢ナカオ山岳会代表　林　正一

金沢ナカオ山岳会（以下ナカオとする）と金沢大学ワンダーフォーゲル部（以下ワンゲルとする）とは、組織としての付き合いは全くなかったが、ナカオが医王山の有料化で医王山を飛び出し犀川源流（犀奥）に活動の場を求めた時、既にワンゲルが活動の場をそこに置いており、大型キスリングを背にした異様な隊列が駒帰から倉谷への道を歩いていた。異様なというのは、当時の犀川源流は山菜かキノコ採りくらいしか山へ登っていない時代だったからである。

ワンゲルとナカオの共通点といえば、ともに会の活動となる道をもっていた。ワンゲルは高三郎の道など（注１）、ナカオは医王山にナカオ新道を持っている。これまで石川県の山には短い期間であるが、いくつかの新道というものが出来た。残念ながら高三郎の道とナカオ新道以外は消滅しており、当然それらの道を開いたグループ（会）は消滅した。自分らがよかれと思って作った道の維持に努めておればグループは維持されていたのに、と思うと残念な気がする。

犀川源流地域全体を踏査し一冊の本にして発表したのは（注２）ナカオであることから、犀川源流を世に知らしめた先駆者はナカオみたいに思われているが、高三郎山から大門山、奈良岳にかけての組織だった活動はワンゲルの方がはるかに先輩でナカオは後輩にあたる。その先輩の労を称賛することも含めて『なかお・犀奥特集号』にその旨記録させていただいた。また犀川源流の真の先駆者の労に報いたいと思い、京都山の会西尾寿一さんがまとめている『渓谷』にワンゲルの犀川源流にかける情熱を紹介してもらう段取りになっていた。しかし執筆を担当することになっていた部員が倉谷で水死するという悲劇（注３）があり、その計画は進まなかった。これと同じ時期にワンゲル部員の白山縦走の記録（注４）が眠っていることを知り、『山と渓谷』に紹介し、小さいスペースであったが載った。もう少し早く知っていたら大きなスペースで紹介されていたろうにと思うと残念な気がした。その頃のワンゲルが最も油が乗っていた時期でなかろうか、と思える。外部から見てのことなので間違っていたならお許しいただきたい。

私とワンゲル部員との接触の第一歩は金沢営林署の国有林巡検であった。昭和50年頃であったろう、当時犀川源流の国有林を受け持ってい

た金沢担当区の尾倉技官との犀川国有林巡検に行動をともにしたことからで、以後何人かの部員と接触があった。当時の部員たちは、高三郎から見越山にかけての道が荒廃しているのを見て整備しようと意気込んでいた時期でもある。「登山者にとっては大変ありがたいことだが、高三郎の道整備に全力をあげるだけで十分でなかろうか」と諌めたこともあった。手を広げて道整備に追われて苦しむことよりも、楽しみながら道作りをすることも部運営に必要なことだと思ったからである（注５）。実際ナカオ新道はそういう思想のもとで整備されている。

今ナカオに、ワンゲルに在籍したことがある会員とワンゲル部員に影響を受けた会員がいる（注６）。ともに真摯な会員で、ナカオの事業推進に大変役立っている。周辺にはマスコミや行政などで活躍しているワンゲル出身者が何人もおり、ナカオはワンゲルの最も恩恵を受けている団体でななかろうか、ありがたいことだ（注７）。

お互い、これまで同様に自然を通じて様々な体験を積み、生涯自然を愛する人間になるようにしようではないか。皆さんの健闘を祈る。

注）は全て、今回編者が入れたものです。

注１）

1958年（昭和33年）ワンゲル創立。

1960年（昭和35年）医王山開発始まる。

大池キャンプ場整備、魚帰ー奥医王間整備…この後、私有地であった医王山は有料化が決まり、部は開発から撤退。

1962年（昭和37年）白山国立公園決定。

白峰村の依頼により白山湯谷新道開発。コース選定も任された全長４km（室堂ー千歳平ー主谷ー釈迦岳）は、室堂ー市ノ瀬間を４時間で結ぶもの。これは白山ワンゲル道とも呼ばれ、さらに、シゲジー鳴谷山ー砂御前ー青柳山ー白峰と伸びて、青柳新道と称される。昭和48年までは、整備バイトの声がかかっていた。

1964年（昭和38年）部室面積を倍増。倉谷に山小屋建設予定地を発見。建設準備委員会発足。

経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言したのは昭和31年。関門トンネル開通、東京タワー完成と、躍進の明るい気運に溢れ、新道開発や整備に団結できた時代であったよう。

注２）

昭和37年秋、医王山中尾尾根に中尾新道を開いたグループが発展し、金沢ナカオ山岳会となる。その創立十周年記念事業として取り組まれた犀川源流の調査は、記念誌「なかお・犀奥特集号」にまとめられ、山と渓谷エバニュー会報奨励賞を受賞。以後、さらに地元の山の魅力を紹介、登山者底辺の拡大などの事業を推進し、県内山岳会の雄となる。またこの特集以降に、犀川源流域は「犀奥」が通称となった。

注３）

昭和53年５月１日、19期ＯＢ高桑弘親さん、倉谷川上流で地質調査中遭難。ワンゲル部は全面的に捜索活動に協力。ダム湖畔に慰霊碑が建てられている。

注４）

昭和47年10月４日～14日の第３次白山ーＢＨＰＷ（Ｌ高村）もしくは、昭和51年10月３日～15日（Ｌ栂）の第４次白山ーＢＨＰＷ。

注５）

ＢＨ22号（35周年記念誌上巻p214）には特集「小屋作業を考える」が組まれている。

昭和49年山小屋改築。その余勢をかったごとく、登山道はワンゲル平ー見越ー奈良・大門へと延びる。これが新聞に載ったところ、県からは「遭難者がでた時の責任問題」とクレームがつき、以後急速に後退。

特集編集時にはすでに新トレ時の利用のみに落ち、作業が疑問視されるようになった。

昭和57年は、ワンゲル平の名がでてくる最後の作業。以後、新道・旧道に作業限定。

さらには、恒例といいつつ、行なわれなかったり、行っても作業をせずの状態になる。

昭和62年（部誌がなく、部室内記録から）

数年ぶりの大々的小屋作業。小屋の床腐る。

平成３年（部室内記録）この年から、新トレは高三郎を離れる。小屋は屋根もはがれ泊まれなくなる。

平成５年　３年ぶりに高三郎新トレが復活するものの、引火事故で中止。この年の秋、部室も角間へ移転。

平成５～７年　山小屋大修復

平成７年　小屋修復記念。月見の宴

この反省会の時に、金沢市の補助金を受ける団体としての申請をすることを合議。話を進めて下さったのが林さんだった。この時、ＯＢによる山小屋酒場も発足。

続く７年までの３年間は、高三郎で新トレが行なわれるも、以降、医王山新トレで定着。その主因は（事務局考察）、新人募集期間の限定及び遅延により、新人確定が連休以降となること。その後グラウンドでのテン設トレ等の、新人育成スケジュールを考えた場合に、ダム湖周辺路ですら転落者の出る高三郎は、新人にはあまりに危険と考えられたことによる。

かつ、それまでは部行事とされながら実質の無くなってきていた小屋作業は、大修復作業の継続により、部の全体行事として復活をみた。その完成後には、登山道修復が部のバイトとなり年間行事に確固の地位を占めるようになる。高三郎離れはその意味ではストップしたものの、多くの部員にとって「高三郎は小屋作業の時だけ登る山」へと変質していった。

平成10年　順次伸ばした旧道整備が、頂上に達する。

平成12年　金沢市の委託により、ナカオ主導現役バイトで標柱９本を設置する。

注６）もちろん舟田事務局長のこと。もう一人は26期難波さんの友人。さらに同期宇野さんが連れてきた会社の後輩や、17期宇野夫人の妹さんもいた。

注７）白山自然保護センターの上馬さん。県自然保護課の栂さん。新聞社の松林さん、ＮＨＫの沖野さん。また、そういったマスコミと同行の現地取材の際に、バイトに出ているのがワンゲルの現役達。

高三郎標柱設置作業

15期　舟田　節子

＊プロローグ

高尾・吉次山、高三郎の道標設置は平成11年の春には耳にしていた話だった。その時には、高三郎についてはワンゲルが請け負うの話がなくもなかった。但し、その発注元の金沢市スポーツ振興課は、翌年のスポレク祭準備に追われることになり、話は宙に浮いたままとなる。

もとより私は、仕切っているようでいて、現実には書類をきちんと提出したり、伝達したりなどの事務の円滑化しかやれない。どこに、どんな材質の物をと、協議できるような器ではない。だから、「そういった折衝はナカオの林代表にお任せ、あくまでワンゲルは現地作業の下請け」が、はじめからの心積もりだった。しかしながら、いっこうに参加者の増えない山小屋酒場の点からは、「この時ぞ」とＯＢが乗り出してくるとは考えにくかった。また、現役の登山道修復作業にしても、悪天だの、私用だのと腰が引けている。

金大ワンゲル伝統の山！と見栄張って受けたとしても、その後をどうする？

あけて平成12年。雪溶けをおって、吉次・高尾山の８本の標柱は、３回の施工山行で、完了する。「ナカオが受けた仕事だから」で、参加する会員、受けた規格以上にどうしたら長持ちするかの工夫を楽しむ集団…その中にありなが

【昨夜、受け取ったままで積んできたという標柱。目的の高三郎はかなたに。】

元藤　浅野　谷　林　田中

ら、ワンゲルはとてもこんなこと出来ないと、ため息をつく自分がいた。

そのあたりは、毎度ＯＢ会報を贈呈している林代表にも感知できたのだろう。「秋には泊りがけで高三郎をやる」と、「やったー」の余勢のままに発表があった。ホッとする。さらには、「山上に立てる３本の標柱の運搬は、ワンゲル学生の個人バイトで」も追加される。それなら、「ワンゲル伝統の高三郎」のこだわりも満たされる。「泊りがけ」には、わがベルクハイムを使っていただくことになった。

こうして、５００人もＯＢがいながら…と、ただただ、情けなく、腹ただしかった話は、きわめて現実路線での決着をみることになった。

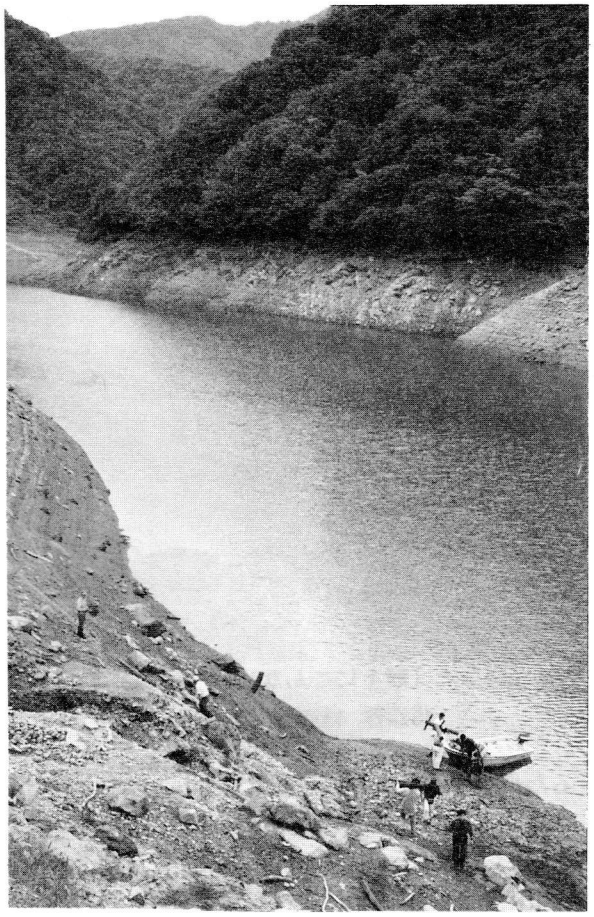
なお、現役バイトについては、小屋作業チーフの矢田部君に、作業で集まる機会に探してもらった。３回生の加藤君（11期加藤忠好氏jr）西脇君、１回生の深作君が名乗りをあげてくれた。

＊参加者
９月30日のみ　今村、谷、野村
９月30日～10月１日　林、古源、浅野、元藤、
　　山口、田中、佐々木、舟田　山本
　　加藤、西脇、深作（左記３名は現役）
10月１日　寺川　曽谷

＊９月30日（土）

標柱が出来上がったのは、昨夜の９時すぎ。塗料がまだ手につく程の代物だった。だから、春先ボートで倉谷に運びこんでしまう…の手も使えなければ、平日のみ可の、ダム管理事務所のボートも使えなかった。ボートは、つてを探して猟友会の方に出していただくことになる。さらに、道路は工事中で、ゲートが閉められており、鍵を借り受けて通過など、すべてに尾鐙がつくような状態で、ダムに到着。

案の定、水位はぐんと下がっており、ダムの階段をずずっと、下りて、さらにヘドロの斜面をつたってでないと搬入できない。これでは危ないからと、初めから崖斜面になっている舟着き場へ移動。９本の標柱とは、高三郎の頂上、クラコシ尾根分岐、砺倉分岐、旧道取り付き、新道取り付き、金山谷手前、倉谷集落跡、吊橋を渡り終えた所、犀川ダムといった、内訳である。全長1.5m、重量８～15kgのこれらに、スコッパ、セメントなどの作業道具と資材、食料、酒、小屋泊個人装備を４往復で搬入。但し、ボートで入れたのは第２の切れ込みを通過してすぐの所、出島の300m手前の張り出し部分までだった。水平道にあげるまでも一仕事。そこから倉谷まで、さらに徒歩での搬入。



【湖岸を降りて搬入。この水位では…】

足場の悪い所での大物のボッカは私達女性には無理と、私と佐々木さんは、小物だけかかえて小屋に先行。窓をあけ、床板をはめ、水を出す。これが、ホースをうめていた砂をどけても、チョロチョロとしか出てこない。ようやく上がってきた西脇君に聞くと、今月初めの小屋作業の際には沢が干上がっていて、水は使えなかったそうだ。

ここで昼食。ビールはそんなわけでまだ冷やせず、まだこれから作業もあるしでお預けとなる。小雨が次第に大粒になりだす。「下部の標柱を設置、上部の標柱はできるだけ担ぎあげておく」の予定で、作業開始。日帰りの人達もおり、３時が本日の作業リミットだ。

担ぎあげの３本については、しっかり荷造りをしなければならない。さらに、上部に設置の物は簡単に補修とはいかず、念入りに防腐措置を施しておきたい。というわけで、ワンゲル関係の私達は残り、浅野さん考案の、アスファルト塗布の麻布を、加熱しながら標柱に巻きつける作業を手伝う。さらにブリキキャップをかぶせるため、先端を切り、これで加工終了。臭いのきついそれを背負子にくくりつけ、いよいよ運搬開始。腰から伸びる1.5mは早速枝に引っ掛かる。足元は見なければならない、上にも注意しなければならない、かがめばバランスが崩れ

【頭上にこんなに突き出る】
45深作 43加藤　浅野　43西脇

るため、後ろ手に背負子の下部を押さえなければならない…で、合羽軍団はしんどそう。彼らの個人装備をザックに持って後ろについた私は、「もっと右」とか「ＯＫ」とか言ってはみたが、どの程度の枝にどの程度かがむかは、体得するしかないことで、間に合いはしなかった。

新道取っ付きに着いた時には、先行の作業隊は、もう旧道口の設置、戻ってきて渡渉前地点に「金山谷」の設置を終え、３本目の新道取っ付きのテン場横を掘っているところだった。

ナカオ式は、下部に横木の付いた標柱を50cmほど埋め、30cm高のステンレスロールで接地面周囲を巻き、標柱とロールの隙間にモルタルを詰め込んでおく。標柱は接地面から腐り倒れてしまう。山中という作業条件下で、どうしたら下部の腐食を防ぎ長持ちする施工ができるかと考えだされた方法だ。行政は発注するだけ、請負はともかくやればよかろう…的な仕事をよく目にする中で、こんな工夫はやっている側も気持ちがよかった。吉次山での８本の先行体験により、掘った土の置場、骨材の石の大きさ、各所に配置していくセメント、水、砂の量などにも配慮できるようになり、現場の地質のみが、作業所用時間を左右するレベルになっていた。

担ぎ上げの方は、砺倉分岐用の１本のみを、現役の３人交替で、３時までと、送り出す。作業隊は上記の防腐作業を設置した２本に行い、そこへ残しておく２本の標柱を背負子にくくり直し、防水シートを巻いた。女性軍は日帰り組と先にそこを離れ、食当にかかる。

本日は、（秋といえば、秋の山小屋酒場メニューといっしょ）栗ご飯に、豚汁、焼き秋刀魚、その他酒の肴。現役も何杯もお替わりをしてくれたから、飯場のオバサンは嬉しかったです。林さんの調整で水ももう少しましに出るようになり、水洗トイレも使えるようになりました。食当の間は、湿気でうまく嵌まらなかった床板を調整しては嵌め込んでいただき、その前にはアスファルトの特製防腐剤も根太に塗っていただきました。おりしも雨は激しくなり、「テントやったらたまらんかったな」と、皆さんには大いに小屋を讃えていただきました。私も大いに小屋を自慢し、利用していただけたことが嬉しかったです。テントでもなく、商売小屋でもなく、手作りの暖かさのあふれた小屋。関わった全員がろうそくを囲んで語り合える空間は本当に贅沢。それをナカオの仲間ともやれたことが幸せでした。小屋の歴史を語った時、空が見え、内部に萩が茂っていた時期もあったことを久々に思い出しました。小屋に関わってくださった皆さん、本当にありがとう！

10月１日（日）

夜中には何度も雨が激しくなり、その度みなさんテントでなくてよかったと思ったそう。そして朝はさわやかに晴れ。

本日、新道は１回生の深作君がチャレンジ。付き添いは山本さん。昨夜遅くに小屋入りしてくれたが、吊橋の所からパカパカ靴底が開いてしまったそう。これじゃ全行程は無理と、針金で結わえて、砺倉分岐までの同伴となった。

旧道は、３回生の西脇君が「高三郎頂上」を加藤君が、「クラコシ尾根分岐」を担いで上がる。彼らの荷物を私が担いで同伴。あとの作業隊は、新道からあがり、砺倉分岐の標柱を設置後、クラコシ尾根を経て、あとの２本を設置と、周回と作業を平行させることになる。この春その周回をやって、クラコシ尾根の藪に懲りていた私は喜んで、彼ら若い燕の守役についた。

彼らは交替にトップをやる。トップは枝払いとクモの巣ベタッの洗礼を受けることになる。合宿の重量に慣れている彼らには、長さの方が扱い兼ねる代物だった。３週間前、もっと気合いをいれて登山道修復をやればよかったと、かぶさる枝に罵っていた。後ろについていた私は、彼らがずっこけると丸太の直撃をくってしまうところだったけれど、ズルッとなってももう片方でピタッと止めてしまう彼らのバランスのよさにさすが若いと感心してしまった。もう私なんかは、転ばぬ先の杖的登り方をやっている。そのうち慣れてきた彼らの方がピッチがあがり始め、私は丸太の直撃なんて心配なしに、彼らの休んでいる所へ追い付くようになった。

【ナカオ・
ワンゲル
合同設置隊】
2000年10月１日

舟田　山口　43西脇　43加藤　佐々木　林
浅野　　元藤　　(by田中)

やはり彼らも、新道、旧道がおぼつかない。クラコシ？砺倉？という具合に、登山道を開いてきた伝統も、小屋の歴史も知らない。「今の現役は…」と言いたい所だが、今一緒に汗を流している私は、知る機会がなかったから知らないんだと率直に理解できた。部誌がなくなって部内で伝えられるものがなくなり、情報は山渓や岳人といった商業誌からのみ入ってくる。槍や穂高など、メジャーな山ばかりがインプットされて、犀奥は好み云々以前にインプットもされていないのだ。嘆く前に、きちんと伝えてあげなければ…。

加藤君の父上は11期で、旧知の方だけに、その息子からの話はゆすりの種にできそうだった。但し、お人柄どおりに大ネタはなく、ケーキをせしめるのが関の山か？家族登山が山の馴れ初めという西脇君は、この秋休みはベトナムへ18日間の旅に出ていたそうだ。あいかわらずきつい登りだったけれど、休憩時間におしゃべりをしながらの山は楽しかった。面倒だろうけれど、本当はいきなり飲み会より、一緒に汗を流した後であった方が好ましい。

ついにクラコシ分岐に着いた。ほどなく林さん達作業隊が着き、穴堀りもあるからと通過していった。クラコシ尾根は春のとおりに荒れたままだったらしい。「新道はわしの持ち場」と言っていたあのM氏の小屋掛けは、金山谷にはなかった。もう高三郎へは入ってこないのだろうか？

彼らは、深作君を待って一緒に来るという。私も頂上へ先行する。分岐からは、よく苅り開けがなされていた。頂上の東側も開けてある。根曲竹の根を堀り、出てきた岩盤はバルーと金槌で割りおこし、穴さえあけばいつもの手順。「俺も男や！」の西脇君が担いできた標柱を埋め込む。深作君は砺倉まで運んだ所で、戻ったらしい。一昨年立てた、石川君製作の看板は割れて落ちていた。この地で積雪に耐えるにはこれだけの物でなくては。こんな物を運ぶ人や、設置を請け負う団体はもう出てこないに違いない。今ホッとして座っている彼らも、今後何度もよかったと反芻できるに違いない。

栄光の記念写真を撮った。

クラコシ分岐においてあった分を埋めて、作業は終了する。加藤君達は先に新道経由で下りて行った。秋の日没は早い。あとは時間と競争の下りだ。急げばなおのこと、こんなひどい下りはないと思える高三郎。沢でのザブザブとゴクゴクで、やっと息がつける高三郎。そう、ミレニアムに２回登ってしまったよ。バイバイ、高三郎。

小屋では深作君と、もう加藤君、西脇君が横になって待っていた。２週間後には山小屋酒場でまた来るから、小屋はざっと片づけてで施錠する。もう薄暗い。ダムサイトのやばい所を少しでも早く通過してしまわなければ。倉谷集落跡と、吊橋の標柱は、本日入山隊が設置しており、証拠写真をフラッシュで撮る。

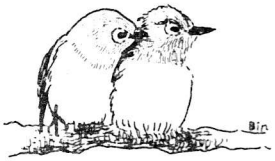
無言の特攻隊は、足元が見えなくなりかけた所で、ダムに到着。ああ、こんな明かりの着いたダムは、第３次白山－ＢＨ隊を迎えにきたあの時以来だ。最後の浅野さんが到着し、ご苦労さんといいかけたところで、「田中さんがいな

い！」。列の間にいたのに、距離があき、どこかで迷いこんだらしい。結局彼は見つかったのだが、現役と、女性軍は、そんな騒動のうちに先に帰らせてもらった。まあ無事だったということで、最後の最後まで、印象深い山行となった。

＊エピローグ

高三郎に立った標柱、何人のＯＢが確かめにくるでしょう？加藤君は「息子を山に煽ったオヤジが、当然見にくるべきだ」と言っていました。そう、オヤジより年上や、オヤジより重いのが、高三郎で作業してましたからね。それを彼は見てしまいました。

その意味では、この標柱物語はいまだ終わっておらず、続編を乞うご期待といったところです。

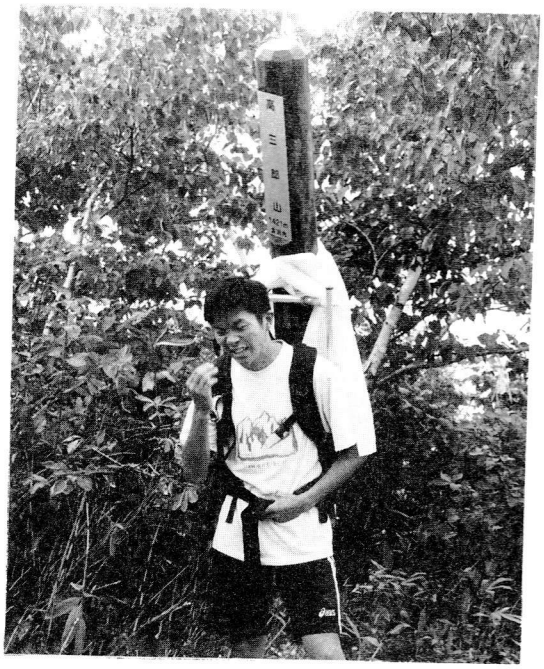


43期　西脇　幹雄

高三郎山頂の道標を運んだ男です。

道標は10kgちょっとなんだそうですが、長さが問題でした。高三郎ぐらいの標高の山だとそこらじゅうの木に、背負っている道標がぶつかります。その度にかがんだり、少し戻ったりの繰り返しでした。腰が痛かった。

山頂付近に来ると、秋の小屋作業で整備した成果が目に見えてわかり、歩き易かった。でも



【「記念写真！」にポーズを決める西脇君】

それは、高三郎の旧道全体のほんの一部にしかすぎず、うちらのガンバリ不足を感じた。

そうしてやっと山頂に着いた。いつもどおり、見晴らしの悪い山頂が僕等を迎えてくれました。

下りは空荷で、初めて新道を下った。なんちゃら分岐（砺倉分岐）までは、結構ひどい道でした。でも、見晴らしはよかった。分岐から下はよく整備されていて、コースタイム 100分のところを30分ほどで走って下った。

この日ダムに帰り着いたのは、暗くなるほんの直前。小屋作業より辛かった。

来年以降も小屋作業頑張って、高三郎の道をよくしてやって下さい。

43期　加藤　菜就

年に小屋作業のとき一回のみ登る山。粘々した蜘蛛の巣、足に絡んでしつこい蔦植物、天候のパッとしない秋山行。今の現役生の中にはワースト３に必ず含む人もいる。彼らほど嫌いじゃないけど、好きにもなれない山・高三郎。

そんな山に、今年は二回目の登山をした。道標を立てることが僕の仕事。

道標は、話によると白山に立ててある物と同じだそうで、がっちりとした造りだった。内心「高三郎にこんなのが必要なのかな。」と思ったが、結局、これを運ぶことによって、後々(小屋作業の続く限り)、ワンゲルの中で語り継がれるという充実感があった。

しかし、充実感を味わうのはどうやら早すぎたようで、道標を持って歩くことはとても辛かった。長さ 1.5M の道標を背負子に担いで歩く際、１Ｍ ぐらいは頭からはみ出すので道に枝などが張り出しているときなどは、中腰で歩くのだけれど、これが一番しんどい。

足を曲げればいいと分かっているけれど、曲げるのにも限界がある。これ以上曲げると足を前に出せないというときは、仕方なく腰を曲げる。すると、道標の荷重が前(頭)にかかり、体が前のめりになる。実に危険だ。実に危険だと体の方は、頭で考えるより早く、それに対処する。背筋に力を入れ、頭をあげ、首で前に倒れそうな道標を支える。

こんな作業をそれこそ20分していると体がだるくなる。腰に変な鈍痛というか、違和感を

感じるし、気分的に無性に腹が立つ。自分たちが作業した道も道標を持って歩くと、まだまだ歩きづらい。だから腹が立つ。「もっときちんと刈り込んでおけばよかった。」と思うとやっぱり腹が立って、立ちすぎて口からは苦笑いしか出ない。

苦笑いじゃなく、もっと悪態を吐きたいのに苦笑いしか出ないのはなぜ？

30 分に一回、休憩を自分がとりたいだけとる。舟田さんからお茶、葡萄、ミカンなどをいただき食べる。大抵の山行は行動食も食べずに過ごせるのに、このときの行動食の美味しいことといったらこの上なかった。特にミカンが最高。あの絶妙なすっぱさが一番おいしく感じた。

辛い歩荷と、天国のような休憩を繰り返しているうちに上の新道と旧道の分岐についた。いつも、旧道を歩きながら「この赤布は何のためにあるんだろう？。」と思っていたところが分岐だった。草も刈ってないし、見ただけじゃ分岐だと思わない。

僕の持っていた道標は分岐用だったので、頂上までは西脇の持っていた道標を二人で担いでいけばよく、気分的にはここから少し楽になった。舟田さんは先に頂上に向かったので、西脇と少し話をしてから出発した。分岐から、頂上まで 40 分。僕の提案で、最初の 20 分を僕が、残りを西脇持つことにした。

我ながらなかなかの名案。ここまで頑張ってきた友のために頂上歩荷到着は譲ろうということ。西脇も喜んでいた。

ところが、最初の20分(正確には17分)僕が歩荷して、「さぁ西脇の番。」と交代したが、頂上に5分も経たずについてしまった。

頂上では中尾山岳会の林さんたちが先に到着していて、道標を待っていた。僕たちが到着すると、林さんが寄ってきて「よっしゃ、記念の写真をとるぞ。」と言うので道標を持ったままの西脇と並んで写ろうとしたら、

「こらこら、手ぶらのやつがいたらわざとらしい写真になるだろが。」

「えっ？。」

「どいて、どいて。君は今着いたような感じで。」

と、今着いたような感じを出している西脇だけを撮って、僕は撮って貰えなかった。

「ちょっと待って？分岐からおおく運んだのは、僕なのに？」

「西脇っ！！いいとこ取りするなぁぁ！！！」

あとで、こっそりと愚痴を言うと、西脇は

「本当や。ふふふふ。」

と、うれしそうだった。

【こんなに刈り明けてあった高三郎頂上。
割れた看板と、新しい標柱。そして三角点。】
43加藤　　43西脇

舟田さんから手紙を頂き、新田次郎の「強力伝」を読んだ。小説の強力はとても辛そうで肉体の限界に挑戦しているかのようだった。仕事を終えた後、主人公は成長ではなく逆に肉体を傷つけてしまうし、仕事を引き受けたことを後悔していた。

僕は、確かに歩荷中は引き受けたことの後悔を感じていたけど、やり遂げたあとの満足感に浸れたと思う。一番の収穫は高三郎山への愛着を少し持てたこと。

山道でやはり、道標があるとそれが目標となって、歩き続けることに覇気がでてくると思う。頂上までの所要時間が分かるわけだし、自分の体力とも相談ができるから体力に応じたペースをとることで登りやすく感じる。

登りやすく感じてくれれば、2 回、3 回と登りに来てくれる人が増え、ますます道が整備されて、ますます登りやすくなるかも。

高三郎は好きな山じゃない。好きじゃないけど、愛着が無いわけでもない。新道ワンゲル道の倉越尾根からの眺望は最高によかった。岩山だけあって、谷筋に続く岩肌に感激した。

がむしゃらに登るだけじゃなく、愛着を持った山を整備することが大切に思えた。
そう考えると、今回高三郎山を整備できたことに感謝したい。

【現地でプレートを貼らねばならない標柱もあった。
その結果、一番重い標柱が、最短コースの砺倉分岐に割り当て。
つまり一番重いのを担いだのが、深作君。】
田中　林　43西脇　　45深作　43加藤　古源

45期　深作　良太

全く登山初心者の僕が、バイトin高三郎を決行したのも、先輩の一言からであった。

初めはちょっぴり不安もあったが、山岳会の方々や先輩に助けられ、非常に充実した、また秋という季節ということもあり、実り多い二日間になった。

またお声がかかれば、絶対参加したい。
やっぱり、肩と腰は痛い！！

（私信ですが、ご紹介）

この前の二日間は、色々とお世話になりありがとうございました。山岳会の方々には、いろいろと助けていただき、また、特に、小屋での夕食－栗ご飯、焼秋刀魚、豚汁－は、秋の到来を感じさせてくれました。ワンダーフォーゲル部で行く山行とはまた違った山行を体験することができ、非常に思い出深い二日間となりました。

初めのうちは余り楽しさを感じられなかった登山も、部での夏合宿、そして今回のバイト等を通して、面白さを感じられるようになってきた今日この頃です。

写真の同封ありがとうございました。そして、原稿料も!?原稿の方、同封させて頂きます。

また機会があれば、絶対参加したいと思っています。

追伸）行方不明となった田中さんがみつかったと聞いて、ひと安心しました。

２０００年度
小屋作業報告

小屋作業ＣＬ　43期　矢田部　桂

今年度の小屋作業は、例年よりいくらか早い時期ではありましたが、９月５、６、７日の２泊３日で行なわれました。

私を含むワンゲル部員の何人かは、数ケ月前に、ベルクハイムの修繕の仕事のお手伝いを、ＯＢの方と一緒にさせてもらいましたが、その時は犀川ダムの水面も高く、資材の運搬をボートを使ってやることができました。その際に、船上から水辺に沿った道の様子を見ていましたが、どうもあちらこちらで崩れている所があるようで、とても心配でした。

確かに例年登っている高三郎山への登山道ですが、お世辞にも歩きやすい道ではないことは分かっていました。現にダム沿いの道は細く、かつ下草が茂っていて、毎年何人かは転落（とはいってもかわいいものですが）する人が必ずでてくるくらいです。ましてや船上からの数々の崩れを見てしまっては、この先、小屋作業のチーフリーダーとしての重い責任に身が引き締まるような思いでした。

夏合宿を終えて２週間程経った頃、サブリーダーである谷上をはじめとした数人の部員と共に、高三郎山への偵察に出掛けました。

まず、予想外のことに、発電所近くのゲートが閉じており、そこから延々と犀川ダムまで歩き、まるでガスがかかったようにオロロにたかられ、自分の身長より高い草を掻き分け、崩れた細くなった危険な道と格闘しながらベルクハイムを目指しました。ベルクハイムに着いた頃にはもうすっかり時間も過ぎ、その時のメンバーにはピークに行く気力は微塵にも残っていない、それくらい疲労困憊していました。

今から思えば、その偵察が一連の作業の中で最も大変だったように思います。

天気が心配された９月上旬でしたが、ＣＬの日頃の行いの為か大気も安定し、いいお天気に恵まれました。ゲートの方も許可をもらうことができて、無事車でダムまで行くことができましたし、心配していたオロロもすっかり影をひそめていました。

ダム沿いの道も草がきれいに刈られていて、ずいぶんと歩き易い道になっていました。ダム関係の方が刈ったのかななどと思っていましたが、後になって、小屋作業当日は不在だった部員の一人である久原がなんと一人であの膨大な量の草を刈っていたのだと知りました。彼には大変感謝しています。

一日目はベルクハイムまで行き、そこから半分に分かれて、片方はベルクハイムおよびその周辺の整備、もう片方は登山道の途中までの整備を行いました。どちらもみな頑張って作業してくれ、かなりはかどりました。私は登山道の方でしたが、帰ってくると、ベルクハイムに敷き詰められた、真新しいきれいな床が私達を迎え入れてくれました。

二日目が今回のメインともいうべき作業であり、全メンバーで高三郎に向けて早朝出発しました。今年は全員にピークに立たせてあげたいとの想いもあり、そのように計画を立てていたからです。ピークはさすがに遠く、計算していたより時間オーバーしてしまいましたが、やっとのことで全員無事ピークに立つことができました。

思っていたとおり、ピークは草、笹が生い茂り、そこからの眺めはあまりいいものとは言えませんでしたが、それでも、辛く、長い急坂を登りきった後のピークは感慨深いものがありました。ただ、残念なことに、２年前に設置した標板がもう傷んでぼろぼろになってしまっていました。

休憩をとった後、下りながら作業していきました。さすがに全メンバーで来ているだけあっ

43加藤　43清水
43西脇　45中川　43井澤　44山本　45竹内
45日向　44谷村　43谷上
44西　44福村
45深作　44角田
44河原　45渡　45松山　43矢田部　43奥野

【今、この頂上に、フラッペ伝説はなく、自動販売機伝説が流布されている。】

て、作業は流れるように進んでいきました。鎌や鉈、鋸を持つ手が痙攣をおこしそうな程必死に取り組んでいましたが、時間が過ぎるのも早いもの。気が付くと辺りはもう夕日が差し込んできそうな時間になっており、部員の尻を叩きながら急いで下りました。

小屋に着いた時にはみなヘトヘトで、なんだか静かな雰囲気が漂っていましたが、さすがワンゲル。食当をしているうちに、お腹がすいているせいか、いつもの賑やかというかパワフルな雰囲気に戻っていて、各パーティー、ご飯をもりもり食べていました。

最終日は再び小屋の周辺の整備と小屋の掃除をして、ベルクハイムを後にしました。

実際に作業に入ると、案外ＣＬというものはすることが少なく、かえってサブチーフの方が忙しそうにしていたのが印象的でありました。

今回の一連の作業は様々な人からの助けをいただいて、大変満足のいく仕事ができたと思っています。ＯＢ会舟田さんはじめ、部員の一人一人に対して本当に感謝しています。ありがとうございました。

来年からもいい仕事ができるように頑張って下さい。

2000年秋　山小屋酒場

13期　辰野　隆義

20世紀最後の山小屋酒場となった。（今年やることは、何でも「20世紀最後」となってしまうのだが…）　今回は個人的に仕事が忙しく、行くこと自体危ぶまれたが、何とか日曜朝帰りで折り合いをつけた。

今回の作業は、そう多くを考えなかった。材料も下見をしてあったので、１週間前には揃え終わった。作業は、「入り口の柱（腐って浮いている）」と、「奥の根太（白アリにやられている）」、それに「外の屋根を支えている木（これもボロボロに腐っている）」の取り替えと補修である。この程度の作業なら、土曜日一日でも完了するだろう。

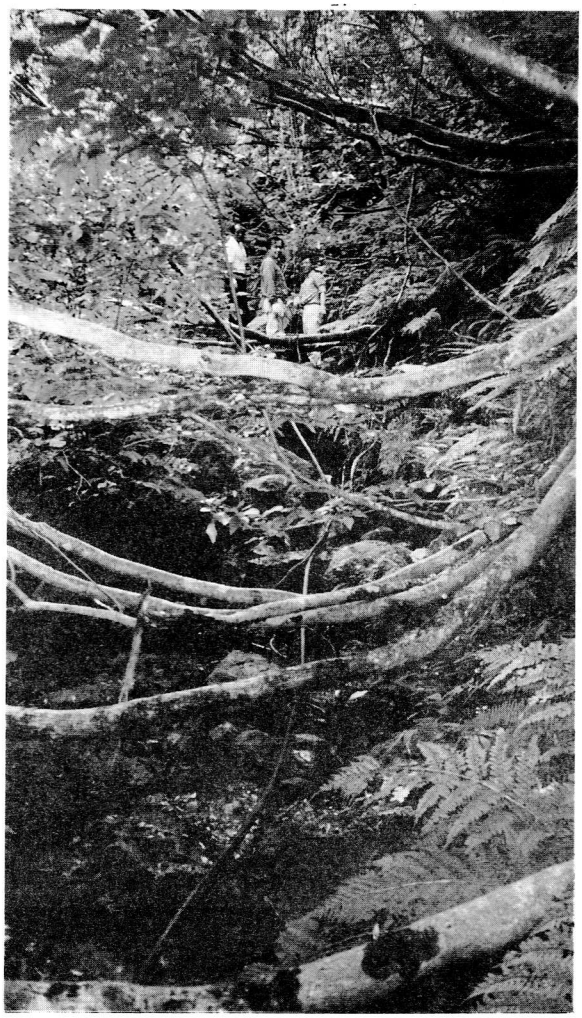
10月14日（土）朝８時、工学部集合。いつものメンバーと顔を合わせる。今回は田村御大は寿欠席と聞いている。13期吉田、吉本、辰野、15期奥名、舟田、16期北川、以上６名。天気は上々、この上ないリフレッシュになりそうだ。

２週間前に現役数名と、舟田さん、ナカオの人達が、高三郎の頂上まで重い道標を背負って上がり、設置してきたとのこと。途中、真新しい道標を２基発見。なんとなく顔がほころぶ。

小屋はいつもと変わらず、私達を迎えてくれた。最後の急坂を登り終え、目の前に小屋が見えた瞬間、本当にホッとするのは、私だけではないと思う。

さっそくビールで喉を潤した後、各自作業へ入る。

以前から気になっていた取水口のステンレスカゴの修理にとりかかる。というのも、私も、



【ホース内の空気を抜くのが至難】
辰野　　吉田　奥名

奥名君もカゴの砂を取り除こうとして、壊れたメッシュで指を切ったことがあったからだ。このステンレスカゴは、２年前の大雨で流され行方不明になっていたのだが、翌年行って見るとちゃんと戻っていた…という不思議なカゴなのだ。

メッシュを整えたものの、パイプの途中で砂でも噛んでいるらしく、なかなか水が出てこない。簡単に水場の修理を終えるつもりが、結構時間をくうことになった。結論としては水圧が低いということになった。カゴが流された時パイプも被害を受け、取水口がかなり下方となってしまったためである。取水口をもっと上へ延ばすのは、来年の課題としておこう。

昼食後、本来の目的箇所の補修作業に入る。入り口の柱も、奥の根太も、まくってみると、思っていたより損傷がひどく、持参した資材だけではややきつい所もあった。が、春の床張りの時の余剰材を利用し、何とか補修を完了させた。

作業をしながら他に悪い所を探す。いくら「無理せず」「楽しく」がモットーにせよ、要補修箇所優先、効率よい資材搬入で予定を立てていかねばならない。

あった、あった、大物が！小屋の屋根を支えている三角形トラスの最も力がかかる横の梁が１本（入り口の上）、腐ってボスボスになっている。これを放っておくと、早晩小屋は雪の重みで潰れてしまうだろう。とはいえ、あんな大きな梁を付け替えることは不可能に近い。別の方法で屋根を支えることを考えるしかないだろう。

また、屋根のトタンに少し錆が出てきている。これも次回の春にやらねばいけないだろう。

作業も終わり、あとは恒例の秋ならではの夕食。半分はこれが楽しみで来ているような所もある。近江町と、倉谷現地で調達した栗がふんだんに入った栗ご飯。大根おろしたっぷりの焼き秋刀魚…あとは、実にうまかった…で、ご勘弁を。秋は暮れるのが早い。ローソクの明かりで視覚情報が不足したのと、カメムシを食べてしまわないよう、そっちに結構気を遣ったからである。

そんな無礼の報いを彼らは十分に受けることになりました。イヤー、今回は全員狂ったようにカメムシのロウ地獄に興じました。御蔭で、天井にびっしりくっついていた無数のカメムシが、寝る頃にはほとんどいなくなってしまいました。久々に学生時代を思い出し、懐かしい限りでした。北川君は夕方下山したため、このイベントには参加できず、残念でした。

翌朝は６時頃に起床し、朝食の後、たまむし御殿（汗水の結晶のトイレのこと）にて快便。生活環境がよいと、快調ですね。その後早めに下山、2000年秋の山小屋酒場を終了しました。

まだまだ今後も、山小屋を維持するためには手を入れ続けなければならないでしょう。が、とりあえず、当初目標の、水場の確保、トイレの設置、予定外の床の張り替えも完了し、なかなかの居住空間が復活しました。前回「月見の宴」から、既に５年を経過しており、この際お披露目も兼ねて、来春、第２回目の宴「シャクナゲの宴」を山小屋にて開催しようということ

になりました。予告はこの冊子の他のページにも載っているはずと思うのでご覧ください。そして、多くのＯＢ、ＯＧが参加して下さることを願う次第です。

その折りには、屋根のペンキ塗り等、楽しい軽作業も準備いたしておきます。もちろん、一日魚釣りでも、日向ぼっこでもかまいません。足に自信のある人は高三郎へチャレンジされ、道標を確かめにいかれるのもＯＫです。

ともかく、ベルクハイムで、昔へタイムスリップするのも、21世紀の幕開けには良いのではないでしょうか。

ワンゲルセカンドハウス　by せっちゃん

2000年締めの山小屋酒場は、かなり気を抜くことができた。というのは、２週間前に標柱設置作業で小屋に行っており、ともに食料係であった私は、メニューも一緒、調味料・燃料もそのつもりで…の合理化（手抜き）を図ってあったのだ。さらには、シュラフや個人装備も置いてきてあって、その分今回は小屋常備用の食器類を詰めてこれた。小屋との距離感のなさが学生時代みたいで、そんな気軽さがなんとなく嬉しかった。

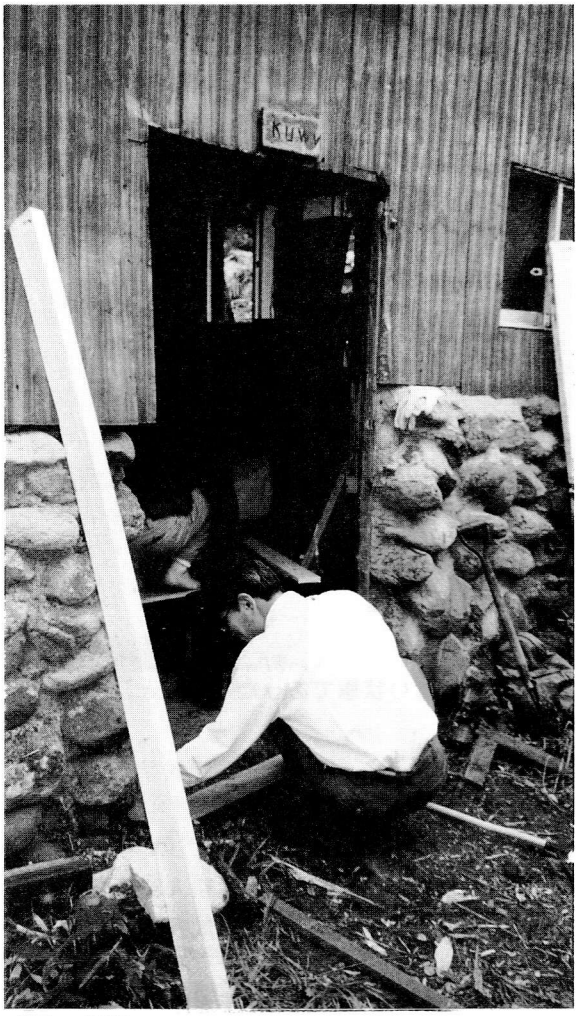
ダムから覗き下ろす湖面。あれ、この間より多いよ。それは、カメムシも同様で、２週間前には数匹しかいなかったカメムシが、びっしり天井を埋めていた。「今年の秋は水が少ない」だの「カメムシが少ない年だ」のと、うかつには言えないものだ。

ともあれ、資材を５等分して、つまり、私は食材いっぱい詰めてんだからねとパスして、あと５人の男性軍が長物をヨイショと運ぶ。中で一番の厄介物は、北川さんに割り当て。彼は、日帰りで荷物が少なかったからであって、年功序列のせいであった訳では…。

第一の切れ込みの所は、先日の行方不明騒動のせいで、結構踏み込まれており、余計迷い込み易そうになっていた。帰りは、案の定先頭が直進してしまう。ホント、あなた任せで歩いてはおれない。そして、第二の切れ込み。この頃はだいたいここで休憩だ。確かに荒れてはいるけれど、ステッキの行列にうんざりの私には、好ましい静けさだ。まして回りにワンゲル仲間がいてくれたなら、♪我がベルクハイムへ～♪で、ウキウキ。

出島をまわり込んでしまうと篤志家の御蔭で草ヤブからは解放される。吊橋が見えてくると、もう倉谷は近い。そのうえ、吊橋を渡った所には、ちゃんと労作が立っているのである。そこからわずかで「倉谷集落跡」がまた立つ。ワンゲルＯＢであれば、高三郎はずっと奥で、何で？であるけれど、行政がらみ、作業の都合がらみでいくと、そうそう、登山のペース配分に便利なように配置できる訳でもない。日帰りハイキングなら、倉谷までであろうからという発想もある。山中では？？？の道標もあるが、発注者、製作者、設置者がバラバラなのである。まだ塗料が手につくようなほやほやを受け取って、現場で初めて文字を見ることになるのも現実。利害がからまない事でも、とかくこの世は合理的にはいかないものなのである。

【吊橋を渡り終えた所に立つ標柱】
吉田　吉本　　舟田
奥名



【戸口部隊。この後の戸が締まり、鍵がかかる状態への調整が、デリケートだったよう】
吉本　　北川

２週間ぶりのベルクハイム。鍵をあければ、あ～れ～！カメムシ館であった。やっぱり自然は手強い。多少物綺麗にしたとて、彼らの絶好の越冬場所であることに変わりはない。箒であらたか掃き出し、一巡するとまた湧いてくる。赤布をまくりあげるとびっしりのカメムシ。ギャーの後これも一掃。内部に慣れた目で見上げたら、天井にもびっしりであった…諦めた。せめてもの抵抗に蚊取り線香をおき、そばで食当をする。

どうやら水が出るようになり、男性軍は、軒下の修理組と、戸口の修理組に別れて作業。私はその合間に、出たゴミを掃除。なにせこの手のことはやったことがないし、そばでうろうろすれば嵩張って邪魔になるだろうし…賄い婦以外の時間は、何かをおろおろとやっている。

ベニヤ板と、外壁のトタンの間には、断熱材もどきに枯葉が詰め込まれていた。ネズミかリスかの類が巣にしていたのだろう。まくる度に「ウワー」「ここもダメや」の声。あちこちダメになっているらしい。平成５、６年の大修理時には、屋根と、内外壁を張り替えたのであり、骨組には触っていない。この２代目ベルクハイムを建てた当事者である北川さんも、30年ぶりに「その後」をめくって見ることになった訳である。

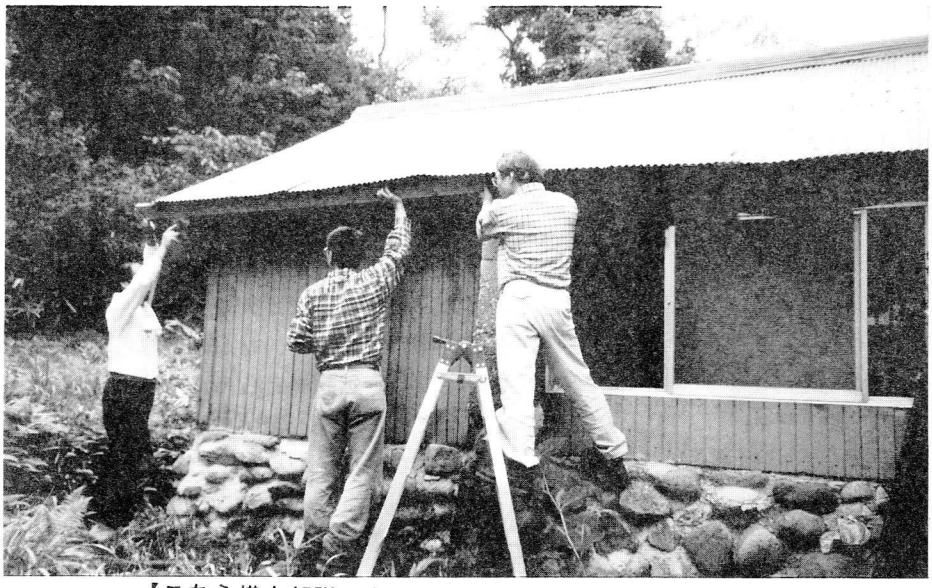
どこまでダメになっているか？どこを補修しておけばいいか？だんだん、やめられない、止まらない状態になって、かなりが剥出しになってきた。「きれいになった」とは言い難くなってきたものの、骨組の確認は大事である。吉本さんが金鎚で叩いていくと、なるほど虚ろである。「ホレ、ここ全然効いとらん。ヤバイナ。こっちで打っても、結局、浮いてしもとるんや。」私、全然わからない。ただ、倉谷に何軒かあった廃屋が、あれよの間に朽ちたことなら知っている。早めに手をうっていくしかない。

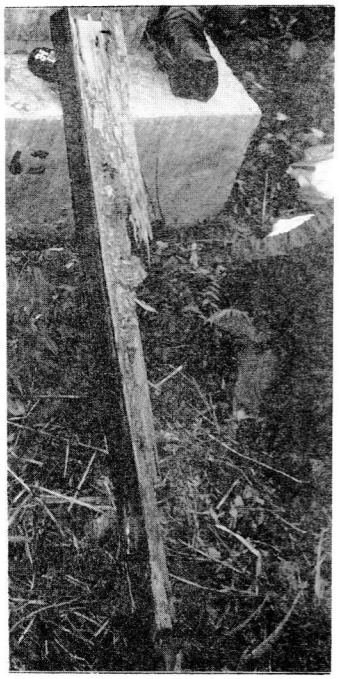
日帰りの北川さんは、戸口を完成させた後、帰っていった。あとの方々は、根太の取り替えを始めたものの、これもまくって根太を叩いていくとあちこちに虚ろな箇所があった。材料を吟味し、防腐処置も考え、それらを春のボートで大量搬入することを考えなければならない。厄介ではあるが、それは内部のことだから、屋根さえあれば、ぼちぼちでやっていける。屋根をもたせることが先決になりそうだ。

実のところ、２週間前、この小屋を誉めていただいたナカオのプロのメンバーからはいろいろ査定いただき、示唆もいただき、卸からの材料も提供してあげようのご好意もいただいた。ただ、「豚に真珠」の情報であったし、ではといって橋渡しも？の惑いがあった。この小屋は初代から、プロの手を借りず、その時のワンゲルの総力で、建設され、維持されてきた。それが愛着の根底であるし、いざとなれば寄付をお願いできる根拠でもある。ＯＢの技量でましになってくる分はいいけれど、そして、小屋が潰れてしまえば話にならないのだけれど、みんなでワイワイ、その時の技量やできる協力の範囲であっていい気がする。プロの使い勝手のいい刷毛より、棒切れに軍手を巻いてその結果そこらじゅう塗料だらけになってしまった…の方がベルクハイムにはあっていると思えるのだ。

夕食は、補修の段取りも話し合いつつ、ともあれきれいな床が張れている現在、もう一度「月見の宴」で皆さんをお誘いしてみては？になった。かつて歓送登山が秋であったこと、また、現役サイドが半年は新人育成にあたっていることから、小屋での行事は秋に行なわれることが多かった。

しかし、倉谷はなんといっても、春がきれいだ。ダム周辺路も春の方が、歩き易い。山菜をメニューにできるし、日も長い。何よりボート





【こちら横木部隊。右のようにボロボロ状態】

が使えて、人も食材もテントも倉谷に直行させることが可能だ。もちろん、シャクナゲと残雪の、高三郎が一番いい時期でもある。以上の利点から、次回は春にお誘いをやってみることになった。名付けて「シャクナゲの宴」。次回の会報と号外で、本腰を入れてお知らせしてみることにしよう。

そんな前向きの話を、なんと、カメムシをロウ地獄に落としながらやっていたのだ。ロウ地獄に落ちた彼らは複数の芯になり、シドニー五輪の聖火の如く盛大な炎になる。その行為は、執行者の表面上の穏やかさ、しとやかさ等とは全く無縁に持続された。さしもの天井びっしりも消滅し、人間が生態系の頂点に立つことを実証した。それにしても仲間の炎に釣られて、次々おりてくるカメムシもカメムシである。ヒトより種としては生き延びていくのであろうけれど、カメムシのような人生は真っ平だ。

翌朝彼らの方は、ちゃんと朝のおじやにも、残りものの豚汁にも紛れこんでいて、それなりに報復をとげていた。だが、すっかり鼻が馬鹿になってしまっていた皆様は、気付かなかったよう。

本日、辰野さんは設計の続き、奥名さんは自然解説員の仕事でこのまま医王山に直行という訳で、早々の小屋仕舞へ移る。

帰路は百万石レースのマラソンコースに沿っての走行の羽目になった。小屋行きも物好きであるけれど、マラソンも相応に物好きの世界であるよう。18期岡部さんが出場していることを知っていた私は、抜きつ抜かれつの車窓から探してみた。そして、蛍光グリーンウェアの彼をちゃんと見付けてしまった。信号他のせいで、三度も「岡部さ～ん、頑張って～」の声を張り上げることになった。気付かなかったのかと思ったら、後日、彼の方は必死で走っていて返事ができない状態であったとのこと。そりゃそうだ。

今回も「金沢は狭い！」でオシマイ。

ワンゲルは、次々新人が入ってくるのが長所です。短期間にそんな新人がリーダーとなり、部を背負う人材に成長していくのも魅力です。

それゆえに短所は、年季を積むことができない、バリエーションルートにまで手が伸びにくいことであるようです。

その短所を補ってきたのが、部の記録であり、部誌でした。先輩の体験がレディネスとなり、情報を集め、同じ指向の仲間を得て、前例プラスαで審査を通し、バリエーションを広げることが可能になったのです。部誌でなければ入ってこない情報である犀奥域の活動は、休刊により決定的打撃を受けることになりました。

では、部誌は今時流行らないのかといえば、某氏は弟のサイクリング部の部報を見たといいます。部外者である自分も、次々延ばしていくその部のテーマ報告が面白かったとのこと。「６年に一度？そんなの記録といえる？次にどんな活動をしようの、部の方向がでてくるの？」…同感！

外部がとやかくいわなくても、記録を出していけば、おのずと、自分達が光れる活動や、ＫＵＷＶならではの方向が見えてきます。

山渓に採用された26期畠山潤氏の記録。休刊で掲載されることのなかった第７次白山－ＢＨＰＷ30期野田和裕氏の記録。また初めての夏期踏破であり合宿でもあった、白山・ＢＨParty の37期山本英男氏の記録（ＢＨ33～38号p103転載）を紹介します。

山と渓谷　84　9月号

白山北方・犀川源流の山々を縦走

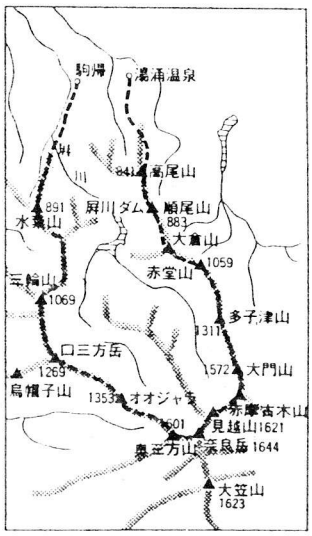
1984年3月27日～4月2日　藤田章三、赤堀鉱二、卯野靖代、畠山潤、酒井輝夫、小川隆（金沢大WV）

3月27日（晴のち曇り）湯涌からの林道は雪があって、ここより高尾山までスキーのトレースがあった。今年は雪がかなり多く、ブッシュをこぐ必要は全くなかった。高尾山を過ぎてテントを張る。

3月28日（曇のち晴）　南岸に前線が発生したため、視界が悪いが、順尾山からはガスの切れ間から雪に埋もれた犀川ダムが見えた。この付近の尾根は人の通った跡がなく、カモシカに混じってクマの足跡が点在している。赤堂山の頂からは1129ピーク（赤砺山）が大きい。赤砺山へはかなりのアルバイトで、ワカンのない我々には腐った雪のラッセルがきつかった。ここからの高三郎山は迫力がある。頂上より少し下った地点に、テントを張る。

3月29日（晴）　春合宿からの疲れがでてきて、ラッセルが思うようにできない。今日は休養日として、予定の行程の半分にとどめ、多子津山泊。多子津山からの大門山は、加賀富士の名にそぐわず実に堂々とした山容である。

雪が多い赤摩木古山手前を行く



3月30日（晴）いきなり大門山への長い登りである。ラッセルがほとんどないのが助かる。ダケカンバが見えてくると頂上は間近だ。大門山からシリセードで下ると、10㍍もあろうかと思われる巨大な雪庇が赤摩木古山にできている。4月だというのに、まだ早春のような感じである。晴れてはいるが風が強く、見越山の急な登り下りはクラストしている所があり、少々緊張させられる。大笠山とその手前の仙人岩が立派である。

奈良岳は犀川の源となっていて、金沢市で最も高い山である。ここまで来ると、今日の出発地点ははるか遠く、高尾山はもう確認できない。ザックをおいて空身で奥三方山へ行く。急な雪壁を越えてピークに立つと、つい1週間前にいた大笠山そして笈ガ岳の怪奇な山容が目を突く。下りはシリセードで下る。1456㍍の鏡池泊。

3月31日（曇り）明け方、寒冷前線の通過で雪が降る。1353（オオジャラ）の下りが急で悪く、西側からトラバースぎみに下る。下り口の大きな木の根にクマの足跡が点在している。大きな音をたてながら下る。下りきる前に下の雲海のなかに入る。ガスで視界極めて悪く、現在地がわからなくなったので、中三方岳手前にテントを張る。

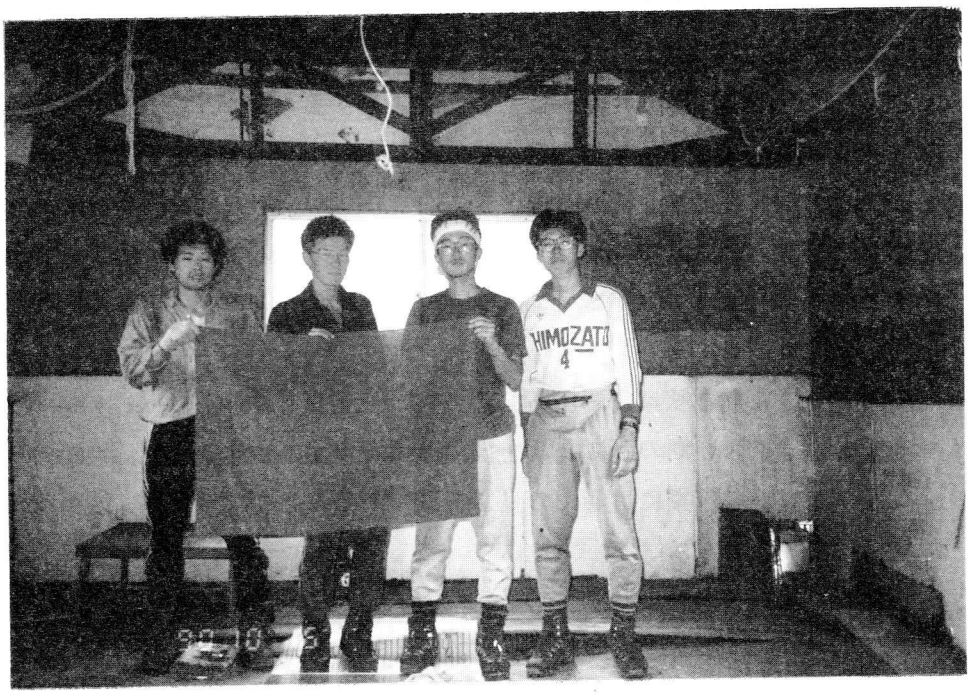
4月1日（晴）雲海が下がったので視界良好。中三方岳は空身でピークに立った後トラバースする。1230ピークからは北側を下るが、亀裂がクレバスのように口をあけている。口三方岳のヤグラは、雪に埋もれ、積雪量は7～8㍍もある所がある。ガスのなか三輪山にテントを張る。

4月2日（晴）下山日であるのにかかわらず、小ピークがいくつも連なり、つらい行程である。しかし絶好の天気のおかげで、充分に春山を満喫できた。987（六郎谷峰）からは遠く白山をはじめ、連なる犀川源流の不遇の山々、そして足元には犀川ダムを望んだ。

水葵山からは、真っすぐに北へ延びる尾根を下っていく。最後の金谷の渡りは橋がなく徒渉となり、林道は崩れてなくなっていたが、なんとか無事に全行程を消化できたことを喜び合った。1週間の間、人に合わなかったどころかトレースさえも見ることができなかった山行であった。

（〒920 金沢市石引1―17―19・川岸方　畠山潤）

白山－BH単独縦走もした26期畠山さんのその後の活動は、p.87からの原稿に記されています。



【最終日　歴代の白山－BHPWの赤布がおどろおどろしい。
1990年当時のBHにて】
野田　草飼　奥出　磯道

「白山-ＢＨ」ＰＷ

３０期　野田和裕

金大ワンゲルは、たいへん活動域に恵まれていると思います。山域においては、白山・犀奥をはじめ北アルプス、そして少し足をのばせば南アルプス・八ヶ岳といった、日本でも有数の山域を足場に活動できます。一方、ロードについても、私の現役時代において、奥能登、木曽路、佐渡島など味わい深い地域で活動が行われました。

ワンゲルにおける山行はマイナー路線とメジャー路線の２色で区分することができるのではないでしょうか。その区分けは必ずしも明確なものではないのですが、例えば、マイナー路線派は、どちらかというと北アルプスにおける栂海新道や南アルプスにおける光岳を選ぶ派であり、メジャー路線派は北アルプスにおける槍穂や南アルプスにおける甲斐駒千丈を選ぶ派と言った感じのものです。私の場合、秋期の白山－ＢＨはマイナー路線の最右翼に位置づけています。その内容は、稜線歩きには違いないのですが、道が無い領域が含まれていることから、他のコースの追随を許すものではありません。さらに言うなれば、金大ワンゲルのホームグラウンドである、白山と犀奥を一挙に踏破するといった意味も有します。ワンゲル内では、むしろこちらの意義の方が大きいかもしれません。

当時、私はマイナー路線に重点をおいて活動していたほうで、犀奥・白山にこだわった方です。もっとも、私などは２０期前後の先輩方の足下にも及びませんが、、、その理由は、好きだったということはもちろんですが、社会人になって行ける山よりも行けない山に行きたかったということです。トレ山やオロロの印象があるせいか、当時から部員の間では犀奥はあまり好まれていませんでしたが、行く時期や場所を選べばとても素晴らしい領域です。もっとも私の場合は、梅雨の時期に犀奥で泥まみれになることも嫌いではなかった方で、そこまでは強要しません。ともかく、犀奥の良さを知らずして金大ワンゲルを卒業するのは、たいへんもったいないことだと思います。秋の犀川ダム沿いを行くのは景色も素晴らしいです。アケビを採ることも、倉谷川ではアマゴを釣ることもできます。コースとして沢を選ぶと、技術的にも高い経験をすることができます。実際にかなりのルートファインディングが必要ですし、事故の場合に容易に救助を得られない点で、ＰＷを出すにもかなり技量（ごまかし？）が必要です。秋期は藪こぎになりますが、体力とルートファインディングに優れている必要があります。ところで、国土地理院発行２万五千分の１の地図は非常に精密なもので、僅かな地形の変化でも読むことができます。ルートファインディングは、正に地図を読む技術と言えるのではないでしょうか。

今回、ＧＷ期と秋期における２回の白山－ＢＨを踏破した唯一の人間ということで、数多の先輩方を差し置き、３０期の私に文章を書く機会を与えて頂きました。実際の白山－ＢＨは大変魅力のあるコースです。ＧＷ期には春山の良さを満喫することができます。犀奥まで来ると藪こぎが多くなるのでやや幻滅しますが、達成感はあります。春山コースとしてもそれほど難しくありません。第６次(1988年GW期)は、以下のメンバーで行きました（敬称略）。

石倉(31)、小林(31)、sL田丸(31)、L野田(30)

畠山さんほどの強行突破はせず、余裕を持った山行でした。小林（現、水越）さんはキスリングで来ました。このこと自体が記録ものですが、あまりお勧めできません。GW期とはいえ、初の女性踏破であり、しかもキスリングで踏破したのは最初で最後でしょう。

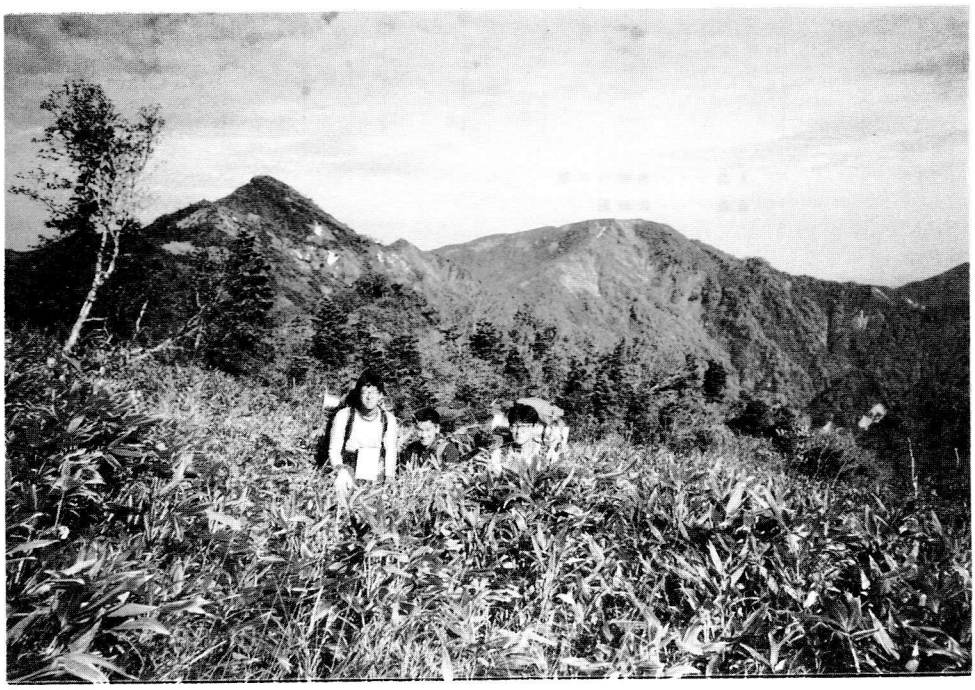
白山－ＢＨは何と言っても秋期に尽きます。その核心は、三方岩～大笠までの藪こぎにあります。

第７次（1990 年秋期）の場合、見越～高三郎も殆ど道が無い状態でしたので、第４次と比較しても藪こぎが多かったと思います。それでも比較的難なく踏破できたというのが印象です。メンバーは、以下の通りです（敬称略）

磯道(33)、奥出(33)、sL 野田(30)、L 草飼(33)

仙人屈の池塘の美しさ、大笠の手前で台風が通過しフライに溜まった雨水で炊飯したこと、また個人的な話ですが、仙人屈あたりの藪で左目をついて目を開けることができず手ぬぐいを巻いて片目で行動したこと、などが深い印象として残っています。この踏破記録はワープロで作成しデータを保存していましたので、今回、舟田さんの勧めもあって、ここに原文のまま全てを掲載いたします。１０年前の記録であり、現況とは異なるでしょう。地図や写真もなく、文章と多少の図だけで全２０頁に及ぶ記録ですが、地図を片手に読んでいただければ正確に現在地が把握できるように当時は記述したつもりです。久しぶりに読んでみましたが、記録を読んでいると彷彿とさせるものがあります。

時代は急速に変わりつつあります。僅か１０年前に記録の作成に用いたハードは PC-9801VM（8086 プロセッサ、クロック 10MHz）で、今使っているのは DOS-V マシン(PentiumⅢ、クロック 600MHz)です。両機種の性能には雲泥の差があります。この１０年間のパソコンとインターネットの普及、携帯電話やテレビゲームの普及など、情報技術の進展が、社会変化を起こしつつあります。人と人との思考格差も広がり世代間ギャップも深まるばかりです。ワンゲルＯＢについても例外ではありません。このような変革期においても、金大ワンゲルにおいて変わらないものの一つとして、白山－ＢＨがそれであって欲しいと思います。、三角テントやホエーブスなどの装備も残っているのかどうか知りませんし、現に創部当時の部室はありません。変革期であればこそ、変わらない何かを求める行動が意味を持つのではないでしょうか。



【仙人窟岳付近より笈ケ岳と大笠山
ヤブとヤブの間の、束の間の天国のような笹原】
磯道　　草飼　　奥出　　（奥出氏提供）

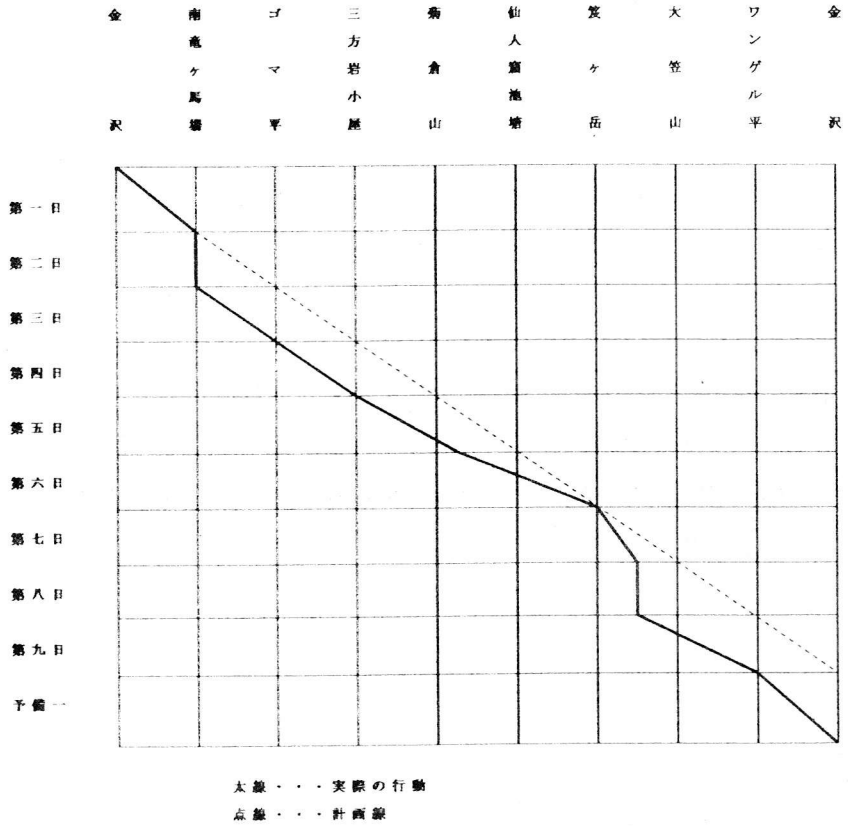
第７次白山－ＢＨＰＷ 記録報告書

１９９０（平成２）年１０月７日～１０月１６日　９泊１０日

・メンバー

	磯道　操	（食料）	文－３	（３３期）
	奥出　俊一	（装備）	理－３	（３３期）
ｓＬ	野田　和裕	（記録）	工－Ｍ２	（３０期）
Ｌ	草飼　信太郎		文－３	（３３期）

・沈澱表



（注１）第一日目は殿ヶ池ヒュッテに泊まる予定であったが、変更して南竜ヶ馬場とした。
（注２）大笠山には一日分の食料と水１０㍑をデポしておいた。

●１０月７日

６：３０　野町駅出発

台風２１号の影響で昨日は土砂降りだった。本日は曇天。

７：００　鶴来駅でバスに乗り換え。

７：３５　白山下駅着

今にも、雨が降りそうな天気。

７：４６　白山下駅発

８：１３　白峰車庫着

８：５５　別当出合着

別当出合に着く前に大屏風がよく見えた。着いてすぐに雨が降り出したが、すぐにやんだ。白山自然保護センターのアンケート調査を受けた。

９：１０　天気図をとる。台風接近が近い。観光新道を行き、殿ヶ池で泊まる予定であったが、南竜に変更。

１Ｐ ---------- (32min) ----------
９：４６　（発）
砂防新道入口に、甚之助谷が台風１９号のため、崩壊したと書いてあった。
御前峰ピークまではよく知られた道なので、簡単にしか記録をとらないことにした。
１０：０１　１３７０ｍの転向点
１０：１８　中飯場
水道から水が出た。小雨、層積
２Ｐ ---------- (26min) ----------
１０：２６　（発）
歩き出して雨足が強くなって来た。視界は良好でチブリ尾根も観光新道の尾根もよく見えた。
１０：５２　１７６０ｍ
３Ｐ ---------- (35min) ----------
１０：５８　（発）
１１：０３　別当覗き
この付近から、紅葉が始まった。
１１：３３　甚之助ヒュッテ
夏と違って樹勢が弱いためか、非常に眺めがよい。小屋の水は出なかった。昼食、高層
４Ｐ ---------- (37min) ----------
１１：５７　（発）
１２：１４　黒ボコ方面との分岐
南竜小屋までの沢に３ヶ所橋があるが、橋板が外されてしまっている。
１２：３４　南竜ヶ馬場冬季小屋
こんな、台風の雨の中でも人客がいた。紅茶を沸かしてだべる。寒いので、小屋の中にテントを張った。
１５：００　食当開始
１５：５０　食事開始
１６：００　天気図
軽量化のため夕飯の米は一人１合しかなく、これでは少なすぎる。
１６：４０頃他の、東京方面からきたパーティー（１０名程度）が帰ってきて食事を始めた。飯を食い終わると何もすることが無い。
１７：３０～　寝始める
隣のパーティーは２０：３０までいろいろやっていた。聞こえたところによると、飯は食えきれないほどあって、こちらは腹が減ってしかたなかった。しかし、いくらすることが無いと言え、１７：３０から寝たのは初めてだった。

●１０月８日
４：００　起床
４：３０頃から土砂降り
５：００　朝食開始
６：１０　ラジオで詳しい台風情報を聞き、沈澱決定。
６：３０～　何もすることが無いので、また寝始める。本当によく寝ることである。
１１：００　昼食
１１：３０頃雷雨となり、風雨ともに強まって来る。
１５：００頃風は強いが、雨はやんだ。個人的にテン場の方に散歩に行った。
１６：００　天気図、食当開始
寝るまで、怪談話などをした。
２０：００　就寝
霧雨ではあるが星はよく見えた。

●１０月９日
４：００　起床
４：３０　朝食開始
５：００　パッキング
５：２５　日の出前で暗いので待機
１Ｐ ---------- (29min) ----------
５：３７（南竜ヶ馬場発）
小屋から真正面に経ヶ岳が見えた。
鳶岩コースを行く。南竜小屋の横から開けた沢沿いの道である。石ゴロの道。
５：４８（２２１０ｍ）
沢を離れる。ここから、所々大きな石（３ｍ以上）が所々出て来る。よく滑る。
広い斜面を登る道であり、昔の道が（石を敷いた）所々出てくる。
６：００　雲海の向こうから日の出。道の所々に、霜や、霜柱が付いていた。
６：０６（２３００ｍ）
別山方面がよく見えた。
快晴、東方向に雲海。
２Ｐ ---------- (27min) ----------
６：１６　（発）
６：２６（鳶岩）
鳶岩を過ぎるとハイマツ帯の中の道である。道幅は広いので濡れなくて済む。コケモモが道の両わきに多い。
万才谷の雪渓は当然であるが、解けてなくなっている。万才谷を過ぎると広い荒野の道といった感じである。石ゴロの道となる。
６：４３（室堂）
わずかに雪がちらついた。小屋はひっそりとしていた。
曇、積
３Ｐ ---------- (32min) ----------
６：５４　（発）
御前峰まで、石の階段状の道で歩き易い。
７：２６（御前峰）
高三郎までよく見えた。写真を撮った。しかし寒かった。
行動水、快晴、消えかかった雲海。
４Ｐ ---------- (16min) ----------
７：５４　（発）
御前峰周辺は岩がゴロゴロしており、表面が凍っていて滑り易かった。また、下り口までは横風がきつかった。御前峰から剣ヶ峰方面へはジグを切った石ゴロの急な下りである。下りきると、火口原である。
８：１０（火口原の中間地点）
ここにザックを置いて剣ヶ峰にワンデリングをかけた。（予定外行動で結構ルーズ）
Ｗ１Ｐ ---------- (7min) ----------
８：１０　（発）
剣ヶ峰までは道無し。岩ゴロの急斜面を登るが、浮き石が多く危ない。
８：１７（剣ヶ峰ピーク）
ピークにはケルンや標識がある。
ＷＲ１Ｐ ---------- (9min) ----------
８：３１　（発）
８：４０（ザックを置いた地点）
５Ｐ ---------- (43min) ----------
ここから、詳しく記録を付けることにした。
８：４３　（発）

翠ヶ池に沿って地図上に示された道どうりにいく。実際歩いてみると踏み跡が見られなかった。

２６００ｍ付近から下りにかかる。この付近は火山灰の砂道で歩き易い。当初は緩やかな下りであるが、２５５０ｍから急な下りになる。立派なものではないが、所々、石が階段状に並べられている。しかし、結構苔むした道であり、この道を利用する登山者が余り多くないことがわかる。下り始めは道の両わきにハイマツがある。沢に近づくにつれ潅木が多くなってくる。

９：０１（２４７０ｍ沢に出る）

沢に出た地点に岩に赤ペンキで矢印が示してある。沢の中は岩がゴロゴロしている。上部を見上げると結構急な沢である。（ＧＷのＰＷではこの沢の中を下ってきた。雪が腐っていて雪崩が起きないか非常に心配しながら下った。）沢と言ってもこの付近ではまだ水はない。

沢を横切り今度は沢の北側をトラバース気味にいく。夏は草が生えており短パンで行くとひどいところであるが、今は枯れていて歩き易い。道をはさんで間隔を１ｍ程度あけて潅木が繁っており、その中に２０ｃｍ程度の踏み跡が続いているといった感じである。

地図にある通り、少し行くとジグザグを下る。下りきって、広場の中の道となる。２３５０ｍ付近の道の北側には、夏なら大きな雪渓があるがこの時期にはない。この付近は岩がゴロゴロしている。また、２３５０ｍには、標識がある。

やがてまた、トラバース道となる。トラバースは踏み跡２０ｃｍ程度の土道。

９：２０（２２６０ｍ付近にお花松原の標識がある）

この付近ダケカンバが多いが、昨日までの台風で葉が全部落ちてしまっていて紅葉は非常に汚かった。赤い実だけ残っていた。

９：２６（２４１６と２３４９の鞍部）

トラバース道からは結構眺めが良かった。剣ヶ峰もよく見える。晴、積

６Ｐ ---------- (44min) ----------

９：４５　（発）

２３４９への登りの途中（２２９０付近）に２～３ｍの岩があり、岩の表面にステップがきってある。２３４９までは北側の方が眺めがよい。２３４９周辺のなだらかな所はハイマツ帯となっている。

１０：００（２３４９ピーク）

２３４９ピークをすぎるとすぐに下りとなり、滑り易い粘土状の道となる。下りきると湿地帯にはいる。今後、間名古の頭まで湿地帯がいたるところに見受けられる。

１０：０９（池塘）

地図が、”白山”から”中宮温泉”に入るところで道の南側に１０×２０ｍ大の池塘があった。全然荒されていない。池塘の周辺は草帯となっていて、その周りにハイマツ、ダケカンバ、ナナカマドなどがみられる。

この池塘を過ぎてからも、カルスト地形みたいに穴ぼこや池塘があちこちにみられる。地図上で道の北西に窪地の印がしてある地点があるが、この付近が北弥陀が原と呼ばれている。

１０：２２（北弥陀が原の標識）

標識は倒れかけていた。広々としていて、辺り草帯かハイマツ帯となっている。地図上で道の北西側に窪地印がついた箇所はハイマツに覆われているのが、ここまでの下りの途中から見えた。ずっと土道。

１０：２９（北弥陀が原を過ぎた尾根上２１５０ｍ付近）

北弥陀が原を過ぎて２１６８手前の尾根にはいると正面に奥三方がどっしりと見える。この尾根は歩き易い５０ｃｍ幅の土道である。東斜面は草地で眺めが非常によい。紅葉もきれい。高層、積、ぽつりと雨が降った。行動水

７Ｐ ---------- (42min) ----------

１０：４０　（発）

２１６８への登りは笹、アオモリトドマツ、ダケカンバの潅木帯の中をいく。

１０：５５（２１６８；地獄覗き）
２１６８から少し北に行ったところと思うが、”地獄覗き”という場所がある。道の西側にあり、二畳分位の広さがある。標識も立っている。覗くと谷が見えるかというとブッシュに隠れて全然見えない。
２１６８を過ぎると滑り易い道となり、下りには木の階段が設けてある。途中で気付いたが、一般的に南斜面は日が当たるので乾いた道で、北側斜面に付いた道は湿っぽく滑り易い道である。以後もずっとそのようになっていた。
１１：００（鶯平）
２１６８と２１１４の鞍部は鶯平である。標識がある。周辺は笹の原っぱで周囲に潅木がみられる。
１１：０６（２１１４）
２１１４ピーク付近は平坦ではっきりしないが、ピークと思われた地点は広場になっている。別に何もない。
２１１４からはなおさら滑り易く、木の階段が多い道となる。間名古の頭に向けての急な下りはジグがきった道である。鞍部に下って少し登ると間名古の頭を北西にトラバースするようになっている。
１１：２２（間名古の頭のトラバースに入る地点）
トラバースにはいる直前でピッチをとった。（ＧＷ期の山行では、トラバース道が見つからなくて、間名古の頭を直登した。急だったが比較的簡単に直登できた）曇、積、昼食
８Ｐ ---------- (35min) ----------
１１：３６　（発）
すぐ間名古の頭のトラバースに入る。トラバースは全体的に登り気味についてある。アオモリトドマツ、ダケカンバの樹林帯の中の道が三俣峠まで続く。小石がゴロゴロしているが、よくしまっていて、トラバース道にしては歩き易い。但し、夏期には下草が繁っていて歩きにくい。途中一箇所土砂崩れで道が塞がれているところがあったが大した規模ではなく危険もなくすぐに越えられる。
１１：５０
トラバースをぬけ尾根に出る。この直前に間名古の頭の標識があるがピークへの道があるわけではない。尾根に出た地点は前方に視界が広がるので気持ちよい。
１１：５４（三俣峠の標識、地図とは地点が異なる）
地図上の三俣峠の位置と異なる地点に標識が立っている。県境から殆ど離れていない所の樹林の中に立っていて、峠らしい地形も見受けられないのでおかしいことがすぐわかる。
間もなく樹林から抜けて低い笹の中の気持ちのよい尾根道となる。軽くジグをきって下れば地図上の三俣峠である。開けた峠で、右手にシンノ沢が曲がりながら高度を下げているのがよくわかる。（ＧＷ期はこの沢の中を下って行った。上部では気持ちよく下れるが、下部はスノーブリッジに注意しなければならない。）
背の低い笹帯の中の道が続く。
１２：１１（２０７７のトラバース道の途中）
２０７７のトラバースは５０ｃｍ程度の土道で、トラバースだけは背の高い笹ブッシュとなっている。２０７７の南東方向の道上で休憩。丁度、フキが生えていたので草飼が食用として採取した。みんなどれだけ食う気があったか知らないが、結局、後で全部食った。曇、積
９Ｐ ---------- (24min) ----------
１１：２４　（発）
ゴマ平へ下り始める地点は左に曲がるのでよくわかる。下りに入ると北斜面であることから急に笹がなくなり、苔むした石ゴロの道となり滑り易い。下りはジグを切った道で、途中、三方岩や国見山方面、岩間元湯への道が見えた。ダケカンバ、アオモリトドマツなどの潅木帯の中の道であるので日は差し込まない。
１２：４７（中宮道との分岐）
１２：４８（ゴマ平小屋着）

小屋は分岐から中宮温泉の方向に行って左手すぐである。曇、積

水場は小屋の東側を通って少し下るとある。小さな沢で、水量は多くないので、ひどい干天時には枯れてしまいそう。今の時期は充分にあるし、今年の盆に来たときよりも多かった。小屋の周囲は樹林で覆われている。また、小屋の前は小さな広場となっている。

小屋の中にはいるには二重扉となっている。小屋の中は土間と二段になった板の間があり、二階へは階段で登る。最大で２０人程度泊まれると思う。便所も用意してあり、比較的きれいに使ってあった。道整備用のシャベルなど、毛布２、３枚、自然保護センターが用意したノートなどがある。小屋の中は暗い。

中宮の方向から登山者が１名来て、野田と３０分ほど話した後、室堂へと登って行った。

１４：００も過ぎていて少し無謀と思ったが特に止めなかった。

１５：２０頃から、取ってきたふきを調理し始めた。皮をむいて、二回ほど沸騰させた湯で煮込んでアクをぬき、ラードで炒めて塩で味付けして食った。ラード臭かったが結構イケた。

１６：００　天気図

天気図を取り終わる頃から雨が降り出した。

１６：４８　食事開始　雨はまだやまない。さっきの人は大丈夫か心配になってくる。

１８：３０　小屋の中の気温計8.5℃である。非常に寒い。

２０：４０まで、歌集を歌っていた。腹は減るし、寒いのでろくなことはない。

２０：４５　就寝　ガス、小雨

さっきの人は果して無事に着いただろうか。一歩間違えば雨の中遭難である。

●１０月１０日（体育の日）

４：３０　起床

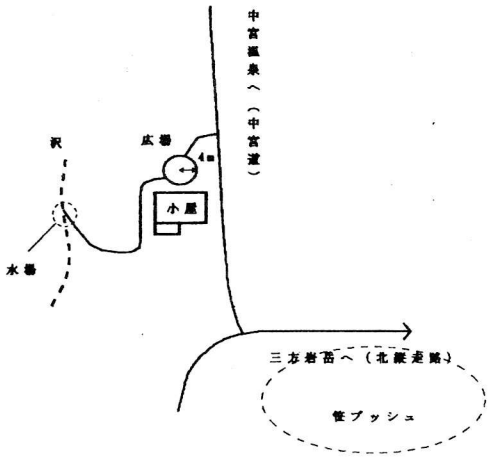
寒くて２時間ほどしか寝れなかった。起床時の小屋の気温は4℃であった。外に出てみると、笹の葉に薄く付いていたのはなんと雪であった。（この時期、山での雪は珍しくないとはいえ、今年金沢で初雪が降ったのは12/24であったので２ヶ月以上も早く初雪を体験してしまった。）、晴

５：０９　食事開始

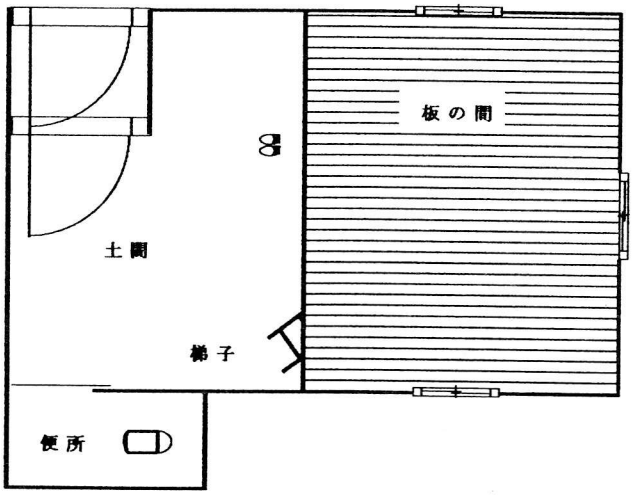
１Ｐ ―――――――――――――――――――― (40min) ――――――――――――――――――――

６：００（ゴマ平小屋発）

ゴマ平を出て少し昨日の道を引き返し、左手に折れ、三方岩岳方面へ向かう。少しずつ登りながら東に進むと行ったところ。現在地ははっきり分からなかった。人も入らないので相当の悪路であり踏み跡もかなり薄いところもあるが、危険箇所は無い。台風の後であるためか石が濡れており滑り易いし、沢が何回か道を横切る。背丈以上の笹ブッシュが道の両わきにずっと続く。笹が道のまん中から生えたりして、登山者がいかに少ないかよく分かる。



ゴマ平小屋付近の地図（上が北方向）



ゴマ平小屋小屋内部の様子（上が北方向）

６：３４（１８５０ｍ付近）

１９００ｍ付近は兎平と呼ばれ確かに平坦な感じはするが、ひたすら笹ブッシュで何も見えない。１８５０ｍからは土道か石ゴロの滑り易い下りである。一部急なところは木の階段が用意してあった。笹ブッシュは相変わらずで、視界は全然効かなかった。

６：４０（シンノ沢手前の小さな沢）

下りが終わって平らな所へ出るが、出る直前に２ｍ幅の水量豊富な沢が横切っている。渡渉して休憩する。この付近アオモリトドマツの林で、地面はぬかるんでいる。北縦走路の案内板と野鳥の説明板が５枚ほどあるが、どれも傾いている。ぬかるんでさえいなければ水場も近いしテン設適地になる。雪（少し）、曇

２Ｐ ―――――――――――――――――――― (42min) ――――――――――――――――――――

６：５６　（発）

ぬかるんだ平坦な道を進む。周囲は笹ブッシュであるがさっきのように頑固ではない。だんだんシンノ沢に近づいてくるのが沢音からわかった。

７：０５（シンノ沢）

シンノ沢は１５ｍ程度はあろうか、コシアゲ沢より少し広く水量も豊富。沢は橋で渡る。沢のまん中に橋脚があり、鉄製の梯子を縦に２本寝かした立派なものである。沢からの高さも２ｍ程度ある。

しばらく沢沿いに進み、やがて１７８６．５と１７７２の鞍部に出る。この付近、瀬領松と呼ばれるらしいが、立ち枯れたアオモリトドマツが数本あるだけであとは笹ブッシュである。ブッシュの高さは５０ｃｍ程度だが、道幅は細くよく濡れる。

鞍部から登りにかかる付近で木の階段があった。登りの中腹までは見越山に似た登りで、木の根が張り出した土道、笹ブッシュ。上部に近づくにつれて笹の背が低くなり濡れなくなる。また、砂利道になってくる。

７：２１（念仏尾根の標識）

大体登りきった辺りで、念仏尾根の標識があった。ここから、快適な尾根上の道となる。笹の背も低く、当分見なかったハイマツも復活する。本来眺めが良いはずであるが、ガスっていて何も見えないのが残念。１７７２周辺から背の低い笹帯となる。この付近南東側が数カ所ガレているが、ガスっていて下方が見えなかった。それほど危険とは思われない。

７：３８（１７７２の次の小ピーク）

１７７２の次の小ピークでピッチをとった。この付近、快適な土道。ガス、曇、積雲

３Ｐ ―――――――――――――――――――― (52min) ――――――――――――――――――――

７：５０　（発）

１７７２の次の小ピークから少し下り、また登ったところ（１７６０ｍ）に３ｍ程度の岩がある。この辺からハイマツの根が張り出した砂利道となる。念仏尾根は全般的に尾根

の中心より南東側に道が付いているので、南東側の視界がよい。また、南東側は結構切れ落ちている。１７６２まで気持ちよい尾根道が続く。

８：１０

１７６２を過ぎて進行方向を北に変える。１０ｍ程下って広い平坦地になる。この平坦地はぬかるんでおり、背丈以上の笹ブッシュ。少し行けば笹から抜け出て、地図でも明らかなように尾根の直下の東側トラバースとなる。非常に気持ちよい砂利道で右手に荻町の集落と鳩ヶ谷ダム湖がガスの晴れ間から見られた。

トラバースが過ぎると１７１０ｍの平坦地に入る。この平坦地はアオモリトドマツ、潅木と笹の中の湿った５０ｃｍ程度の土道。１７１０ｍからの下りは笹の中の滑り易い土道。

７：２８（１７１０ｍと妙法山との鞍部）

この鞍部付近はアオモリトドマツなどの潅木帯。

すぐに妙法への登りである。登り始めは人工的に石を積んだようになっている。しばらくするとガレの多い道となる。登りの南東側が崩れていて岩肌が出ているが特に危険はない。登りは潅木の背が低いので視界がよく、スーパー林道も見える。登っている途中、陽がさしてきた。

８：４２（妙法山ピーク）

ピークは約１０ｍ×５ｍと縦長で広い。石がゴロゴロしており、標識と三角点がある。行動水、曇、積

４Ｐ ―――――――――――――――――――― (50min) ――――――――――――――――――――

９：００　（発）

ピークを出てから急な下りである。かなり古いがまだしっかりした木の階段がこの下り全体にわたってついている。眺めがよい。

９：１０（妙法と１７５６の鞍部）

東側に笹ブッシュがある。東側の一段低くなったところに池塘が見られた。１７５６へは東側を行くが、所々木の階段がついている。潅木帯中の土道であり、笹も刈り込んであった。１７５６は通らず、ピーク直下をトラバースする。トラバースを過ぎて１７５６と１７８０の鞍部付近はうっそうとしたアオモリトドマツの林の中のぬかるみ道となっている。１７８０手前の１７００ｍ付近から林を抜けて登りとなる。この登りは道幅５０ｃｍ程度の砂利道でずっと階段が用意してある。右側はガレているが特に危険はない。背の低い潅木帯で景色が良く、荻町まで良く見えた。

９：５０（モウセン平の池塘）

１７８０を過ぎて少し行くと地図上で池塘の印があるところがモウセン平である。この付近だけ丸太を打ち込んだ踏み木が用意してあるので、この上を伝って行くことが出来る。ナナカマドも良く紅葉しておりきれいだったし、池塘も全然荒されていない。モウセン平には壊れたベンチと標識がある。池塘は２つ見受けられたが高層化しており水はあまりなかった。テン場に刈り込んだ後もあった。

５Ｐ ―――――――――――――――――――― (33min) ――――――――――――――――――――

１０：０５　（発）

モウセン平を出てからも丸太を打ち込んである。出てからすぐに、丸太の根元にナメコを発見、今晩のおかずにすることに決定。すぐに尾根上の道となる。地図上のガレマークの地点は実際も相当ガレている。全般的に左手はアオモリトドマツなどの背の高い潅木帯であり、東側の眺めがよい。上り下りの地点には必ずと言っていいほど階段が用意してあるので、快適に進むことが出来る。

１０：３８（野谷荘司山ピーク）

ピークはダンロップのテントを縦に２つ並べた程度の広さ。ピークには三角点、標識有り。ピークからの眺めは良く、白山（正し雲で見えなかった）～鳩ヶ谷～三方岩・犀奥方面まで良く見える。スーパー林道からの観光客が数人いた。ここから結構人に出会うこととなった。今日は体育の日である。昼食、曇、層積

６Ｐ ―――――――――――――――――――― (50min) ――――――――――――――――――――

１１：０３　（発）

１１：１０（鶴平新道との分岐）

鶴平新道の分岐は１７９７と１７０４の中間の小ピークにある。

大体は樹林帯中の中の土道であるが、ときどき右手に視界が良く広がる所に出る。視界が広がる所は、地図上にもたくさん見られるガレ場となっている。急なガレ場ばかりだが、落ちる危険性は無い。 しかし、念仏尾根以来の北縦走路は本当に快適な道が続く。

１１：５３（１７３６手前の鞍部）

この地点でピッチを取った。人に良く出会った。

また、１７３６のトラバース道は良く分からなかった。多分、廃道となっている。

７Ｐ ―――――――――――――――――――――（17min）―――――――――――――――――――――

１２：０６　（発）

１７３６への登りは階段となっている。

１２：１５（１７３６）

１７３６は飛騨岩と呼ばれる。ピーク付近は道が走っているだけであり、あと顕著なことと言えば、杉の木が多く根が道上に張り出している。

１７３６からの下りも木の階段となっている。

１２：２３（三方岩岳加賀岩）

加賀岩の少し手前に三方岩小屋跡への分岐がある。

加賀岩のピークは人が多く、いつもそうであるように、観光客から注目を浴びるのであった。飛騨岩と違って加賀岩のピークは広く、標識、ベンチ有り。ピークから明日のコースを見てみると、１７５４までは踏み跡が付いているのがよく分かった。紅葉がきれいであった。

８Ｐ ―――――――――――――――――――――（18min）―――――――――――――――――――――

１３：０２　（発）

来た道を少し引き返して、小屋跡の方へ向かって下りる。飛騨岩の直下まで来ると、稜線上を東側にどんどん下りて行く。やがて、道が左側にそれて行くと同時に背の高い笹が出始めて間もなく三方岩岳小屋跡に到着する。

１３：２０（三方岩岳小屋跡）

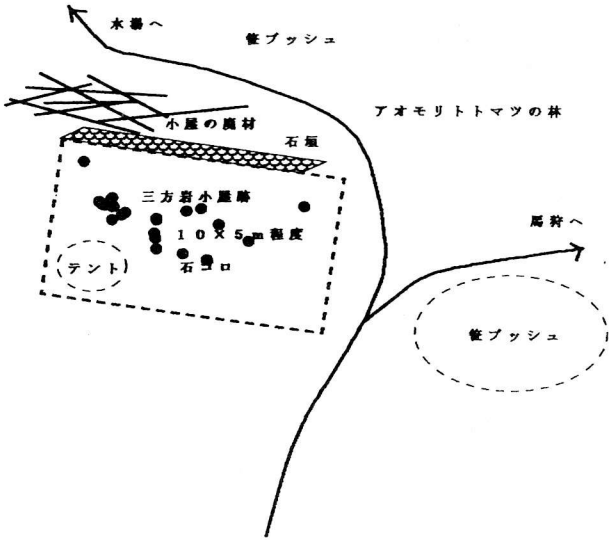
小屋跡周辺はちょっとした広場みたいに広く、周囲はアオモリトドマツとダケカンバの林である。眺めは無い。小屋跡は平で広いが、石がゴロゴロしていてテン設はやりにくい。水場へは２～３分程度で行くことが出来る。水量も豊富で干天時にも大丈夫だと思う。

１５：１５　食当開始

モウセン平で採れたナメコを、マルタイのスープで煮て食べた。うまかった。

１６：００　天気図

２０：５０まで歌を歌った。寝る前、外に出しておいた靴が凍っていた。快晴。



三方岩岳小屋跡付近の様子

●１０月１１日
５：３０　起床
夕べも寒かったのでほとんど寝られなかった。自分は目はさめていたが、シュラフから出る気がしないのでじっとしていた。すると、４：３０起床のところが、一時間も過ぎてしまっていた。今日から、いよいよブッシュ突入と言うのに、いきなりフェイントがかかってしまった。
５：５８　朝食開始
６：１５　撤収、パッキング開始。一人４㌔の水歩荷。
１Ｐ ---------- (27min) ----------
６：４０（三方岩岳小屋跡、発）
小屋を出てすぐは、背丈以上の笹の中の土道である。全般的に溝状となっており、滑り易い。１６１０ｍ当りから尾根上の道となるが、潅木ブッシュである。潅木は歩き易いように刈り入れてあった。しかし、道の状態から推察すると利用者は少ないと思われた。尾根上から、後ろを振り返ると、北アルプスの山並が良く見えた。やがて、飛騨岩直下に出る。飛騨岩は巨大な岩である。２万５千分の１の地図には、飛騨岩直下の巻道が記載されているが、現場には見あたらなかった。
７：０５（北縦走路との分岐）
分岐には標識がある。
加賀岩まではすぐであるが、北側が岩場となっており、危険箇所はロープが張ってある。
７：０７（三方岩岳）
ピークには標識、ベンチ有り。非常に見晴らしのいいピークである。白山から、北アルプス、医王山、能登半島まで見えた。晴、絹雲
２Ｐ ---------- (36min) ----------
７：２６　（発）
三方岩からの下りは道幅１ｍ以上ある土道で快適である。ぬかるみが多くて、滑り易そうな道であるが、凍っていて気にならなかった。全般的に木の階段が設けてある。
７：３７（県境と夏道との分岐点）
いよいよ藪へ突入である。分岐点は注意していればすぐわかる。三方岩からも良く見えるので、観察しておくと良い。また、ピークから見たところ、県境上にうっすらと、旧道が残っているのがわかった。
実際に歩いてみると、確かに踏み跡がある。余りはっきりしない踏み跡だが、藪の薄いところを突いて行けば普通の夏道と余り変わらぬ速さで歩くことが出来る。１５７４の次の鞍部で少し迷ったが、踏み跡は忠実に尾根上に付いている。
ブッシュは背丈以上の笹か潅木である。木をまたいで乗り越えるとか、ザックにひかかるとかいうことはない。紅葉は汚かった。
１５７４次の小ピーク（１５７０ｍ）は瓢箪展望台となっている。
８：０２（瓢箪展望台）
瓢箪展望台は最近出来たもので、ベンチと、木製の展望台がある。展望台への道は、西側に付いている。切株がごろごろしており、植生などを説明した看板があった。展望台と言っても三方岩岳の方がよっぽど眺めがいい。
３Ｐ ---------- (55min) ----------
８：１３　（発）
展望台からわかりやすい道が付いているが、１分も行くと途切れて、わからなくなる。しかし注意すると、やはり旧道の踏み跡が付いているのでそこをたどる。非常に分かりにくいが、少し藪が薄くなっている。展望台過ぎの鞍部を過ぎ、瓢箪山の尾根へ取り付く付近では、旧道は県境上を行かず、少し西へトラバースし一気に尾根まで登る感じである。そして、１６００ｍのピークの少し西側に出る。
展望台過ぎの鞍部付近は所々ブナや、松がある林となっている。全般に、背丈以上の笹と潅木ブッシュである。ところどころ、古い切株がある。
８：２６

１６００ｍのピークの少し西側の稜線上に出る。

出た付近、東西に延びた溝状の地形となっている。その溝の中を西に向かって進む。溝幅は約５～７ｍ深さは約３ｍといった感じか。溝の中は笹ブッシュであり、缶ビールの空き缶や、瓶ゴミがいたるところに捨てられてあった。

溝状地形となっているのは瓢箪手前１６３０ｍ小ピークと１６００ｍ小ピークの鞍部付近だけで、どんどん進むと、やがて溝が途切れる。途切れたところで北側の斜面を少し登ると一本尾根になっていて、その上に明らかに道が付いている。比較的進み易い潅木ブッシュ中の道である。

瓢箪手前１６３０ｍ小ピークは南側を通る。ピーク付近において、道の北側に南北に延びた溝状の地形（深さ約３ｍ）があり、いままできた道とＴ字形に交わっている。気にせずまっすぐすすめばよい。

しばらくしてまた、溝状の道となるが、すぐに、南側の斜面を少し登る。すると踏み跡が付いている。この辺からだんだんブッシュがひどくなってくる。その踏み跡どうりに行くと瓢箪山のピークに着く。

９：０８（瓢箪山ピーク）

ピークには何もない。背の高い潅木ブッシュに埋もれていて何も見えない。テン設適地なし。今回のピッチは全般的に旧道の踏み跡があり、楽に進めた。行動水。

４Ｐ ---------- (58min) ----------

９：２２　（発）

瓢箪山から少し行くともう道はない。所々、踏み跡らしきものがあるが当てにせず、尾根上を行く。背丈以上の潅木、笹ブッシュで、乾燥していてほこりがひどい。眺めも悪い。

１６５０ｍ付近だけ、杉の、木や根が大きく張り出していて進みにくい。しかし、その上に立って現在地を確認できる。尾根ははっきりしている。

１０：２０（１６５０ｍを過ぎ、少し行った平坦部）晴、絹雲

５Ｐ ---------- (56min) ----------

１０：３３　（発）

進み初めてすぐ、１６５０ｍ過ぎの平坦部の途中に、白く立ち枯れた木（直径約１ｍ）があり、その周りだけ円周状に笹が低く膝下程度になっている箇所があった。多分、落雷により焼けたものであろう。笹を刈り込めばテン設可能。眺めも良く、剣が見えた。

１１：０３（１６８６）

ここまでの道、主に潅木混じりの笹ブッシュで、背が高いので日がさしこまない。やはり、旧道跡が所々見受けられる。注意していれば切株も見つかる。

１６８６付近、地形が平坦で進行方向がよくわからない。コンパスなどで確認する必要がある。少し行くとブッシュの隙間から国見、笈方面が見えたので進行方向を確認することが出来た。

１６８６からやはり旧道があった。道といってもわずかに藪が薄い程度のものである。溝状となっており、笹ブッシュで何も見えない。

１１：２９（国見手前１６８０ｍ小ピークと１６８６との中間点）

この付近地形が平坦で現在地がよくわからない。ブッシュは背丈以上で眺め悪く、日がさしこまない。しかし、日陰を行けるので、割合楽である。

近くのダケカンバに登り、現在地と進行方向を確認した。ダケカンバの上からみると、旧道跡がよくわかった。実際に歩いてみると殆どわからないが、上空から見るとよくわかる。昼食、晴

６Ｐ ---------- (64min) ----------

１２：０３　（発）

国見山手前１６８０ｍ小ピーク上を通って行った。旧道跡かどうかよくわからない。小ピークを過ぎると一面深い笹ブッシュとなっている。だだ広い地形で、くねくね曲がりながら進む。ところどころアオモリトドマツが立っている。人は入っているようで、テープが見受けられた。

国見山直前の１６８０ｍ当りに南北に走る溝状の地形（深さ約２ｍ）がある。

溝の中に降りて、国見山に登るが猛烈な笹ブッシュである。しかし、すぐに終わり、平坦部に出る。
１３：００（１６９０付近通過）
ピーク付近は潅木と笹ブッシュ。見たところではテン設適地なし。
１３：０７
１６９０から真北に行った１６８０付近で休む。笈方面が見える。よく見えないが、北側は比較的急に落ちている感じ。行動水、快晴
７Ｐ ---------- (69min) ----------
１３：２２　（発）
仙人窟方面の稜線への入り口は厳密にわからない。左手に谷（トークズレ谷）を見ながら（見えないが）トラバースぎみに降りて行く。潅木と笹ブッシュがひどい下りである。踏み跡も全然無い。ブッシュの間から、正面に仙人窟だけが大きく見える。地図でも明らかなように、尾根の右側は広い。（ＧＷ期は国見山を通らずにこの広い斜面を通り、大きくショートカットすることが出来る。）地図上の矢印地点（１５６０ｍ）にテン場（１張り）がある。このテン場は平坦で快適そうだが西側はすごく谷が切れ落ちているので危険である。
１３：４８（テン場）
テン場から、笹が急に姿を消し、潅木だけのブッシュになるのと、所々踏み跡が出てくる。地図上では比較的細尾根であるが、東側の視界が余りきかないのでよくわからない。西側は、ものすごい谷である。テン場から少し行ったところ（地図のガレ場マークか？）で非常に危険な箇所があるので慎重に行く必要がある。この場所を過ぎればあとは問題無い。
１４：３１（菊倉山手前１５４０ｍの平坦部付近）
この付近、潅木の枝を払えばいいテン場になりそうなところがある。行動水、晴
８Ｐ ---------- (68min) ----------
１４：４５　（発）
菊倉山付近、全体でテン設適地が４、５ヶ所ある。但し、菊倉山を過ぎると１６４６までテン設適地無し。菊倉山付近の尾根は広く、西側にブナがぽつぽつ立っている。菊倉山を過ぎるとあとはずっと稜線上の潅木ブッシュの中を行く。　１５：３５頃（１６４６と菊倉山鞍部）
１６４６へは急登で、踏み跡らしきものがある。（無いよりはまし程度のもの）木を手づかみで登らなければならない箇所や、木をまたいで行かなければならない箇所があるので大変である。途中で野田が左目をひどく突いてしまった（視力がなおるのに１カ月以上かかった）。みんな結構疲れているように思えた。
１５：５３（１６４６登り途中の１５８０ｍ）
国見山だけがよく見える。行動水
９Ｐ ---------- (46min) ----------
１６：０６　（発）
１６：４２（１６４６ピーク）
ピーク付近は潅木ブッシュ。踏み跡無し、テン設適地無し。仕方なく、もう少し進む。
１６：５２（１６４６と次の１６４０ｍ小ピークの中間地点）
ピークからも踏み跡無し。
なんとか、１張り張れるテン場を見つけたのですぐテン設する。潅木を木鎌で少し払った程度で張れた。薮の中で全然眺めはなし。
１７：３１　ブス点
あと記録無し、早々に寝たと思う。

●１０月１２日
４：３０　起床
５：０５　朝食開始　水の無いマルタイ

５：４５　撤収開始

１Ｐ ---------- (65min) ----------

６：１４　（発）

尾根上を行く。踏み跡もない、ひたすら潅木ブッシュの見通しの効かない尾根である。ところが、登りになると、立派な踏み跡が付いている（１６５０ｍ付近と１６６０ｍ～１７００ｍ）。刈り込めば立派な夏道になるほどである。昨日の１６４６の登りと違ってぐんぐん進むことが出来る。平坦部には踏み跡は無い。これは、ＧＷ期に南斜面の雪がとけるため、ＧＷ期の登山者が尾根道を利用するからだと思われる。）

７：０２（１７００ｍ）

ここからは、もう踏み跡無し。ひたすら潅木ブッシュ。西側にブナ林。

７：１９（１７４７手前の１７２０ｍ）

尾根をそれることなく来る。テン設適地は昨日のテン場以来見あたらない。曇、高層、高積

２Ｐ ---------- (48min) ----------

７：３２　（発）

ひたすら潅木ブッシュの中を行く。眺め悪く、踏み跡無し。

７：５５（１７１７）

１７４７付近から、西の方向に尾根が広がる。１７４７を過ぎてまっすぐに行くと、東の尾根にそのまま入ってしまうので、適当な地点で進行方向を西側に向けてやる必要がある。我々も、適当に西側にそれて、広い尾根の方向に入って行った。アオモリトドマツが所々立っている、深い笹ブッシュ。潅木も混じっている。ときどき、笈が見えるので、地図で進行方向を確認しながら行った。

この付近平坦地であるが、笹が深く、よほど刈り込まなければテン設出来ない。

笹ブッシュを下り、仙人窟の１峰と２峰の鞍部に着くと、そこには湿原がある。

８：２０（仙人窟岳湿原）

湿原は、すぐに見つかる。図に示すように南北に上中下の三段になっていて、一番下の湿原にしか池塘が無い。しかも、水がくめる池塘は、直径１ｍ、深さ５０ｃｍ程度の小さなものが一つあるだけである。他のものは水深が１０ｃｍ程度しかなく、干天時には干上がってしまうかもしれない。

下の湿原だけに水が集まるためか、下の湿原はだいぶぬかるんだ草地となっていて、上中の湿原は乾いた草地となっている。（従って、湿原と呼ぶのは変なので以後は草地と呼ぶ）上中の草地は、最高のテン場になる。特に上の草地は視界が広く北に開けて、眼前に笈、大笠をみることができる、一級のテン場である。中の草地と下の湿原はくぼんだ地形の中にあり、眺めはない。テン設は中の草地に２張り、上の草地に５張りはできる。

下の湿原の周りには、獣道と思われる踏み跡が付いていた。踏み跡はかなり踏まれているので、毎日のようにこの池塘に通っているようだ。池塘で一人４㍑ポリタンに水を満たし歩荷。水は、池塘特有に薄茶色をしているが比較的澄んでいる。行動水、晴、絹雲

３Ｐ ---------- (65min) ----------

８：４３　（発）

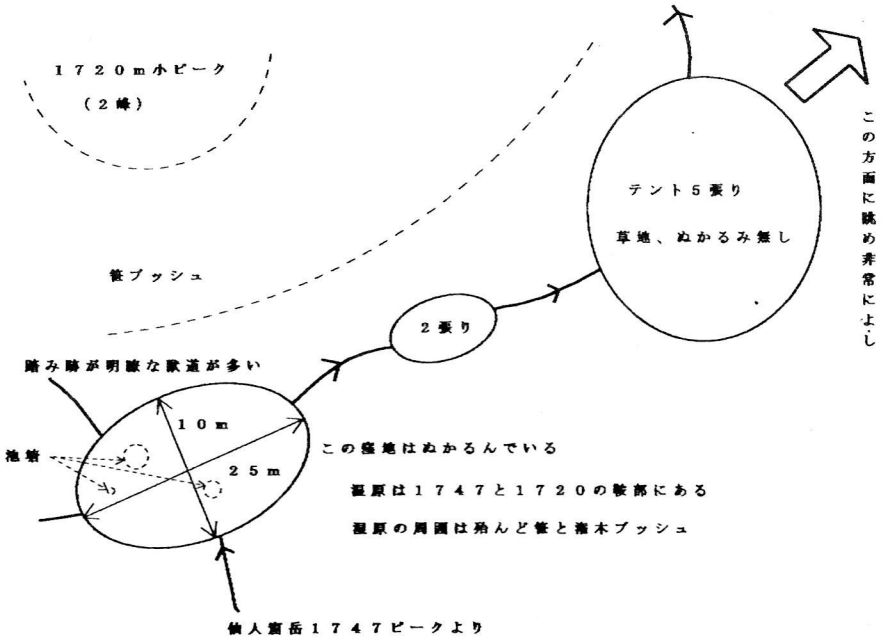
２峰ピークは直接通らず、東側を少し巻いて行く。再び、猛烈な笹ブッシュである。視界が無いまま、とにかく３峰（１７００小ピーク）へとりついてよじ登る。ほぼ県境沿いに来ているものと思われた。

２峰と３峰との鞍部はブッシュのみで何もなさそうだった。沢の源頭部の溝状の地形が東側に見られた。

９：２２（３峰付近）

３峰手前に、思いもよらずしっかりした踏み跡がある。しかし、数１０ｍ行くと無くなる。あとは、細尾根上を行く。潅木ブッシュがすごく、枝や、根が張り出していて、なかなか進まない。しかし、背が低く眺めはよい。

９：４８（岩底キレット手前の細尾根上、図中に表示）晴、絹、絹積



仙人窟岳の池塘付近の様子（上が北方向）

４Ｐ ---------- (54min) ----------

１０：０２　（発）

同様な状態が続く。

１０：１９（岩底キレット手前の１６９０ｍ小ピーク）

笈を左前方に見るような感じで進行方向を間違えないように下る。下りも潅木ブッシュである。途中、潅木ブッシュから抜けるところがある。（１６１０ｍ付近）眺めがすごく良いが、草付きの急な下りであり西側が急であるので慎重に下る。東斜面は草付きとなっている。すぐに、ブッシュに戻る。

１０：４０（キレット鞍部）

藪で、テン設適地無し。かすかに踏み跡あり。

熊のダイビングは次のような状況である。鞍部から少し進むと、尾根上に上から杉の根が大きく張り出した３ｍ大の岩がある。この岩は、東側の少し下を巻く。どうっていうことはない。次は、本当の岩場である。４、５ｍの高さがあり、直下から直登出来そうにも見えるが、ザックを担いでいると危ない。そこで、西側にトラバース道が付いているのでそこを行く。１５ｍ程の距離を登り気味に行くとスラブ状の地形となっていて（高さ３、４ｍ）そこを登れる。ホールドも多くすぐに登れる。但し、落ちたら危険である。（ＧＷの時もこのスラブを利用した。雪も付いていなかった。また、藪が雪で隠れていたので、下から熊のダイビングの全体を見渡すことが出来た。岩場は、帯状に東側に連なっているのが分かった。）

スラブを登り、少し東側に返すと地面が露出したテラスになっていて少し広がりがある。

１０：５６（テラス）

テラスは狭いが、良い休憩所になる。ここから、岩底キレットや、岩底谷が一望できる。岩底キレットは名前通り、急なアップダウンである。晴、高層、昼食

５Ｐ ---------- (60min) ----------

１１：３４　（発）

テラス付近は草地である。しかしすぐに尾根上の潅木ブッシュの中を行く。１６９０から岩が連続して尾根上に出てくる。初めは、３ｍ大の岩の中をくねくね行く感じである。高三郎旧道のザック置き場みたいなところが連続してあると思えば良い。最後のだけはでかい。”ジャンダルム”と言われているらしいが、高さが１０ｍ以上あるだろう。岩の東側直下の草付きを巻くが、特に危険なし。あとは、尾根上の潅木ブッシュの中をひたすら

行くのみである。
１２：３４（冬瓜山との分岐手前１７３０ｍ付近）
行動水、曇、高層
６Ｐ ---------- (48min) ----------
１２：４８　（発）
１３：００（冬瓜山との分岐小ピーク）
いままで潅木ブッシュだったのが、ここから潅木混じりの猛烈な笹ブッシュになる。潅木をまたいだりしていかなくてはならないし眺めもない。
１３：３６（小笈手前のテン場）
１７５０ｍに来ると、急に藪から抜け、目の前に草原の斜面が広がる。この斜面の下に立派な２張り程度のテン場がある（１７５０ｍ付近）。今日はここで泊まりかという雰囲気になった。
行動水を残り全部飲む。喉がからからだった。小笈を見に、草原の斜面を登ってみる。尾根上は潅木、笹ブッシュで覆われているが、尾根から少し外れた東側は草原となっており、その途中で、１張り程度のテン場が見つかった（１７７０ｍ）。数１０ｍ下の方に池塘も見えた。実は、これらのテン場が、一般に”小笈のテン場”と言われているものらしいことが後からわかったのだが、小笈のピークにもテン場があると言うことを聞いてきていたため、その幻のテン場を求めてさらに前進することになった。
１７５０ｍまで戻って、再び出発。
７Ｐ ---------- (33min) ----------
１４：１８　（発）
尾根上の藪の中を進まず、草原を行く。
１７８０ｍから小笈の登りである。登り直前は沢の源頭部の溝状の地形となっている。尾根上を登るが、笹と潅木のひどいブッシュである。
１４：５１（小笈ピーク）
ピークは藪で覆われているが背が低く眺めよし。テン場などどこにもない。テン設不可。
８Ｐ ---------- (34min) ----------
１４：５９
小笈からひたすら潅木と笹ブッシュが続く。潅木の株を乗り越えて行かなければならない登りであるので、きつい。小笈から笈まで楽に行けるとどこかで聞いたことがあったが、とんでもない話である。しかし、なんとなく踏み跡が見える。
１５：３３（笈ヶ岳ピーク）
笹を刈りテン場を広げて、テン設。１張りがせいぜいで、小笈のテン場の方が快適には違いない。しかし、笈のピークにテン設出来たし、距離も大きく稼げたので満足した。計画書の丸一日分をカットするスピードで来ている。食料を削ってまで軽量化した効果が現れたかもしれない。
笈ピークには、標識、地蔵さん、雑記帳がある。眺めよし。ＧＷに来たときのメモが残っているかと楽しみにしていたら、持ち去られていてなく、残念だった。今年の夏に、東京都立大学が来たらしく、計画書が置かれてあった。そこで我々も、本ＰＷの計画書を残して行くことにした。
１６：００　天気図　このころから、雨がポツポツ降り出してきた。
沈澱をする可能性があったので、フライシートを利用して天水をとれるようにした。
２０：３０　就寝　小松方面の町の灯がよく見えた。

●１０月１３日
４：３０　起床　雨
５：１３　朝食
明るくなるまで待機する。
８：２０　撤収開始
高層雲が厚いが、一時的に雨がやみ視界も良好だったので、前進することにした。

１Ｐ ---------- (67min) ----------

８：５９　（笈ヶ岳発）

ピークから２０～３０ｍ程踏み跡があったが、すぐに消えて無くなる。尾根上を行くが、笹と潅木ブッシュである。笹は細くて頑固でない。雨の後で、笹が滑り易くなっている。右側は草付きの開けた急斜面である。錫丈との鞍部近くに来ると、岩が出て来る。通行の障害になるわけではなく、西側を行けばよい。岩の東側は急に切れ落ちているようだった。錫丈への登りは急である。尾根上をたどったが、すぐ西側に溝状の地形が見えており、そこを行っても良さそうだった。

８：３６～８：４０（錫丈岳ピーク付近）

錫丈岳ピークは比較的広いが、潅木ブッシュでテン設適地無し。余り顕著ではないが一番東側に少し高くなった所（つまり尾根）がありそこを行った。全く踏み跡はない。しばらく行くと、宝剣との鞍部への降り口に顕著な踏み跡が出ている。この降り口だけは、が低く眺めがよい。（ＧＷ期にもこの降り口から宝剣との鞍部にかけて雪がなく藪漕ぎになる。）降り口から、鞍部にかけて踏み跡が付いている。我々は、踏み跡を外して少し下ってしまったが、まもなく、踏み跡に戻った。踏み跡は、降り口からどちらかと言えば左前方に向かって付いており、笹ブッシュの中の急な下りとなっている。鞍部に近づくと東側の斜面が草付きとなっており、一カ所東側へ尾根を巻くところがある。

１０：０６（錫丈岳と宝剣岳の鞍部）

鞍部付近、潅木帯でテン設不可。鞍部からも所々踏み跡があり、鞍部付近だけは非常にはっきりした踏み跡である。ピッチの途中から雨

２Ｐ ---------- (70min) ----------

１０：１６　（発）

宝剣ピークまで所々踏み跡がある。やはり、登りになると春期に雪がとけるので、踏み跡がはっきりしている。宝剣ピーク辺り潅木ブッシュであり、かすかに踏み跡がある。ピーク辺り一本尾根で、南北にはなだらかであるが、東側は切れ落ちている感じ。（ブッシュで見えない）忠実に尾根上を行けば問題無し。

１０：４５（宝剣岳ピーク）

宝剣からの下りも１６５０ｍ付近までは、踏み跡らしきものがある。笹ブッシュに潅木混じりの中を行った。やがてその踏み跡らしきものも消え、笹ブッシュがメインとなる。笹の中の潅木がうるさい。１６００ｍ付近になると尾根が広くなり、進行方向が狂いやすい。しかし、この付近からブナ林が尾根より左に広がるので、ブナ林との境界を行けばよい。ブナ林の中に入ってしまえば、藪が余り頑固でないので進み易い。

１１：２６（鞍部少し手前の１５７０ｍ）

１時間以上歩き続けているので休んだ。体じゅうびしょ濡れであった。

３Ｐ ---------- (25min) ----------

１１：３４　（発）

鞍部付近、沢の源頭部の溝状の地形が錯綜している。鞍部はかなり広く、ブナ林となっており、藪も薄く、すぐにテン設できるかと思ったが意外に傾斜地でテン設適地がなかなか見つからない。（もう少し千丈平の方へ行けばあるかもしれない）

１１：５９

余りいいとは言えないが、とりあえず、ブナの木の下にテン場を見つけてすぐにテン設した。雨

ブナ林の中なので直接雨が降り込まないのでよい。それでも、フライをたるませて張っておいたら、しばらくすると結構水がとれた。（２㍑程度）フライに付いている泥が溶けた泥水だったが、おかげで米の飯が食えた。（このころになると先が見えてきたので予備米を使い始めている）

１６：００　天気図

１６：２５　食事

２１：００過ぎまで歌を歌った。最後は大声の四高寮歌でしめた。

●１０月１４日
４：３０　起床
５：０２　食事開始
雨は降っていないが、風が強そうだった。しかし、ブナ林の中は全然吹かずで安心していられた。もし、笈ピークで沈澱していたらなかなか大変だっただろう。びしょ濡れにはなったが、昨日の移動は結果的に正解だった。悪天が予想されるときは、吹きさらしの所は避けるべきであろう。
とりあえず待機。
７：１０頃から土砂降り
寝る。
９：１０　天気図　寒冷前線が近い
このころ雷。下山後聞いた話によると、金沢はものすごい雷雨だったそうだ。
１３：００になっても、風雨やまない。大笠は無理と言うことで沈澱決定。テントの中は水浸しとなり、食器で水を何回もくみ出した。
１６：００　天気図
徐々に、雨が弱まってきた。
１７：００　夕食
本日は、ジフィーズが初登場。うまいが、食器に半分もなく全然量が足りない。そこで、マルタイを食ってようやく腹六分目となった。また歌を歌ってから寝た。沈澱して疲れがだいぶんとれた。

●１０月１５日
４：３０　起床
１Ｐ ---------- (57min) ----------
５：５９　（発）
初め広い尾根で進行方向がよくわからないが、ブナ林に沿う感じでクネクネとブッシュの中をいく。ガスっていてよけいにわからない。ブナ林を出ると猛烈なブッシュとなる。１５８０ｍの小ピークを過ぎて少し行った鞍部付近に笹を刈ってテン設をした跡があった。この鞍部付近笹ブッシュとなっている。
鞍部を出てから細尾根にはいるが、当初はブナ林中を行くので笹も細く比較的進みやすい。だんだんガスも晴れてきて、登りの途中笈がきれいに見えて感動した。
６：５６（１６５０ｍ）
この付近は、背丈か背丈以上の潅木ブッシュである。尾根より西にブナ林が広がる。踏み跡は昨日の宝剣以来全くない。曇、積、層
２Ｐ ---------- (67min) ----------
７：０６　（発）
１７００ｍの進行方向が少し西に向かう付近で、テン設適地が２カ所ほどあった。一本尾根であり、尾根上は潅木ブッシュがひどく、根を踏み越えて枝をまたいで行く。
８：１３（１７４０ｍ）
白山までよく見える。曇、高積、層
３Ｐ ---------- (36min) ----------
８：２１　（発）
尾根上をどんどん進む。ピーク直下になると笹のみのブッシュとなる。笹は西側に広がっており、東側は草付きの急斜面である。笹は背丈か背丈以下で、細いのでどんどん進む。
８：５７（大笠山）
ようやく大笠山に着いた。
一等三角点、標識、ベンチ２つ、テントは４張り程度張れる。昨日、昨昨日練習した四高寮歌を歌った。デポを回収した。このとき、デポしておいた水１０㍑は、本日中にワンゲル平に着くとの見通しから捨てた。
白山から犀奥方面、金沢までよく見えた。曇、積、行動水。

４Ｐ ---------- (33min) ----------
９：３５（大笠山発）
大笠から道がある。ピークを出てからすぐは、背丈以上の笹が道の両側から道を覆っている。道は土道である。
９：３９（桂方面との分岐）
標識がある。桂への道は、境川ダム工事のため通行止めになっているはず。
分岐を少し行くと尾根上を下り始める。背の低い笹が両側に生えた、踏み跡が３０cm程度の土道となる。下り始めだけ木の階段がある。１７２０ｍの平坦部付近は溝状の地形の中のぬかるみ道である。（雨が降った跡だからかもしれない）１６５０ｍ付近の尾根の東側にガレ場マークがあるが、危ない。このガレ場を過ぎると、植生が潅木になり、木の根が張り出した土道で歩きやすい。
１０：０８（１６６８小ピークの北東側の沢の源頭部）
ピッチをとった付近は溝状の道となっている。このピッチをとった地点は、東側が湿原の草原（２５ｍプール程度の広さ）となっており、その中に小さな池塘がある。干天時に水があるかはわからない。曇、積
５Ｐ ---------- (56min) ----------
１０：２０　（発）
次の１６６０ｍ小ピークはピーク直下の東側をトラバース。やがて、比較的細い尾根に出る。この尾根の両側潅木帯で、根が張り出した土道である。１５９１ｍは東側に高さ２～３ｍの岩が出ており、その下の草付きの斜面をトラバースしていく。滑りやすかったが、それほど危険ではない。１５９１ｍを過ぎて、しばらく行くと、西側へ階段がついていて急に下る。（尾根から外れる）下りは滑りやすい。下ってからは、じめじめした深さ約５ｍ程度の溝状の地形の中の道となる。
尾根に戻ってからすぐに、奈良手前の二重稜線の中にはいる。（地図では二重稜線の東側の稜線上を通るようになっているが、実際の道は二重稜線の中を通っている）この二重稜線への入り口付近の東側に大きな池塘がある。笹の中にあり、気が付きにくいが、道から見た感じでは干天時でも枯れないだろうと思われた。二重稜線の中は湿地帯で、雨の後なので水溜りが多い。木の丸太を寄せ集めて道を作ってある。また、溝を横切るところは木の橋となっているが、ことごとくまん中で折れている。ほぼ中間地点に２張り程度のテン場がある。草の上で快適そうだった。
奈良への登りは急な溝状の道である。木の階段があり、背丈以上の笹に覆われた道である。ピーク直下にも１張りの快適そうなテン場がある。
１１：１６（奈良岳）
ピークには三角点、標識（倒れていた）有り。テン設は１張りなら出来る。周囲笹ブッシュで眺め悪い。曇、積、昼食
６Ｐ ---------- (28min) ----------
１１：４４　（発）
奈良から、笹と潅木の混じったブッシュで覆われた道で、視界悪い。鞍部に標識がある。（ブッシュに埋もれて分かりにくい）見越への登りは所々、木の階段がある。また、木の根がよく張り出した道である。大きく杉の根が張り出し、赤いガレが多くなるとすぐピークである。
１２：１２（見越山ピーク）
標識有り。眺めよし。北側以外は周囲が急斜面の尖ったピークである。
７Ｐ ---------- (81min) ----------
１２：２９　（発）
見越から１６２１との鞍部まで踏み跡が付いているだけで、あとは道がよくわからない。と言うか、踏み跡も何もないので大笠までと余り変わらない。所々古い切株が出てきたりして道があったとわかる程度となってしまっている。
深いブッシュの中で現在地点がよくわからなかったが、結構溝状の地形が多かった。見越第３峰（１６２１が第２峰、その南側を第１峰、北側を第３峰と定義した）付近に少し

だけ踏み跡があった。この３峰からは急な笹ブッシュの中の下りである。この下りは踏み跡あり。

１５２１付近もよくわからない。東側の尾根に入ってしまわないように注意していたら、逆に西側に行き過ぎていた。こんな所で、ルートファインディングが必要である。（昨年、磯道のＰＷでは高三郎方面から来たそうだが、今回は逆方向であるので、全然状況が違っている。）

１３：５０（１５２１ｍ地点から少しはずれた西側）

ピッチをとったとき現在地点はまだ未確認だった。南側に谷をはさんで急斜面が見えたので、西にそれすぎたということが推測された。

個人的ではあるが、こんなに時間がかかるとは思わなかった。昔、立派な道が付いていたとはとても思えない。（この付近での小屋作業は１０年近くされていない）

８Ｐ ---------- (26min) ----------

１４：０３　（発）

東側に戻るとやはり薄く踏み跡が付いていた。下りでもありどんどん進む。この付近はブナ林であり、元々、藪も深くないが、やはり道は有難い。しかし眺めはない。迷うことなくワンゲル平に着いた。

１４：２９（ワンゲル平）

ワンゲル平は２張り程度のテン場。水は５分ほど東側に沢を下って行けばとれる。水量は干天時でもとれるくらいある。（地図上で沢が合流する１３５０ｍ付近、従って、３０ｍ程下る）

１６：００　天気図

１６：３２　夕食開始

今夜は、大笠のデポ食料で食事が豊富であった。フルーツ缶や、ワインまであった。

２０：３０　就寝

●１０月１６日

４：３０　起床、快晴

５：１５　朝食

１Ｐ ---------- (41min) ----------

６：２４（ワンゲル平発）

１３６６は右手が少しガレている。１３６６までは踏み跡はしっかり付いてある。しかし潅木が育ってきており（特に西側から道にかぶさるように）歩きにくい。１３６６を過ぎて少し登り、広い尾根になると踏み跡は無くなる。

７：０５（１４６１手前の広い尾根に地図上で２つの１３９０ｍ小ピークが見られるが、その２つの小ピークの中間地点）

この付近、道跡は不明瞭で、周囲潅木と笹ブッシュである。全般的に尾根上の道ではあるが、ブッシュのため眺めは悪い。

２Ｐ ---------- (53min) ----------

７：１７　（発）

天の又の頭（１４６１）へも背丈以上の潅木ブッシュで登りにくいが、踏み跡はある。３年前に来たとき（犀滝～高三郎ＰＷ）より、明らかにひどくなってきていた。

８：０５　天の又の頭

ピークには何もなく、踏み跡が付いているだけ。背丈程度の潅木ブッシュである。

天の又からの下りは段差のある急な下りである。笹が多い。前方だけ眺めがよく、能登半島方面までよく見えた。海に浮かぶ島のように見えた。

８：１０（下りの途中１４３０ｍ）

晴、高積、行動水

３Ｐ ---------- (51min) ----------

８：２０　（発）

道はきっちりついているが、相変わらず潅木ブッシュがひどい。

９：１１（ホイクラ）
ホイクラからは、眺めがよい。白山もよく見えるし、二又川支流のタキ谷が正面によく見えた。双眼鏡でみると名前通り滝が多く高度な沢みたいだったが、詰めてみるのもおもしろいかも知れない。
ワンゲルの標識も健在であった。紅葉も、白山よりこちらの方がずいぶんきれいだった。
晴、高積
４Ｐ ---------- (36min) ----------
９：２６　（発）
ホイクラを発してすぐに一面笹ブッシュの下りとなる。背丈より少し低い程度で、下が見えない。下は土道であるが、見えないので思わず滑って転んだりしてしまう。笹ブッシュを抜けて、高三郎本峰との鞍部は北東側がガレて道が崩れている。別に危険ではないが、道は尾根上に続いているので下ってしまわないように。ガレ地点から高三郎まで潅木ブッシュの道である。一度、道を外してしまったが、大体は踏み跡がはっきりしている。
９：４６（高三郎ピーク）
三角点、標識有り。眺め悪い。
高三郎ピークからは略記する。必要があれば、数多い他の記録を参照のこと。
高三郎からは道がしっかりしており、道の有難さを思い知らされた。途中、犀川ダムが遠くに見える。
９：５５（ガレ場）
１０：０２（新旧道の分岐）
分岐には相変わらず壊れた標識がある。
ブッシュで眺めは効かないが、上を見ると抜けるような青空である。快晴、昼食
５Ｐ ---------- (57min) ----------
１０：４３　（発）
分岐を出てすぐに、ガレ場。
あとはワンゲルの作業の効果があって、快適な道である。
１１：４０（旧道ザック置き場）
６Ｐ ---------- (37min) ----------
１１：５１　（発）
１２：２８（コシアゲ谷出合、旧道登り口）
コシアゲ谷出合に来て驚いたのは、沢筋が前と全然異なっていたこと。変わってから殆ど日数が経っていないとみえ、濁流の跡がみられた。以前、テントが張れた中州は今はもう無い。
この辺はまだ紅葉していない。晴、積
７Ｐ ---------- (30min) ----------
１３：００？（発）
カナヤマ谷の様子も変わっていた。ＢＨまでの道から川を見ても何か以前と違っていた。沢筋が広がった感じ。
１３：３０？（ＢＨ）
旗揚げをしにＢＨによった。カメムシが繁殖していた。
８Ｐ ---------- (160min) ----------
１４：１５？（発）
道沿いの至るところで土砂の流出が見られた。よほどの豪雨だったみたいだ。第２のガレ場は道がしまって、草も着いてきており年々良くなっている。
１５：３５（犀川ダム）
この時期にはめずらしく、ダムは満水状態であった。
１６：５５（駒帰）
ダムから舗装道路がすっとのびている。休み無しにＢＨから駒帰まで行ったのは疲れた。なんとか最終バス５分前に駒帰に着いた。

【岩底キレットと笈ケ岳
通称「クマのダイビング」
といわれる岩壁が見える】

【笈ケ岳山頂にて】
草飼　磯道　野田

【大笠山への登りで、千丈平
を望む
ブナの森の鞍部で幕営し、
暴風雨をやり過ごした翌朝】
（以上　奥出氏提供）

夏合宿　白山・BH Party

37期　山本英男

今、この文章を書いているのは95年の10月だから、夏合宿から、かれこれ一年以上経っていることになる。従って山行中のすべてを覚えているという状態ではないが、それでもやはり、今までの山行の中で一番印象に残っているものは、と聞かれたら間違いなくこの夏合宿が最初に挙げられるだろう。白山－BHの夏合宿を越える山行がしたいと、この一年間思いつづけていたが、今は、それだけの山行をやりとげる体力も時間もなくなってしまった。しかし、自分自身が納得のいくような、そんな山行をしたいという気持だけは衰えず生き続けている。

八月四日（木）雲時々晴　オロロの洗礼をうける

北アルプス白馬岳でのさわやかな第二回トレーニング山行を終えてから、いよいよ夏合宿の本番の日となった。七月中に三方岩岳小屋跡にデポを置き、事前の準備にぬかりはなかった。

しかし、バスの予定の時刻になっても三浦が現われず、初日から、この山行の波乱を予感させるような事態となり、みんなパニック状態におちいった。このバスを逃がすと次は十一時頃で二時間以上時間があいてしまい、打ち切り時間に間に合わなくなってしまう。しかし、兼六園下のバス停の向かいの道路に自転車を必死にこいでいる三浦を発見し、事なきを得た。

バスの行き先はいつもの通りの駒帰である。このときは「なんだか夏合宿に来たような感じがしないな」などと佐川が言っていて、まだ第二回トレのさわやかさがぬけきれてないようだったが、待ちうけている**あるもの**によって、夏合宿であるということを認識させられることになる。それはオロロとよばれる吸血アブの一種の虫である。ダムに近づくにつれブーン、ブーンという羽音が増し、特にある人のまわりをとびかっている。ある人とは誰のことであろうか。それは、昨年（94年）の小屋作業でみんなに「みち」と呼ばれつづけた、そう、あの「みち宇根」のことである。この「みち」というあだ名については物議をいろいろかもすところだと思うが、ここでは、本人のプライベートを尊重するため、あえてふせておこう。

すぐに出発する。ここからオロロはますますその勢いを増し、BH前のテン場ではピークとなった。小屋の中に貼るための赤布を持ってきていたが、あまりのオロロのすごさに、とっとと今日のテン場である新道入口へと向かった。十五時十分、テン場に着いたが、ここにも恐しいくらいオロロがいて、設営し終ったテントの中はオロロで真っ黒となる。あまりのすごさで、テントの入口が開けられず中にいる人間が蚊取り線香をたいて下におちてくるオロロをビニール袋の中に入れてプチプチ殺す。この状況がわからないみなさんは、ハチミツとりのおじさんがミツバチが入っている箱からミツをとりだしている風景を思い浮かべてほしい。全くそれと同じなのだ。

オロロのため、水はしかたなく金山谷からとることにした。この谷の水は、昔、上流が鉱山だったため本当は飲んではいけないものだが、オロロには勝てなかった。しかし、このオロロ、一糸乱れず攻撃してくることからもわかるように、非常にまじめなのである。夜六時ともなると、オロロはみんな自分の寝床へ帰ってゆき、夜の倉谷をブラつくようなことは決してしないのだ。だから、夜は快適に寝ることができた。

八月五日（金）晴　ワンゲル平は遠かった

予定より三十分早く起きてオロロに備える。旧道から高三郎山へ向かうのだが尾根の取りつきはいつもと同様、急できつい。三十分早く出発したがオロロは朝から元気だ。八百mぐらいまでオロロも登ってきたが、その後は数も少なくなってきた。前高三郎（一〇八九m）より先は五月の新トレの時期と比べてブッシュがすごく、足もとの道は草木をかきわけないと、どのようになっているのかよくわからない状態である。また、道の上にクマのフンがところどころにある。においもきつい。十時十分、ようやく高三郎のピークに着く。壊れた標識を笹ブッシュの中に発見する。背丈以上の笹のため視界は全くなく、ただただむしむしていて不快でたまらない。ピーク登頂を記念してナタデココを食べる。このペースで行けば十五時ぐらいにワンゲル平に着けると思ったが、今日もとんでもない日となってしまうのであった。ホイクラまでは比較的はっきりした踏み跡があり、頂上からの眺めもそこそこ良く、笹の背も低い。ここからワンゲル平までは地図上のピークのあたりだけ踏み跡がある以外、あとはほとんどブッシュで、進むスピードが異様に遅くなり、疲れが一気に出てきた。天ノ又の頭を少し下った所で二時三十分頃休憩したのだが、疲れのため座っているだけで眠ってしまった。佐川の「山本さん！」という一声がなかったら二時間ぐらいは寝てしまっていたのではないだろうか。高三郎を越えたころからガスが出てきて暑さは幾分やわらいだが、持っている水も少なく、絶対ワンゲル平まで行かなければならない追い詰められた状況であった。もうすでに僕は放心状態となり、頭の中では「ワンゲル平へ絶対行く。」という言葉がぐるぐる回り、ゾンビのように歩いていた。

稜線を歩いていると左に少し下った所に灌木のない笹のみの明るい開けた場所に出た。時計を見るともう五時をまわっており、ここがワンゲル平でなかったらこれからの行動をどうしたらよいのかと考え十分な安心感はまだ得られなかったが、稜線から東側に踏み跡が続いているのがわかったとき、とりあえず今日はなんとかなったと安堵感にひたることができた。四年前の記録と比べて高三郎からの道はかなりひどく、無雪期だけでなく残雪期をのぞく全ての季節において人がほとんど入っていないことがよくわかった。テン場はヤブ用語集にも載っている「夢テン」というやつで、草原状となっていて美しい場所であった。（これは本当？）ところが、水場は今年の猛暑のためか、夏だからなのか、極端に少なく、水を汲むのに結構、時間がかかった。

八月六日（土）晴　ヤブ明けパート1

気持ちのよい朝をむかえたのだが、皆、三日目にして早くも元気がない。しかし、昨日のヤブのスピードを考えても、遅くとも見越山南峰までは間違いなく行けるはずである。そう、いきなり山行三日目でヤブ明け（これもヤブ用語集にある。）となるのだ。そう考えると、歩きながらでも

思わずニヤけてしまう。

ワンゲル平からは踏み跡がかなりはっきりしていて楽に進むことができた。出発から二ピッチ目に地図を見ながら休んでいると、聞き覚えのある羽音が、しかもたくさん近づいてきた。この稜線上でまたオロロかと思ったが、ブーンという音が小さく、どことなく音に根性が感じられない。ふと、自分の体をみると無数のハエがたかっているではないか。しかし、ハエはハエである。彼らはオロロと異なり、真面目でもないし、攻撃もしてこない。スーパーエキスパート・ヤブクライマー佐川は、「オロロと比べると、かわいいもんだな。」などと、言って自分の体を全てハエにまかせていた。宇根はというと…、やはりプライバシー保護のため、あえてふせておくことにしよう。

ハエとたわむれたピッチの後、恐しいほどの急登が待ちかまえていた。この時、我々は初めてヤブの急登をのぼったのだが、ほとんど木登り状態でひたすらすべる笹をつかみながら、腕力だけで登り続けた。たかだか五～六〇mの登りなのだが、バカみたいに体力を消耗するのだ。この急登は残雪期の場合でもアイゼンとピッケルが必要となる唯一の場所で、やはりかなりのものらしい。

急登から二時間三十分ほど歩いて、ついに見越山南峰に着いた。山行始まっての初めてのヤブ明けであった。三浦も宇根も小林も佐川もみんな、なぜかニヤニヤして、顔が異様なくらいにあやしく、つい僕もニヤニヤしてしまう。しかし、このヤブ明けは本物ではなかった。昼食をすませて出発すると、五分もたたないうちに頭がボーッとしてきて、ここは山でなく下界なのではないかと思えるほどクソ暑く、むんむんした空気につつまれた。三千m級の山を歩いていて出てくるいかにも心地よい汗とは異なり、汗がボタボタおちるというような言葉でも表現しきれないくらい、とてつもなく汗が流れた。見越山南峰から奈良岳の少し先までの稜線は、おそらく、夏合宿全日程中、最も暑さが厳しいところではなかったのだろうか。奥三方へのワンデリングは早々にカットして、先へ進むことにする。今日の予定のテン場は大笠山山頂であるが、地図を見る限り、山頂周辺に水場らしい場所はなく、また、暑さしのぎという意味を含めて瀬波川源頭の最も稜線に近いところへ、水を求めて汲みに行くことにした。当所、水を汲むのに必要と思われる二人だけに瀬波川へ行ってもらおうと思ったが、みんな沢の水を飲みたがっており、全員で沢へ下降した。この沢は、他の沢と比べてさほど危険ではなく、水もちゃんと流れており、なかなか使えるところであった。それにしても、沢というものは砂漠の中のオアシスといった感じで、流水のおかげで涼しく、いくらでも水がのめるので、ついつい長居をしてしまい、今日も五時近くまで行動することになってしまった。さらに、あらかじめ調べておいた草地の予備テン場の場所を感違いして見つけることができず、結局、道の上にテントを張った。二日連続の打ち切りブッチの五時まで行動となり、晩飯を作っているとき、全員がウトウトしていた。

その夜のミーティングで僕はこれまでの行程をふり返えると大笠山より先へ前進することは不可能と考え、フカバラの尾根（エスケープルート）より下山して鳩谷まで国道を歩き三方岩岳に登りかえし、白山をめざすことを皆につげた。そのことに対し、二年生の四人は何も言わず、反応がない。リーダーとしても、ここで「笈ケ岳へ行きましょう。」とでも言われたら、多少勇気づけられるのだが、二年生の立場上そのようなことも言いずらいだろうし、何ともしっくりいかない夜を過ごした。

八月七日（日）晴　ついにヤブに突入

毎日毎日そうだが、今日も快晴である。大笠山への途中でサルの大群を道の右側に発見した。かなりの数である。一年のときの夏合宿でも、北アルプスの表銀座でサルと出会ったが、今回のサルの数は、この時の比ではない。じっと、こちらを見ていて微動だにしない。北アルプスより白山山系の方が、やはり、自然が多く残されているのではないだろうか。

テン場から一汗かくと大笠山の山頂に来た。頂上からの眺めは、雄大でさえぎるものはなく、笈ケ岳も手にとるほどの近さに見える。笈ケ岳とともに白山山系北方稜線の盟主だけあって、大笠山は美しく立派な山である。

大笠山と笈ケ岳――。この二つのことを意識し始めたのは、OGである舟田さんから「白山国立公園とその周辺の山々」という本をいただいて、何気無しに読んでいたときだった。その時は、特別強い印象を持ったということはなく、いつかいってみたい程度の軽い気持ちしかなかった。しかし、それからしばらくして、残雪期にこれらの山へ行くPWが出され、参加することができ、その山行の中で、僕はこの山域に対して一種のカルチャーショックのようなものを受けた。たかだか千八百mの山々はその高さを感じさせないほどのありあまる魅力をもっていた。

そんな一年前の出来事を回想しながら笈ケ岳を眺めていると、昨日のミーティングで自分が言ったことを撤回して先へ進む決意をした。それでもやはり、頭の中の中には、「もし遭難したら…。」という強迫観念が居座りつづけたまだったが、みんなに「ザック持って、出発するから。」と告げて、自分自身をもう引きかえすことのできない状態に無理矢理追いこむより他に方法はなかった。

大笠山からの下りは背丈以下の笹の斜面や、心地よい風の通るブナ林でどんどん進むことができる。稜線の右手には、千丈平の広大な笹原が横たわっており、この山の奥深さをよく物語っている。大笠山と宝剣岳（笈ケ岳の前衛）の最底鞍部のあたりは二m以上あると思われる猛烈な笹ブッシュをかきわけてゆく。笹ブッシュにもいろいろなものがあって、主にその高さに特徴があると思う。背丈以下のものなら、視界がよくきいて快適なのだが、背丈よりはるかに高いものだと、自分の現在地がわからないだけでなく、まわりすべてが笹で下界や一般的の登山では出会うことのない不思議で一種独特な空間につつみこまれる。ヤブに対しての好みは人それぞれ異なるだろうが、僕が一番嫌いなのは垣根と呼ばれるブッシュだ。これは尾根上の中心から放射状に枝をのばし、かつ、笹など他の植物と比較しても、弾力があり、人をよせつけない。目の前にこいつがあるとわかったとき、一気に疲れがでてヤル気さえうせてくる。僕は垣根でもほとんど直登してゆくが、宇根はよく右か左から巻いて垣根を処理していた。ヤブこぎはその人の個性や性格が歩き方に表れやすいところがなかなかおもしろい。自分で道（歩くところ）を決めてゆく要素が最も大きいのはヤブこぎではないだろうか。雪山でも、自由に歩くことができるが、雪庇や雪崩のことを考えると、ヤブこぎほどその自由度は大きくないだろう。

最底鞍部から境川源頭に水を求めて下降してゆく。今日も水をすぐ発見することができラッキーだ。しかし、ここの下降が一番恐かった。宝剣岳への登りは残雪期によく人

が入っているためか、はたまた、昨年の秋の成城大のワンゲルのおかげか、踏み跡がかなりあり、歩きやすかった。結局今日も予定のテン場である笈ケ岳まで行くのはあきらめて宝剣岳の山頂でテントを張った。ここは夢テンというほどではないが、下に笹があって、仲々良いところであった。目の前に見える笈ケ岳は大笠山から見るそれより、はるかにスケールが大きく独特の雰囲気をかもしだしていた。

八月八日（月）晴　笈ケ岳に立つ

ほとんど毎日、起きてから出発するまで二時間はかかってしまう。メンバーが五人しかいなく、二・三年生だけなのに。理由は簡単だ。夜シュラフにもぐって横になっているときが唯一の現実から解放されるときであり、やすらぎの時間だが、朝、起きたその瞬間から、現実をいやがおうにも直視しなければならない。皆、ヤブこぎを開始する時間を一分でも遅くしたいのだ。僕にも、そんな気持ちがあるのでどうしても撤収を速くしろとか、きついことを言えない。しかし、出発する時間が遅くなると、昼の最も暑い時間に長時間行動しなければならなくなり、ひいては、予定のテン場まで行けず、ヤブの中での日数が増えるという悪循環におちいってしまう。まさに、「どはまり」である。（みんな、山口君が「どはまり」という姿を思い浮べながら言ってみよう。）

テン場からところどころ踏み跡のある尾根をたどること二時間半、ついに念願の、この山行のメインである笈ケ岳に登頂した。登頂した時刻は八時十四分で、山頂には大きなダケカンバの木が一本ある他、さえぎるものがなにもなく、「炎暑」といった感じである。駒帰でバスをおりてから五日目、毎日毎日、ほとんど打ち切りブッチの行動でアッという間だったような気がする。

笈ケ岳からしばらくの間は垣根のヤブにはばまれたがその先の東側斜面は草原となっており、ニッコウキスゲも咲いている。東側の沢に水を取りに行こうとしたが、十mぐらいの涸れ滝にはばまれ敗退。テン場をさらに先の夢テンに移し、その後水たまりの水を汲んで今日の行動を打ち切る。入山以来、ひさしぶりに早くテン場に着き、午後はゆっくり過ごす。ここのテン場は、ヤブに突入した中では最も状態の良いところで、ちょうど一張程度地面がでていて、傾斜がほとんどなく快適そのものだった。

そういえば、パーティーの構成が三年生一人に二年生四人であることはこれまで読んでもらってわかっていただけたと思うが、どのようにしてできたのか、不思議に思った人もいるのではないだろうか。そんな人々のために、「パーティーができるまで」ということについて簡単にふれてみることにしよう。（37期のみなさん、まあ、当時の3Mは時効ということで先をどんどん読みましょう。）

夏合宿の行き先きを決める3Mで僕は、いきなりみんなに部活をやめるといった。これはいつもの計算しつくされた策略ではなく、ずっと前から考えていたことであった。それは、94年の夏が93年と同様、部全体としての行事のため、日程が限られてしまい、僕が当時やりたいと思っていた南アルプス全山従走が行えそうになく、満足のいくように夏休みを送ることができず、また、部活動のメインである夏合宿にいかなくなってしまう以上部活を続ける意味がないと思ってそんな発言をしたのだった。ところが、その意志は弱いというのか、その頃、後輩の佐川や小林からもちかけられていた夏のヤブ山従走というのにも魅かれていて、みんなにおきまりの説得をうけて、それなら、ヤブに行こうと考え、夏の白山－BHが出されることになったのだ。この山域にした理由は部内に記録のある唯一のヤブ山であり、故・長崎氏の「わが白山連峰」で挙げられていた、高尾山から岐阜の大日ケ岳までの積雪期の従走のことが目にとまって、同じコースを歩いてみたいという単純で自分勝手なものだった。

ところが、一年生に書いてもらった事前の夏合宿の希望調査では、なんと全員、第五希望だった。誰か一人でも第四希望を書いてくれればその人を連れていくつもりだったが、これではどうにもならない。クジで決めようかとも考えたが、行きたくない人を連れてゆくわけにもいかない。結局、3Mでは何も決まらなかった。

八月九日（火）晴　仙人窟岳の池塘へ

昨日、早い時間にテン場についたおかげで体の疲れは幾分とれた。岩底バットレスまではジャンダルムのようなものがブッシュの稜線にいくつかあって今までにはない開放的なヤブこぎを楽しむ。岩峰群の一つに登ってさわやかな朝の風景にしばし見とれる。三六〇度さえぎるものはなく、尾根の西側には境川ダムや人形山、南側には仙人窟岳や白山がのぞめ、自分達のいる場所の奥深さを改めて認識させられる。

バットレスの下降点には細引がついており、踏み跡もしっかりしている。尾根の東側は絶壁で西側より下ってゆく。下部は一枚岩でさらにその下は草付の急斜面となっている。

十一時頃からガスってくるが、今日も早めにテン場に着く（発見する？）ことができた。午後一時に仙人窟岳の池塘にとびだすと、池塘を中心に放射状にけもの道がついている。池塘の水の中には小さな虫が飛びはねていて、茶褐色をしている。少々ぬるいが水はこれしかないのでガマンしてガブガブ飲む。池塘の最上段からは大笠・笈がせまってこの上ない最良のテン場である。

ところで、この山行が行われた一九九四年の前後に、部に在籍していた方々はこのメンバー五人を御存知だと思うが、そうでない人々のために簡単に紹介しておく。

まず、宇根悟史。言うまでもなく宇根はワンゲル一、弱い人間である。体力がないからというわけではない。なぜか弱いのだ。（もちろんワンゲル内だけでなく学校でも弱い。）そして、「うっ。」というのが口ぐせである。しかし、北アルプスや南アルプスなどメジャーな山々はほとんど登っている。一時期、彼女を求めて女子大（今の金沢学院大）で手あたりしだいに女の子に声をかけていたという、うわさがあったが…。

次に小林俊夫。ミスタードーナツでさわやかな夜のバイトをしている工学部生である。最近はピンクのトレノを乗りまわしてあちこち行っているらしい。「ゲシュタポ」というあだ名があるほどワンゲル内随一の情報通で私もその部下の一人である。

そして、ヤブ大王こと佐川貴久。マイナーな会津や東北方面の山々をこよなく愛しているロンゲのあやしい文学部生。現在の部の主将を務めているが小屋作業で足を痛めてからパワーが弱った。なんでも食べる人間で、以前はタイ米を推めていたが、今は麦飯に凝っている。

二年生最後は三浦永士。三浦がこのパーティーに入ったのは夏合宿の結団式の時だった。夏合宿のメンバーが決まらず、三浦がヤブへ行ってもいいと言っていたという情報を「ゲシュタポ」から聞いていた私が、犀川の河原で突然「三浦、ヤブに来てくれないか？」と聞いたら、「ああ、いいですよ。」と言ってくれて、その一言でこのパーティー

はできたのだ。もし、あの時、三浦がいやだと言っていたら、あの場で一年生にジャンケンをさせて決めたかもしれない…。ちなみに、第二回トレ山で女子大に声をかけたのも三浦だ。

そしてこのパーティーのリーダーである山本英男。ワンゲル一のスーパーエキスパートクライマーで数多くの後輩から親われている良い人間である。決して悪人とか言われず、部内に敵は持たない穏健派で、以上の五人からこのパーティーは成っていた。それにしても、五人という人数は夏合宿だけ考えてみても極端に少なく、いろいろな意味で、濃くなっていったと思う。

八月十日（水）晴　ついに遭難か…。

今日の目標は仙人窟岳Ⅰ峰から見えた国見山である。運が良ければ、それより先の瓢箪山やスーパー林道まで行こうと、みんなで話しあう。仙人窟岳からの下りで小林が蜂におそわれたこと以外はいつも通り順調に進み、十二時頃には最底鞍部付近に来る。そこから西側に国見山のスラブすなわち、トークズレを見る。谷底に少し雪が残っており、下は絶壁となっていて恐しい風景である。スラブが見事だ。

その次の笹の急登で僕はいやけをさし、また、予定より進むペースが早いこともあって、不必要と思われる水を国見山の登りの途中で捨てることにした。そして今日中に三方岩の駐車場まで行くことに決める。ところが、これがとんでもない誤った判断で、この後の行動に大きく影響を及ぼした。

次のピッチで国見山の頂上付近に来たのだが、非常に広く、沢すじがいくつも入りこんで迷いやすい。そして、実際、視界があった（晴れていた）にもかかわらず、リングワンデリングをしてしまい大きなタイムロスをしてしまう。国見山は一面、背丈を越える笹原であるが、今までにも同じような所を歩いており、迷ってしまうようなことはなかった。陽がかたむきはじめ、みんなあせっていたためか、とんでもないことになった。この時、僕の頭の中には遭難の二文字が、そして、今日中にスーパー林道へ下りることが不可能なのではないかという焦りや不安が錯綜していた。自分自身、アドレナリンが分秘されるのがよくわかった。思わず自らトップをして、先へ進もうとするが、水の入っていない軽いザックにもかかわらず、ヤブをこぐスピードに大差はなく、思うように距離をかせげない。国見山付近は平坦であることからもわかるようにテン設可能な所は何ケ所かあったのだが、水がないため先を急ぐより道はなかった。

結局、瓢箪山にたどりついたのは辺りも暗くなりはじめた六時過ぎで、七時過ぎについに行動するのは不可能と判断し、溝状の傾斜地にテントを張る。みんな精神的にも、肉体的にも疲労しきって、テン設にもやたら時間がかかった。このとき、水は六ℓぐらいしかなく、その日の夕食はゼリーと水だけであった。行動時間はなんと十四時間三十分で二日目の十二時間四十分よりも長いものとなった。

しかし、誰一人として、愚痴を言ったりキレたりする者がないのがうれしく、パーティーの結団力の強さをあらためて知った。疲れのため、すぐに寝入ったが、溝のため地面がすり鉢状となって、体育座りをしたような格好で寝ていたため、夜中に何回か起きた。

八月十一日（木）晴　本当のヤブ明けだ

朝食に水を用いないで食べられるカロリーメイトを口に入れ、すぐに出発する。道が絶対ある瓢箪山の展望台までは目と鼻の先で一Pで立てた。空はまっ青で特に白山が美しい。本来ならば、ここからさらに稜線上を歩き三方岩岳まで行くべきなのかもしれない。しかし、ここからは地図上に道があり、また、僕らには三方岩岳まで行く水もない。したがって次回の白山－BHより劣ることになるかもしれないが、そういったことは、今この展望台に生きてこれたということを考えればどうでもいいことなのかもしれないし、実際、皆の顔には今までみたことのないような満たされた表情であふれていた。昨日の行動がかなりひどかったせいもあるが、この時の気持ちは、ヤブをこいだことによってのみ得られるようなものだった。それまでの他の山行にはない、何か独特な冒険的な要素の強いものだからだろう。でもそれだけではないもっと深い何かがあるような気がする。

しばらく展望台でそれぞれ思いにふけった後、三方岩駐車場へ向かい、そこで昨夜食べなかったジフィーズをつくり、今日一日の時間を何も気にせず自由に使う。時間というものに対しても、ヤブの中では焦燥した感があったが、ここでは無用である。道があるということによって、これから先の計画がたてられ、それに沿って行動すればよいのだから。

午後はアオモリトドマツのある三方岩小屋跡で昼寝をする。食缶の中から食料をとりだして、夕食はひさしぶりに豪華なものとなり、みんなの会話もはずんだ。

八月十二日（金）晴　快適な山歩きをする

三方岩岳の頂上でモルゲンロートの北アルプスを眺めた後、北従走路を南下する。このコースは千七百m前後の山々の稜線上を辿っているのだが、樹木に視界をとられることのない開放的なところで池塘なども道のわきにあって静かな山歩きのできるルートだ。ひさしぶりにまともな道を歩き、あらためて道のありがたさがわかった。登り下りが少ないこともあって、歩くスピードが今までと格段に変わる。東側には堂々とした奥三方岳や三方崩山が聳えており、庄川をはさんで猿ケ馬場山などの山々もみえる。

オモ谷でゆっくり休んだ後、急登を登って昼前にゴマ平ヒュッテに着いた。このコース中、人に会ったのはゴマ平ヒュッテとその付近だけで、マイナーなコースだということを実感する。ゴマ平ヒュッテにいた人達も中宮道で下山するらしい。

小屋のノートには前回の白山－ベルクハイムの記録が残っていた。午後に単独の人がきて、小屋は僕らとその人だけでとても静かだった。

八月十三日（土）晴→ガス　白山本峰に立つ

暗いうちに出発する。聞名古の頭の手前で燃えるような朝日をうけながら笹原の中を歩く。とても印象に残る風景だった。この頃は昨日、見えなかった白山が晴れていたのだが登るにつれガスがどんどん下りてきて、ヤブの中とはうってかわり寒いくらいだった。お花松原やヒルバオ雪渓のあたりでは完全にガスって、風景を楽しむといった余裕はほとんどなかった。

猛烈な風の中、とりあえず大汝峰に立つ。そして、今回の山行の最高地点である御前峰に向かう。頂上からは大汝峰と同様、ガスのためなにもみえない。僕は何回か白山に

来ているが、ほとんど晴れたことはない。早々に室堂に行くと、おじさん、おばさんでごったがえしており、今までとのギャップに閉口する。昼食にマルタイをたべ、トンビ岩コースで南龍に行くことにした。南龍は室堂と異なり、静かで箱庭のような美しさで僕らをむかえてくれる。今日も早い時間にテン場に着き、ゆっくりと過ごすことができた。

八月十五日（日）風雨→晴　南龍ケ馬場で休養する

朝、起きたとき雨だったので沈殿する。適当に一日を過ごすつもりだったが、この五人である。誰かが何かしようと言うこともなく、退屈で仕方なかった。

夕方五時からは松任谷由実のラジオを聞いてみんなでもりあがる。第二回トレ山のときからこの番組を聞いており、三週連続聞いていた。うちのパーティーでは一種のブームとなっていて、特に恋愛相談のコーナーのあやしい話にハマリまくっていた。

八月十五日（月）晴　遂にこの山行も終わる

昨夜のミーティングで大日ケ岳方面に向かうと、合ワンにまにあわないことになりそうだったので、石徹白に下りることにした。夏合宿が貫徹されずに正直いって未練があったが止むを得なかった。また、とぼしい食料で再びヤブに入ることに対して不安もあった。

石徹白へ下るコースでも人は少なく、笹が主体の美しいコースだった。神鳩ノ宮避難小屋で関東方面の大学の記録を目にする。結構、ヤブこぎをしにこの辺りに来ているようだ。それによると大日ケ岳―丸山の間は刈り後があるそうで、本当のヤブではないと書かれていた。

小屋から先も下山パワーでぐんぐん下り石徹白のスギで休憩する。そこに家族連れの観光客が来ており、「どこから来たのか」とたずねられたので「金沢市からです」と答えたらみんな目をまるくしてビックリしていた。

だらだらと長い林道を炎天下の中ひたすら歩く。この辺りは名古屋から近いためかオートキャンプの人がたくさんいた。

石徹白は四方を完全に山に囲まれたまさに陸の孤島といった感じのところだが、町全体どことなくなつかしい趣きをかもしだしており、僕は一気に気にいってしまった。町のあらゆるところに小川が流れており、それが町の美しさを一層ひきたてている。今までいろいろな山に登ってきたが、大抵どこの登山口も観光地化されているか、あるいは何もないようなところばかりである。しかし石徹白は、まさに山とともに生活が密着している、白山信仰とのかかわりが深い歴史を感じさせる場所であった。これからの日程を考えて休んでいた僕らに、地元のおじさんがジュースをくれたりと、素朴さを感じる一幕もあった。

結局、今日中には帰れないことがわかり、小学校にテントを張った。

八月十六日（火）晴　一路金沢へ

個人山行という名目で大日ケ岳を登ろうともくろんでいたが、バスの時間があわないこともあって、素直に金沢へ帰ることにする。石徹白から町営のバスで美濃白鳥へ向かう。ここも、のどかなところでもう一度おとずれてみたいところだ。どことなく鶴来に似た雰囲気の土地で岐阜県のふところの深さがよくわかる。美濃白鳥でバスを乗りつぎ九頭竜湖からＪＲで金沢へ帰った。これだけ長く充実した山行だったにもかかわらず、帰りの乗り物の中では満足感にひたることができず、しっくりいかない状態だった。その時、ずっと考えていたことは「もし、最後までいっていたら…。」という後悔の念と「これで精一杯だった。」という自分自身を納得させようとするなぐさめによる葛藤から生じたものであった。

山行中リーダーとして失敗ばかりしていた僕に対して、最後までつきあってくれた二年生四人には本当に感謝しています。また、夏合宿としてヤブを出すという前例のないことをしたにもかかわらず、誰一人として反対せず協力してくれた三年生のみんなにも感謝しています。

☀ 花・星・人ｉｎ南竜 ☀

２０００年８月５日（土）～６日（日）

☀参加者

０期　田村　昭夫	４期　高田　昌嗣	７期　村田　泰恵	８期　伊予　欣二
11期　青柳　健二	11期　森川　　功	11期　斎藤　　薫	11期　井上　聖子
13期　吉田　穂積	15期　上馬　康生	15期　奥名　正啓	15期　鈴木　良紀
15期　間所　新一	15期　高村千佳子	15期　佐野　哲雄	15期　舟田　節子
15期　松林　知一	15期　松林由佳里	15期　松林知恵里	15期　宇野　　潔
17期　宇野　和子	15期　宇野　春菜	17期　山田　郷美	18期　椿川　利弘
18期　大西　正明	18期　大西　菊路	18期　大西　沙紀	18期　大西　真実
18期　岡部　伸一	18期　岡部美沙貴	18期　岡部沙矢佳	23期　鳥越　伸博

決算報告

【収入】		【支出】			
会費		宿泊費	49、100	（テント代　3、700×5	18、500）
4、000×31	124、000			（清掃料　300×22	6、600）
ＯＢ会補助	46、150			（ケビン　12、000×2	24、000）
		食費	92、450	（山荘食事代　2、800×31	86、800）
	170、105			（ここで支払い得	10、000）
				（ビール	9、750）
				（スイカ、つまみ	5、900）
		連絡費	8、530		
		写真代	20、025		
			170、105		

「花・星・人ｉｎ南竜」によせて

15期　奥名　正啓

ワンゲルに入って最初の高山帯へ足を踏み入れたところが白山だった人は多いことでしょう。多分私もその一人です（記憶が曖昧）。それから四季を通じ幾度となく訪れて、それぞれに思い入れがあるに違いありません。

８月５日。下界は連日うだるような暑さが続き、白山では朝方から昼前までは晴れているものの午後は決まって大雨に見舞われていました。この日も例外ではなく昼近くになって甚の助ヒュッテあたりからはガスが吹き上げてくるようになり、雷鳴も轟きはじめました。しかしながら皆さんの切なる願いを天は聞き届けてくれたのでしょう。ガスとわずかな小雨程度で午後は持ちこたえてくれました。夕食の6時頃にはお日様さえさしはじめてきました。この時期の日没は7時頃。大地は闇に沈みはじめ、雲は夕日をうけて縁を白く輝かせ、空は深い青に染まっていく。山際は水色から次第に黄味、赤味を帯びて朱色から暗赤色へのグラデーション。食後の一時を過ごしながら刻々と色を変えていく山、雲、空はボーと眺めているにかぎる。

６日朝。御来光鑑賞組は出かける準備、空を仰ぐといくつかの星。天の川は見えない。しばらくして暗さに目が慣れてきても星座はよく分からない。時折一直線に移動する人工衛星の光が見える。朝日が油坂のてっぺんあたりを照らし出す。見る見るうちに明るい部分は下がってくる。エコーラインののっぺりした面にも朝日が当たる。油坂の飛騨側にははやくも真っ白なガスがはい上がってひんやりしたした朝の冷気を感じる。夏の朝だ！

七倉山と四塚山にはさまれた北竜。日の出前、夜の闇はすでに少しずつ白みはじめて濃い暗紫色の空気が谷筋に沈んでいる。朝の仕事も忘れてしばしぼんやり佇んでいると、みるみる明るさを増して薄紫から水色へと移り変わっていく空。それまでに見たこともない色合い。かすかに感じる風・・・。

しまっておいた記憶が甦るとともに、また一つ新たな想いが刻まれた。

皆さんの胸の中にも何かしら一つでも素敵な想いを残してもらえたでしょうか。

今回は白山へのきっかけを作る、あるいは場をセッティングすることだけにとどめることでこの企画を進めてきました。それでも運営に当たり骨を少し折られた方、あちこちにお誘いをかけて下さった方、天候を心配してお祈りをして下さった方、現地への車を提供して下さった方、差し入れを下さった方、そして何よりも集まっていただいた方々に感謝します。

「花・星・人」＝自然と仲間。これがワンゲルの原点です。

宇野　山田
松林　舟田　高村　高田 森川 伊予 宇野 佐野　吉田　鳥越　鈴木　間所
青柳　上馬　　田村　岡部　椿川　松林　宇野
井上　斎藤　　奥名　村田　大西
大西　大西　岡部　岡部　大西　松林
【南竜ケビン前　参加者全員】

栄光、吾をば去りぬ

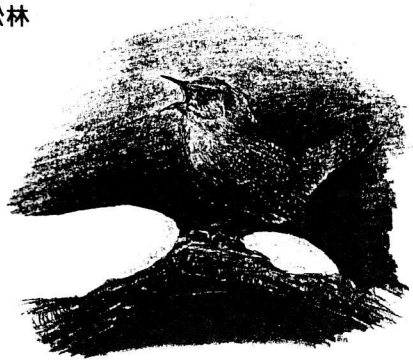
0期　田村　昭夫

別当出合までもう少しの時、急に雨が降りだした。　村田、田村、高田の三「田」組は、雨具を付けて、下山を続けた。中を歩く田村の足が急に弱り出したのは、この時からである。

先を行く村田は杖の威力を見せてスイスイと下って行く。後から来る高田のしっかりした足音が迫ってくる。数々の山歴を重ねた田村の黄金の両足はもはや鉛と化し、それを動かしているのは、ただ、過去の栄光とのポテンシャルだけである。

やがてそのポテンシャルも使い果たし、哀れ田村は力尽きて、ぬかるみの山道に転倒したのであった。二度、三度苦しみ、もがいた末、やっとのことで立ち上がったが、そこにはもはや往年の元気溌剌たる山男の姿はなかった。老醜をさらす、一人の爺がいるだけだった。

その間、彼の耳には若い頃よく唄った「北帰行」の一節、「栄光われをば去りぬ…」が聞こえ続けていたのだった。老鳥の目に光る涙を見たものは誰もいなかった。雨が、それを流してくれたから。



ミツサ

KUWV 同巣会員へ告ぐ

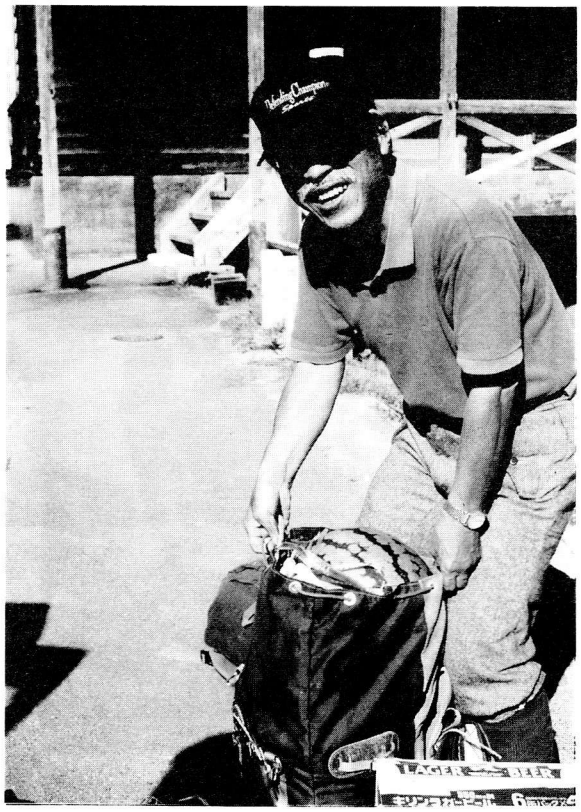
0期　田村　昭夫

わが金沢大学ワンダーフォーゲル部の卒業生には、毎年事務局が企画している行事に、少なくとも一回は参加する義務があると思う。

春、秋の「山小屋酒場」、夏の白山、冬の野沢がそれである。

これ等の行事に一度も参加しない卒業生は、もはや同巣会員ではない。それ等は泣きながら巣を去っていただきたい。勤めが忙しいなどとは単なる言い訳に過ぎない。同巣会長や事務局長その他の方々のご苦労を考えれば、知らぬ顔の半兵衛では済まされない筈である。

同巣会員諸氏の猛省をうながす次第である。そして、体の自己管理は絶対に行なって欲しい。煙草などもっての外である。



【馬鹿でかスイカをさっと、我がザックに収めてしまわれた田村先輩。教祖の心意気ここにあり。このザックは奥名会長と交互に背負われていった。ワンゲル教祖とＯＢ会会長は名誉職ではない！会長は実は、半分に…も想定して、包丁、サランラップも用意していたが、ＫＵＷＶの意地が妥協を打破。また、小スイカの方は17期宇野さんの妹さっちゃんが忍ばせて（？）くれた物。それらの残飯は、翌日椿川さんが担ぎ下ろしてくれた。多くの心遣いに支えられた、「花・星・人in南竜　ミレニアム白山」】

FROM: "高田昌嗣"
SUB: 花・星・人in南竜から帰って

今回は38年振り、11回目の白山山行でした。出会ったOB諸氏は、夫々自分なりの登山を生活の中に組み込んで活動している様で、大変羨ましく思った一方、古いOB連の数が少なかったことは残念でした。

何事も一旦中断してしまうと、その再始動には実に大きなエネルギーが必要なことは、日頃いろんな局面で経験するところです。多忙な毎日の生活に追われている間に30数年の月日が流れ、体力的にも今一つ自信が持てずに、参加の決心がつかなかった人も多かったのではないでしょうか。

確か女流登山家の田部井さんが、
"最近はやりの熟年登山で最も危険なのは、昔かなりやっていてその後長い間中断し、最近急に再開した人達"
と言っていましたが、まさに自分にぴったり当てはまっていて、再始動には慎重にならざるを得ませんでした。

磐梯山登山のトレーニングを積んで万全を期した、悪天候で流れの35周年白山登山とは異なり、再挑戦の今回は、準備不足のぶっつけ本番でした。他の皆さんの足手まといとならない様、正直に言えば醜態を晒さない様、皆さんより先に登ってトレーニングをすることにしました。

南竜集合日８／５の２日前の８／３の13時30分、別当出合いの駐車場から小型テント、食料他を担いで体調を見ながらゆっくりと登り始めて16時20分甚之助避難小屋着。夕方になって人の往来が途絶えて無人となった小屋が気に入ってそのまま宿泊。

翌８／４は早立ちして南竜にテント設営完了したのが６時55分。７時30分よりエコーラインを登って、御前峰、池めぐりコース、室堂、展望歩道経由で13時40分テントに戻る。

８／５は５時45分にテントを出発して８時に別山山頂着。ここでキツネに出会う。早朝で他に登山者が居なかったせいか、逃げもしないで300メートル位後をついてきた。

帰りに油坂を下りきったところの谷の水場でサンショウウオを見つけて30分ほど観察。上流より下ってきて岸辺の流れのないところで一休みし、それが下っていくとまた次のが流れてくるといった具合で何時まで見ていても飽きない。

11時35分テント着。テントの中で昼寝をしていると、"高田さ～ん"と遠慮がちに呼ぶ女性の声。外に出てみると舟田さんで、ケビンの本隊と無事に合流。

８／６は南竜山荘での朝食の後に解散し、田村さん・村田さんと３人でエコーラインを登り、観光新道経由で別当出合いへ下る。馬のたてがみ付近の見事なお花畑と、最後の30分位豪雨の中の下山が忘れられません。

滑って転んで、水が流れる中で起き上がれずにもがいていた人（特に名を秘す）もいましたが、過去の栄光とプライドの後押しを受けて最後まで独力にて別当出会いに降り立ちました。この頑張りには敬意を表する次第です。市ノ瀬の永井旅館で飲んだビールと温泉は最高でした。

今回の収穫はOB諸氏に再会できたこと、白山の良さを再認識できたこと、キツネとサンショウウオに出会ったこと、自分の体力の現状につき見極めがついたことです。また機会があれば参加するつもりです。

その時にはもっと多くの古手のOB諸氏にも会えることを楽しみにしています。今回の私の様に少しゆっくりしたスケジュールと、ある程度

11斎藤　11井上
18椿川　　0田村　　8伊予　　15上馬　4高田
17宇野　　15高村　11青柳　　15佐野　15舟田
17山田　13吉田
【南竜山荘前　朝食後のひととき。】

の日頃の陸トレをやっておけば、再始動もそれ程難しくないと思います。4期　高田昌嗣

アオノツガザクラ

8期　伊予　欣二

約10年ぶりの白山でした。

室堂センター建替えの為のヘリコプターの騒音を除けば、天候にも恵まれ、例年より多い残雪の御蔭でお花畑も楽しめ、懐かしい先輩の方々のお顔に、青柳・森川両君の元気な顔、頼もしい15期、18期の方々にもお会いできました。それにお母さんの若き日にそっくりの井上さん姉妹にお会い出来たことも！！

また時間を作って山へ行こうという気になりました。

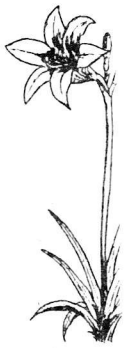
一人でのんびり山を歩いていて、山の大気に生命（いのち）を吹き込んでもらった、元気をもらった気分でした。

あの時、裏銀から黒部五郎を歩いてきた奥さんは、先日（8／19、20）白山へ行って、クロユリ、ハクサンコザクラ、ハクサンボウフウ、ニッコウキスゲ…etc.まだまだきれいでよかったと、10数年ぶりの白山を振返っていました。

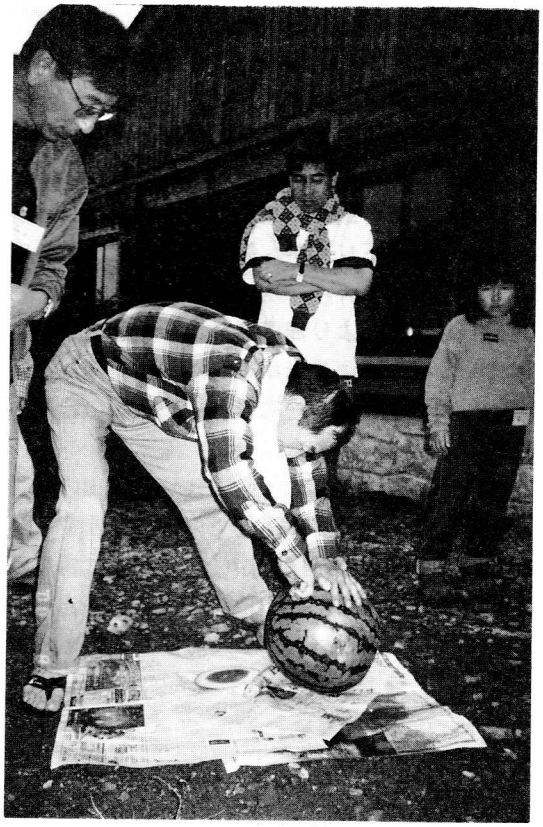
30年ぶりに歌を歌って、歌詞がスラスラ出てくるのが不思議なくらいでした。

お世話になるだけでしたが、これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。

（追　写真、ＣＤありがとうございました。）



ニッコウキス



【スイカ割りから、テント設営から、食堂の場所取りから、サッと体が動いてしまう伊予先輩。森川さんがビビッてらした点からも、現役時代が髣髴。野性味あふれた時代のワンゲルの貴重なお話を窺いました。】

FROM:fkks-ino
SUB:白山最高！！

11期　井上　聖子

花・星・人のみなさんへ

８月５・６日はありがとうございました。あまりに楽しかったので、未だ白山の話題で盛り上がっている井上家です。今、B.G.M.に父の「白山の尾根」が流れています。

私達の６日の行動は以下の通りです。

7:30　南竜発　トンビ岩コースにて室堂をめざす。舟田さんに教えてもらった花の名前をおさらい。

8:30　トンビ岩到着。青柳さんの「ヤッホー」が白山にこだまする。

9:10　室堂到着。上馬さんの地図通り1:40で到着。

9:30　室堂より御前峰周遊。森川さんの助言通り室堂に荷物放置。ちちょ有情にて30年前の父と加藤さんの写真と同じポーズで青柳さんに写真をお願いする。

10:40 室堂再着。頂上で大西さんご家族、途中で松林さん親子に出会う。

10:50 室堂出発。下山。今回多大なるお世話をおかけした青柳さんと涙の別れ。

1:00　別当出合到着。バスに間に合うよう砂防新道を駈け下りるが、最後の30分間は雨の中下界をめざす。

18:00 青柳さんより無事帰れたか確認の電話。

19:30 舟田さんより無事帰れたか確認の電話。

翌朝7:00　祖母より無事帰れたか確認の電話。

薫は家に帰り、父に夕食を作り。登山の報告。聖子は父を待たずに居間で熟睡。寝言で「テントのライトが、ライトが…」と盛んに繰り返す。父、姉に「まだ白山にいるらしい」と笑われる。ホンニンは「クーラーの風があたって寒い」と言ったつもり。

本当に白山は素晴らしかったです。いつになく、全員の気持ちがひとつになった井上家は、９月または10月に家族で白山登山を計画中。聖子は８月中に、友人と日帰りの白山登山を計画中。

ただ、今回残念なことに、やはり「写るんです」はちっとも写真が美しくなかったです。現像をして予想以上にがっかり。今度はカメラを忘れないぞ。

これだけ書いてもまだ興奮覚めやらず、といったところですが本日はここまで。本当にありがとうございました。これからも是非お誘い下さい。

SUB:白山はいいなあ。

井上家ミレニアム登山2000無事帰ってきました。８月とはまた違う花が咲き乱れ、違う一面をみてきました。一番の不安だった天候も少々の霧雨テイドで。10日には晴れ間ものぞいて、少しばかり日焼けをした４人です。前回の白山を思い出しながらの登山となりました。

９月９日

9:00　別当出合出発。（砂防新道）今回はしっかり恐竜の足跡で記念撮影。

11:00 別当覗到着。確かここから30～40分で甚の助到着と思ったが30分たっても到着しないので休憩。その後３分後に甚の助到着。爆笑。８月の教訓を生かし、冷凍果物とビールで回復。この辺から霧雨になり南竜へ急ぐ。南竜分岐から南竜へ（通称ランラランコース・母命名＝平坦で楽だから）

14:00 南竜馬場到着

20:00 あすの晴天を期待し就寝。

【別当覗にて　やはり若い！
溌剌井上姉妹と、松林家次女。
昔の白山記念山行では、こんな元気一杯の現役お姉さんが、ＯＢの子供達の手を引いて登ってくれたものでした。受け継がれてほしい光景でした。】

9月10日
10m先までしか見れない霧のためご来光はあきらめる。
6:30　南竜出発。エコーラインより頂上を目指す。だんだん霧雨がひどくなる。
8:15　室堂到着。ひどいガスのため、頂上はあきらめる。
10:30 観光新道にて下山。このあたりから晴れ間が見える。馬のたてがみまでは今回一番の花畑。タカネマツムシソウなど観光新道ならではの花が咲き乱れる。（by白山花ガイド）殿ケ池までは青空のもと絶景を楽しむ。砂防・別山・殿ケ池・釈迦岳全てを覗める地点で１時間の休憩。しかいｓここからは悪夢の斜面が…。観光新道は絶対登りには仕様すべきではないと確信。
14:30 別当出合到着。最後の５分はスコールに見舞われる。

今回はトリカブト・リンドウ・タカネマツムシソウ等々紫色の花が美しかったです。チングルマは風車になり、ナナカマドには赤い実がついていました。天候がいまいちだったので風景があまり楽しめなかったが、２日目の観光新道は前半だけ感激の嵐！！

そのころ金沢は大雨・洪水・雷注意報が…。母は心配のあまり、南竜山荘・予約センターに電話をしていました。おまけに、「警察から一人行方不明という連絡が入る」という夢を見ていました。山の方が天気がいいなんて珍しい。それではまたの報告を。

FROM:KENAOYAGI@aol.com
SUB:白山最高！！

11期　青柳　健二

１週間ぶりに自宅に戻り、ほっとして、どっと疲れがでています。10日の連続休暇も、後１日。ちょっと淋しい気分にもなっています。

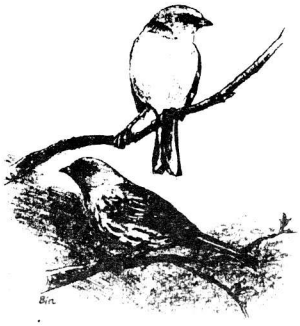
皆と別れて、白山を倍楽しみました。７日には大汝を巻いて、お池巡りをし、大汝に登った。朝霧に濡れた花々をタップリ時間をかけて写真に撮った。ただ、今回の白山の特徴の昼の夕立にもまれ、10時過ぎには雨が降り出し、黒ボコを越えてのところで土砂降りになり、高飯場では、１時間近く沈殿。川となった道をヒイヒイ下ったのでした。

井上薫・聖子さん
やや強引な誘いに乗ってもらって、白山に大満足してもらって、こちらもハッピーな気分です。いや、予想以上の健脚に参りました。２日目は室堂泊りで助かった私です。トンビ岩を登り、御前峰を登ったところで、足と膝に来手ていました。お二人のペースの下山には、正直ついて行けなかったでしょう。

秋には、家族で白山を計画とのこと。結構な事です。ただ、日帰りでは勿体無い。ヤッパリ色んな白山をタップリ楽しむためには、１泊以上しないと不足です。そして、二人のペースには、両親ともついていけないでしょうから。

かく言う私も、スキーだけではなく、山を復活させようと思っています。ヒイヒイ登っても山頂に立った時の爽快感と達成感は格別です。秋には、白山から見てヤッパリ登りたいと思った御岳に、森川さんと登ってみようかな。

奥名　松林　松林　高村　井上　斎藤　　大西　椿川
舟田　田村　村田　青柳　　大西大西大西
【別当出合発９時の”本隊”。嬉しい登山日和】



奥名会長と舟田事務局長様

ヤッパリ白山はイイ！15期の拡大企画、大成功でした。まさか伊予さんに会えるとは、思わなかった。スイカを担ぎ上げた、田村御大の馬力には脱帽。何より、高村さんを加えた15期の団結力は羨ましい。

今回の白山、ハクサンコザクラと、クロユリの乱れ咲きに圧倒されました。また新しい白山を見付けた気がします。思えば、合宿と重なるこの時期の白山へは、初めて登ったのだ。その分、ハクサンフウロとハクサンイチゲの群落が少なかったようだ。また機会を作って下さい。まだ知らない白山を見ることができるように。

せっちゃん

早速写真を送って頂き有難う。皆イイ表情をしていて、良い写真です。

当方、一脚なるものを始めて本格的に使ったが、出来栄えはもう一つ。いや、白山の写真は難しい。槍・穂高はスンナリ、絵になるが、白山はなかなか掴みづらい。早々とガスが巻くいた御薩で、山の写真があまり撮れなかった。その分、花の写真に力を入れたが、光と花の表情を撮るのが難しい。この白山で、お金を取れる写真を撮っている、上馬・栂の両君は尊敬に値します。という訳で、会報向け写真は残念ながら、修業を積んだ次の機会に持ち越し。三脚をシッカリ帯同した。村田先輩の作品に期待しましょう。

原稿の方は、井上家の聖子ちゃんを推薦します。白山初登山でも、コースタイムを記録する余裕うを持ち、親譲りの好奇心で白山の素晴らしさをタップリ吸収しました。親譲りの文才にも期待できます。強く重ねてプッシュしてみて下さい。

さて、待遠しかった夏休みもあと一日。人様がお盆休みを取る頃には仕事ですが、次の夢の日を求めて、また色々思いを巡らそう。スキー・山・カメラ・パソコンなんでも手を出す、そんな軽率さが我が取り柄か。まあ色々手を出しながら、それなりに進歩していくつもりですので、その道のプロのテクニック、今後もご教授下さい。

さて次のイベントは何ですか？またタノシイ企画を期待しています。宜しく。

FROM:MORIKAWA
SUB:RE:白山最高！！

11期　森川　功

無事下山おめでとう！それも二人だけで！（でも、次回からは経験者と行動して下さい。昔よく言われたことに、山は登りに体力の１／３下りに１／３、そして下山してからのかわいい？彼女のために１／３…つまり余裕を残して）

でも、室堂から２時間とはすごいですね。私は南龍から別当出合まで３時間かかりました。それも、上馬君という一流のガイド付きで、彼の杖を借りて。安全にゆっくり下山したつもりでしたが、やはり足が痛い。白峰の総湯でゆっくり温泉に入り、足を揉んだのに。

その後、白峰の林西寺で昔、御前峰や別山に安置されていたが、明治の神仏分離令で廃棄されそうだった仏像を見てきました。昭和55年？に本堂の横に白山本地堂を設け、一般開放しているとのこと。ただ、私も上馬君も、開放前に本堂の裏に安置されているのを見た記憶がある。案内の優しい女性の説明によると、開放前は何かコネがないと観れないとの事。その女性の説明だと、昔は白山山系には６～7000体の仏像があったとの事。秋には是非参観して、優しい女性の説明を聞いて下さい。その女性の声を聞いているだけで、仏像の優しさが胸にきます。

上馬君とせっちゃんと青柳さんにゴマをすれば、希望の写真が手に入るでしょう。二人の参

【展望コースの展望台にて。
ミレニアムの御来光】
青柳　田村
鈴木　上馬　　佐野
井上　斎藤
（by森川）

加で南龍は楽しかったです。老井上夫妻にもよろしく！次回野沢温泉で会いましょう。もちろん。薫、聖子令嬢も一緒に。

SUB:凄い！

15期の森川です。凄いですね。さすが我が15期は凄いですね・もう少し鍛練して15期に入れてもらいたいと思っている人もいるでしょう。（アオヤギさんは秋には濁河温泉へ行くよ。）

こういう記念品がもらえるなら、来年の15期会も是非参加させてもらいたい。（でも、少し小さな希望を言わせて貰えば、カメラは会長には重いでしょうから、幹事長にもってもらったら？）

ありがとう。21世紀の野沢は、奥名会長と加藤父さんの２大競演が楽しみです。

13期　吉田　穂積

８／５　別当出合－エコーライン＝御前峰－南竜
８／６　南竜－別山－千振尾根－市ノ瀬

８月４日夜11時頃、金沢の家を出た。夏山交通規制中ではあるが、別当出合まで入れるかもと期待したが、０時半に着いた市ノ瀬には、おっちゃん二人がしっかり見張番。「５時になったらバスが動きますので、それまで車に居て下さい。」との事。

星空がきれいだ。天の川を見るのも随分久し振りの気がする。車で仮眠するが、時折到着する車のふかすエンジンの音、ドアを閉める音がうるさく、ウトウトしても目が覚めてしまう。

結局、起きたのは６時近く。パン食を済ませ、別当出合行きのバスに乗る。足の筋を伸ばしさあ出発と、数歩歩きだしたところ、何やら見覚えのある顔。ン、間所だ。佐野もいる。宇野も。あと一人誰だか判らない（途中で聞いて、鈴木と判る…ゴメン）。

佐野がトップで出発。さすが山に登っているだけにピッチが速い。他の三人は山に登っていないし、これといった運動もしていないらしいが、よくついていっている。私は、そろそろ限界かなと思いながら、別当覗までついて行けた。途中「速すぎる」と文句を言っていた宇野がトップを交代し、ペースを落としてくれたので、楽になった。甚ノ助小屋で休憩していると、別当で後発の宇野の奥さん、娘さん、義理の妹さん一行が到着。彼女達は、花を愛で、話をしながら余裕で登ってきたらしい。しかし、たった15分しか違わないではないか。

エコーラインの登り口で、南竜に直行する彼女達と別れ、我々は室堂へ向かう。弥陀ケ原の

松林　山田　鳥越
高村　井上　宇野　鈴木　吉田　松林　宇野
斎藤　森川　上馬　宇野　松林
間所　青柳　伊予　田村　村田　佐野　奥名
【今、18期連呼んでくっからね！あ、高田さんも探さなくちゃ！】

道はきれいな木道となり、五葉坂は工事中で通行止め。水屋尻雪渓脇に道がつけられている。

玄関の石組だけはそのままの、工事中の鉄骨組みの室堂前で昼食。間所達がビールを買ってきてくれたが、酒の弱い私は、飲んで歩く自信はないので、遠慮する。宇野、佐野はここで引き返すというが、ビールを飲んだ鈴木、間所は頂上へ向かうという。私も同行する。奥宮まできれいな石畳に整備されている。ガスで展望の良くない頂上で記念撮影をして、水平道に戻ると、９時別当集合の一団に出会う。村田さんや奥名の顔が見える。南竜山荘では一足先に着いていた舟田さんの笑顔が迎えてくれた。

今晩の宿であるケビン、テント場に着く。懐かしい顔、初めての顔。あちこちで話の花が咲き、夕食までのひとときを、写真を撮る人、花を探しに行く人、酒を飲む人、思い思いに楽しむ。

南竜山荘での夕食後は、ケビン前でスイカを食べながらの自己紹介。山上でのスイカは夏合宿以来だ。楽しみではあったが、一番厄介な荷物だった記憶がある。

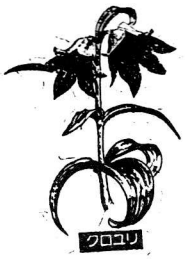
ケビンでは夕食前の部に引き続き、酒宴が始まる。伊予さんの隣に座っておられた森川さんは、私をその間に座らせた。どうも、コワイ先輩は何年経ってもコワイものらしい。田村さんの人力車の話は何度かお聞きしたが、今回は、村田さんによる裏話も聞くことができた。能登の某所に移り住んだ夫婦の、夫の死後、奥さんがエライ目にあいかけた風習の話が村田さんから出た所、実は倉谷にも似たような風習があったんだという上馬の話。隔絶していた地には、思いもよらぬ因習がわずか昔まで残っていたのだ。土間では、佐野、松林、舟田さん達が、ウィンナーや丸干イカを焼いて、次々と出してくれる。特大スイカをボッカしても元気の余っている田村さんや、前日は室堂泊まりという優雅な森川さんは、まだ余力が残っていそうだが、他の人は、腹一杯、疲れ一杯で、早めのお開きとなる。

テントの朝はやたらと明るい。快晴である。南竜山荘で朝食、記念撮影の後、それぞれのルートで帰路につく。私は前日御前峰に登ってしまっていたので、一人千振尾根を下ることにする。聞いてもすぐ忘れてしまう花の名前を、今回は少し覚えて帰ろうと思う。

南竜の湿原で、今朝山荘で買ったばかりの「白山・花ガイド」を開いて、一つ一つ照合しながら歩く。花の色別で探し出せるのでわかり易い。こうして花を見ながら行くと、油坂も苦にならず、天池に着いた。

池端に寒天状の塊がある。中にオタマジャクシが見える。クロサンショウウオらしい。親が何匹も底に這いつくばっている。ボウフラが垂直にクネクネしてうる。これは上馬が、昨晩スイカを食べている時解説してくれたハクサンヤブカであろうか。２、３箇所刺されて、余り保護したい気にはならぬが。４、５㎜位の黒い水生昆虫が時折、息継ぎに浮上してすぐ潜ってしまう。また、妙なものが、あちこちで動いては止まる。長さ３㎝、太さ３㎜位の小枝のようなものが、数㎝スーと動いては止まる。しばし観察していたが、正体不明である。水面に小さなバッタのような虫が落ち、もがいているので、何か水生生物が食べにくるか眺めていたが、バタツいて次第に岸に近付き、ついに草にたどりつき逃げていった。こんなにのんびりした山歩きをしたのは初めてである。

８時すぎからわき上がり始めた雲は次第に山々を隠し、11時すぎに着いた別山では、飛騨側は殆ど真っ白になってしまった。何種類かのおかずが、一種類になってしまった弁当を食べ、千振尾根を下ることにする。千振尾根避難小屋を過ぎ、お花畑を過ぎた辺りから、ポツポツ雨が降りだした。下界は降ってないだろうし、多少濡れるのもいいかとそのまま歩いたが、雷が鳴り始め、次第に雨も強くなってきて、パンツまで濡れてきた。これ以上濡れると、ズボンの滴で靴の中がグチョグチョになってしまうので、ちょっと遅きに失したが、雨具をつけた。落雷の恐れはないが、それでも間近で鳴ると恐い。泥流の山道をひたすら下った。



FROM:takamura chikako
SUB:宿題

15期　高村　千佳子

白山は３回目の登山です。
１回目は、1979年の夏、結婚した年。どうしても白山を見せたいと連れていかれました。主人と二人で登りました。朝一番の金沢駅発のバスに乗って行き、ただひたすら登りました。

２回目30周年記念登山に娘と参加しました。現役の学生さんが食事の用意をしてくれたり、娘と遊んでくれたりしました。お父さんの好きだった白山に、娘と登れてよかったです。

35周年も参加するつもりで、節ちゃん宅　に前日から泊めてもらっていたのですが、台風で中止。

そして今回、３回目の白山。今度は一人で参加。前日は宇野さんのご家族に車に乗せてもらって、節ちゃん宅へ娘と二人で泊めて頂きました。練習もしないままの参加だったので不安でしたが、私達のペースに合わせてゆっくり、ゆ

【南竜分岐は満開のお花畑。我がＯＢ会の華達。
ところで、今回参加の二代目、総勢９名は全員女性。金大ワンゲルに入ろう！の誓いもあったとか？】
松林 高村 村田 斎藤 井上

っくり登ってくれました。途中で食べた、節ちゃんが重たいのに一杯持ってきてくれた冷凍の果物の数々が、疲れを吹き飛ばしてくれました。また、お花畑が最盛期でとても綺麗でした。帰りは楽だろうと思っていましたが、下りの方が結構急で、とてもしんどかったです。でも、山でしか味わえない、山に登らないと分からない満足感を感じました。

お世話になった同期の人、参加した皆さんありがとうございました。

FROM:matouzu@p2222.nsk.ne.jp
SUB:写真のお礼＆原稿

15期　松林　知一

早々と写真をお送り頂き、まことにありがとうございました。何もしない幹事で、会長、事務局長の足を引っ張ってしまい、申し訳なく思っています。ましてや、写真係をおおせつかりながら、肝心のカメラを車の中に忘れてしまうとは…。カメラを忘れるようになっては、新聞記者は失格ですね。だから、廃業したのですけれど…。

それではとりあえず、以下原稿です。メインの感想文は夏休みの宿題が終わり次第、娘達に書かせますので、私の分はその前書きということでお許し下さい。

８／５別当出合－南竜
８／６南竜－エコーライン－室堂－頂上－砂防新道－別当出合

何年ぶりかの白山でした。変わらぬ姿で迎えてくれたと、言いたいところですが、中飯場には立派なトイレができ、南龍にはケビンやビジターセンターができ、エコーラインや弥陀ケ原の登山道には木道い整備され、室堂センターは改築工事の真っ最中。

でも、何より変わったのは自分の体でしょうか。かつては、確かに登れてたはずの登山道があんなにもきつく、あんなにも長かったとは。登りは甚之助ヒュッテのかなり前から足がつってしまい、下りでは黒ボコ岩の直下からヒザがいうことをきかなくなり、すさまじい雷雨の中を登りより遅いペースで、まさに泣き泣き足をひきずって別当出合にたどりつきました。（頂上へ寄り道をしていたため下山が遅れ、ひどい目に合いました。はくさんは12時過ぎからものすごい雨となりました。）

運動不足はよく承知しており、不様なことにならないようにと、事前に自分なりにウォーキングに励みトレーヒングをしていたのですが、平地と山道、しかも空身と荷物を背負ってでは、状況はまったく違っていました。トレーニングもさることながら、自分の体をもっと軽くする必要があることも、改めて痛感しました。

でも、登ってしまえば、ビールはうまいしスイカもうまい（自分で運んだわけではないので、胸は張れませんが…）。年に一度はこうして、懐かしい顔と山で出会えるというのはなんと嬉しいことでしょう。願わくば、生きている限りは体が動き、白山に登りたいとの心を失わないでいたいものだと念じていますが、意志薄弱の身にはちょっと荷が重いようです。

今回連れていった娘のうち、上の方は宇野さんちの春菜ちゃんと白山の上で
「いっしょに金大へ行って、ワンゲルに入ろう」と約束したようです。アゴを出したオヤジを尻目に、「今度は観光新道を通りたい」などと申しております。

だれが連れていってやるものか。お前達で勝手に行きなさい。その前に、金大へ行けるものなら行ってみろ。勉強しない人は金大には行け

ないんだからね。…と、オヤジは負け惜しみをつぶやいています。
山でも様子や感想は娘達の原稿に譲ります。

次女　松林　由佳里

ふう、やっぱり登山は最高！「伊吹山、立山を登っているのに、しかも石川県民なのに、未だ白山に登っていないのは何たること！！」と思い、今回の参加を決意しました。（というか、登山なら絶対するつもりだったけど…）
他の山も楽しかったけれど、やっぱり白山は格別でした！クロユリ(採)たくさん見れたし。春菜ちゃんにも会えたし。（15期宇野ジュニア）
今回意外だったのは、やはり父ですね。来年50なうえ、普段運動してないから…。ん？でもおとーさんより年上の方もたくさんいるのに、バリバリ登ってなかった？ふっ、やはり運動不足ですね。娘２の私が先頭だったとゆーのに、父がビリでどーする…
「ほっほっほ、立場が逆転しましたわね、おとーさま？」
二日目に、我が一家はみなさんと別行動をとり、山頂まで登ってまいりました。山頂もいいけど、黒ボコとか、別のコースも歩いてみたかったナ…。ま、それは次の機会でいーか。（でも父があれじゃ）
来年は、私中２、妹は中１になるわけですが、ヒマがある限り参加させていただきたいと思います。15期は毎年やってますし。うーん、うーん。考えてみれば、登ってみたい山が、日本全国いくつもいくつもあるわけです。うーん、中学、高校と忙しくなり、登山なんかしてるヒマなくなるなぁ。やはりここは、金大に入ってワンゲルに入る？そーなると私、みなさんの後輩になりますね、ま、先のことはわからないし…居間、言えることは、やっぱり「山は最高、ワンゲル最高！」ーーこんなものかナ？

三女　松林　知恵里

今まで山はたくさん登ってきたけど、やっぱり一番きつかったなぁ。井上姉妹や春菜ちゃんと仲良くなれて良かった。お父さんはかなりの年だから山はきついらしいけれど、これからも連れていってほしいです。私はまだ山に登りたいです。

FROM: 上馬　康生<DZZ05040@nifty.ne.jp>
SUB: 南竜、私の２日間

久しぶりの白山山行は、ほんとうに「花・星・人」に出会うことができ、体の調子もだいぶ良くなったことが分かり、収穫の多いものであった。計画された方、いろいろ事務的なことをされた方、そして参加されたみんなに感謝の気持ちです。

８月５日

金沢を４時前に出て、市ノ瀬を５時に一人で出発。涼しい川風の中、数匹のオロロの出迎えを受け、猿壁堰堤の左岸から登山道に入っていった。ブナやトチノキなどの木々から降りそそぐ、ひんやりと心地よい空気に歩く力の元をもらい、早朝の森の中、鳥やカモシカなどと同じ自然の一員となる。

見おぼえのある木々が、懐かしい昔のひとこまを思い出させ、倒木や新しい道標が、時の流れを気づかせてくれる。昔と変わらぬチブリ小屋に着いたのは９時過ぎ。一人で泊まったという60代の男性が市ノ瀬向けて降りていった。この時間になると、前夜、南竜に泊まった人が次々と降りてくる。中には30人くらいのグループも。チブリ尾根も結構利用されるようになったものである。

ルリビタキやメボソムシクイの声の他に、キツネ、テン、オコジョの足跡や糞を道に見つけながら、御舎利山にはチブリ小屋から１時間45分で着く。登山道のまわりは、まだ雪が解けて日にちがたっておらず、コザクラやイチゲがいっぱい咲いていた。別山神社の石の囲みの中で休んでいると、次から次へと人が来て、正午には20人以上になる。
ゆっくりしたかったが、入道雲が次々と上がりだしたので、南竜向けて出発。ほとんど休まずに歩いていると、油坂の頭で雷が鳴り出した。降りきった赤谷で、顔を洗い、最後の坂を上りきると池塘のある広々としたところに出る。そこから見失いそうな道をキャンプ場めざしていくと、ケビンに到着。すぐ前のサイトで、早く着いた仲間がテン

トを２つ張っているところであった。別山から１時間45分で着いたことになる。

その夜は、飲むペースがはやく、いつもになく酔ってしまい、部屋の隅で一足早く横になる。３時ころだったか、外に出ると星を見上げている何人かがいた。夏の星座ではなく、何がなんだかわからなかったが、ペガサスを佐野氏が教えてくれた。

８月６日

４時05分キャンプ場出発。ライトを照らし、10人あまりで御来光を見に展望歩道を行く。途中の沢には、まだ大きな雪渓が残っており、水は流れていなかった。45分で展望台到着。空の雲が焼け、北アルプスや乗鞍、御岳がはっきりと稜線を連ねており、なかなかの眺め。５時過ぎに水晶岳の少し南から太陽が出る。その後、展望台付近のお花畑を見て南竜へ戻る。

朝食のあと、観光新道組や頂上組を見送り、最後に森川さんと２人で出発し、砂防新道を下る。ゆっくり、のんびりと歩き、３時間かけて別当出合到着。そこには伊豫さんが、すでに着いてから１時間になるといいながら服を干しておられた。このあと、森川さんと２人、白峰の温泉に入り、林西寺の下山仏を拝観してトチ餅を買い、鳥越で蕎麦を食べて金沢へ向かった。

２日間の白山で、山歩きの体力が少しは戻ってきた気がする。夕方になると、まだまだ正常ではなくなる体であるが、これから月に２度くらいは山歩きをしようと思う。９月の小屋作業にも、できるだけ参加したい。

バン

今年の夏

15期　鈴木　良紀

８／５　別当出合－エコーライン－御前峰－南竜

８／６　南竜－黒ボコー観光新道－別当出合

昨日、お盆休みに「我が家の短足犬を、浜名湖で泳がせる」というイベントをすませ、帰ってきました。ドライブ疲れで、本日は左肩痛と右足疲労に悩まされています。

その前の、本夏のメインイベント、白山より帰った翌日も、両足痛のため階段の登り下りに苦労しました。

寄る年波というより、日頃の不摂生のためと考えています。暑くなってから、昼夜ともエアコンの効いた室内。殆ど唯一の外気浴が、犬のトイレのお供で、夜、近所を歩く時でした。

本年の15期会参加は、体力的にも、日程でも無理と、もともと諦めていました。上記の宿泊イベント宿泊予約の方は、昨年８月のうちにいれてあり、小生の代理医師に、その間の留守番をまず依頼していました。

ところが、春のお花見金沢行きを雨で流してしまい、白山行き案が急浮上。ダメもとと、彼に留守番の日程を打診したところ、簡単にＯＫされ、小生が留守の間の診療も、父が引き受けてくれることになりました。

最後に南竜へ行ったのは23年前です。体力的な自信は全くありませんが、状況の方は整ってしまいました。この機会を逃すともう登れないかと思い、参加を決めました。

返事をした後は、かつて小生があきて放り出し、こどもが受験間の体力維持に利用していたエアロバイクを漕ぐようにしました。当時に比べ体重が10キロ程増えていますから、荷物も減らすよう工夫しました。

実際の山行きは、宇野君の配慮により、前夜は白峰の快適な民宿泊り、早朝涼しい内に登山を開始するなど、好条件で行なわれ、人・白山との逢瀬を心ゆくまで満喫しました。

奥名・松林・上馬・舟田さん、金沢の面々ありがとうさんでした。

成り行きで、来年の15期会の幹事を引き受けることになりました。皆さん心配している事と思います。他の近畿のメンバーと相談しながら企画を立てたいと考えています。

余談ですが、我が家の短足犬。慣れぬドライブと強制された犬かきに苦しみ、神経性の下痢を起こしています。

【黒ボコ岩前の15期連。
現役時代には意外と
ここは通っていない。
それに縦割りＰの為
同期が揃ってのこん
なシーンもなかった。】

舟田 間所 高村 宇野
奥名 宇野 宇野 鈴木 佐野

15期　佐野　哲雄

８／５　別当出会→エコーライン→室堂→南竜
８／６　南竜→黒ボコ→観光新道→別当出会

事務局長の魅力をも金沢駅で振り切り、悪天の中を無理矢理登った幻の３５周年以来の白山でした。あの時は強風と雨とガスの中、南竜の食堂で、自然観察員の解説付きのスライドを見たのですが、今回は贅沢なことに、帰路ずっと解説付きで白山を楽しむことが出来ました。
白山で私の好きなアングルはエコーラインの登り口付近から南竜方向をみたところ。山々に囲まれた緑の楽園の様にみえるところが何ともいえずホッとします。

さて、室堂では、平成１４年の夏オープンに向けて工事の真最中でした。
商売柄、建築中の現場があると排水処理施設がどうなっているか気になってしまいます。
公共下水道の無い地域で、建物をたてる場合、建築用途、排水量に合った、排水処理施設を設置しなければいけません。（例外もある）
もちろん室堂は公共下水道に繋がっていないので排水処理施設が必要になります。
現場を覗いてみると、合併処理装置工事とありましたので、トイレ・洗面・厨房・風呂等の排水を全て処理する装置が設置されるようです。
ところで山岳地帯での排水処理では次の様な項目が問題となります。

1．設置スペース
2．動力（電気）の確保
　電気は必須条件、自家発電・自然エネルギー（太陽、風力）が必要となる。
3．流入水の季節変動・週変動
4．汚泥の処理
　場外搬出の方法（ヘリコプター）
5．放流先の問題
　処理水といえども、そのまま放流すると生態系に大きな影響を与える。窒素、燐は除去されにくいので、高山植物には悪影響大。
　もちろん飲料にも不可。
　高度処理には費用がかかり過ぎる。
6．維持管理
　有資格者の定期的な保守点検が義務付けられている。
7．諸々費用（全てがコスト高になる）。

快適さと、お金と、自然保護、いつも悩まされる問題です。
設計図を見ないと何ともいえませんが、白山に優しい、排水処理施設・システムであることを願うばかりです。

奥名　会長　殿
ＣＤ－Ｒ　有り難うございました。
とても良い出来です。家族も一度白山に登ってみたいと言うだけは言っております。

―ほくほく線で白山へ―

１５期　間所 新一

8/4 東京駅－金沢－白峰（山和荘）、8/5白峰－別当出合－砂防新道－エコーライン－室堂－御前峰－南竜、8/6南竜－黒ボコ岩－観光新道－吉野谷村（温泉）－金沢－東京

佐野君と東京駅で待ち合わせ、ほくほく線経由で一路金沢へ。金沢到着は17:30。宇野君ファミリーが車で待っていてくれ、ほっと一安心。

大阪からの鈴木君も合流し、駅のコンビニでアルコールの買い出しをし、20:00頃白峰山和荘到着。

鮎、かた豆腐、トチもちなどの地元料理に大満足。この民宿は宇野君が、インターネットで見つけたものだが、聞けば上馬君もよく職場の歓送迎会等で利用しており、白峰の中でもお勧めの民宿とか。

翌朝6:00白峰出発。別当出会で13期の吉田穂積さんにお会いし、一緒に登る。明け方の涼しい中を順調に登り９：００頃甚の助到着。

エコーラインの上り口にザックを置き、室堂へ。途中の弥陀が原はすべて木道となっていて、その必要性は理解しつつも、何か味気なさを感じてしまう。室堂で昼食。そして、お楽しみの冷たいビール。

室堂改修の資材を運ぶヘリが、間断なく飛んでいる。白山もどんどん変っていくのは仕方がないのか？　一年の合宿トレで四塚のお花畑の中でテントを張ったのがなつかしい。

昼食後穂積さん、鈴木君、間所の三名は御前峰へ、宇野君父子、佐野君は先に南竜へ。御前峰はあいにくのガスで、アルプスの山々は望めなかったが、何年ぶりかに頂上まで来れたことに満足する。

帰りのエコーラインを下り始める頃から、雷鳴が鳴り始め、雲行きもあやしくなってきた。ザックを置いて全くの軽装で登り始めたことを、多少後悔する。何とか雨に会わずに無事エコーラインの上り口にたどり着き、奥名会長、松林ファミリー等の本隊に出会う。

南竜到着。15期意外にも見慣れたＯＢの方々が既にたくさん到着されていた。田村教祖の運び上げられた超特大スイカを冷やすために炊事場に運ぶ時、周りの登山客からウオーという羨望の声が上がる。教祖の元気に感服。

夕食後バンガローでの恒例の宴会。宇野君お勧めのすだち酎の南竜の冷たい天然水割で気分よくなる。前夜の白峰の夜更かしもあり途中からは半睡眠状態となり、途中でテントに移り就寝。

4時頃、人の話し声で目が覚め外に出ると、満天の星。星座の名前を忘れたことを除けば、きらめく星座は、最初に白山に登って感動した時と少しも変らずそこに有った。

今回の花、星、人ｉｎ南竜では、南竜での活動はもちろん、行き帰りの足にいたるまで奥名会長はじめ舟田事務局長他の多くのＯＢのお世話になりました。

おかげで、なつかしい白山に久しぶりに登り、思い出を懐かしむことができました。ありがとうございました。

コバイケイソウ

次は「エベレスト」か！

１５期　宇野　潔

白峰の「山和荘」（やまわそう）はお勧めです。料理が非常に良くて一泊２食７５００円です。道に迷って遅くなり、じっくり味わえなかったのが残念でした。１５期遠方組（間所、佐野、鈴木と私）は、白峰の民宿で一泊し宴会もそこそこに、明日に備えました。

熟睡した佐野君をトップになんと３ピッチで甚の助へ行ってしまったのです。学生時代でも出来なかった快挙かも知れません。同行した１３期穂積さんもとんだ迷惑で、早い早いと言っていました。しかしその後疲れが出て、私と佐野君は御前峰を目の前にして、娘が疲れた事を理由に頂上に登らず集合場所の南竜に戻りました。

その後、同期や先輩、後輩との、気の置けないワンゲルの懐かしい空気とともに、白山の自然の中で過ぎて行った２日間は、久しぶりに充実した時間でした。帰りに寄った「手取温泉」もよかった。

・・・というわけで楽しい３日間でしたが、好天に恵まれながら頂上を踏まない山行きとなってしまった事が少し悔やまれています。帰って来て、何気なく読んだ夢枕漠の「神々の山稜」が追い打ちをかけました。「鍛えればまだやれそうだ」との思いがくすぶりかけています。

上記本を読んで、節子ちゃんの紀行文を読んで、思いは、次は「エベレスト」です！。

あ！、その前に御前峰に借りを返さねばなりません。休日ジョギングの再開です。

２５年ぶりの白山

１７期　　宇野　和子

”今年の夏は白山に登るぞ”という夫の言葉によく考えもせずＯＫしたものの、最後に白山に登ったのは．．．２５年前の様な気がする。その後は近くの山でハイキング程度の事しかしてない。それなのに、お気楽おばさんは何とかなるさと準備を開始したのです。

まず、ポーターとして妹（某大学ワンゲル出

身体力、山行歴共に私より豊富）を手配しました。靴も購入しました（私の山靴は、とっくの昔に処分してしまったので）。付け焼き刃は役に立たないとは思うけれど、マンション６階の我が家までは階段を使う事にしました。あとは当日のお天気次第．．．

そのお天気に恵まれ、久しぶりの白山は３０年前の合宿トレよりずっとラクでした。妹が一生懸命説明してくれたお花の名前はなかなか覚えられなかった（最近記憶力が落ちた）けど、いつの間にか南竜に到着していて、私もまだまだ捨てたもんじゃないわとつぶやいたのでありました。

他のメンバー（１５期４名と１３期吉田氏、そして我が末娘）が山頂アタックを試みる間に留守部隊としてはテント設営にとりかかりました。おばさん２人がエッチラオッチラ、テントと格闘している所に近づいてきた１人のオジサマ、”あんた達テントの張り方知ってる？”その方が大先輩の伊予氏とは露知らず、一応知ってますけど．．．（だって元ワンゲルだもの）と言いながら張り方の順序を教えていただいた。その直後、偶然出会った１１期森川氏に御挨拶しようと近づいた時、森川氏の視線は私たちを通り過ぎて後ろのオジサマへ。お２人の会話でようやくその方が私の１０年上の大先輩である事がわかり、ハハーッと思わず最敬礼でした。

そんな大先輩とも、一度酒宴が始まれば気軽に話せて話題の尽きる事がない、こんなＯＢ会の楽しさは現役時代には想像もしないものでした。今年はお花もきれいだったし、先輩後輩との交流もできたし、学生のころより数キロ増えた体でチャレンジした白山は正解だったと言えます。

末っ子にも白山体験をさせてやれたし、唯一達成できなかったのは私の減量ぐらいでしょうか。

いずれにしてもミレニアムの一大イベントであったことに間違いありません。また次の機会に元気な顔で再会できることを願って、心のアルバムを閉じようと思います。

空が近くに見えました

宇野　春菜

今回、父と母に「白山に登るゾ！」と言われた時、かなりめんどくさいと思いました。疲れるのが嫌いだし、山って虫がいるから嫌だしとかなり不機嫌な私でした。

だけど、いざ登るとなると私はやる気満々でした。「私はまだピチピチで若いんだから意地でも登る！」といつもの負けず嫌いが出たのかも知れません。

だけど、白山で見た空には感動しました。前から好きだった空をこんなにたくさん見れるなんて、すごくうれしくて疲れた事も忘れてしまいました。山の上は高くて、私の視界をさえぎるものは何もなく、空がとても近くに見えました。手を伸ばしたらあの雲がつかめるんじゃな

吉田 奥名　　高村　　松林
間所　椿川　宇野 佐野 田村　　松林
伊予　宇野　　青柳　　松林
宇野　　岡部　　大西　　上馬
大西　岡部 岡部 大西 大西　舟田　　森川
井上　　斎藤

【ミレニアム白山はこれにて解散。また会う日まで！】

いかと思うぐらいに。雲より高い所にいるなんて信じられなかった。あたりを見渡せば、一面の空色と花の色と雲と緑だけ。

山の上ではすごくゆっくりゆっくりと時間がたって行って、時計を見ようなんて思いませんでした。騒音の中で生活している毎日とはちがう、川や鳥や草花の音が私には新鮮で心地よかった。あんな大自然をまんきつ出来るんなら、白山も「けっこうイイではないか」と今では思っています。頂上に行けなかったのが残念で、必ずもう一度いきたいと思います。

意外性のある出会い

山田　郷美

旅の醍醐味は、「意外性のある出会い」だと思うのです。今回の山旅でも、たくさんの思いがけない出会いがありました。

その１．どこに入っていたのか謎を呼んだ「巨大スイカ」その甘さと大きさは感涙ものでした。

その２．大自然に触発されたのか、野生もしくは青年に戻る人々。

その３．２０年ぶりに夢中にさせてくれた家型テント

その４．春夏秋が一斉開花したお花畑。後で聞いたところでは、今年は格別だったようですね。

その５．撤収と朝食準備で賑わうテン場を泡を食って駆け抜けて行ったウサギ「ナンヤネン、ナンヤネン、ドナイショー～」と言ってました。

花も、雨も雷も、そして皆さんの姿も、昨日の事のように思い出されます。

楽しい山旅に御一緒させていただいて本当にありがとうございました。

きわめつき

15期　舟田　節子

「フィルムが落ちてるわよ」「あら、撮影済みだわ」おばさん達が騒いでいる。

ここは殿ケ池ヒュッテ。私が腰を下ろす前からその騒ぎは始まっていた。だから、全くの他人事で静観し、そこから出発前にはとりわけ、慎重にフィルム交換もやり、しかとサイドポケットに撮影済みを収めたのだ…。まさかまさか、それが、私のバックポケットからこぼれ落ちたもので、当人より先行しておばさん方の足元にころがり至っていたとは知るよしもない。

ようやく辿り着いた別当出合。バックポケットのチャックが半開きになっている…不吉な予感。いや、ちゃんとフィルム類はサイドに決めてたよ。でも、ケビン前での記念写真のあと、花園へ行くという森川さん達を追っ掛けた時に、とりあえずバックの方へ入れちゃったような気もするなあ…。

帰宅後、祈るような気持ちで片づけをする。撮影済みは３本…。ん？少ない。ますます厭な予感。あれがそうだったとしても…記念写真の分でなければ、ま、いいか。

翌日さっそく、同時プリントへ。うんうんまあまあの出来。ギャー、やっぱりない！あれが記念写真のフィルムだったんだ。ちっきしょう、あん時、ちょっと、「え、どれどれ？」と、見てさえいえば！だって、騒ぎの方が先だったんだもん。自分だなんて思わないよ！

ともあれ鶴来署へ電話。白山での落とし物ならと、市ノ瀬案内所を紹介される。

「昨日の午前10時半頃、殿ケ池ヒュッテの前で落としたんです。」こんなに、場所も、時間もきちんとわかっている落とし物なんて、やったことがない。「それらしいのが、届いていますが、外見は？」「白に紫のパトローネです。」「それなら、これで間違いないようですね。受け取り人払いで送りますから、現像して確かめて下さい。」

という経緯で、その記念撮影フィルムは、水曜日に届いたのだ。同時プリントに出し、ケビン前の31名の笑顔を確認した時の安堵は忘れられない。「そうだよ！みんなに、ミレニアム白山をお膳立するような善女に、悪いことおこるはずないよ！」と、嬉しさのあまり言ったら、息子の顰蹙を買ってしまった。

ともあれ、そんな間抜けなハプニングのために、ミレニアム白山は、私にとってさらにきわめつきの白山になってしまった。そして、聖書にある「無くなったと思った息子が、生きて帰ってきた」という一節を思い起こしていた。単に現像して、で済んでしまう筈だったことに、天と地の思いを味わったから。感謝の種はそこらじゅうにあるものなのだ。

それらの写真は、いつものごとく、木曜日に

は、原稿請求同封で、参加者に発送されました。多くの方のフィルムがまだ、カメラに入ったままであったろう、行事４日後のことです。

したがって、以上のようなハプニング経由であったことは、どなたも感知できなかったことでありましょう。しかし、ここに暴露してしまいました。なんといったって、これが、「きわめつき、ミレニアム白山」でしたから。

もう１回記念写真を見てみて下さい。白山権現の後光を感じるでしょう？！

FROM:Masaaki Ohnishi
SUB:お礼

18期　大西　正明

”花・星・人in南竜”お世話になりました。事務局、幹事の方に改めてお礼申し上げます。早速写真と原稿依頼を送って下さいまして、誠にありがとうございます。妻（菊路）、次女（沙紀）、三女（真実）に感想文を宿題として与えましたので、たぶん書いてくれるでしょう。沙紀は当パーティの記録係として、克明にノートをとっていたので、期待できるでしょう。

２日目の行動をお話しします。

エコーラインより室堂に出る。この時期にもかかわらず、お花畑はたくさんの高山植物が咲き誇っていた。登りの辛さを忘れさせてくれた。妻も娘もいたく感激していた。私は花の名前を尋ねられ、いい加減な答えをしたため、以降彼女らは私に訊かず、椿川と岡部に質問を浴びせていた。（クロユリ、ハクサンコザクラ、ニッコーキスゲ、チングルマ…あと10個くらいかな。父のレパートリーは）

室堂を出発する頃から頂上はガスが出始め、展望は期待できないなと思ったら、御前峰は案の定。翠が池の雪渓で、岡部の持参してくれた小豆缶とフルーツ缶でフラッペを。（こいつは相変わらず気の利く奴だ。）子供達はこれにも感激。

下山の途中雨がぱらつき始め、室堂に着いたら本降りになった。通り雨と考え、昼食後、小降りになるのを待って、黒ボコ岩コースで下山開始。直後、雷が鳴り始めた。雷鳴は近付く、雨は激しくなる、休む所はない。子供達は大丈夫だろうか。小学３年生が二人いるし、沙紀（中１）は指を怪我しているし（登山前から骨折していた。それでも連れてきてしまった）、んーまいったなと思いつつ歩き続ける。

子供達はよく頑張った。土砂降りの中で水浸しになりながらも、登山道が川のようになっても、１時間20分、甚ノ助ヒュッテまでよく歩いた。（この日、増水で百万貫岩で孤立した人がいたそうな。谷川岳で鉄砲水のあった日）

甚ノ助３時半。今度は最終バスに乗り遅れそう。ペースをあげて、更に下山。自分の膝もガクガクきてる。みさきちゃん（岡部の娘さん、小学３年生）、真実（同じく３年生）は大丈夫かな？

雨が上がった。90人の団体が今頃登ってきてる。このおっさん、おばはん連中を待たにゃならん。早う通り過ぎてくれ。

別当出合着、５時20分。ぎりぎりセーフ。疲れました。妻（もちろん主婦専業。体力などありゃしない）も、子供達もよく付いてきてくれた。

さて翌朝、身の入った足を這うように、車の乗り込み、大阪まで運転。午後、出社。男はつらいよ。翌々日、翌々々日、階段を降りるのが大変。歩いて10分の所へ行くのもタクシーに乗る。

妻も子も、「また白山に連れてって」とさ。

以上で、私　の宿題はおしまい。また、素晴らしい企画をお願いします。（我が家族はどうやら白山がすこぶる気に入ったようです。ありがとうございました。）

いつもお世話になりありがとうございます。先日の白山登山では家族ともども本当にお世話になりました。お礼申し上げます。

さて、事務局長殿のご依頼の件、夏休みの宿題に課した作文が出来上がりましたので、お送り申し上げます。e-メールにて送ろうかとも考えましたが、手書きそのままの方が、感動と感謝の意も伝わろうかと思い、原文のまま送らせていただきます。

残暑厳しき折、ご健康に留意され、ご活躍されますようお祈り申し上げます。

北國　平成12年（2000年）8月7日（月曜日）

増水、中州に一家孤立

白峰の百万貫岩　4人を無事に救出

六日午後三時二十一分ごろ、石川県白峰村市ノ瀬の手取川で、松任市山島台六丁目、会社員倉田正行さん(五)ら家族四人が濁流のため、通称・百万貫岩の中州に取り残されているのを警戒中の白山消防署白峰分署員が見つけた。白山消防署のレスキュー隊が出動、河川敷と岩をロープで結び、午後四時十九分に救出を完了した。倉田さんらにけがはなかった。

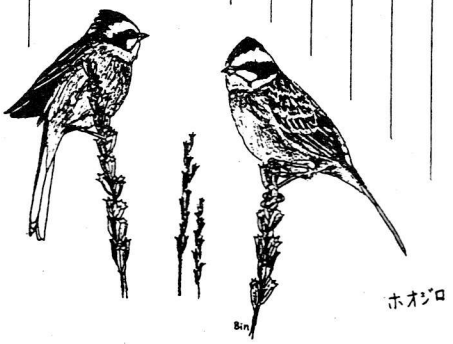
北電手取電力部（吉野谷村）が市ノ瀬地区に設置する雨量計が一時間で十五ミリを記録するなどしたため、同部が一時的な増水の危険があると判断し、自主的に白峰村役場に連絡。午後三時ごろ、村役場から通報を受けた白山消防署白峰分署がポンプ車を出動させ、パトロールしていたところ、倉田さんらが取り残されているのを見つけた。

倉田さんによると、百万貫岩を近くで写真に収めようとして河川敷から中州に渡った約五分後に、急に濁流が押し寄せ、水かさが増したという。白山消防署によると、百万貫岩の上流に数本の谷川が合流して流れ込む地点があり、局地的な大雨が降ったことを知らない行楽客らが中州に取り残されるケースがこれまでにも何度かあったという。

「白山登山」

大西菊路（18期大西の妻）

今回の登山に、お世話をしてくださいました皆様、大へん
お世話になり、本当にありがとうございました。とても
楽しく登山ができて、心から感謝しています。
南竜山荘で食べたスイカ、めちゃくちゃおいしかったです。
「白山の歌」は、主人がよく歌っていたので、自然に覚えて
いました。ですから、皆さんといっしょに歌うことができました。
白山のお花畑は、最高ですね。色とりどりのかわいい花
が、たくさん咲いていて、少しは名前を覚えましたが、頑張っ
てもっと覚えるつもりです。
二七〇二mの白山に登った私の中には、達成感と満足感
があって、充実した気持ちです。下山のときは、思わぬ雷雨
にあい、頭の上から、足先まで、びしょびしょになりながらも
子供たちも一生懸命、歩いてくれて、無事、別当出合に
着いたときは、ほっとしました。今思うとすごい体験をし
たように思います。
魅力いっぱいの白山が大好きになり、又、登りたいと
思っています。



白山

大西沙紀（18期大西の次女、中二）

「うわぁ、キレーっ。お母さん 空見てっ」
思わず声をあげてしまった。
暗い空に小さくみえる光りの粒。それは、無数に輝く
星でうまった夜空の次女だった。
「新世界だ!!」私は空から離れられなかった。今自分が
ここに立っている事が素晴らしかった。空は私の思いに
こたえてくれたのか、流れ星までプレゼントしてくれた。
感動にひたったまま、目が覚めて起きてみると
あの吸いこまれそうな空の姿はなかった。

「ついたあーっ。」
頂上。
この先に上はない。登りきった感動は以外に後から
おし寄せてくるものだった。あいにく頂上には雲が
かかっていて晴れた景色は見れなかった。
「やっほーっ」「やっほーっ」「やっほーっ」「やっほーっ」
妹と二人で叫びまくった。「この声で雲がふき飛んで
くれればなあ」と言う私の思いを乗せて。
コーヒーを飲んでると雲が切れて晴れ間がでてき
た。そこには、あの夜空とは別の、もう一つの
空の姿があった。

今回、お世話をしてくださった方々には本当に感謝し
ています。こんなにたくさんのいい思い出がつくれたの
も皆さんのおかげだと思います。
初めて感じた快感や楽しかった思い出を本当にあり
がとうございました。

山登り

大西真史（四期大会の三、小三）

わたしは、8月5日・6日に2702mの白山に登りました。さいしょは、しんどかったけど、パンを食べたら、元気になりました。どんどん登っていたら、いいけ色でした。がけもありました。こわかったです。

2時ごろ南りゅう山そうにつきました。5日は、ここのテントでとまりました。5日の夜、みんなで食べたスイカはとてもおいしかったです。そのあと星を見ました。たくさんあってきれいでした。

次の日、ちょう上をめざして登りました。と中、お花畑がありました。チングルマやクロユリがさいてました。ほかにもいろいろさいてました。ちょう上につきました。

前よりも、もっといいけ色でした。でもきりがあって少ししか見れませんでした。ちょう上に着いて思いました。「やったー。ちょう上に着いたぞ。」うれしかったです。ちょう上に着いてから、少し休んで雪けいの方へ行きました。そこで、きれいな雪けいを食べました。かき氷みたいで、おいしかったです。そのあと雨がふってきました。急いでもどりました。やね根のある所で休みました。雨は、どんどん強くなってきました。

お父さんが言いました。「これは、やみそうもない。」って言いました。カッパを着ました。そして急で下りました。なんだか、川の中を歩いてるみたいですこしたのしかった。またや根のある所で休みました。自分のズボンを見たら、びちょびちょでつめたかった。

また下りはじめました。と中、つり橋がありました。わたってるとき、下を見たら、こわかったです。1番下につきました。1番下についたら、「はあ、つかれたあ。」とわたしと姉は言いました。バスがきました。そのバスに乗って、ちゅう車場までいきました。着きました。そこで車に乗って帰りました。その次の日、足がかくかくして歩きにくかったです。

白山から下界へ戻られた皆様
その後いかがお過ごしでしょうか。
当地金沢では連日真夏日、熱帯夜となりこれほど暑い夏は記憶にありません
（ボケが始まったと表現する人もいる）
ささやかな記念品をお送りしますのでご査収下さい。

以下、記念品の説明

1．ＣＤを入れると自動で起動します。
（パソコンに入れて下さい）
2．次の画面が表示されます

２０００　花・星・人 終了

3．２０００　花・星・人をクリック（左）して下さい。始まります。

4．終了したい場合には　右クリック　して下さい。操作メニューが表示されます。
そのなかの「終了」をクリックすると
上記と同じ画面が表示されますので　終了をクリック（左）して下さい。

5．その他の操作は　右クリックで　表示されますのでそこで選択してクリック（左）
して下さい。
（画面のマウスポインタを移動させても一部の操作はできます）

6．ごゆっくりお楽しみ下さい。

****
Photograph:Okuna Masataka
Composer　:Okuna Masataka
BGM　　:キロロ「長い間」
Copyrigh　;Okuna Masataka
Director　:Okuna Masataka
Date　　:2000.08.05～06

迅速に写真を送り付け、驚愕のうちに、原稿依頼を済ませてしまうのが事務局長の得意とする所ですが、（そう、生徒に頑張りシールをあげる日は、即ち、月謝袋が挟まれている日なんです。）このプレゼントにはびっくりしました。

自分達が主役の画面が出て来る。ビデオがとっくにそうかもしれない…でも、しばし、風に吹かれて景色を眺めていたい登山には、この静止画像のベースとＢＧＭの方が、何か相応しく、記憶を重ねるだけの余裕もあって、ぴったりの気がしました。

野沢スキーの時も、加藤父さまの編集ビデオが皆さんを唸らせました。

ワンゲルＯＢってすごいですね。遊び心があって、みんなをアッと言わせて、それをまた、楽しむ。生きる達人なんだって思ってしまいます。

ＩＴ革命を恐れる方、何も恐がることはないんですよ！（但し、本人はちと留っただけ）遊ぶ道具と思いなさい！その為には…まず、行事に参加して楽しむことです。

立山・能登、同期会（第１～３期）報告

３期　西尾　皓史

今夏の、北陸地方の暑さは記録的なもので、雨の降るのを心待ちにしながらも、７、８月は雨に恵まれず、カラッカラ天気のまま９月を迎えることとなりました。

さて、我々、1～３期の同期会を、９月９～１１日の３日間、“立山・能登”と、かって現役時代に活動の拠点となった、思い出の地で開催することになっておりましたので、「７、８月は晴れた日が続いたのだから、このまま９月１０日過ぎまで、晴天を持続して欲しい！」と神にも祈る気持でおりました。しかしながら、神に我々の気持が通じなかったのでしょうか、その２．３日前になって沖縄周辺にあった大型の台風１４号がゆっくりと北上し始め、一方、秋雨前線が日本列島にピタリと張り付いたような形で停滞することになり、「これは困ったナ。」と、内心、幹事の日頃の行いの悪さを反省しながら、当日を迎えることとなりました。

９日朝の天気予報では、「富山県の今日、明日は曇り、ところによってにわか雨」ということでしたので、天候に恵まれなかったのは幹事の不徳のいたすところと、覚悟を決めて家をあとにしました。

午後１時、予定通り、ＪＲ金沢駅西口に、安藤、岩井、北、佐々木、鈴木、村田、西尾の７人が集合し、３台の車に分乗してケーブルカー：立山駅に向かいました。立山駅では、田村、高島の２人が合流し、早速、地元の名士、高島兄の案内で、立山駅近くの立山博物館“まんだら遊苑”を訪れ、地界、天界、陽の道、闇の道に我が身をおいて、五感（見、聴、香、触、空）を最大限に働かせてみる、という体験をしました。

不思議なもので、この“まんだら遊苑”で体験した後は、それまで胃が痛くなるほど心配していた天候の事は全く気にならず、「雨が降ろうが、槍が降ろうが、大した問題ではない。現役時代の仲間が久し振りに集い、健康で元気である事を確認し合うことがこの同期会の狙いなのだ。」と悟ったような気持になりました。

美女平行きのケーブルは、１６時４０分発の“最終便”に乗り、美女平からは立山高原バスで、天狗平の立山高原ホテルに向かいました。

ガスはかかっておりましたが雨は降らず、時折ガスの切れ間から見える鍬崎山や、遠くにのぞむ薬師岳、更に、眼前に聳えるて見える大日岳.奥大日岳連山に、久方ぶりに感動を覚えた次第であります。また、高原バスが天狗平駅に着いて我々が下車した時、丁度、剣岳の雄姿をガスの合間から、この目で捉える事が出来たのは大変ラッキーであったと思います。

立山高原ホテルには、一足先に第１期の仙田先輩が到着しており、我々の来るのを首を長くして待っていたとのことですが、ようやく参加予定の全員が集い、１年４ヶ月ぶりの再会を手に手をとって喜び合いました。特に、岩井兄は昨年参加できなかったので、約４０年ぶりの再会となりましたが、“岩井節”に磨きがかかり、田村兄と工業化学科で机を並べた中というだけあって、ご両人の議論の“絡まり合い”は大変興味深いものがありま

鈴木　岩井　仙田　北　田村村田　佐々木　安藤　高島

【立山高原ホテル前】

した。

夕食を終えた後は、高島兄の図らいで、“スターウオッチング”を計画しておりましたが、星は恥ずかしがって顔を出さず、代わりにスライドによる、“星の鑑賞会”を開き、高い山から見る星の美しさ、すばらしさを充分味わうことが出来ました。

その後、せっかく１年４ヶ月ぶりに顔を合わせたのだから寝るのは惜しい、とばかりに一つの部屋に皆が集まり、４０年間の時差をものともせず、年月を行ったり戻ったりしながら、留まるところを知らない議論が続き、睡魔に負けて、一人減り二人減り、ようやく全員が眠りについたのは、１０日午前１時頃ではなかったでしょうか。

立山高原ホテルの大浴場は、剣岳が一望できる位置にありますので、翌朝５時３０分頃、空の明るくなり始める時間を見計らって、剣岳の雄姿にお目にかかるべく、大浴場へ降りていきましたが、残念ながらガスがかかって、剣岳の雄姿どころか数十メートル先も見えず、本当にガッカリしてしまいました。そのうち、ＯＢ仲間も各々同じ気持でいたのでしょうか、一人二人と、朝風呂を浴びに大浴場に集まってきたが、待っても待ってもガスは晴れず、お互いに顔と顔を見合すばかりでありました。

朝食後、８時２０分、天狗平発の高原バスで室堂平まで行き、そこから、いよいよ雄山（３００３Ｍ）への登頂に挑戦することになります。

全員から、「登る」と言う快い回答を得て、８時４５分出発しました。一の越山荘に到着したのは、最も早い者で９時３０分、遅れて着いた者でも９時４５分の到着で、ここまでは、全員落伍することなく、顔を揃える事が出来ました。

天候は曇りでガスがかかっていたが、雨には殆ど降られず、風もなく、大変歩きやすい状況であったので、年老いた渡り鳥でも大丈夫だったのだろうと思います。

一の越山荘からは、ホンの一時だけ、ガスが晴れて後立山連邦が一望出来たのは、我々の山登りの苦労に対する神様のご褒美だったのかも知れません。

一の越山荘から、雄山頂上へ登ったのは、１０名中５名で、第１～３期のＯＢの“登頂分岐点”は、この辺りにある、ということになるのでしょうか。

雄山の頂上への一番のりは、教師を辞めてからは、孫のお守と畑仕事が生き甲斐という、佐々木さんでしたが、頂上まで登った者、途中で止めた者、いずれにせよ、全員が、久方ぶりに味わう立山の雰囲気、薄い空気、ガス、そして身体中から吹き出る快い汗に、充分満足する事が出来たと思います。

昼食後、午後１時４０分発の高原バスで室堂平を後にし、美女平へ向かいました。

西尾　高島　佐々木　安藤　田村

【室堂平にて】

午後３時、ケーブルカー立山駅で、一旦解散し、引き続き、“能登、オプショナルツアー”に参加する、安藤、北、鈴木、田村、西尾の５人は、今日の宿舎である、氷見に向けて出発しました。

オプショナルツアーには、新たに、登内、北野、の２名が参加することになっており、

西　安　登　鈴　北
尾　藤　内　木　野
【見附～恋路】

二人を、ＪＲ氷見駅でピックアップして、“九殿浜温泉、ひみ”に入りました。

登内、北野の御二人とも、昨年参加しておりますので、１年４ヶ月ぶりの再会でしたが、それでも大変懐かしく、ここでも、再会を心から喜び合い、途切れることなく話しに花が咲き、「また一年若返った！」という実感に浸ることができたのは、私だけだったでしょうか。

“九殿浜温泉、ひみ”は、小高い丘の上にあり、眼下に氷見湾が広がり、その向こうに、立山・剣岳の連峯がそびえたって見えるという、非常に風光明媚なところに位置していますが、当日は、残念ながら曇天のため、立山・剣岳の連峯をのぞむことが出来ませんでした。

しかし、外は晴れていなくても、氷見のキトキトなお魚は天候に関係なく、キトキトで美味しい。評判に違わず、久し振りに新鮮で、深みのある味をもった魚を十分堪能する事が出来ましたが、立山へ登った後だったから、尚更美味しかったのかもしれません。

夕食後は、体力が衰えたとは言え、舌力は益々盛んな登内兄が加わった事もあり、かっての論客である、元祖鈴木兄、北兄、と口舌泡、とばかりに、政治、宇宙、宗教、哲学、環境問題から、ＯＢ会のあり方にまで話しが及び、そこに、奇想天外な発想の出来る田村教祖が口を出すものだから、議論は大沸騰するが、結論が出ないし実りも期待できない。

横にいる、安藤さん、北野さんが、時々、キツーイ反撃をすると、それにタジタジとなる場面もあり、大爆笑の中、大変楽しくてアツ～イ一時を過ごす事が出来ました。

聞き上手の西尾は、「現役時代もこんな議論をよくしたナ。結論も実りも期待できない議論の方が、罪もないし、犠牲者も出なくてよいのかな！」と一人納得しつつ、疲れの為か、遂、うとうととしながら、聞いている振りをして眠りについた次第です。

翌日、１１日は、朝起きて見ると残念ながら、雨模様の天気で、部屋から眺める、氷見湾も霞んで見える。勿論、立山・剣岳の連峯は見えないので、「見えぬあたりが、立山・剣、、、、。」と替え歌を口ずさんでみるが、空しい感じがする。

鈴木兄が、「悪いナ、やはり俺が東京から雨を運んできたんだヨ、幹事のせいではない。」と、しきりに気を使ってくれるので有り難い。

７時３０分に朝食をとって、８時出発する事となったが、田村兄が突然、「能登を回らずに、会津若松へ帰らなければならなくなった。」と言う。

従って、６名が、２台の車に分乗して出発しました。

雨は止まないし、時々、気が狂ったかと思われるほど、土砂降りになる。でも、登内兄は、「カラリと晴れた能登の海より、雨に霞んだ海の方が、よほど情緒があってすばらしい。」と、これまた幹事を慰めてくれるので本当に嬉しい。

氷見を出発し、七尾から能登島大橋を渡って能登島の西側を走り、ツインブリッジを渡って中島町へと車を進めていったが、雨はなかなか止んではくれません。

中島町～穴水町を通って輪島市へ行き、輪島の朝市を訪れたが雨が強く、車の中から眺

めて、匂いをかぐに留めましたが、晴れていればいろいろと買い物が出来たのに！と残念。

それから、白米の千枚田、曽々木海岸を訪れ、昭和３４年５月にワンダリングし、テントを張って野営した海岸を眺め、過ぎ去りし年月の如何に大きいかを考えて、つい胸が熱くなるのを覚えたのであります。

狼煙の灯台は、雨のため、次回にまわすことにしてここをパスし、九十九湾へと車を走らせましたが、能登の道路は、４０年余り前にワンダリングした時に比べると、想像も出来ないほど立派に整備され、雨の中のドライブとはいえ、それなりに、思い出深い快適なものになったと思います。

見附島（軍艦島）の見えるレストランで昼食をとり、その後、助三郎と鍋乃の悲恋物語を偲ぶ、恋路海岸へ立ち寄ったあと、穴水から“能登有料道路”を経由して、金沢への帰途につきました。

来年は、“冬のスキー合宿”の舞台となった、山の防・平岩周辺で開催することにし、全員が元気な姿で再会することを誓い合って、解散した次第であります。

（参加者名簿）

・第１期：仙田厚太郎、

・第３期：安藤道子（旧姓、柿谷）、岩井　修、北野倫子（旧姓、加藤）、北　正昭、佐々木美穂子（旧姓、宇野）、鈴木兵一、高島　誠、田村昭夫、登内郁夫、西尾皓史、

・第７期：「特別参加」村田泰恵（旧姓、木下）

なつかしい古い顔、みんな元気だよ！

昭和４３年卒（9期）　鍋島 武

ＩＴ時代は怖いですね。東京で、ＫＵＷＶの顔合わせ会をひっそりとやっていることが、インターネット経由で、ＫＵＷＶ・ＯＢ会のお母さまにキャッチされることになりました。それで、何か一筆をとの依頼を受けてしまった次第。ということで斜め読み用の駄文をメモしました。

１．なが～い付合いのワンダラー

昭和 43 年春、ＫＵＷＶを卒業。転勤での出入りはあるものの、常時 6, 7 人が東京周辺に在住。東京に来た頃は、一年先輩のキリンビール社勤務の藤井信晴さんにキリンビアホールでよくご馳走になった。それ以来３３年間、毎年一回くらいは 43 年卒を中心に、顔合わせ会をやっている。酒のつまみに、高度で難解な話は不要ということで気楽な会話に終始。（小屋酒場で飲みながら、大論文をものにする御仁は偉いと思う。何時だったかの数式は私にとって難解だった。理解不能だった。）

会社では、悔しいこと、泣きたいことはたくさんあろうが、この顔合わせ会では、愚痴話は出ない。みんなの元気な顔をみて、また明日からしっかりやらなくちゃと、自分で自分を励ましながら帰宅する。

それでも、一年くらいたつと、つい会いたくなってしまう。誰かが呼びかけの案内書を出す。そして集まる。という事の繰り返しの KUWV 卒後 33 年の付合いだ。

２．古い顔を一言で紹介！

そんな彼らも会社ではそれぞれ自分としての最大限の役割を果たし、家庭での子育てもほぼ終盤戦。KUWV・OB に、もうひとつ○○会社の OB ということで、二つの OB 称号を持つ年代となった。これからの３３年間（ＫＵＷＶ卒業以後の年月と同じ年限を今後生きるつもり）、何の現役として、どう生きるかを自問している年代だ。この顔合わせ会の常連達の顔を独断と偏見で表現してみましょう。（敬称略、おべっか略、順不同）

◇**伊藤博道**　農林中金の金融マン。学生時代と全く変わらぬ紳士。頭は真っ白。頭の悪いKUWVの友人の面倒を長年みたせいかも？（私、感謝しています。）

◇**伊藤俊成**　昔流で言えば、電電公社マン。体型は学生の頃と同じ。髪は白が目立つ。日本ITを世界一にするための鍵をにぎる通信事業を頼みまっせ。

◇**吉田洋二郎、森本千秋**　土木・橋梁の専門家。この二人は、「あの橋は俺の設計、このトンネルは俺の設計…」と、自分の仕事が眼に見えるうらやましい方達だ。頭を使っているせいか、おでこは少し広くなったかな。

◇**清水一**　化学の仕事で、60歳までの生活基盤は確保済み。そして、次の人生の準備を怠りなく挑戦中。高齢化社会では尊敬に値する人物。頑張れ！

◇**保田敦**　現在、東京に単身赴任中のエンジニア。華麗なスキーは昔のまんま。みんなの「保田、早く北アに別荘造れ！」の声に奮起するかも。乞うご期待。

◇**山中重夫**　松下マン。数年前に東京に転勤。元のまんまの１００％関西人。全く変わらぬ好人物の一人。（でも幸之助さんとは別タイプよ）

◇**青柳健二**　最近よく顔を出してくれるよき銀行マン。先輩達のことが少し心配なのかも。金融業界の荒波を乗りきって頂戴。

◇**四十万利之**　三菱重工マン。世界の環境を守るため、改善のためのお仕事とか。後輩の顔合わせ会にいつも参加して、後輩の成長を喜んでくれるお兄さん。あの面構えには変化なし。

◇**鍋島武**　損保マン。情報システム、保険営業、保険業務、ニューヨーク・ヨーロッパ駐在と担当業務はよく変わるが、真剣度合いが足りぬ。その証拠に、体型、髪に変化なし。

◇**藤井信晴**　顔合わせ会のきっかけのためにビールをご馳走してくれた篤志家。転勤等で25年位、お会いできず。2年前に名古屋から、“20数年振りに上高地に行った”とのお便りあり。(お会いしたい。今度はビール代払います。)

◇この他にも、**吉田圭子さん、北川邦夫さん、上村人史さん、山口裕さん、森川功さん、島崎隆信さん**達が元気な顔を見せてくれたことがあります。（私にはボケの初期症状あり。忘れたお方もありそう。ご容赦を！）

３．白山神社の近所で仕事！

人間の縁・運とは不思議ですね。今年7月から私の新職場(会社)は、霊峰白山信仰の白山神社（西暦948年、加賀の国一の宮白山神社を祭ったことに始まる。）のご近所だ。かつ加賀百万石の上屋敷跡（東大本郷）の近所でもある。夕方には、ビルの谷間から富士山が見えたりもする。KUWV卒業生にはぴったりの地だ！ KUWV一年生、三年生、四年生の三度にわたり、オープン山行のボッカ隊に志願し、霊峰白山に金大の学生さんをたくさんお世話したのを、神はみていたのだ。神からの贈り物かも。

この会社は中堅損保三社で作った損保システムの共同ソフト開発会社。ケチ精神でコスト削減を目標に創設した割勘会社だ。従業員、役員もほとんど出向。私は三社持ち回りの当番社長。2年後にはバトンタッチで、失業確定済。

2年後にどなたか雇っていただけませんか。賞罰なし。特技なし。セールスポイントは、今年11月26日(日)、“新宿・青梅間４３kmかち歩き大会”に完歩をめざす健康指向くらいかな。これでは高齢化社会ではただのゴミかな。

４．　ＫＵＷＶ顔合わせ会は永久に不滅だ！

人のつながりとは不思議なものだ。何の接着剤もないのに何十年もくっついている。くっつくための特別の努力をしているわけでもない。なのに一年に一回くらいは顔をお互いに見たくなる。そんな気持ちにさせてしまうＫＵＷＶ集団だ。今後もそうなんだろうな。

名古屋の吉田幸造さんから、「12月８日、東京に出張する。顔合わせ会ひらいてよ」の要請あり。もちろんみんな集まるよ。また、水戸の柴田勝之さんからも次回出席の声が届いている。

長嶋さんは、「巨人軍は永久に不滅だ」と言った。私たちは“ＫＵＷＶ顔合わせ会は永久に不滅だ”と思う。
(不滅の巨人がどうして日本シリーズ第一戦、第二戦落とすの。長嶋さん、松井さん！心配させないで！)

以上

(2000.10.31記)

１３期 同期会報告

13期　柴田　茂樹

初めてお便りします。ワンゲルのホームページいつも楽しく拝見しています。奥名氏のご尽力には常々感謝致しております。しかし『ＯＢ通信』の１３期欄がずーと空白のままで寂しい想いをしていまして、そこで今回初めてお便りします。

我々１３期では、ここ７～８年毎年晩秋に旅行をしています。足腰の弱った我々ではとてもワンデリングは叶わず、もっぱら温泉が主流となっております。

今年は総勢９名が参加、吉田穂積君の幹事で軽井沢に集合、草津温泉に泊まり、白根山を経由して志賀高原で遊び小布施で解散しました。我々１３期には酒豪というほどの者はなしで、わずかのお酒でバカを言っては一年一度の楽しい時間を共有している次第です。

参加者は、伊藤純治、岩田実、大島良治、島崎隆信、橋正徹、吉田穂積、吉本良治、柴田茂樹・訓子。記念写真を添付します。１０期～１６期の皆さんには見覚えの有る顔もあるかと思います。

ではまた皆様からの『お便り』を楽しみに、・・・。

キンクロハジロ

同期会報告？

もと36期　奥出　聡美

こんにちは。もと 36 期の旧姓・新道です。途中で退部してしまった（だから「もと」36 期）私に、何がどうなったのか、舟田さんから原稿依頼を頂きました。舟田さんによると「同期会が開かれていれば、同期会報告を。今はちょうど、披露宴や披露宴の二次会が同期会代りになっているのではと思い、お願いすることにしました。」とのことでした。6 月にあった、私と 33 期の奥出さんとの結婚二次会のお話を…、ということのようです。

舟田さんの言葉どおり、特に同期会がなくても、36 期近辺では今まさに結婚ラッシュで、約 2 ヶ月毎、どうかすると 1 ヶ月毎にワンゲル 36 期近辺大集合の機会がやってきます。ここ半年あまりを振り返ってみても、6 月に信州で私と奥出さんの二次会があり、7 月に名古屋で 36 期・清水勇一くんの結婚披露パーティーがあり、8 月に琵琶湖で 36 期・石川明弘くん結婚おめでとうバーベキュー大会がありました。すごいですね。こう立て続けだと、なんか焦って結婚して行くようだ…（実際、清水くんは披露宴の会場で「ワンゲルの同期が結婚を決めていく中で焦ってしまいました」とか言ってました。すごい理由だ。）。加えて、立川くんも朝日くんもパパさんになり、36 期はおめでたいニュースだらけです。

舟田さんいわく、結婚ラッシュも終わって、皆で会う機会がなくなった時、同期会をやりはじめた、とのことでした。でも、多分 36 期に同期会は必要ないのでは、と思われます。結婚シーズンが終わっても、36 期には一年に 2 度、追悼山行と蒲原君のお墓参りという、一堂に会する機会があるからです。それを仮に「同期会」とすると、幹事は蒲原君と蒲原君の御両親ということになるのかな。この場を借りてありがとう。

追悼山行については、蒲原君の御両親を始め、いろいろな方の記事が「やまざと」にすでに載っていることと思います。そこで、今回はお墓参りについて、しかも、蒲原君を偲ぶおはなしではなくて（蒲原くんごめん）もっぱら「蒲原家における宴会の定番」についてお話したいと思います。

私自身は、「毎年恒例の蒲原君のお墓参り」には、3 年前から参加しました。参加するのは今年で 4 回目です。でも、36 期で行くお墓参り、は、多分、追悼山行が始まった年から平行して毎年あったのではないでしょうか。そうすると、もう 8 回目くらいになるのかな？このお墓参りは毎年、追悼山行が終わった後、10 月か 11 月頃あります。石川くん、新倉くんなど、誰かがみんなの都合を取りまとめて、日取りを決め、蒲原さん宅に一泊の予定で、みんなで押しかけます。他の人は知らないけれど、私は結構このお墓参りを楽しみにしています。「お墓参りが楽しみ」なんて変ですけれど、蒲原君のお墓は交通の便の悪いところ

蒲　樫　　奥　新　竹
原　村　　出　倉　林
柴
田　石　　金　沢
　川　　井　田

【お墓参り】

にあって、車を運転できない私はなかなか一人ではお墓参りに行けないのです（一度電車で行って、本当に大変でした）。だからこの機会を逃すと、今度いつお墓参りにこれるかわからない、という理由から「これはいかねば」と思ってしまいます。あとは、やっぱり、なんだか楽しいからかな。

お墓参り当日は、お昼ごろ大垣駅に集合して、車に分乗して蒲原君のお墓に向かいます。お参りをして、蒲原くんに久しぶりの挨拶をして、それから近くの芝生がきれいな公園に行って、敷き物に座って、蒲原お母さんお手製のお弁当を食べます。そして、最近の傾向では、なぜかスポーツに興じます。一年一年、体力がなくなって動かなくなる人（石川くん、君のことだよ）、なぜか激しくスポーツしてる人、寝ちゃう人、などなどなど。

夕方近くになってから蒲原家へ。夜はお母さんのおいしい手料理（名古屋のごちそうという感じ）を頂いて、飲んで騒いでいろんな話をします。わいわいと夜もふけてくると、お父さんにスイッチが入って歌い出します。それから近くの銭湯に行って、だれそれは腹が出てきたなんて言いながら、蒲原家に布団をぎゅうぎゅう敷き詰めて、みんなマグロのように横たわって寝る…、というのが蒲原家ワンゲル宴会の定番です。なんだか学生みたいで、いいでしょう。

清水くんの結婚式のように、名古屋でみんなが集まる時や、機会なんてなくても「遊びにおいでよ」と蒲原さんから声がかかれば、こんないつもの楽しい蒲原家の宴会が待っています。蒲原お父さんお母さんに感謝感謝感謝です。もちろん蒲原くんにも。

ちょっと関係ないですが、蒲原お父さんお母さんといえば、この結婚ラッシュシーズン、当人たちの次に忙しいのは、まさに蒲原夫妻ではないでしょうか。二次回出席率ナンバーワンだし（推定）。なにゆえ忙しいかといえば、36期近辺のワンゲラーが結婚した時、蒲原さんが必ずくれるプレゼントがあるのです。蒲原家に遊びに行った人なら誰でも知っていると思いますが、蒲原新太郎さんは歌がうまい！ギターもうまい！のです。そして、結婚した私たちのために、一曲選んで、門出のお祝として歌ってくださるのです。そして曲の間奏中に、お父さんのギターの調べに乗せて、お母さんが「はなむけの言葉」を朗読してくださるという…、よいでしょう、よいでしょう。日頃、辛口なお言葉を頂いているだけに（？）本当にじーんとしてしまいます。私と奥出さんの時は、蒲原家の居間で、吉田卓郎の「花嫁」を歌っていただきました。じーんとしていると、「なんで泣かないの。（34期の）金田くんの奥さんは涙ぐんどったよ。」とお叱りを受けたけど。清水くんの時は、藤井フミヤの「True love」を、石川くんの時はサザンの「ＴＵＮＡＭＩ」を歌ってくださり、その時はなぜか（？）我々も一緒に歌いました。

蒲原さん、蒲原君、我々の永年同期会幹事として、今後ともよろしくお願いいたします。では、11月にお墓参り、楽しみにしています。

（舟田さんへ：我々の二次会とは全然関係ないことを書いてしまいました。すみません）

沢　清
樫田　水金
立村　　井　柴
蒲川　　石田
新原　　川
道　　遠
　　藤

【蒲原家の宴会】

藤　福　田　金　新　立　伊　　柴
牧　田石中沢井遠倉新川　藤み奥田　山
　川　田　藤　太　　ち出　　本
　　郎　　子
　　さ　　さ
　　ん　　ん

　　道　寺　　福　清　金
草　明　島　佐田　水　吉
飼　　今　佐川　　山
　　井　藤　　本

若　望井　新　金　樫　福
山　月村　倉　井　村　田
　石　伊　奥　　新　　沢
　川　藤　出　　道　　田

【二次会の写真】

ロシア沿海州シホテアリン山脈
オブラチナヤ山（１８５４ｍ）
登頂記

７期　村田　泰恵

2000年(平成12年)10月24日(火曜日)　北陸中日新聞

北経随想

沿海州登山行

力丸　茂穂

黒沢明監督による日ソ共同製作映画「デルス・ウザーラ」を二回観賞した。百年前のシベリア極東地区は、ヨーロッパの人びとにとってはさいはての辺境であり、軍人で探検家のアルセーニエフが活動した舞台だ。映画では探検隊の隊長「カピタン」である。その隊長とデルスの探検、人間愛を描いた映画に感銘し、自分自身の肌で、シベリア極東の世界に触れてみたいとの欲求が年々高まってきた。

そんな折、仕事でロシアに行った時、現地の青年と知り合った。ロシア沿海州の観光事業で生活したいという青年と出会わなければ、今回の登山成功はおぼつかなかった。

日本人登山隊一行は建設会社社長の東野智也氏、NTTドコモ社員の前川陽氏、トム工芸経営の村上哲氏、金沢大学文部教官の村田泰恵さん、それに私の五人。みんな五十歳以上だが、山、自然が大好きな人間。

ウラジオストクの空港に降り立ったのは八月の暑い日だった。

そこから、東北東へ約五百三十キロ。青年が手配してくれたロシア大陸軍の6WDトラックは、ロシア人ガイドらを含め一行九人を乗せ、力強く発進した。

農村地帯を抜けウスリー河を渡ってオーブラチナヤ山（「雲の山」の意味。標高一八五四メートル）の山ろくに着くまで九時間かかった。この夜はこのベースキャンプに泊。森閑としたやみの中で眠る。

翌朝は七時にキャンプを出発し、午後一時に頂上到達。出発からベースキャンプに戻るまで十四時間半を要した。このアムール地方には現在約四百五十頭のアムールトラがいるといわれる。世界で一番美しい模様のトラだ。そのほかヒグマ、ツキノワグマが生息する。

登山途中、クマが土を掘り返してえさを取った跡がいくつもみられた。人頭ほどもある動物のふん…。体長二メートル、体重二百キロというアムールトラの足跡は深さ五センチくらいもめり込んでいた。

けものののにおいにおびえつつ、ガイドのスコープ付き連発銃に守られながらの五泊六日の登山行だったが、原生の山を振り返り、こう、別れを告げた。「オーブラチナヤ山よ、ウスリーの流れよ、いつまでも変わらずにいてほしい。さようなら。ダスヴィダーニヤ」―。

日本人初の同登山成功を祝って、一週間後にふるさとの白山頂上で「反省会」と称し、祝杯をあげた。

今、あこがれのデルス・ウザーラの世界の一端を体験できた喜びに浸り、お世話になったロシアの人びとの温かさをしみじみ思い返している。

ロシア登山のルートができたので、来年は三四〇〇メートルクラスのイルクーツクの山に挑戦したいと考えている。

（石川県立中央病院副院長、日本山岳会員）

オーブラチナヤ山の登山隊一行＝力丸茂穂氏提供

力丸　茂穂氏（りきまる・しげほ）

一九六七（昭和四十二）年、金沢大学大学院医学研究科博士課程修了。七五年金沢医科大学助教授、七九年に石川県立中央病院放射線科部長を経て、副院長に。日本山岳会員、アラスカ山岳会員、県自然保護協会員、白山診療班員。五六年以来、白山登山百六十三回を含め、五百回以上の登山経験。七一年、アラスカ北極圏のブルックス山脈で三カ月の登山。金沢市城南在住。六十五歳。

新芽が吹出す４月末、Ｒ氏よりロシア沿海州の山に登らないかと声がかかる。

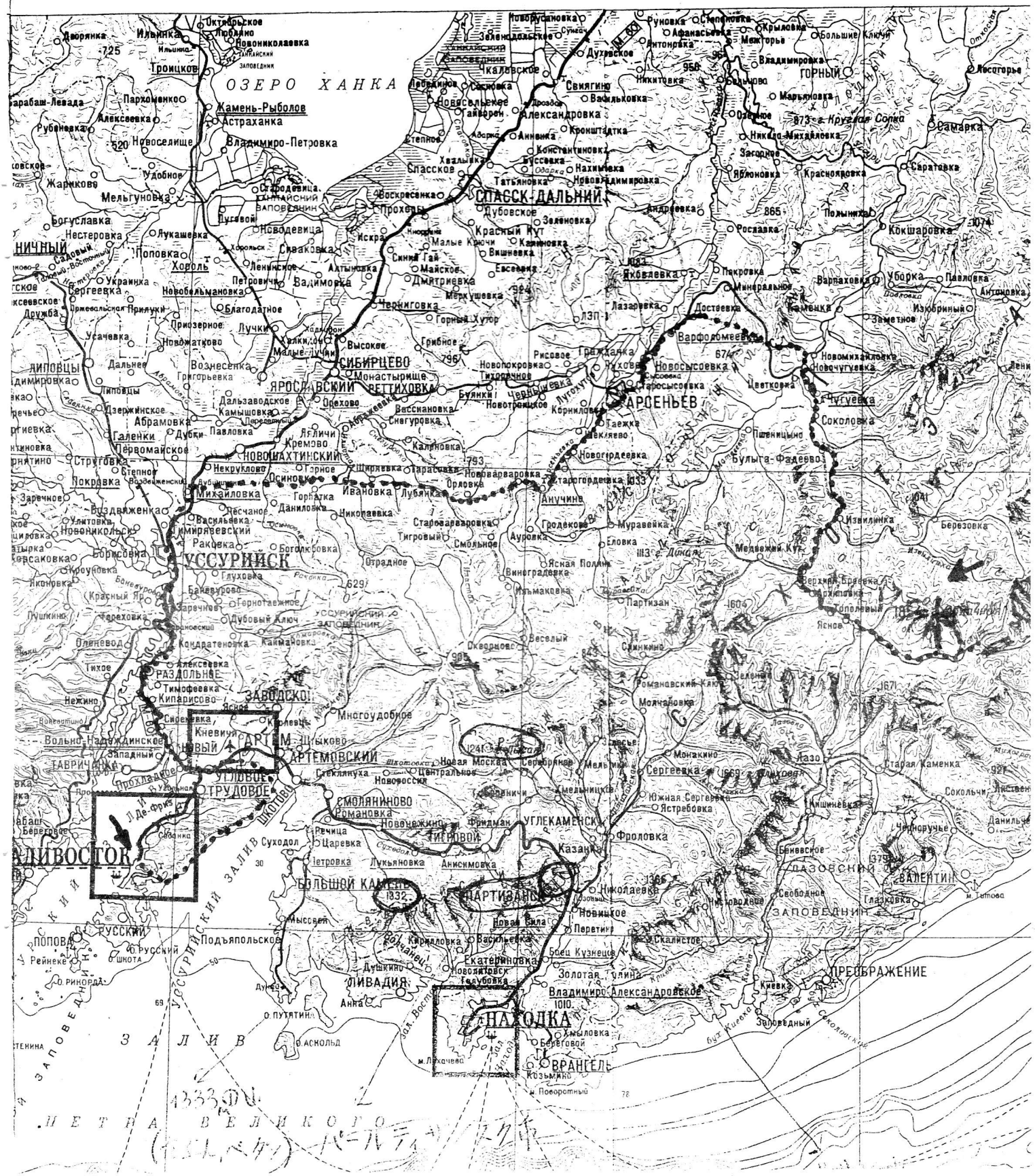
２０年間山登りと無縁で過ごし、３年程前より再び山に登り始めたものの、新参者はなかなか仲間に入れて貰えず、かと言って、今更、○○山同好会なんぞに入ることも出来ず、一人寂しく安全登山をしていた者が、飛び付くのに数秒も必要としなかった。

総勢５名、男３名、女２名。女１名では不都合ということで、私にお声が掛かったらしい。でもそんなことは問題ではない。１人では決して行くことが出来ない山に登れる。それで十分だ。

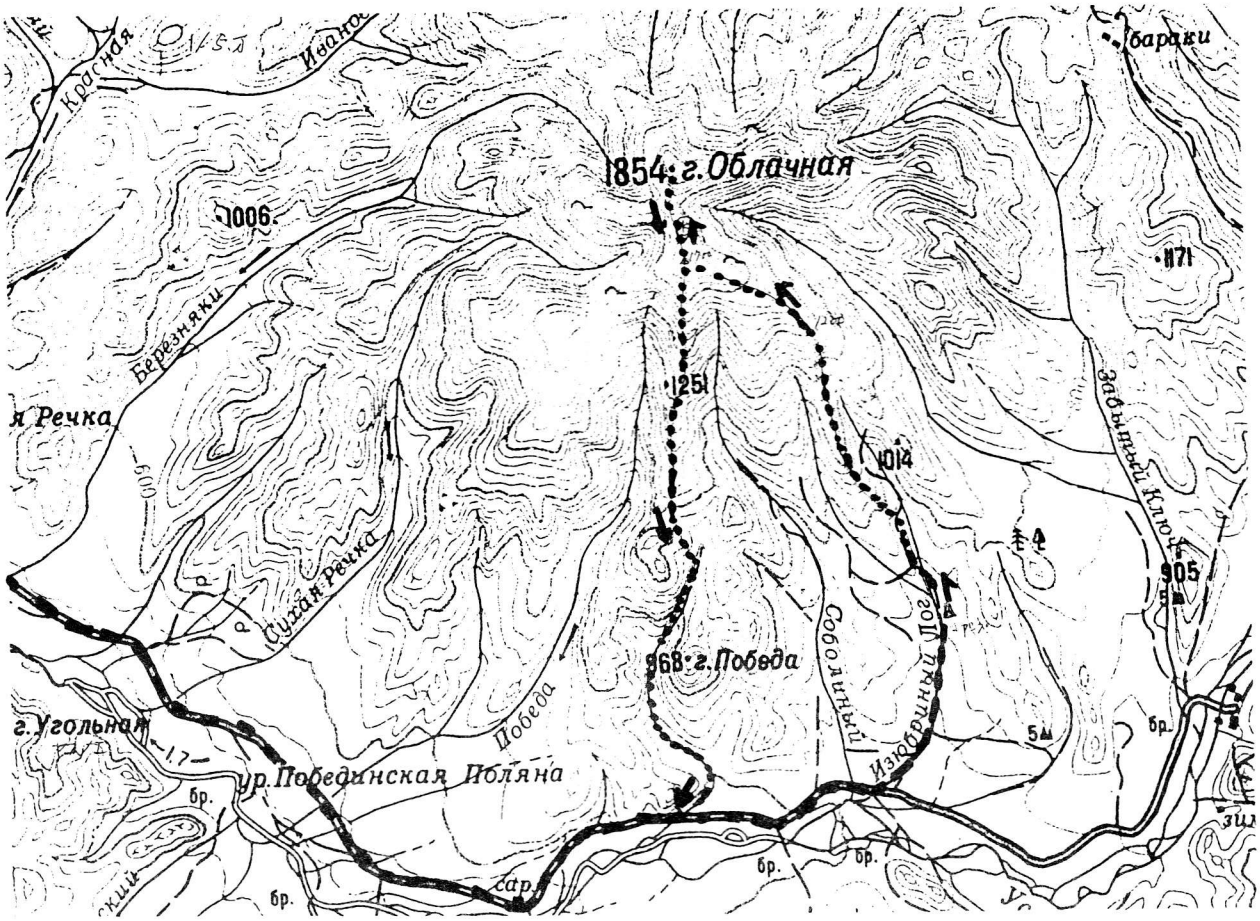
目標にオブラチナヤ山が選ばれた理由はシホテアリン山脈で最も高い山、しかも、この山に登った日本人はまだいないだろうということであったらしい。標高１８５４ｍ。

詳しい地図が手に入らない。ここからが私の出番だ。理学部地球学科に行けばあるのではと、聞きに行くと、何と、毎年、その近く（１００Km程手前）へ研究のため調査に行っている研究室があったではないか。

1/100万



そのボスは、最も詳しい地図で、アメリカ製の２０万分の１の沿海州全体の地図を持っていた。コピーのため、借用を申し出たが断られ、その代わり、オブラチナヤ山近辺のコピーのみ貰うことが出来た。ウラジオストクからオブラチナヤ山までのコピーが欲しかったが、とてもそれ以上頼める雰囲気ではなかった。最初は同じ研究の競争相手ではと疑われたが、純粋な登山であることは一応納得して貰えた？ようではあった。



そのボスの話によれば、彼等がその地に行く時は、軍用トラック並の車で、ピストル持参の護衛を連れて行くとのこと。我々が行きたいと思っているところは、戦車でもないと行けないとのこと。又、その辺りは、山賊（強盗）、トラ、熊、マムシ、蚊、ダニが出、特にやっかいなのが、ツツガムシ病のリケッチャーを持ったダニだとのこと。人間の身体に食い込んで、取るのが大変とのこと。暗に、君たちでは無理でしょうと言っているようであった。

この話を聞いて、女１名が、怖気付き、降りてしまった。替わりに男１名が補充された。

この研究室が、その地方を研究対象としているのなら、ひょっとして、学生が関連のホームページでも作成しているのではと、インターネットを開いて、探して見ると、案の定、学生が作成したホームページを見つけることが出来た。そこには、トラの足跡やマムシ、川を渡るトラックなどの写真が写し出されていた。

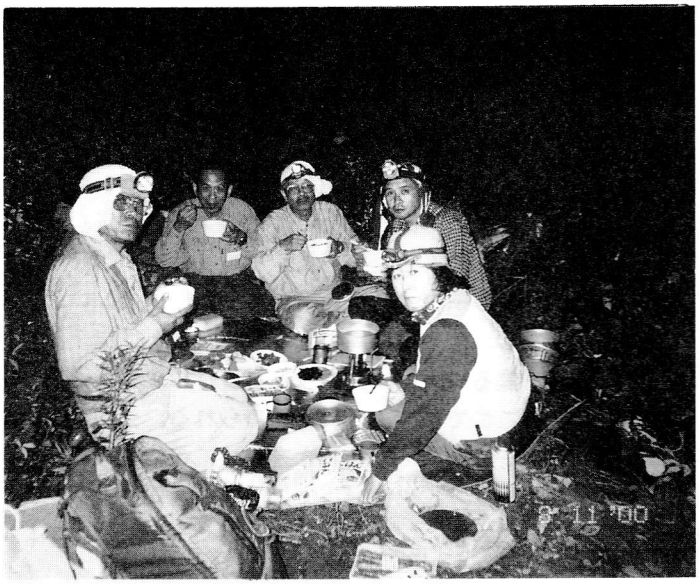
それらの資料を基に、Ｒ氏がウラジオストクの既知の通訳と十数回にわたる電話やファックスのやり取りを行ない、計画は着々と進行して行った。Ｒ氏とＭ氏によって全ての細かい段取りがなされ、Ｒ氏よりの計画書が出されること数回、打ち合わせ４回。私の仕事は唯、当日、皆のお荷物にならないような体力をつけておくことだけだった。

オブラチナヤ山登山の１週間前のワンゲルミレニアム白山登山は、格好のトレーニングの場になることは間違いない。しかし、今年はまだ山らしい山には一度も登っていなかったため、その白山登山でさえ、覚束ない状況であった。

よって、その１週間前、トレーニングに選んだのは、ロープウエイで簡単に登れ、１人でも安全な西穂高岳であった。７月２９日、西穂山荘より、ガスの中、独標まで往復し、３０日は上高地へ下り、無事トレーニング終了。お陰で、８月５、６日の白山登山も後輩に迷惑を掛けることなく、楽にこなすことが出来た。

８月１０日、金沢を出発。蚊、ダニ、獣、強盗対策も怠りなく、新潟より飛行機で１時間半でウラジオストクに到着。ロシアもあまり涼しくはなく、ウラジオは湿度が高く、日本の梅雨時のようであった。霧の町と言われるのも頷ける。

１１日、我々日本人５人（男４名、女１名、平均年齢５７才）は、ロシア人の通訳、その助手、山のガイドと、チャーターしたライフル銃所持の運転手付六輪駆動の軍用トラック（タイヤの直径１ｍ以上、搭載ガソリン１２００ℓ、水深１ｍの水の中も平気で渡れる）でウラジオを後にした。走ること５５０km、橋の落ちた川



【登頂前夜】

を渡ること２０回以上。オブラチナヤ山の麓に着いた時は夜９時。それから、食事の用意をし、眠りに就いたのは１２時過ぎだった。

翌１２日、朝７時テント場に、護衛の運転手を残し、９人で出発。ロシア人は、殆ど空身、水と食料のみ。日本人は着替えから雨具、カメラ、食料、ツエルトと、かなりの荷物を背負っていた。

上り１２km、道無き道を、殆ど休みなし。しかも、私の前にすぐ人がいなくなり、進むべき方角をいつも探さねばならず、倒木を越えるもハイマツ漕ぎをするにも足の長さが足りず、体力の消耗は甚だしく、男との体力の差を痛い程感じる。私の背の荷物が少しずつ軽くなる。そうしなければ、男性について行けない。

かって、大昔、自然の中で暮らしていた時代は、男女の役割分担がはっきりしていた意味を、今回、初めて実感する。しかし、現代社会では、男のみの出番が失われてしまったことも、はっきりと見える。山登りをしている男性は、安心して。奥さんや子供を連れて、山登りをすれば、お父さんの家庭での地位が上昇すること間違いなしだ。

標高１２００mでようやく森林限界に到達、周囲の山並を見渡せることが出来た。山並はどこまでもなだらかで優しく優美だ。

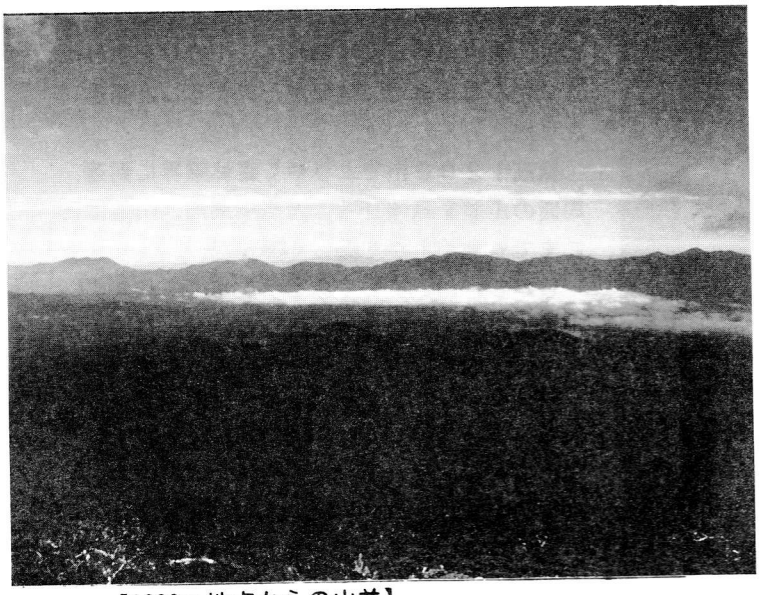
しかし、ここでも５分と休ませてもらえず、山頂を目指す。標高１６００m、我々が熊平と名付けた場所には、辺り一面、月の輪熊（ロシアではヒグマより大きいそうだ。体長２m位）の足跡だらけだった。ここにだけ水場があり、体力の限界に達していた私はここで、皆の戻るのを待ちたかったが、熊の出現が危ぶまれ、更に皆と前進せざるを得なかった。

ここからは空身での頂上往復で、疲労困憊していた男性も元気回復し、吾先にと、ガレ場を１８５４mの頂上目指して歩き始めた。

１４時、ガイドと２人になった私は途中でもう歩けなくなり、座り込んでしまう。英語もあまり話せないガイドが一生懸命"five minutes"と言ってくれるのだが、私にはそのまま信じられず、fifty minutes の間違いかも知れないと思い、見えない頂上に向かい「ヤッホー、ヤッホー」と数回呼んでみるも、帰って来る声はなし。これで、やはり、頂上まで５分では行けないと判断。２、３０分歩く気力はもう残っておらず、ガイドに、「ここに残る」と宣言。ガイドもとうとう諦めて、私に、決してここから動かないようにと言って頂上に向かった。

待つこと４０分で皆が、上から下りて来た。その時は、まだ、下りがあるのだから、無理をしなかったのは正解だったと、自分に言い聞かせていた。しかし、後から、私がギブアップした場所から頂上まで標高差５０m、距離にして２００mと聞いた時には、正直、頂上に行かなかったことが残念だった。この日、歩いた距離

【朝７時　ダニ、朝露対策も万全、いざ出発】



【1200m地点からの山並】

は３０km、その内のたった２００m。あの時、上から、［残り、２００mだ」と、声を掛け、励ましてくれる仲間がいれば、きっと登れだろうと思うと、…。初めて一緒に登った仲間にそれを求めるのは　酷だと分かってはいる。彼等も疲れ、他の人を省みる余裕が残っていなかったのだからと。しかし、…。

１５時、下り開始。上りのコースとは別で、尾根二つ離れてる。所々、切れてはいるものの、一応道が付いておりほっとする。車が林道奥まで入れる時は、この道が登山道となるのだ。喜べたのは１９時、林道到着まで。ここから、更に１２km、死の強行軍が待ち受けていた。これらの林道は恐らく、３～４０年前、伐採した木材を運び出す為に作られ、現在は殆ど用がないものと思われた。周囲の山々の木がいづれも若く、大木は見当たらず、ウスリュウー川の本流に、人が渡るために使われていた材木のみは数百年は経ていると思われる大木であった。林道の奥には材木の集積場があるが、２週間程前の台風による、大洪水で、殆どの橋は落ちており、車が入った跡は見当たらなかった。

獣に襲われる危険があるので、明るい内に、森を出なければならない。日没は夜９時、残り時間は２時間、途中、アムール虎の足跡（１週間前のもの）や熊の糞（昨日のもの、米１０kg位の量）が数カ所あり、「暗くなったのでマムシに気を付けて」と言われたが、そんなことを考える余裕もなく、皆、唯、黙々と必死で歩いた。

時速６km、向こうにたき火の明かりが見えた時は本当に嬉しかった。そこが、林道の終点。ようやく、広い車道に出たのだ。そこでは、現地の人がキャンプをしていたが、女、子供もいたので、襲われる心配はないと思い、安心出来た。

しかし、そこから、キャンプサイトまでは、さらに６kmある。皆、限界に来ている。ガイドが通訳の助手を連れて、キャンプサイトまで行き、トラックで迎えに来ることになり、二人は出発して行った。

待つこと、２時間、３時間、トラックの音はしない。聞こえたのはライフル銃の音、一発のみ。満天の星空、満月が段々と高くなり、流れ星が一つ、二つ。何かあったに違いない。しかし、暗やみの森に入って行くことは出来ない。焦る一人は、進もうと言う。しかし、通訳に、ここで待つようにと止められる。先が長くなりそうなので、枯れ木を集め、道端で火を炊く。やはり、火はいい。人を落ち着かせてくれる。

真夜中、０時半過ぎ、遠くで、微かにエンジン音が聞える。ウスリュー川の本流を渡って、この車道に入っている車は、我々の車以外はほとんどいないはずだ。間違いない。皆の期待に応えるように、トラックの轟音が近づいて来る。トラックが止まり、運転手が下りて来る。お互い、駈けより、感謝の気持ちと無事を喜び、手を取合う。トラックに備え付けられたコンテナの中のマットレスに、皆、倒れ込む。今まで寝転んでいた砂利道に比べ、このマットレスの何とソフトで寝心地のいいことか。

迎えが遅れた理由はやはり事故だった。疲れ切ったガイドが途中転倒して、怪我をし、まともに歩けなくなり、遅くなったとのこと。でも、大した怪我にはならなかったと知り、皆ほっとする。キャンプサイトは撤収して来ており、20分程、走った道の脇の空き地で車を止め、キャンプをする。私は立ち上がる元気もなく、ビールに一口、口をつけただけで、何も食べず、横になったまま。流石に男性陣は元気。日本人初登頂のお祝いと、車の外で花火をしている。花

【1500m辺り。バックが頂上】

【初めて持ったライフル銃。ガイドと】

火のお返しに、ライフル銃が５発、ドーンと、すごい音だ。これでは、命中すれば、虎も熊もひとたまりもないだろう。午前１時半、アッという間に、深い眠りの中。

翌１３日、目覚めはスッキリ。テントの横に虎とシカの足跡、２週間前のものとか。シカはここで虎の餌食となったのだろう。大体、尻尾まで入れると体長は４ｍはあるとのこと。最近はかなり数が増えているとのことだ。

ここで、お腹をダニに食い付かれた人が一人。ガイドがダニに油を塗り、私が持参した木綿糸で、ダニの身体を縛り、ゆっくりと引っ張る。ここで大事なのは、食い込んだダニの頭を千切って残さないことだ。数回、糸が外れた後に、するりとダニの身体が人間の肉塊より、抜けて来た。後は、仲間の医者が持参した抗生物質を処方して、一件落着。マダニは家ダニと違い、ツツガムシ病の病原菌を媒介しているため、厄介なのだ。この後、ウラジオのホテルに戻ってから、更に、２名の犠牲者が出る。衣服やザックに付いていたのを、部屋に持ち込んだ結果らしい。

夕方、７時、無事ウラジオストクのホテルに戻る。

翌１４日は通訳の案内で、市内を回ったが、車の数が多く、殆ど観光らしい観光は出来なかった。６５万人の人口に２０万台の車、その９割以上が日本車、それも中古どころか、廃車になった車が多い。車体に描かれた文字はそのまま、洗車などしたこともなく、サイドミラーが取れようが、フロントガラスにヒビが入ろうが、凹もうがお構い無し。信号は少なく、１００km で車が走っていようとも、人はゆっくりと横断する。車に跳ねられないこつをここで会得。日本人は車に跳ねられまいと、走るからいけないのだ。人が車の速度に合わせようとするのではなく、車を人の速度に合わせさせることだ。しかし、ロシアのように道が広くないと無理かも知れない。

町の中を歩いている若い女性のファッションは素晴らしい。カラフルでデザインも様々、田舎に行ってもそうだ。ノーブラ、へそ出し、透け透け。男性でなくても、目が点になる。それに比べ、男性のファッションはまるで垢抜けない。背広姿は殆ど見られない。

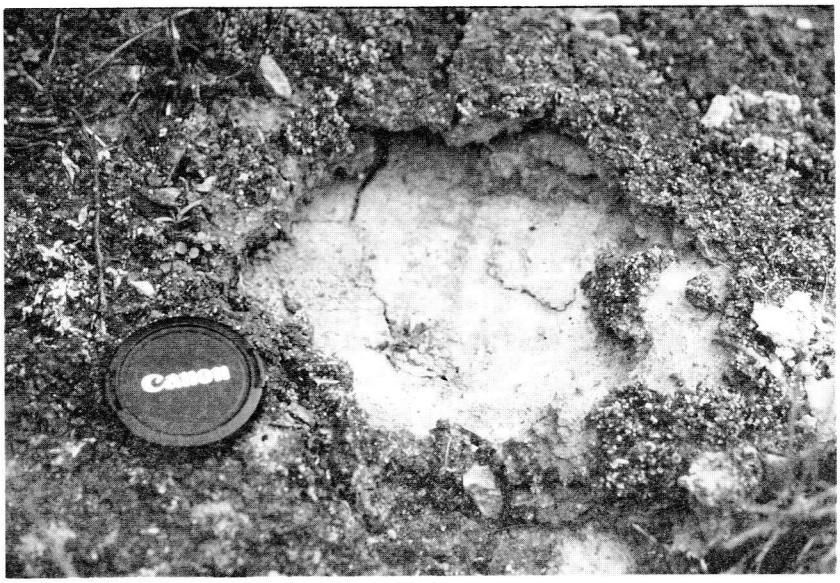
町には大挙して中国人の観光客が押し掛けているため、我々が歩いていても、誰も振り返らない。幸い、危険を感じたこともなかった。日本で思っている以上に安全で、物価も安く、楽しめた。

惜しむらくは時間がなく、慌ただしい旅だったことだ。「今回は、観光でなく、山登りに来たのだから」が、リーダーの口癖であった。

日本人初登頂の人はいいよ。そうでない私はどうなるのと言いたいところだが、二度と出来ない、したくない、冒険旅行であった。

でも、誘われれば、また、懲りずに出掛けることは間違いない。

２０００年８月２３日記



【トラの足跡（２ｗ前）】

私の山スキーの楽しみ方

26期　畠山　潤

26期の畠山です。住んでいるところは新潟県上越市、水族館の隣で、窓を開けると日本海が広がり潮の香りがする。夏は最高だが、冬は荒れ狂う海と強風の毎日である。転勤で４年ほど前に群馬から引っ越してきた。

家族構成は妻と子供が二人。妻とは私が仕事でつくばの電総研にいたときに知り合った。その当時彼女は電総研の山岳会に入っており、何度も一緒に山行を供にした。普段から山の話ができるパートナーであり、植物園の研究員だったので私の高山植物の先生でもある。

ＯＢになってから山スキーを中心にした山行を続けている。山スキーの魅力を語った本は山ほどあるが、私の場合は雪山登山のラッセルにおいて、スキーは絶大な効果を発揮することを知ったのがきっかけである。ワカンで腰まで潜る雪でもスキーだったらスネぐらいですむ。下りのスピードは更に圧倒的である。単独登山では、なくてはならない道具であり、スキー登山の快適さを覚えてしまったらワカンを履いての雪山はもうできない。

‘８５年のゴールデンウィークに白山からベルクハイムまでの縦走をしたことがある。殆どが雪の尾根の縦走だったので単調に歩くだけでよく、比較的スムーズに２泊３日でベルクハイムに下山できた。しかしこの時スキーを持っていれば、もっと刺激的な縦走（笈からの滑降など考えただけでわくわくする）になったはずであり、更に１泊２日に短縮できたと思う。

‘８６年早春には岐阜県平瀬から入山し、別山東尾根を登って、加越国境を経て大日岳、火燈山の尾根から、山中温泉に下りて日本海まで歩いた。１週間かかったが、この時はスキー縦走だった。

ＯＢ２年の卒業まで白山、医王山、加越国境、犀奥の山々をスキーを履いて頻繁に登った。残念だったが登れなかったのは２月の高三郎山のクラコシ尾根（新道）だ。厳冬期の白山も、美女坂に掘った雪胴で１週間粘った後に退却させられた。このころあくまでもスキーは歩行用の補助手段であり、ワカンの代わりであった。

卒業してからはしばらくゲレンデスキーに興じ、スキーテクニックの向上に努めた。歩くスキーだけでなく滑降をメインとした山行をやりたかったからだ。

このころ住んでいた群馬県安中市は妙義山の麓で、谷川岳、尾瀬の至仏山、浅間山には車で１時間程度のところにあった。

【谷川岳芝倉沢源頭の一の倉岳頂上からの滑降】

６月中旬まで滑走可能な谷川岳芝倉沢はよく通った。ゲレンデスキーヤーが集まり、競技用のポールが立てられるマチガ沢と違い、一の倉岳のピークから滑走可能な山スキーヤーだけの静かなロングコースだ。　一の倉沢も一度滑ったが、急なだけで滑走距離が短かった。やはり頂上から滑走するのは気持ちがいい。マチガ沢もオキの耳ピークからの滑走が可能だと思うが、頂上直下はかなり急でスーパーテクニックが必要だ。谷川岳では芝倉沢がベストだ。

１１年ほど前、高崎のＩＣＩスポーツ店で長さ６０ｃｍのスキーを見つけた。店員によると、春山の下山などに使うと便利という。今やゲレンデでも珍しくないファンスキーだが、元はといえば山の道具だったのだ。

靴の大きさと大した変わらないこんなちっぽけなスキーで滑れるかどうか分からなかったが一つ購入してみた。

次の週、会社の山岳会の日本海から梶海新道を経て白馬岳に至る縦走に携帯していった。短い分だけ軽くてたいした荷物にならない。朝日岳の下りで初めて滑ったが思ったほどバランス取りが難しくない。かなり攻撃的な滑りも可能だが、スキーとスタンディンググリセードの両方のテクニックをあわせて滑るような感じだ。競技スキー専門のもう一人のメンバーはグリセードの技術がないせいかうまく使いこなせなかった。６月初旬の大雪渓は完全に雪に埋もれており、雪質も良かったため標高差１４００ｍの滑降を満喫できた。

以後雪渓の滑降可能な夏山には必ずショートスキーを携帯した。鳥海山、飯豊山石転び雪渓、

【妻と、至仏山頂上にて、
尾瀬ケ原と燧ケ岳を望む】

針ノ木雪渓、北岳大樺沢、穂高涸沢、剱岳小窓、三の窓、長次郎、平蔵、剱沢等、名だたる雪渓は殆どこれで滑った。

家内と結婚する前、一緒にゴールデンウィークの白山に登ったことがある。この時私は単独一里野スキー場から入り、室堂で彼女のパーティーを待った。季節はずれの１ｍを越える降雪があり、尾添尾根の天池付近で２日ほどビバークする羽目になったが、新雪を巻き上げながら大汝峰頂上直下の滑降は気持ちよかった。この頃の白山はスキーヤーのメッカで、スノーボードを担いでくるものもいた。

スキーのメッカといえば尾瀬の至仏山も同様である。休日の頂上にはたくさんの人が集い、尾瀬ヶ原を目指して無数のシュプールがつけられる。白山同様、技術的に難しいところはなく、真っ白いムジナ沢の広い斜面に飛び込むだけでよい。滑り終えた後は、所々雪解けたところからのぞく水芭蕉を眺めながらの散策を楽しむこともできる。

ゲレンデスキーは専ら子供を背負って滑っているが、山スキーにまで子供を連れていくのはまだためらいがある。もう少し大きくなってスキーの基礎を覚えたらついてくれるかどうか。今年の冬は戸隠小舎（カモシカ同人のメンバーがよく集まる）にいってクロカンスキーから始めてみようか。子供の成長は楽しみのひとつでもある。

昨年から再び少しずつ山に行くようになった。子供と遊ぶ約束があるので日帰り、それも数時間で戻ってこられるような近郊の山が殆どであるが。

一番良く行くのが南葉山。上越市郊外の標高９００ｍ程度の、医王山の様に市民に愛されている低山である。

登り口のキャンプ場まで車で２０分、４月上旬ならばここから雪がある。スキーを担いで標高差４００ｍの急斜面を１時間ほど登ると斜面が緩くなってだだっ広い頂上に着く。天気が良ければ北は佐渡ヶ島、南は妙高、戸隠の山々が連なる。

頂上直下は４０度の傾斜で、なかなかの斜面である。眼下に高田城の桜を眺めながら、ジャンプターンで飛ばしていく。風になったような爽快な気分になれる時間である。これに勝るのはパラグライダーぐらいであろう。ジョギング気分で気軽に楽しめる自分だけのゲレンデである。

今年の夏山は白馬岳と剱岳に行った。６年振りの夏山である。白馬は猿倉からの日帰り往復であった。今年は残雪が多く、白馬尻小屋からの大雪渓は稜線コルまで途切れることなく雪が付いていた。中間の岩小屋付近の雪渓が細く、ここが雪渓中最大３５度の傾斜である。以前６月に滑った時とは大違い、やたらと石が多くスプーンカットが深い。この日は強風と降雨のため、特に雪面が堅く、ガスで視界が効かなくなったため岩小屋付近は一般道を歩いて下った。数珠つなぎで登山者が登ってきており、滑っている時にいちいち注目されるのには参った。そもそも夏山最盛期の大雪渓を滑りに行ったのが間違いだった。

次は剱岳、一泊二日で長次郎雪渓へ。クライマーのコールが響く静かな左股を詰めて長次郎のコルを目指す。八峰と、源次郎２つの尾根のフェースに囲まれた岩と雪のダイナミックな景観はいつ来ても感動的だ。　黒部ダム、真砂沢から来たという単独行者と話をしながら登っていく。コル手前の大きなクレバス脇の平らな雪面でスキーを履いてスタートする。コルから熊の岩までの傾斜３５度の大斜面が今日のハイライトだ。スプーンカットが浅く日が当たって緩

んだ斜面は比較的滑りやすい。

熊の岩の下では学生パーティーが雪上訓練をしている。学生たちは驚いたようにこちらを見ている。思えば学生の時には夏の雪渓をスキーで滑り降りるなどという山行は考えられなかった。急な雪渓は危険でな場所であり、アイゼンまたはピッケルが必需品で、滑ったら即滑落停止が常識だったからだ。

たしかに夏の雪渓はゲレンデとは大違い、降雨による融雪によってできた深いスプーンカットは溝のようにうねり、スキーをはねとばす。落石、クレバス、雪面は堅いし、場所によっては転倒が許されない。階段を滑り降りる如く足がぶれ、ショートスキーではバランス取りが難しい。平坦な雪面ではジャンプターンで難なく飛ばしていける斜面でもワンランク落とした慎重な滑りになる。「快適そうで良いですね」と声をかけてくれる人もいるが、見た目より技術と体力が必要である。

平蔵谷は長次郎出合いより１５０m程剱沢を登ったところから見上げることができる。長次郎が左に緩やかにカーブしているため上までのルートが見渡せないのに対して、平蔵谷や三の窓雪渓は一直線にコルまで突き上げており、好みのルートだ。以前滑ったことがあるが、平蔵谷は上部が４０度近くあり、スプーンカットの雪面では私の限界に近い。６月頃のザラメ雪ならジャンプターン可能な快適斜面だろう。

雷鳥沢は剱御前小屋直下から滑ることができた。長次郎に比べれば緩くて柔らかく、快適なウェーデルンで締めくくった。

歩きが主だった時、スキーは寸胴形で滑りづらかった。滑降をメインにし始めたとき、ジルブレッタのビンディングをスラローム競技用のゲレンデスキーに取り付けた。

今やカービングスキー全盛の時代。切れと安定性が増した分だけ板の長さが短くなり、ワールドカップのスラローム選手でも身長よりも短い板を履いている。私もゲレンデスキーとショートスキーをカービングタイプに変えた。来年は山スキーも１３０ｃｍぐらいのカービングに変えようと思っている。体力と技術は落ちたが、道具の力を借りて滑りのグレードアップを図りたいのである。

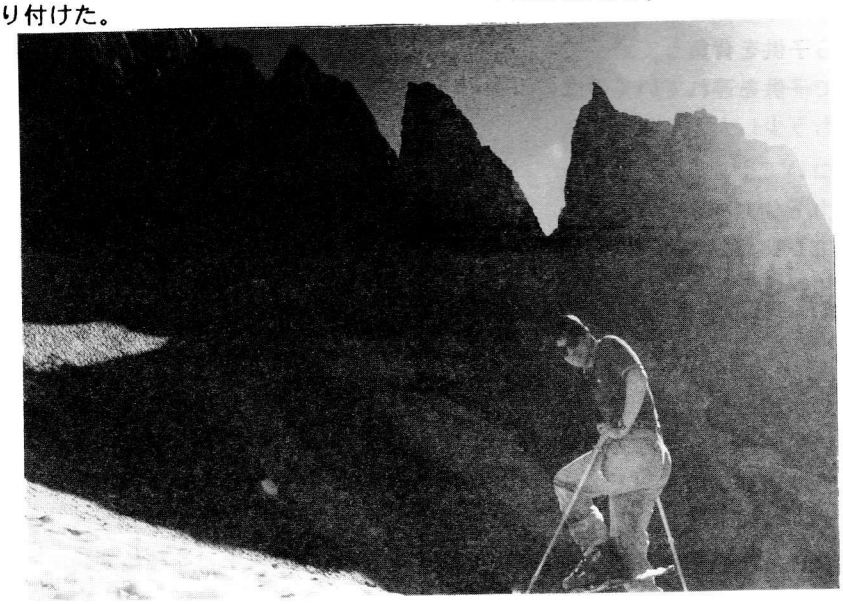
山スキーで行きたい山。近くは妙高山群の焼山。ここは山スキーヤーの間で人気が高い。頂上直下の岩尾根の急斜面はアルペン的で、標高差１５００mのロングコースだ。隣町の鉾ガ岳は１３００mの標高の割には１０００mの標高差で最大５０度の斜面を持つダイナミックな山容である。

北アルプスは沢山あるが、まず剱では平蔵と三ノ窓。　白馬槍、杓子沢と大雪渓（但し８月はパス）、針ノ木岳頂上から針ノ木雪渓。穂高なら北穂高頂上から涸沢へ。前穂の北尾根３，４コルからの滑降もダイナミックだ。北穂高からの滝谷と奥穂頂上からの涸沢の記録も目にしたことがあるが私には無理だろう。

南アルプスは北岳や仙丈ヶ岳。北岳バットレスを滑降したものもいるが八本歯コルからでも十分。

富士山と利尻山ももう一度行きたい。特に、富士山は最高のバーンを提供してくれる。富士山観測所の裏からは壁を伝って火口の底にも滑降可能だ。

海外の山を挙げればきりがない。ヒマラヤのジャイアンツやマッキンリーは無理としても、キリマンジャロやアコンカグアは私の技術でも大丈夫だろう。



【剣岳、長次郎雪渓熊の岩にて】

基本的に、雪が付いていればどんなところでも滑り降りることができる。本などに紹介されているルートにこだわる必要もない。もちろん斜面のレベルが自分の実力の許容内であるか、雪崩や崩壊の危険がないかの確認は必要だが、斜面を見て自分がイメージする好みのルートを滑り降りることができる。雪が消えたら登降不可能な場所でも飛ばしていくことができる。自由で、想像力をかき立てる登山だと思う。

ゲレンデスキーヤーが登ることがなく、山屋が滑ろうとしない、そんな狭間の対象を山スキーヤーが目指しているのだと思う。

山スキーでいろいろやりたいこともあるが、先端の半導体材料の研究に明け暮れている現在の仕事も充実しているし、もちろん家族も大事である。適当に仕事をして遊びだけの人生を送るつもりは毛頭ないが仕事に忙殺され続けるのも問題であり、そんな狭間でも揺れている毎日である。

【富士山頂上付近にて】

夢・風を掴んで空へ・遠くまで飛びたい。

WANDERN VOGEL　から　FLIEGEN VOGEL　へ

3期　増田耶夫

卒業してからすでに３８年も過ぎ、会社も卒業してしまいした。
夜の巷(ちまた)のWANDERN VOGELから、空を飛ぶFLIEGEN VOGEL　の『夢』にとりつかれています。
空に飛んでみたいとの『夢』を追って、人力飛行機作成に昨年から嵌(はま)っています。

私がFLIEGEN VOGELの『夢』に取り付かれた経過(いきさつ)をお聞き戴けましょうか？

一昨年(1999年)の春未だ浅き頃でした。
会社を定年となり、ゆっくりし畑仕事などをしながら、何をしようかを考えようと思っていました。しかしながら、春先では畑仕事もあまりありませんでした。

会社勤めの最後の頃、鮮度保持包装の開発をしており、日本包装学会に属し、この中に「MA(Modified Atmosphere) 包装研究会」(鮮度保持包装研究会)という会を立ち上げ、退職後も運営委員をしておりました。
この関係で、野菜の鮮度保持について興味を持ち、これらに関する文献を多数家に持ち帰っていました。これらを抄録したり、また時折文献探しに図書館に行ったりしていました。
これは私のライフワークの一つかと思っています。
それと、今まであまり帰らなかった田舎(信州・伊那)に時折、行ったりしていました。

そのころ、ある会社の品質管理についてお手伝いの話があり、再度勤めようかとしていた矢先に、母親が足を骨折と言うアクシデントがあり、田舎に行く機会が多くなりそうな状況となってしまいました。そうなれば迷惑をかけるのではと思い、自由がきくフリーの暮らし(早く言えば年金暮らし)を選択しました。

文献読みと両親の面倒見のため田舎への往復や雑用などで殆どの時間は潰れてしまいましたが、これら以外に何か夢中になれる面白そうな、楽しいものが欲しい状態でした。

そんな折、野田市のJC(日本青年会議所)で人力飛行機を作るとの話が伝わってきました。
野田来てから知りあった人が、この年のJC野田の理事長でした。
この人から、「人力飛行機を作っているので、時間があればプラスチックのことについて手伝っていただけないか」とのことで、飛行機の製作現場に顔を出したのがことの始めでした。

正直なところ、３７年間プラスチック関係の会社に勤めていましたが、製造･品質管理とか開発関係の仕事でしたので、飛行機にどんなプラスチックをどこに使うかもわからず自信はあまりありませんでした。
製作現場に顔を出してみて、ほとんどの人が飛行機作りに関して素人集団との感じでした。
プラスチックに関して、この集団なら、Priorityがとれて、気楽に参加出来、少しはお役に立てるのではと思えました。

（飛行機の設計に関しては、野田の近所に住んでいる東大の航空工学の佐藤と言う先生に相談に載って貰っているとのことでした。）

この人力飛行機の製作メンバーは前述の様にJC野田が主体で、毎週の日曜日に集まって製作しているとのことでした。

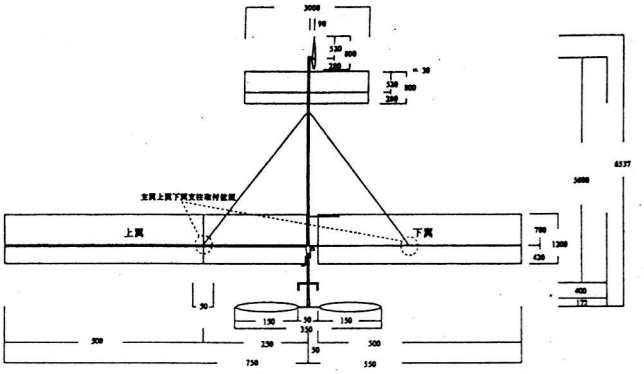
JC(日本青年会議所)とはご存知のことかと思いますが、いろいろな業種の若き経営者や、次世代の企業･商店の経営者となるべき人だちの集団です。
JC野田が飛行機作りに取り組んだのは、野田を挟んで流れている利根川や江戸川の河原に多くの単発飛行機やグライダーの基地があり、スカイスポーツが盛んなところであり、この理事長以下、JCのメンバー数人が単発飛行機のマニアであり、空への夢を持っていたことと、人力で飛行機を飛ばしてみたいとのことで、JC野田のこの年度のテーマとして取上げ、テレビ(読売)で放送している琵琶湖の「鳥人間コンテスト選手権大会」に出ようと企画をしていたとのことでした。
したがって、人力飛行機作成メンバーは30代のJC会員を中心にし、市報などで募集したとのことでした。中･高生も多数参加していました。
(JC野田として青少年の健全育成もテーマの一つであったそうです。)

このような集団に首をつっ込み始めました。飛行機作りに参加した中では、私が最年長でした。
私よりわずかに若い板金屋さんがいて、二人が６０代でした。

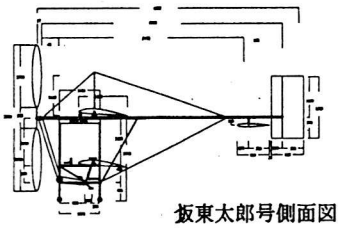
尤も、私が現役でしたら参加していたかどうかもわかりません。
野田は夜遅く、酔っ払って寝に帰るところで滞在時間は数時間しかなく、市報など読んだことも無く、ましてやスカイスポーツが盛んのところなどは始めて聞く話でした。

そうそう、この飛行機作りの仲間(チーム)の名前は『飛(と)びたい野田！空(それ)でいい野田！』といい、作っている飛行機は『坂東太郎』号と呼んでいました。

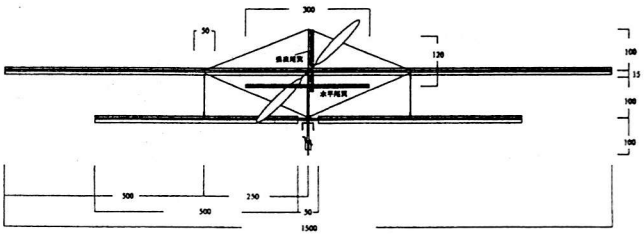
この『飛(と)びたい野田！空(それ)でいい野田！』のメンバーは、前述の様にJC野田が主体でしたので、職業は種々雑多で大工、運送屋、蕎麦屋(この年のパイロットは蕎麦屋の後継ぎでした)、肉屋、電気屋、板金屋、テント屋、なんとかファンクラブ事務長やデザイナー等々と前述の中･高生たちで、地域社会の縮図のようでした。
しかしながら看護婦さんはいましたが、お医者さんと坊さんはおりませんでした。



板東太郎号平面図



板東太郎号側面図



板東太郎号正面図

さて飛行機の話に戻します。この『坂東太郎』は複葉機でした。
なんの知識もテクニックも持たず、しかも詳細な図面も無く、作り始めました。
毎週日曜日の昼間に集まりわいわいと楽しく始りました。
機体は上翼長が 15 ﾒﾀｰ、全長 6.5 ﾒﾀｰほどの双葉機でした。　(概略設計図Ｉ)

３月頃から琵琶湖の「鳥人間コンテスト選手権大会」へのエントリーの準備を始めていたとのことでした。
尚、琵琶湖に出場することは、かなり難かしく、毎年エントリーする数は５～６倍とのことを初めて知りました。
（エントリーすれば簡単に、誰でも出られるものだと思っていました。出場は毎年１４～１６チームですから、全国で１００近いチームがあるとは驚きでした。）

当然、飛べる機体である事が必須条件ですが、民間のテレビ (読売テレビ)の主催であり視聴率も重要であり、このため話題性のあることも必要だそうです。

私が参加し始めた３月頃は、琵琶湖に出場出来るかどうか分りませんでした。
最初は半分冷やかしのつもりで参加していましたが、数回製作現場に顔を出しているうちにだんだん面白くなって来ました。
機体の作成がだんだんと進み、飛行機がが姿を現し始めると、更に熱が入って来、更に面白くなり、毎日曜日に作成現場に行くのが楽しみとなってしまいました。
作った飛行機を飛ばしてみたいという『夢』が大きくなり始めて来ました。

この頃から、田舎に行く頻度が増えて来ていましたが、野田に戻っている時の日曜日は朝から弁当を持って製作現場に行っていました。

５月に正式に「第２３回鳥人間コンテスト選手権大会」(琵琶湖)に出られるとの朗報が入りました。
今まではただ面白くテレビを見ていただけでしたが、こんどは出場する側となると、おのずと力が入るものです。
それからは製作に一段と熱が入り、日曜日の飛行機作り、がさらに楽しみとなってきました。

また琵琶湖に間に合わせる為に、６月の末頃からは、野田に帰っている時は週日の夜も製作現場に行くようになり、急速にのめり込んでしまいました。
特に琵琶湖に送り出す１～2週間は半徹夜状態で、蚊に食われながら、飛行機作成に熱中しました。
チームの皆は、少しでも遠くに飛ばそうとの『夢』を抱き、一生懸命でした。

やっと完成にこぎつけ、７月２８日に琵琶湖へと機体を送り出し、後を追って琵琶湖入りしました。
琵琶湖で調整をし、フライトの日は夜明け前から最終組み立てをし、ようようのことでプラットホームに運び上げました。
プッラトホーム上がってみて、今までテレビで見ていた時とは全く違ったもので、やっと　ここまで来ることが出来たという感動が湧きあがりました。
後は空に舞いあがり、鳥の様に遠くまで飛んでくれ！と祈る気持ちでいっぱいでした。

しかしながら、我が愛機『坂東太郎』号がプラットホームに上がった時は、風は背風(陸から湖水に)で強く、時折横風も混ざり、飛行機を飛ばすのには最悪の条件でした。
飛行機を飛ばすのは僅かの向い風か、無風が最適の様です。
機体が風で壊れてしまわないかと心配しながら、どうか早く神風(向い風)が吹いてくれと祈りましたが、祈りはついに通じませんでした。

背風のなか、スターターの合図で、風の弱くなったと思われた時に押し出しました。が、風を捉まえることはできませんでした。
結果は無残にも 24.75 ﾒｰﾄﾙの 12 位(出場 15 チーム中)でしプラットホームに立ち、機体を押し出した時の感動は、今まで味わったことの無い、非常
にすばらしいものでした。

『これで夏は終わってしまった！！』

無念のプラットホームから降りる時は、また来年も琵琶湖に来るぞ！もっと飛ぶ飛行機をまた作るぞ！そして来年もここに立つぞ！と。

鳥人間コンテスト選手権大会について。
第１回は 1977 年に琵琶湖で開かれ、第１０回大会から滑空機、人力プロペラ機等の部門が出来てきたようです。
JAPAN INTERNATIONAL BIRDMAN RALLY と称し、第２回から世界大会として認められているようです。
昨年(第 23 回)は３部門(チャレンジ部門:ユニークの発想による飛行機(今年度は中止となった)、滑空機部門と人力プロペラ部門)がありました。
我が『飛(と)びたい野田！空(それ)でいい野田！』チームの『坂東太郎』号は人力プロペラ部門に出場しました。
この人力プロペラ部門へ出場チームは最近、学生主体のチームが殆どのようです。我がチームはメンバー構成も雑多な、地域色のぷんぷん匂う異色のチームでした。

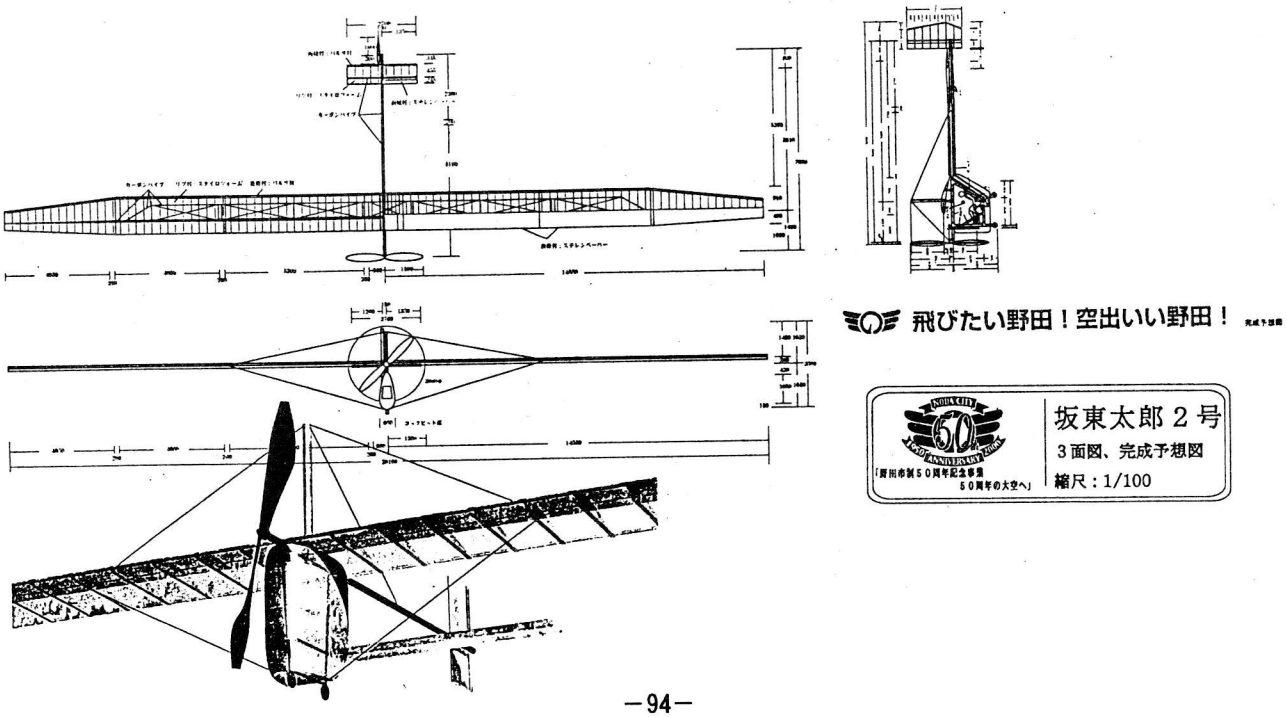
応援も野田から、市長を先頭にバスをチャーターして駆けつけて来てくれました。
後日テレビで見ると、我々の飛行機より、市長の方にカメラが向いていたようです。市長が「鳥人間コンテスト選手権大会」の出場チームの応援に来たのは始めてであったようです。
これで市長も人力飛行機に目が向いて、今年度(2000年度)の飛行機作成につながりました。
琵琶湖から帰り１ヶ月はお盆などで殆ど田舎で過ごし、９月に野田に戻っている時にメールが入り今年度(2000年)も挑戦をしようとの話が出ました。
1999年度は野田JCが主体でありましたが、今年度は市民団体として参加することになり、当然、製作メンバーに参加することにし、再び琵琶湖を目指す『夢』を見始めました。

市民団体としてのスタートですから、資金集めから始りました。因みに、メンバーは年会費２万円でした。昨年はJC野田の予算で会費無しのボランテアでしたが。

前年のチーム名を引き継ぎ、『飛(と)びたい野田！空(そら)でいい野田！』とし、飛行機は『坂東太郎』２号としました。
たまたま、今年は野田市・市制50周年で各市民団体から記念イベントの募集があり、これに応募しました。
市からの助成金が目当てと、市制50周年という話題でテレビ局にアピールすることを狙いました。
(昨年、市長が琵琶湖でテレビに出たことが助成金獲得に影響したのではと思っています。)
資金の市からの助成金を目当てにし、骨格をカーボンファイバー (C-FRP)として最終設計をし始めました。
昨年の秋から暮れにかけては、数回ミーティングを開き、どのような機体にするかなどを皆でわいわいと議論しました。
設計担当が決まり、年が明けてから製作に取りかかることとしましたが、C-FRPの手配等で本格的に製作に取りかかったのは今年も３月頃からでした。
(尚、昨年はジュラルミン製のパイプで製作しました。)

我々のチームは、設計図と趣意書を鳥人間コンテスト選手権大会事務局(読売テレビ)に提出し、出場要請書などを、市長や多くの小学生から書いて貰い、読売テレビに郵送、市制50周年記念イベントを前面に出してPRを計ったとのことでした。

このへんのことは、私のように、市長の名と顔を昨年始めて知ったようなものには思いもつかぬことで、このようなことを計画し実行したメンバーの根回しに脱帽です。



さて今年の飛行機は昨年とは違い単翼で、翼長が２９メートル、機体長８.６メートル、総重量約 50 キロ(実際には６０キロ近くになったようでした)の設計でした。 (概略設計図Ⅱ)
琵琶湖への輸送を考えて、翼は７分割、機体は２分割で作成しました。
多分今年の出場した飛行機の中では翼の長さは１，２番でした。
２９メートルといえば、想像している以上に、はるかに大きいものです。

昨年は経験が無くまったく手探り状態でなにも分らず、作成しましたが、今年は東大(東京大学飛行理論実践委員会 F-tec)、日大(日大理工学部航空研究会)チームに見学や、教えて貰ったりし、作り始めました。
彼等のところに行けば、WV(ワンゲル)時代にタイムスリプしたようで、むしょうに懐かしく感じました。

他のチームはどこそこでテストフライトをしたとかの情報が彼等との関係でよく入ってきました。

テストフライトと言えば、昨年は、完成するのがぎりぎり間に合った状態であり、出来ませんでした。
(尤も、テレビに出ることが第一で、テストで機体が損傷したらの心配で、テスト無しの一発勝負でした。)

今年こそはテストフライトと思っていましたが、資金の目途のつくのが遅れ、機材(C-FRP)の手当てがずれ込んでしまい、機体の製作が遅れ、昨年の二の舞となってしまいました。
テストフライトもせずに出場したのは我がチーム位ではなかろうかと思っています。

私は、今年は田舎での時間が長くなって来ていました。
両親の介護は、良くなることは期待出来ず、衰えていくばかりで、非常に淋しいものがあります。
(良くなることが期待出来る介護であったらと願っております。)
昔の単身赴任の再来となって、土日に飛行機作りに野田に帰り、また田舎へという状況になって来ていました。

飛行機製作のメンバーも増え、最年長は４歳年上の人が参加してきて 60 歳代が４人となり、この老齢パワーのカルッテトが機体製作のメインとなって進めました。
もちろんこのカルテットの皆さんは仕事(自営、会社勤め)があり、私は田舎からとのことで日曜日の飛行機の製作が主でした。
翼のリブの切出し、製作、機体の加工など、昨年に比べると格段の進歩であり、お互いの智慧と経験を出し合って進めました。
昨年は全くなにも知らずの状態で、盲ら蛇におじずで作ったものだと感が強く、今年は、まあまあ納得が出来る飛行機が出来たと思っていました。

それでも、まだまだ改善の余地があり、更に来年はより以上のものをと思っています。
やはり、製作については、伝統と技術・経験の積み重ねが必要であると痛感しました。
経験の積み重ねと言う伝統は大きな「財産」です。

さて、今年も琵琶湖へのタイムリミットが近づいてしまい、分割して作成した機体を最終に近い状態で組込んだのは７月２０日でした。
かなり大きな工場を借りて組みましたが、それでもいぱいでした。 (写真３)
私達のチームは工場を休日に借りることが出来ましたが、よそのチームは広い場所がなく苦労しているようです。

このような状態でしたので、今年もぶっつけ本番を余儀なくされました。(一番の反省点です。テストフライトとは機体の修理、作り替えなどを考えれば、２～３ヶ月前に完成させるべきであると思っています。)

７月に入ってからは昨年同様徹夜状態が続きました。皆、昼間は仕事があり、現場に集まるのは１９時過ぎで、毎晩１時，２時頃迄作っていました。

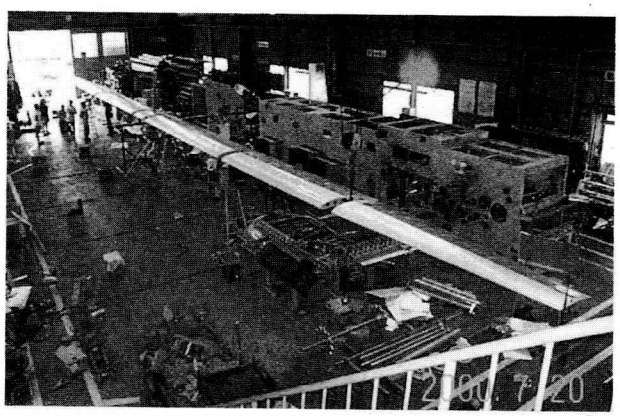


写真３　２号の組立

写真４　プラットホームへ運ぶ途中。私です。

私は田舎の方は姉妹やヘルパーさん達に任せて、我まま言って野田で飛行機作りに専念しました。
昼間は今まで出来なかった諸々の整理や、家の雑用で過ごし、夜は飛行機作りで、ライフワークと思っていた文献調査等の図書館通いも、どこかに消し飛んでしまっていました。

７月の２４日にはどうやら完成の目処がつき、細かい手直しをし、２６日夜にトラックに積み込み、晴舞台の琵琶湖への準備をし、翌２７日に琵琶湖入りをしました。

２８日には琵琶湖で操縦席の組み込みや、機体検査などで遅くまで砂浜で最後の調整をしました。
夜は野田から市長を始めとする応援団のバスが着き、前夜祭で盛り上がり、二次会まで付き合い、１２時過ぎまで飲んでいました。

２９日、待ちに待った晴舞台の日、１年の総決算の日です。
【当日の日記から】
「4.00 起床。昨夜の酔いが未だ覚めておらず。皆と琵琶湖のピットに急ぐ。
だんだん明るくなり、快晴に近い。風よ我々が飛ぶまで凪でいてくれと祈る。
組み込みは 8.30 に終了。主翼の繋ぎ目のパネルに狂いが出てしまう。現寸合わせで作成したが、後縁部の取り付けに問題があったと思われる。やはり事前に組み込んで見るべきであった。今更後悔しての間に合わず。なんとか押込んで、嵌める。
なお、主翼下部のワイヤーも本日始めて張ったので弛み加減が分らず。これも反省材料。
組みあがった機体は非常に美しい姿である！！　約１年の汗の結晶だ。
8.30 からプラットホームへ運び込む。やさしく、傷つけぬ様にそっと運ぶ。　(写真４)
プラットホームに機体を上げるのは、大きくて大変であった。
プラットホームに立ったら、昨年の感動が戻ってきた。これはプラットホームに立ったものしか味わえないもである。
幸い風も凪いでおり、絶好の飛行機日和である。フライトが１３番目で風向きを心配していたが、最高のコンデションだ。

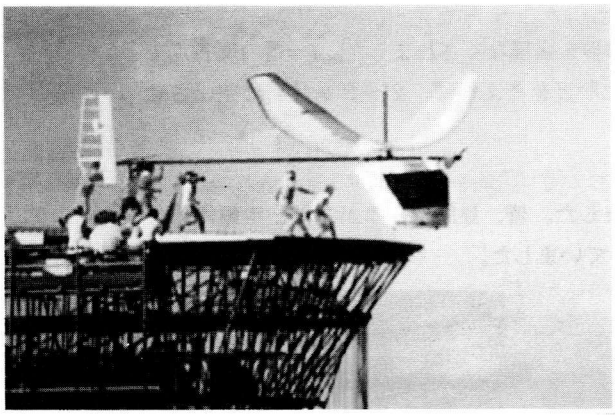


写真５　飛翔スタート

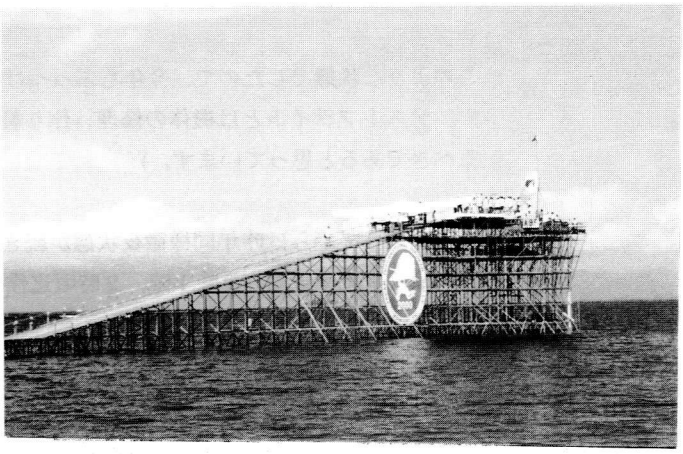
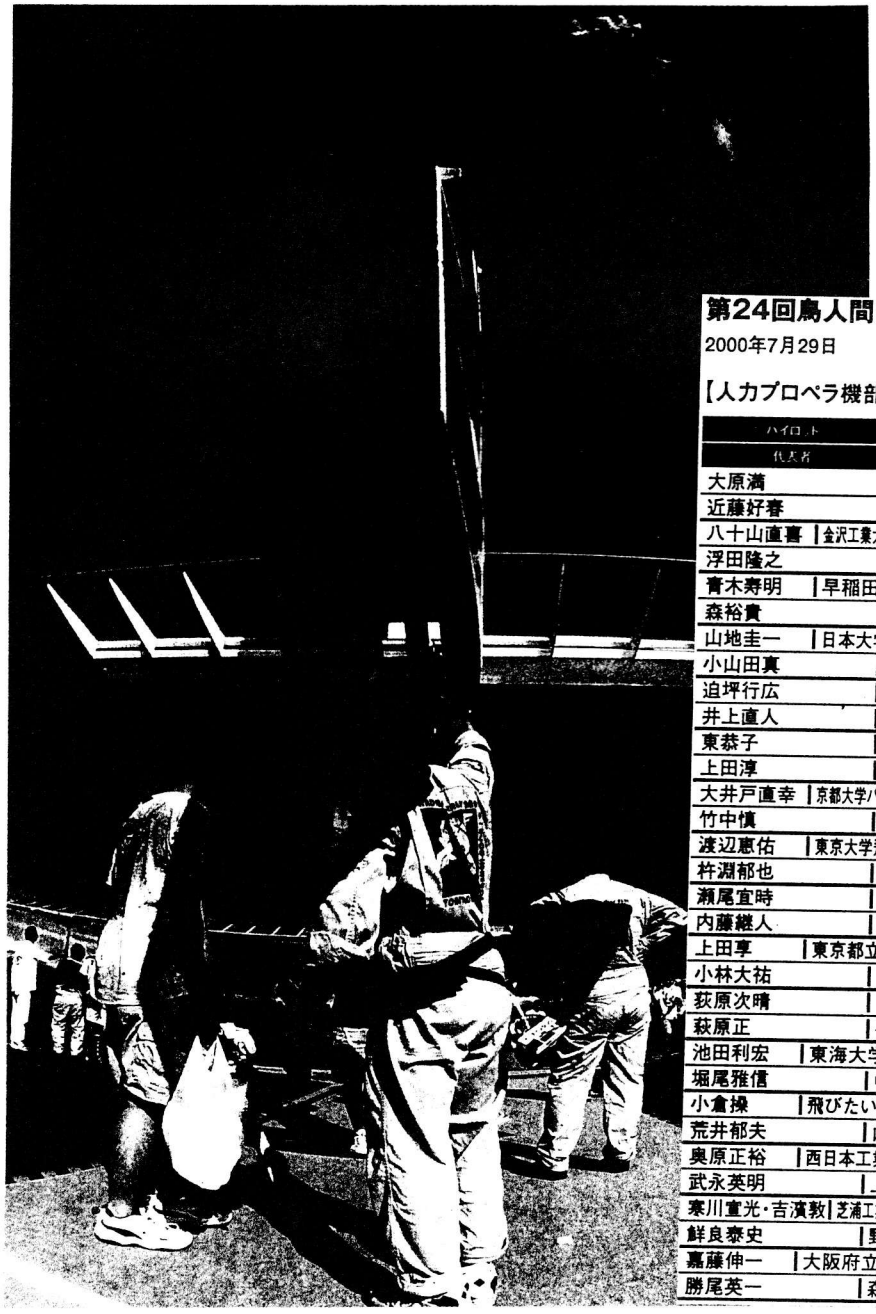


写真６　今年2000年プラットホーム

飛翔、プラットホームから押し出す。綺麗に飛び出したが飛び出し角度が高すぎた。
失速、一舜の、数秒の夢であった。……　32.85 ﾒｰﾄﾙ　　(写真５，６)

『これで今年の夏も終わってしまった！！』



我が飛びたい野田！
空でいい野田！チーム
テイクオフ寸前。

第24回鳥人間コンテスト選手権大会

2000年7月29日

【人力プロペラ機部門】

パイロット	チーム名	飛行距離
代表者	設計者	順位
大原満	豊田飛行機研究会	棄権
近藤好春	野尻勲	
八十山直喜	金沢工業大学夢考房人力飛行機プロジェクト	263.65M
浮田隆之	KLT WINGS	5位
青木寿明	早稲田大学宇宙航空研究会	失格
森裕貴	田中利典	
山地圭一	日本大学理工学部航空研究会	94.96M
小山田真	航空研究会	8位
迫坪行広	つくば鳥人間の会	34.14M
井上直人	古徳雅史	10位
東恭子	有人飛翔体研究会	255.33M
上田淳	上田淳	6位
大井戸直幸	京都大学バードマンチーム Shooting Stars	61.72M
竹中慎	楢崎昭尋	9位
渡辺恵佑	東京大学飛行理論実践委員会 F-tec	1308.09M
杵淵郁也	杵淵郁也	2位
瀬尾宜時	Team Typhoon #09	183.90M
内藤継人	Team Typhoon #09	7位
上田亨	東京都立科学技術大学 T-MIT	棄権
小林大祐	小林大祐	
荻原次晴	東工大Meister	380.54M
萩原正	平野義鎮	4位
池田利宏	東海大学人力飛行機研究会	582.94M
堀尾雅信	中村紀仁	3位
小倉操	飛びたい野田！空出いい野田！	32.85M
荒井郁夫	山本和広	
奥原正裕	西日本工業大学バードマンクラブ	13.45M
武永英明	上原英治	
寒川宣光・吉濱敦	芝浦工業大学 Team Birdman Trial	28.38M
鮮良泰史	野村昌樹	
嘉藤伸一	大阪府立大学 堺 風車の会	7945.85M
勝尾英一	森本厚	1位

(なお、今年は大阪府大 堺 風車の会が7,９４６メートルで１位で、東大飛行理論実践委員会 F-tecが1,３０８メートルで2位、日大チームは９５メートルとのことでした。

(成績表と我がチーム)

傷心の状態で機体を撤収し、帰途につき、茫然自失の夏が過ぎ、再び来年の『夢』を見始めました。
来年こそはもっと風を掴み、もっともっと遠くへ飛ばそうと！！

飛行機は発泡スチロール(翼のリブ、プロペラ)、スチレンペーパー、パルサ材、PETフイルムと C-FRP。駆動系は自転車のペタルやチエン利用。変速機。エポキシ系接着剤をメインにして組み立てました。制作費は１号機が約４５万円、２号機は１６０万円程でしょうか。
まだ会計報告は聞いておりませんがC-FRPに１００万円以上かかったようです。
C-FRPが安く手に入ることが出来るルートがあればお教えください。

どうも、くどくどした『悪夢』の話をお聞き頂き有難うございました。

９月11日、東海地方は記録的豪雨に浸りました。全国に散るワンゲルＯＢの中にもこの災禍に遭遇された方達がいます。すぐメールで知らせていただいた11期森川さん、17期渡辺さん。そして、克明な原稿でお返事いただけた37期柴田さん。
公の報道では抜けてしまうような混乱模様をお読みとり下さい。また、そんな緊急時、ワンゲルのお父さん、お母さんがいかに頼もしいものか！自負を持たれるとともに、それにかこつけて着々とワンゲル装備をゲットされることをお勧めします。
尚、柴田さんには多数の現場写真を同封していただきました。見慣れた風景が浸水していく驚愕が、見たこともない景色の方にはそのニュース性が伝わりにくいであろうという当方の判断により、一部の紹介とさせていただきます。お詫び申し上げますとともに、地域の皆様を含め、一日も早い復興をお祈り致します。

37期　柴田　祐介

９月 11 日、仕事が終わって地下鉄名古屋駅の改札を出るまでは、街の様子は日頃の雨の日と変ったところはなかった。名駅の地下街に異常に人が多いので「名鉄・ＪＲが止まった？」と感じ、確認のため両改札口に近づこうとしたが、すでに人だかりで確認するまでもない。周りでは携帯で連絡をとろうとする人、公衆電話に並ぶ人、タクシーの列に並ぶ人、階段に座り込む人、改札の駅員の兄ちゃんに復旧のめどを聞く人など。

数年に１度ぐらいは台風等で電車が不通になることもあるので、今回の雨も「そういう規模の雨なんだ」と感じたが、帰る手段に心配はなかった。自宅は名古屋駅から約３キロ、歩いて 45 分、西枇杷島町である。

2・3 年程前に台風の影響で電車が不通になったときは、自宅はすでに停電していたが、今日はまだ送電されているので、「たいしたことないのかな？」と思っていた。テレビでは知多の竜巻、電車の不通、地下鉄の駅が水没など。さしあたり、現在の自分に直接影響のない話題がニュースになっている。22 時頃、歩いて 30 秒の庄内川の堤防（比高約３メートル）に上がる。堤防上は遠くのほうに消防団の車と付近の人が何人か見えるだけ、庄内川の水位は堤防の上まであと２メートルぐらいで、流れはかなり速い。ニュースでまだ雨が降りつづけるといっているのが気掛かりだが、庄内川の水位も自分で確認したし、明日も平日なので１２時前にはフトンにもぐりこむ。

９月１２日、午前１時頃、夢の中で「西枇杷島町に避難勧告が出ました」というアナウンスを聞いた。目覚めると、家族も起きてきた。外に出ると近所の人も出てきており、今後どうしようか相談している。というのも、西枇の避難場所は全て自宅のある道路面（県

(なお、今年は大阪府大 堺 風車の会が7,９４６メートルで１位で、東大飛行理論実践委員会 F-tecが1,３０８メートルで2位、日大チームは９５メートルとのことでした。

(成績表と我がチーム)

傷心の状態で機体を撤収し、帰途につき、茫然自失の夏が過ぎ、再び来年の『夢』を見始めました。
来年こそはもっと風を掴み、もっともっと遠くへ飛ばそうと！！

飛行機は発泡スチロール(翼のリブ、プロペラ)、スチレンペーパー、パルサ材、PETフイルムと C-FRP。駆動系は自転車のペタルやチエン利用。変速機。エポキシ系接着剤をメインにして組み立てました。制作費は１号機が約４５万円、２号機は１６０万円程でしょうか。
まだ会計報告は聞いておりませんがC-FRPに１００万円以上かかったようです。
C-FRPが安く手に入ることが出来るルートがあればお教えください。

どうも、くどくどした『悪夢』の話をお聞き頂き有難うございました。

９月11日、東海地方は記録的豪雨に浸りました。全国に散るワンゲルＯＢの中にもこの災禍に遭遇された方達がいます。すぐメールで知らせていただいた11期森川さん、17期渡辺さん。そして、克明な原稿でお返事いただけた37期柴田さん。
公の報道では抜けてしまうような混乱模様をお読みとり下さい。また、そんな緊急時、ワンゲルのお父さん、お母さんがいかに頼もしいものか！自負を持たれるとともに、それにかこつけて着々とワンゲル装備をゲットされることをお勧めします。
尚、柴田さんには多数の現場写真を同封していただきました。見慣れた風景が浸水していく驚愕が、見たこともない景色の方にはそのニュース性が伝わりにくいであろうという当方の判断により、一部の紹介とさせていただきます。お詫び申し上げますとともに、地域の皆様を含め、一日も早い復興をお祈り致します。

37期　柴田　祐介

９月 11 日、仕事が終わって地下鉄名古屋駅の改札を出るまでは、街の様子は日頃の雨の日と変ったところはなかった。名駅の地下街に異常に人が多いので「名鉄・ＪＲが止まった？」と感じ、確認のため両改札口に近づこうとしたが、すでに人だかりで確認するまでもない。周りでは携帯で連絡をとろうとする人、公衆電話に並ぶ人、タクシーの列に並ぶ人、階段に座り込む人、改札の駅員の兄ちゃんに復旧のめどを聞く人など。

数年に１度ぐらいは台風等で電車が不通になることもあるので、今回の雨も「そういう規模の雨なんだ」と感じたが、帰る手段に心配はなかった。自宅は名古屋駅から約３キロ、歩いて 45 分、西枇杷島町である。

2・3 年程前に台風の影響で電車が不通になったときは、自宅はすでに停電していたが、今日はまだ送電されているので、「たいしたことないのかな？」と思っていた。テレビでは知多の竜巻、電車の不通、地下鉄の駅が水没など。さしあたり、現在の自分に直接影響のない話題がニュースになっている。22 時頃、歩いて 30 秒の庄内川の堤防（比高約３メートル）に上がる。堤防上は遠くのほうに消防団の車と付近の人が何人か見えるだけ、庄内川の水位は堤防の上まであと２メートルぐらいで、流れはかなり速い。ニュースでまだ雨が降りつづけるといっているのが気掛かりだが、庄内川の水位も自分で確認したし、明日も平日なので１２時前にはフトンにもぐりこむ。

９月１２日、午前１時頃、夢の中で「西枇杷島町に避難勧告が出ました」というアナウンスを聞いた。目覚めると、家族も起きてきた。外に出ると近所の人も出てきており、今後どうしようか相談している。というのも、西枇の避難場所は全て自宅のある道路面（県

道 126 秩父西枇杷島線・旧街道の美濃路・通称を本通り）より低い土地にあるからである。自宅にもどり、一応避難用にザックに山道具を詰め込み、お風呂に水を張って（200 リットル確保）、ポリタンなんかにも水を入れるが避難はせずに２階で寝た。この時点で新川のことは、話題にも上らなかったし、そもそも全く考えていなかった。まだ、庄内川下流の下之一色町（中川区）の方が気になった。

１２日朝６時頃、電話で母が起こされる。母方の祖父母がテレビで「西枇がすごい事になっている」と心配して懸けてきたらしい。が深夜の内に停電したのか時計もテレビもつかないウナギの寝床では朝日も差さず、まだ暗いので「今、何時？何の用」という感じ。電話によると「西枇の町が水浸した」との事だが、自宅は停電している以外は別に変わったところ無しで、状況がつかめない。

雨はほとんど止んだ状態で、ときどきパラパラと降ってくる程度。Ｔシャツ、半ズボン、サンダルに傘という格好で、自宅を出るが本通りは、近所の人が何人も出ているのが普段と異なるが、通りそのものは普通の雨の日と変わりなし。近所の人と挨拶がてら状況を確認しあうが確実な情報は誰も掴めていないようだ。しかし、本通りの人はほとんど避難しなかったみたいだ。まず、庄内川の堤防に上がると、堤防まで１メートルぐらいのところまで水がきている。（写真１）ここら辺、いつもは公園と畑からなる河川敷なのだが、その痕跡も見えない。庄内川がこんなに広い川だとは。話によると深夜の３時ごろは堤防から

写真１

庄内川はこの地点より約 800 メートル上流の県道 67（旧国道 22）の枇杷島橋の長さが約 150 メートル。写真付近は両側に河川敷が広がり約 500 メートルの幅がある。通常の水位から７メートル以上高く満々と水がある。写真中央の 13.8 の標識は河口からの距離（ｋｍ）。対岸の中央のビルはＪＲ名古屋駅のツインタワー。

手が洗えるぐらいの所まで来ていたとの事。これが溢れなくて良かったと思った。堤防から本通りに戻り、名鉄本線の二ツ杁駅の方へ坂を下る（本通りから比高約３メートル下）。坂を下り着たところで濁流が名鉄線の方から音もなく急速に広がってくるのに出くわし、はじめて西枇の町が冠水している事が分かった。（写真２～4）この途中、「新川から水が出たらしい」と言う話を聞き、「じゃあ、新川町はもっと大変だなー」と漠然と思っていた。この頃から、マスコミのヘリが飛んでいることに気が回った。濁水が坂を上がってきそうな雰囲気なので、いったん自宅に戻り今日は仕事に行けない旨を電話し、本通りより二ツ杁駅側に約 1.5 メートル下がった裏庭にある物置小屋の中からめぼしい物を母屋に上げたり、母屋の１階にあるものを２階に上げたりした。

自宅はまだ停電、水道は問題なし、電話はＮＴＴの黒電話は問題なし、NEC の FAX 付電話は使用不可、ガスはガス圧がおかしいのか？すごい音と勢いで出るが使えないことはないので、遅い朝食はそれで調理した。この頃から、父・祖父の知人から電話が引っ切り無しにかかってきて、全国に西枇の名と惨状？が伝わっていることを知るが、当事者であ

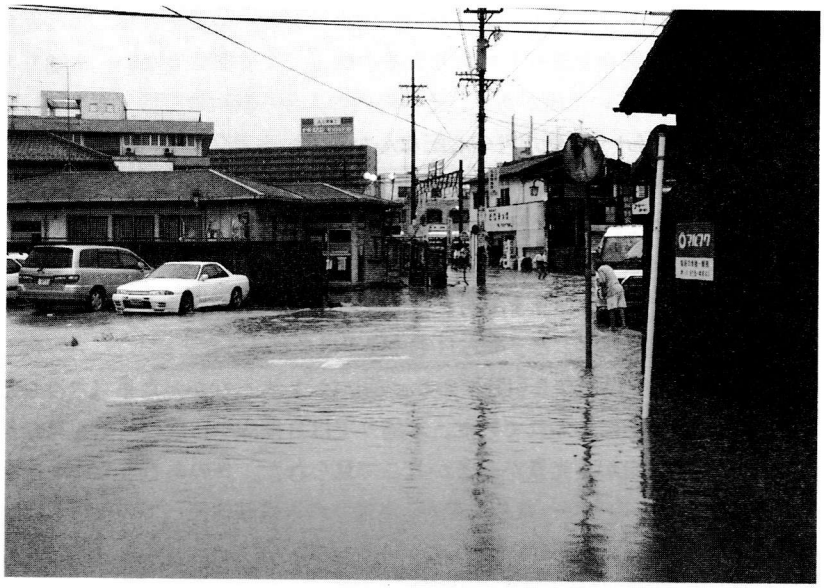


写真 2

自宅の東の名鉄二ツ杁駅への坂を下ったところ。中央の平屋の建物は二ツ杁郵便局。この奥に名鉄本線および二ツ杁駅がある。左手奥のビルは駅ビル。中央奥の看板のあるビルは三菱重工の社宅。社宅左手には三菱重工エアコン事業部の工場がある。この時点で、水深は足首から脛ぐらい。

写真 3
自宅の西方の坂。道の突き当たりは、二ツ杁神明社。その裏に名鉄本線が走っている。

写真 4
写真 1 の交差点を右（東）に行った所。電柱上部にあるように福祉センター（自宅周辺 の避難指定場所）が画面左手にある。この道を（北に）直進するとＪＲ枇杷島駅がある。

る自分たちがどういう状況にあるか良く分からない。携帯ラジオで情報を収集しようとするがマスコミのヘリが何機も低空を旋回しており、その騒音でよく聞こえない。本通りでも朝 9 時ごろまで電気が通っていた所があり、その町内の人から新川の左岸（西枇側）の堤防が切れたことを教えてもらい、「新川町の心配なんかしている場合でない。西枇の大半が水没する（実際にはこの時点で既に水没していた）」と感じた。「しかし、新川みたいな人工の直線河道でなぜ片側だけ切れる？」。裏庭に濁水が入ってきて、物置小屋も浸水する。その後も水位の上昇は容赦がなく、これはちょっとマズイナーと。しかし、見ているより他にしょうがない。午後になると本通りまであと 1 メートルぐらいと言うところで水位が安定し、雨がこれ以上降らなければ、どうやら自宅の浸水は免れそうだと感じた。（写真５～８）この時点で庄内川の水位はかなり引いており、朝には 1 台もなかった車（水没した地域から避難してきた）が堤防にあふれていた。本通りでは自衛隊や行政の活動を見なかったが、個人ボートで救出に向かう光景がそこかしこで見られた。日のあるうちに晩飯を作った。報道でガスは使うなとの事だったらしいが、本通りの人は結構使っていたらしい。家は用心のため、この日はＥＰＩを使用した。

13 日、堤防の復旧と排水作業が始まったらしいことは分かったが、1 日で水が引くとは思わず（水が引かないと何も出来ないので）、バイクで仕事に行く（名鉄もまだ水中）。庄内川を渡り名古屋市に入ると、すっかり平常通り。仕事場で携帯を充電する。夜、市内のネオンとは対照的に、枇杷島橋を渡ると逆に真っ暗。自宅前の通りが普段ではありえない渋滞になる。橋で車両の流入規制とかしないのか？。本通りの人たちが福祉センター（避難所の一つ）のために炊き出しを行ったらしい。 14 日、深夜に自宅周辺の電気が復旧し、朝には名鉄も平常運転していたので、電車に乗って仕事に行く。15 日からの連休は掃除・ゴミ出しなど。

幸いにも我が家は母屋への被害が無かったが、床上浸水した家屋では、まだ、床を張っていないところもあるし、明かりの無くなった家もある。

写真５
写真３の数時間後。坂の上から。

写真９
９月１９日撮影。写真３の坂。
これでもゴミは減った方。

町は悪臭とクレゾール（消毒薬）のにおいと砂埃がひどい。

日本地図センター刊『地図ニュース』2000-11月号 より転載

なお，白黒複製印刷となるため，現地の状況を想像していただくためにと考え，一部の写真については，カラープロッターによる出力プリントを準備し，事務局長様のお手を煩わせて挟み込んでいただきました。
（現地及びフィルム上の豊かな色彩は，余りうまく再現されたとはいえませんが。）
また，期限までに全員の方分のプリントが準備できるか，やや心もとなく，入っていない場合は小生の責任です。

あのまちこのまち〈105〉

白山麓 出作りの村の記憶 ―石川県白峰村ほか―

長岡（ながおか） 正利（まさとし）

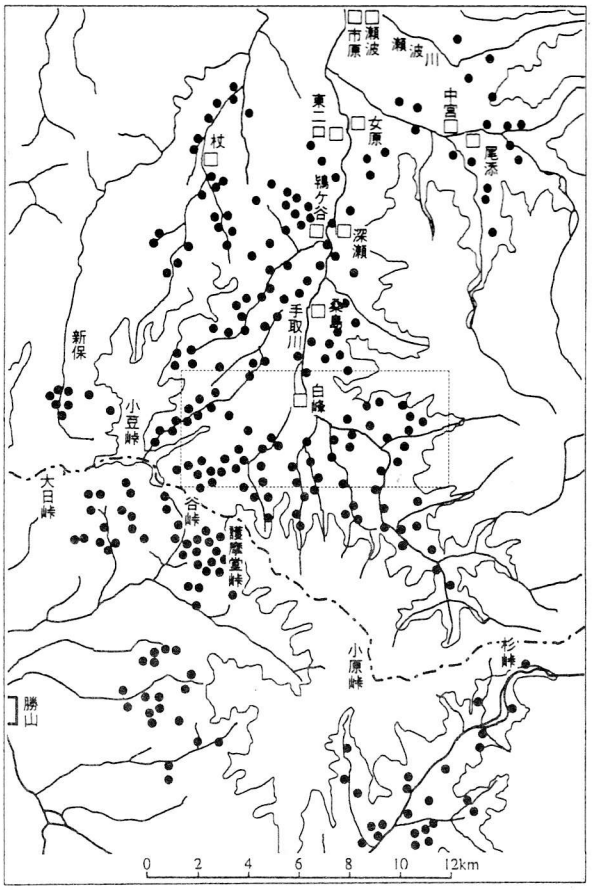
はじめに―白山麓のあけぼの

石川県・富山県・岐阜県・福井県にまたがる白山山系（両白山地）の西側山間部一帯に、古くから「出作（でづく）り」と呼ばれる伝統的な生活文化があった。出作りは、地理・民俗・歴史学の立場から研究の対象とされてきたが、高度経済成長期を経て今ではほぼ消滅し、往時の写真と文献の中に、あるいは一部家屋が「白山ろく民俗資料館」に移築されて、当時の姿をとどめているに過ぎない。

それが、ここに紹介する白峰村を中心とする地である。

白山山麓の村々の成立はかなり古い。このあたりの一帯は、平安時代には加賀国司の支配下に置かれた。その後、加賀の守護富樫氏の所領となり、一向一揆などを経て、寛文8年（1673）には幕府直轄の天領（てんりょう）白山麓（ろく）拾八ヵ村（現在の白峰村、尾口村、鳥越村、小松市山間部にまたがる）となって、加賀百万石の威光も及ばぬ別世界であった。

さかのぼれば、この地は、越前の僧泰澄（たいちょう）による養老元年（717）の開山伝承のある白山信仰の中心地として、平安時代中期以降から江戸時代まで、越前・加賀・美濃の3馬場からの山頂登拝の経由地として知られ、賑わった。白山信仰は、現在も人々の間に生き続ける御嶽講（木曾御嶽山）のような形とはならなかったものの、その面影は全国に散在する白山神社として今に残っている。

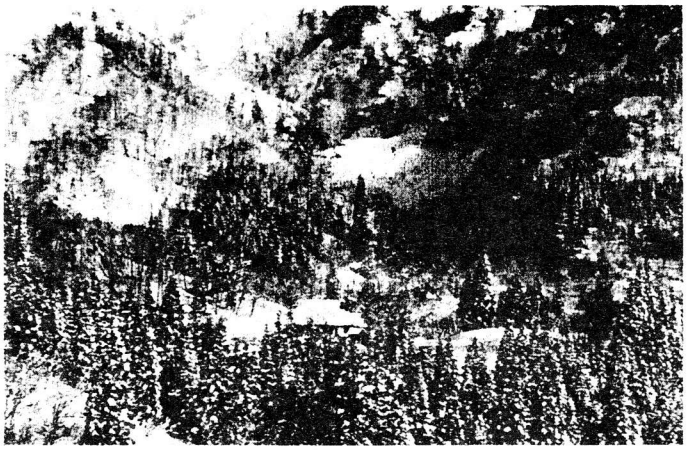


明治43年の地形図から見た出作り分布（山口(1994)より、その一部：原図は、田中・幸田、(1933)、地理評3巻）。□は、次ページ地形図の範囲。

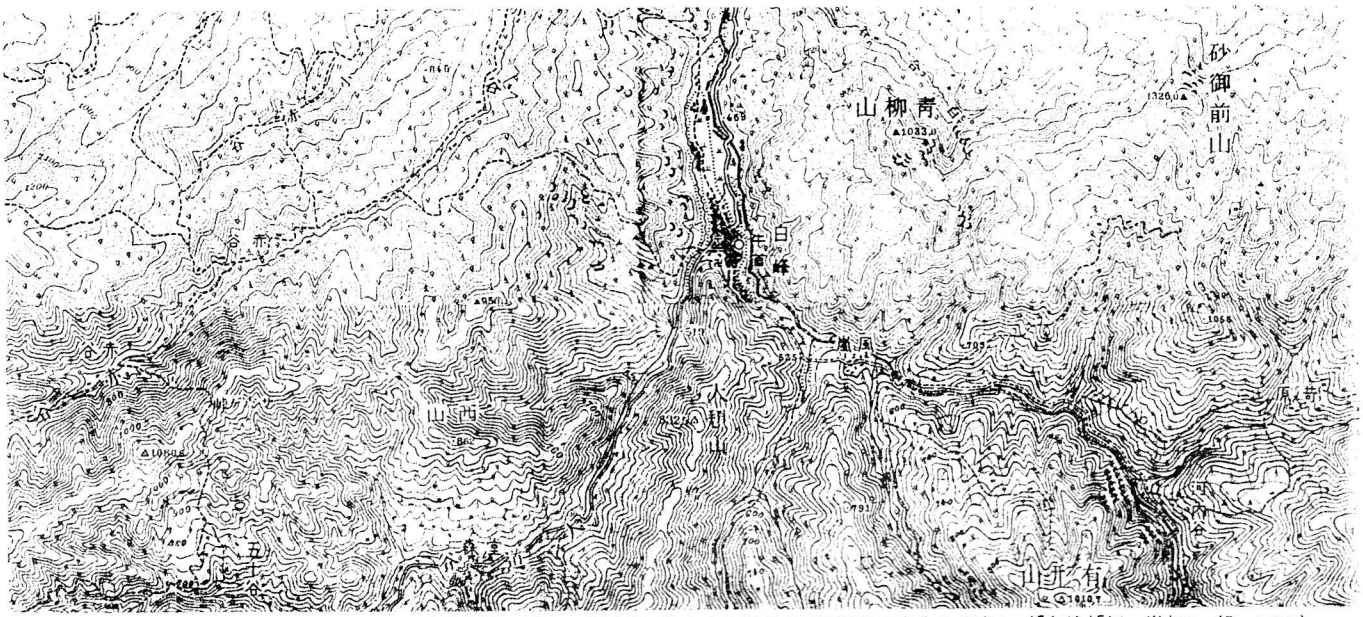
出作りの村々

「出作り」とは、無雪期に山中の家（季節出作り；次ページ左下写真）に移り住んで、農耕、養蚕、炭焼きなどに従事し、冬季に本村（母村）に戻る生活形態をいう。一年を通じて山中で生活する「永住出作り」（上記以外の写真の地）もあったが、冬の積雪による交通途絶を嫌って、昭和40年代には無雪期のみのものとなった。

この出作りの発祥については、本村での人口増加に伴う耕地不足を補ったものという戦前からの説と、もともと古くから周辺の山間斜面には散在する定住地があって、これが生活の利便性を求め



表紙と同じ地点、白峰村大杉谷の初冬の眺め
家は次ページ写真の長坂宅。



明治43年測図の５万分１地形図に見る白峰周辺。図中の山間部に散在する黒点(黒抹家屋)が出作りの家々（「白峰」「經ヶ嶽」の一部、×0.8）

て次第に本村に生活の本拠を移すようになったものの、春になれば山での仕事に戻り、やがては本村の人口増加によってさらに遠隔の山中への出作りが促進されたものという、２つの説がある。

歴史に見るその起源は古い。江戸時代の所領争い（山論）ほかの文書によれば、室町時代には既に出作りが行われていたもののようである。また、江戸時代には、牛首（現在の白峰村中心地の白峰）村民は広く近隣の勝山藩、郡上藩、加賀藩領の山間部に出作りに出ていたことが知られている。

幕末期の文久３年（1863）には、牛首の家数は480軒で、うち100軒が村方に居住、200軒が夏期不在の季節出作り、180軒は奥山に永住出作りで、形式的に村方の人別。なお、季節出作りの人々は、積雪期には、越前・加賀の平野部やさらに遠国に出稼ぎなどに出かけていたという。

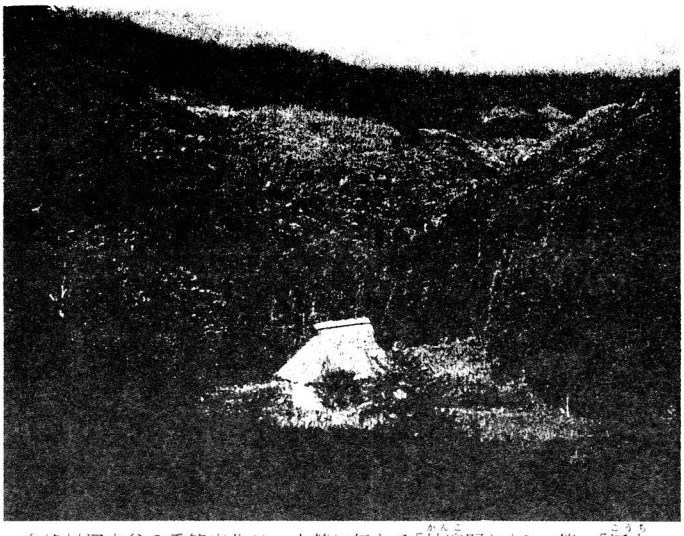
くだって、明治末期から昭和初期の調査においても、ほぼ同規模の出作りを数えている。

山中での生活は苦しいものであった。山深い傾斜地で雑畑を開いての耕作―斜面の樹木を伐開して畑を開き、これに火入れをしてヒエ・アワなどを植える。その地で５年ほど順次作物を変えて輪作し、その後の20～30年は自然に戻す。このような土地をムツシと呼んだ。本ページの写真のように、家の近くでの常畑や水田稲作が可能であったのは僅かな平坦地においてのみであった。ほかに養蚕があったが、これは全国での傾向と同様に、戦前が最盛期で昭和40年代には消滅した。

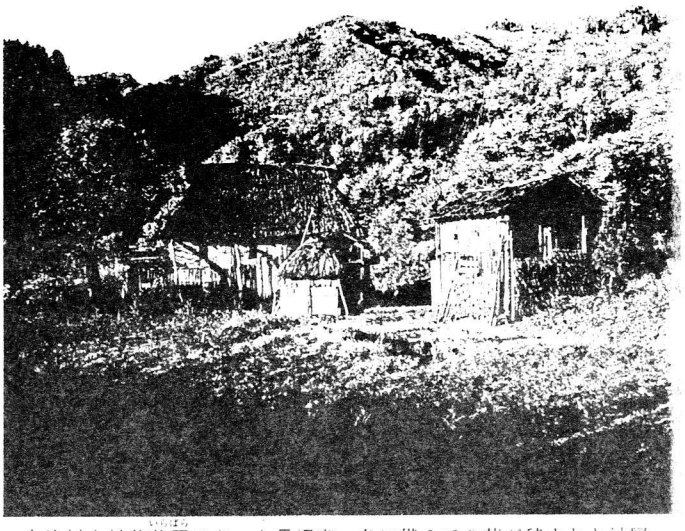
戦後もしばらくすると、山間部では、雑穀の作付けよりは杉苗生産や炭焼きが現金収入の面で有利となり、やがては電源開発や砂防工事、林業や製材業が盛んとなって、村の生活構造は一変した。

出作り地の終焉と現在

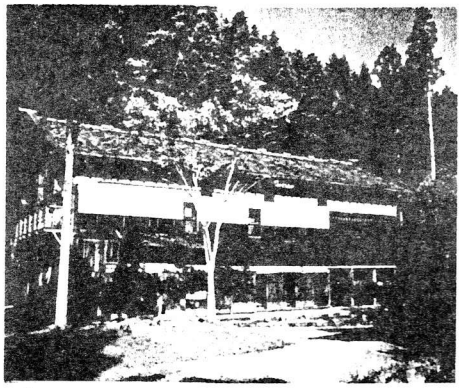
しかし、炭焼きや林業の盛況は長くは続かなかった。その後の高度経済成長と、いわゆる燃料革命（薪炭から灯油・ガスへ）が山間部の経済にも



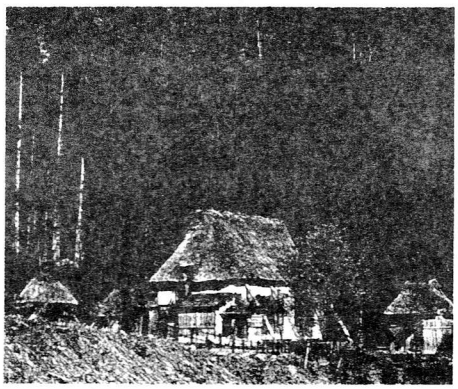
白峰村河内谷の季節出作り　山麓に伝わる「神迎踊り」の一節、「河内の奥は朝寒いとこじゃ、…、御前の風を吹き降ろす…」を思い起こすような冷夏の年の風景。家の周りはアワなどの畑。



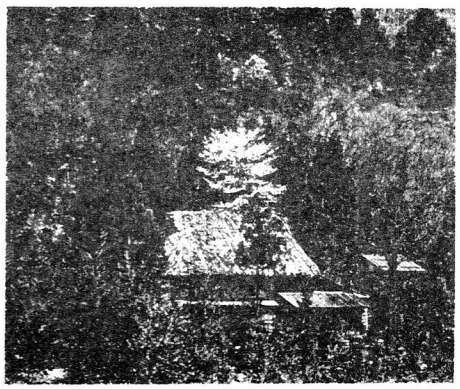
白峰村大杉谷苛原にあった長坂宅　冬に備えての薪が積まれた納屋(右)、ほか幾棟かの建物からなる規模の大きな永住出作りで、村内にあった一般民家とかわらない。



「白山ろく民俗資料館」に移築された白峰本村の家　豪雪と養蚕を反映した立派な造りの民家



同、移築された出作りの家　前ページの長坂宅で、周辺の建物と一体的に保存



現地に現存するほぼ最後の出作りの家　白峰村大空の織田宅。春5月山桜の眺め

大きな影響をもたらした。炭焼きはすたれ、それに追い打ちをかけるようにして、木材輸入自由化以降には林業は凋落の一途をたどった。

一方では、公共土木工事などによって現金収入の途が広がったことに加えて、若い人々を中心に都市部への人口流失が続いていた。そのため、自然の生態系と調和しつつ自給作物と商品作物を生産するこの出作りは、とうに成り立たないものとなり、出作りはついえた。

現在、その一部家屋は「白山ろく民俗資料館」に移築・保存されている。新旧の出作りの家々だけではなく、養蚕が盛んで豪雪の地であったことから、3階建ての剛健な造りの家も見られる。また、同館には、暮らしのほとんどを自給自足でまかなっていた時代の貴重な資料を多数展示して、雪深い山村特有の暮らしぶりを今に伝えている。

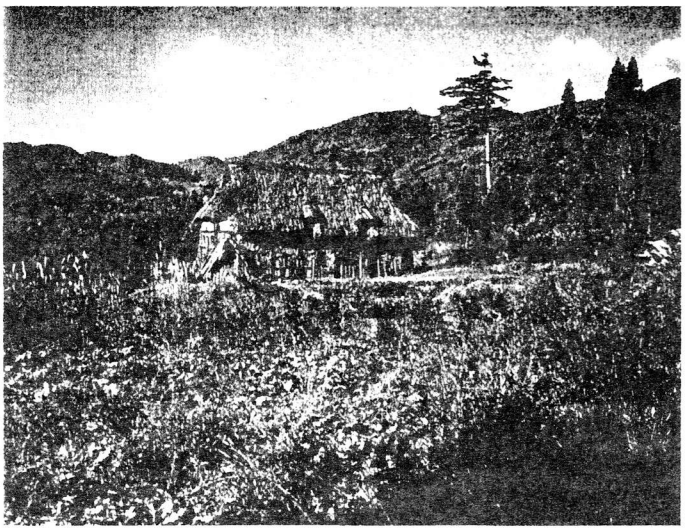
ほかに、白峰村には、著名な恐竜化石産地であることから「白山恐竜パーク白峰」館、山の恵みによる素朴ながらも味わい深い食べ物の数々。また、白山国立公園への玄関口としての、あるいは冬のスキー場など、四季折々のにぎわいがある。

わが国の高度経済成長がようやくに翳りを見せようとしていた頃、昭和50年代に入って、白山麓の山間部広くに散在していた出作りの家々は一斉に姿を消し始めた。それは、当時の全国各地で見られたように、開発の手が及んだがためのものではなく、もはや、辺鄙な山間部には一時的にせよ、住む人々の居なくなったためにほかならない。その後僅かの間に、今となっては個々の家がいつの冬に潰えたのかの記憶も定かではないが、守る人のない家々は、年ごとの豪雪に耐えかねるように、何時とはなく自然のなかに埋もれ、水田のあるものは水芭蕉の茂る湿地に、あるいは杉の植林地にと姿を変えて行った。

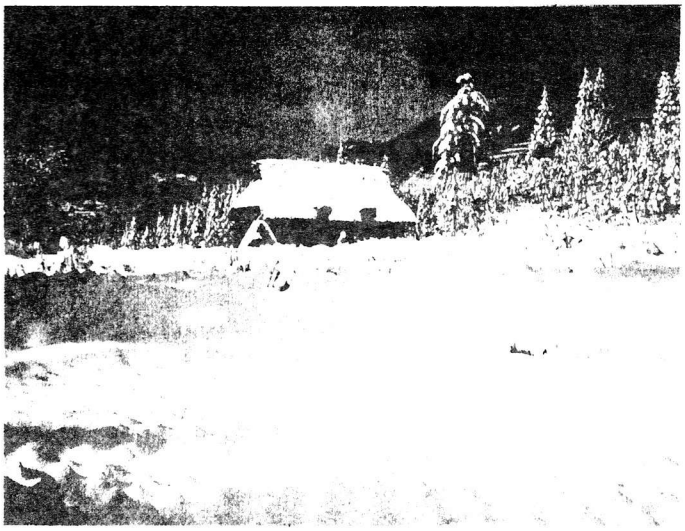
白山麓の暖かな山懐の秋に往き逢うたびに、往時の人々との語らいを、もう随分昔のことにもかかわらず、わずか一ときが過ぎただけのように想い、懐かしむ。

主な文献、ご参考のために

若林喜三郎編『白峰村史、上・下巻』白峰村役場（1962・1959）
北國新聞白山総合学術調査団編『白山』北國新聞社（1962）
白山総合学術書編集委編『白山－自然と文化』北國新聞社（1992）
山口隆治『白山麓・出作りの記録－牛首村民の行方』桂書房（1994）
橘 礼吉『白山麓の焼畑農耕』白水社（1995）
白峰村のホームページ：http://www.vill.shiramine.ishikawa.jp/



白峰村五十谷にて　紅葉は10月中旬から11月上旬にかけて全山を彩り、たちまちに過ぎてゆく。望見する山肌の各所に、このような家々が点在するのどかな眺めであった。

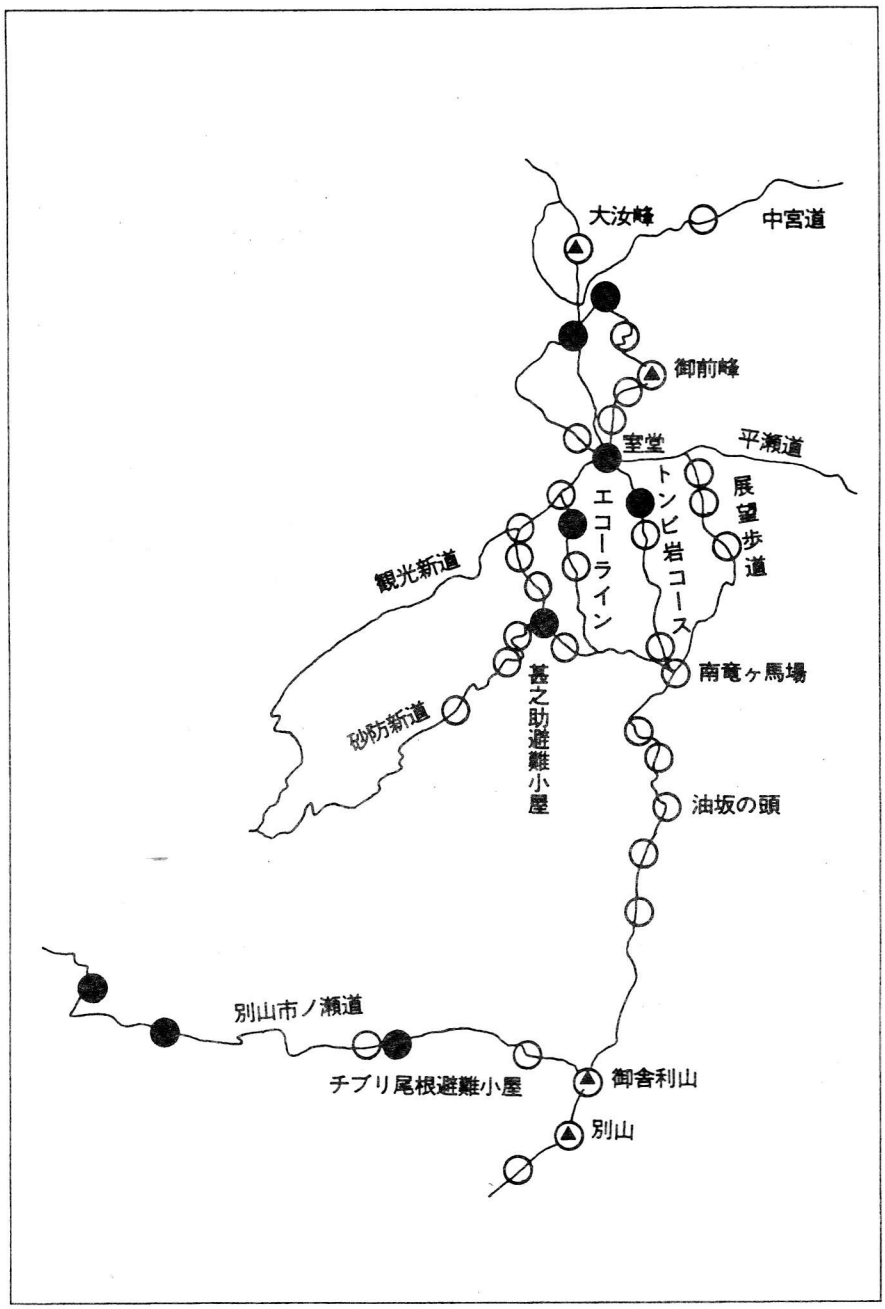


11月下旬には積雪を見る　まだ季節出作りの続いていた頃で、手前は稲刈り後の水田の新雪。今、この地では、何代にも亘って仰ぎ見られてきた標ばかりのトド松を残すばかりの風光。家も田も消え果てた。

いしかわ人は自然人　NO.52　2000.7.1発行
（橋本確文堂）p34～p.35の転載

で子供一頭が、また同じく一五〇〇㍍で子供三頭が発見されています。

今までの調査で、白山山系では北は金沢市の高三郎山から、南は岐阜県の大日ヶ岳までの広い範囲で見つかっています。図には最近の調査で明らかとなった場所を示してあります。黒丸で印したのは子供が見つかり、近くで繁殖したことが考えられる記録です。



白山山頂部におけるオコジョの目撃記録（●は繁殖に関する記録）

冬に低地で見つかる

白毛のオコジョが、白峰村の標高約七〇〇㍍で一月に、尾口村の標高約六〇〇㍍で十二月、一月、三月に、鶴来町の標高約四〇〇㍍で二月などの発見記録があります。おそらく冬になると、低山に降りるものがいると考えられます。この中で尾口村の記録は、白山自然保護センターブナオ山観察舎およびその付近で違う年に見つかっており、冬期の生息地となっているようです。

日本列島の分布の西限

ところで白山は、日本列島の中でオコジョの分布の西の端にあたります。氷河時代が終わって、地球が暖かくなると、高山に逃げ延びたオコジョだけが生き残ったと考えられるのです。白山より西方には、オコジョが生き延びることができる高山はありません。白山のオコジョは、現在の分布の中心である日本アルプスからは遠く離れ、孤立した存在です。高山植物やイワヒバリなどと同様に将来が危ぶまれる生き物の一つなのです。

夏に白山へ登ったとき、避難小屋や室堂、お池めぐりコースなどで、ひと休みしているときに周りを注意して探してみてください。小さくて愛嬌のあるオコジョに、運が良ければ出合えることと思います。

県：準絶滅危惧

白山のオコジョ

上馬康生
石川県白山自然保護センター

愛らしい姿で登山者を魅了するオコジョ。白山山系のオコジョも、高山植物などと同様に、その将来が危ぶまれています。

オコジョに始めて出合ったのは、もう三十年近く前のことです。白山の四塚山の山頂近くで、山の仲間四人でいっしょの時でした。休憩していたところ、すぐ近くの茂みから、ひょっこり出てきたのです。静かに動かずにしていると、私たちを見上げ、引き返して姿を隠し、またすぐに姿を現すという行動を何度か繰り返しました。一度は、私の登山靴に前足を掛け、不思議そうに見上げては、驚いたかのように姿を隠したりして、とても愛嬌のある仕草でした。その後、白山のいろいろな場所で何度が出合ってきました。

オコジョの特徴

オコジョはイタチの仲間の小型の哺乳類です。夏毛の背は濃い褐色、腹は白色で、冬期にはほぼ全身白色になりますが、尾の先の三分の一は一年中黒色です。雄の方が雌より少し大きく、頭と胴体の長さは十五～二十㌢くらいのほっそりした体つきで、五㌢くらいの尾がついています。一見かわいらしい動物ですが、主にネズミ類を餌とし、他に鳥の卵や昆虫も食べ、時にはノウサギを襲うというどう猛さも持っています。

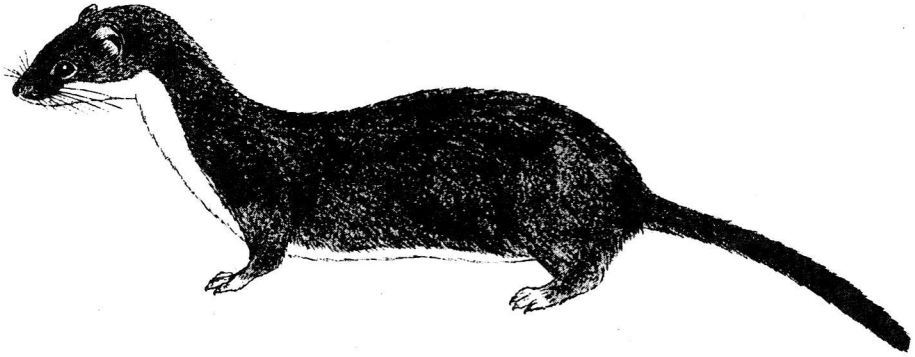
子どもの成長

オコジョの研究者である野紫木洋さんの報告では、子育ては雌のみで行い、出産は四月下旬から五月上旬頃ということです。白山ではまだ深い雪に覆われているころです。そして、約七週間で初めて巣の外に出て、二か月半で母親に連れられて出てくるようになります。このあと秋まで子は母親と一緒に生活し、十月下旬頃には独立するようです。

白山での分布

夏の白山では、登山シーズンの七月～八月に、標高二〇〇〇㍍以上の亜高山帯から高山帯で観察されることが一般的です。この時期は、前記のように子供が巣場所から出てきて動き回るころなので、好奇心旺盛な子供が人の近くに来て発見されるのではないかと思われます。また高山帯では岩場があったり、背の低い草木しか生えておらず、見つかりやすいからかもしれません。

最近の調査で、高山帯だけでなく、より低いブナ帯からの記録が見つかり、しかも繁殖していることも分かりました。例えば別山チブリ尾根のブナ林の標高一三一〇㍍



オコジョ（イラスト／加藤友美）

ＯＢ通信

３期　岩井　修

長年勤務した会社を退社し、新規巻き直しでニッショーに入社しましたが、60歳を迎え、仕事が一段落したこともあり、この４月退社しました（現在失業中）。忙しくはしておりますが、心の中はゆっくり時間が流れております。「やまざと」を読んでおりますと、KUWVの人々（OBを含む）の心の中には、いつもこのような時間の流れがあったのですね。

この７月よりインターネットというヤヤコシイものにも入りました。ワンゲルのＨＰにも早速タッチしてみました。皆様の努力を本当に有り難いと思っております。

さて私は家庭の事情もあり、現在蓄電中です。錆付いた英会話を磨き直し。コンピューターももう少しできるようになりたいものです。来年はIntercultural Voraunteerとして活動を開始する計画です（現在登録はしておりますが、自分でやらねば何も始まりません）。

さて、天敵田村教祖に一言：”子供の躾は父親の役割”には賛同します。最近講演会で”子供が親の思うように育ったら「子育て失敗」”と聞きました。我が家の息子は田村教祖のように育ってしまいました。「大成功」です！

お誘いのあった南竜ケ馬場へは残念ながら行けませんでした。前回のメールでは”家の事情”と、軽く流しましたが、実は母の介護が大変で、愚妻より「協力しないなら里に帰らせていただきます」と宣言されて、仕事を辞めて現在失業中なのです。特にお許しを得て、９月９日～10日に立山で開催された第３期WVOB会には出席できましたが、本当に楽しいひと時でした。来年は「山の坊スキー場周辺」で開催の予定だそうです。その時村田女史（お爺さんとお婆さんに紛れ込んだ美人）が”オブラチナヤ山”に登った話をされ、ワンゲルＨＰに詳細あり、とのことで、久しぶりにＨＰを拝見しました。

私は学校に通うのに忙しくしております。先日英会話学校の先生から「禅とは何か？」と質問され、困りました。正解は”識らずない”（達磨禅師の答え）ですが、それでは理解してもらえません。現在、禅の研究とその翻訳に励んでおります。その先生は10月末にはアメリカに帰りますので、それまでに何とか”禅”の概念を把握してもらいたいと考えております。

また、来年のWV活動に備えて、身体のトレーニングのため（実は愚妻に催促されて）畑仕事にも励んでおります。山口では雪が降らないため、野菜作りはこの秋からがシーズンです。来年には学校と失業保険を卒業し、本格的に第三の人生に入ります。今回第３期同期会の幹事をして頂いた西尾氏・高島氏、ＨＰのmaintenance をしておられる奥名会長、舟田さんに感謝して、メールを終わります。

０４期森島

度々のＯＢ通信、有難うございます。
高度？なデジカメの画像も楽しく拝見しています。

ＧＷもふくめ、山に小屋作業にと楽しんでおられること
いや、ご苦労さまなこと感謝です。

先日工学部へ行く用事がありましたが日帰りでしたので失礼してしまいました。
久しぶりの金沢でした。
この次は、山に入れたらと思いながら・・・

またＯＢ通信を楽しみにしています。

０６期大崎

「やまざと」１３号受け取りました。また奥名会長からのメールも毎回受け取っております。いつも有り難うございます。御両人の情熱に引かれるように、ぼつぼつ山歩きをしております。同じ大学の隣の建物に同期の石橋さんがいますが、山の専門家（古生物学）で世界が相手（うらやましい！）なので、連れて行ってもらえません。
一人で福岡周辺の常緑樹の暗い山道を徘徊しています。もうすぐ町の中を徘徊するような年齢になりましたが、遊びで、世界を徘徊できるようになりたいと思っています

０７期四十万

すばらしい、便り有難うございました。
先日私も、親父の初盆で富山に帰省するのに、８月１２日に松本から乗鞍を超え高山経由、白山スーパー林道に入り、中宮温泉に一泊いたしました。
翌日は、蛇谷を散策し、姥滝（今は姥ケ滝というようです）を鑑賞し、どすの湯（今は親谷の湯と言うようですね）へ行き、そこから白川村に入り井波にて欄間とお寺（瑞泉寺）を拝見ししてきました。
８月１４日には、例年のごとく第７期を中心とした二組で金沢カントリー倶楽部でゴルフをやりました。（メンバー　稲葉、影近、小松、田丸、澤田、新谷、宮本、干場、四十万）
貴兄たちのますますのご活躍を心から祈りしております。

０８期柴田

暑中お見舞い申し上げます。
水戸は関東でも涼しい方と言われていますが、年を取ると暑さが苦手になるようで、この暑さには参っています。体が水ぶくれ状態（？）で、だるくて糖尿病にでもなったかと思うくらいです。早く秋になればと思いつつ過ごして居ます。

さて、野沢温泉スキーのビデオ頂きました。貴重な記録を有り難うございました。
もっと短いと思っていましたが、１時間ものをはじめから終わりまで楽しく見ました。
プレーバックしつつ、家内と一緒に夜中の２時までかかりました。スキーの滑りもいろいろありますね！ここまで編集するのは、本当にご苦労だったと思います。KUWVのOB会にビデオディレクターの素養のある人が居るとは知りませんでした。

当方、７月下旬に１週間、シアトルへ行き、米国機械学会の会議に出席してきました。日本よ

り約１０℃くらい温度が低く、また好天に恵まれ極めて快適でした。佐々木のいるシアトルマリナーズの試合を見て来ました。大リーグ３時間あまりの大変熱戦でした。また閑を見て、シアトルから約100km南にあるレニエ山（4300mm?だったか）のドライブを楽しみました。富士山によく似た、非常にかっこいい山です。氷山の近くまで行きました。そこでは、高山植物は日本とは少々異なるようですが、お花畑は丁度見頃でした。米国の国立公園は入園料が必要ですが、極めて自然が良く管理されていると感じました。涼しさと山と大リーグを満喫し、満足した１週間でした（会議の方もそれなりに？？？）

０８期柳川

日頃より役員の皆様には、忙しい中種々の活躍・会員への配慮に本当に頭が下がります。何も出来ない私にとって、皆様の躍進を暖かく見守り静かなる声援を送るしか手助けができません。最近、提供されるホームページの更新日を確認しながら楽しみに拝見させていただいています。インターネットの普及もかなり急速のようで、ＯＢ情報もこちらの方が、早く伝わりそうですね。筆不精の当方にとっても、こちらの方ならなんとなく対応出来そうです。会員のＥメールアドレス等お願いしたいのですがどうすれば教えていただけますか。

０９期清水

私（旧姓）鈴木あつ子を
思い出して頂けたそうで・・・・・・。でも、違っているかもしれませんよ。素敵だなんていわれた事もありませんので。でもいいではありませんか、お互いにあやふやな記憶のなかで。

いつも、皆さんのためにいろいろお世話をして頂いて本当に頭が下がる思いです。有り難うございます。私たちは、実家が金沢にないものですから、なかなかそちらの集まりには行けません。
山にもすっかりご無沙汰ですが、夫婦とも歩くことは好きで、その辺を歩くようにしています。いつかベルクハイムまでは行きたいと思いまして。私は、会員ではないのですが、もと同期だった大島さんや、岩田さんなどにお会いしてみたいなあと思ったりしています。もし、大島さんに会う事があったら、よろしく言っておいてください。自然を愛したいと思いながら、雑事におわれている年月です。子供の受験が終わったと思ったら、去年は結婚式今年は娘の出産の手伝いとなかなか家を空ける事もできないものです。それではどうぞ元気でご活躍ください。
清水一の家族の者でした。

いつも連絡有難うございます。
本当に暑い夏でしたね。９月１３日に、東京近辺のかたがたが集まって懇親会を開きました。その時青柳さんが、白山でのビデオを見せてくれたと、主人が言っておりました。東海地方の、災害はどうだったでしょうか。
ワンゲルのかたがたでその地方に住んでおられる人も多いので心配しています。
この夏私たちは、ジジババになりました。孫にこんなに愛情をそそげるなんて・・・
想像以上でした。

１０期木津

白山への誘い、ありがとうございます。森川さんや青柳さんからも、初メールいただき旧交を暖めましたが、残念ながら都合により行けませんので、皆様によろしく。
実は、久しぶりの白山を満喫して来ちゃいました。
*
７月２日、例の奥様グループに誘われ、白山へ久しぶりに登りました。２５周年白山登山以来の快挙です。
*
今週、厚子リーダーは長男の息子、つまり初孫のお宮参りに、お嫁さんの実家のある、静岡へ夜討ち朝駆けにて、ご主人とドライブしなくては成らず、そのための気合い入れにどうしても白山に登りたかったとのこと。白山頂上の展望台では、明後日はここよと富士山の方角を指さしておりました。おばあちゃんには違いないのに、元気なこと　元気なこと。
さっき挨拶にみえて、孫から元気もらってきたと報告ありました。
*
岐阜県白川郷の平瀬温泉より登る。
このコースは昨年は通行止めで使えなかったとのこと。小生にしても、別当出会、他の登山口は知らない。
平瀬登山口　８：５０出発　２回休憩、昼食タイムあり
室堂着　　１３：００
白山頂上　１３：５０
白山下山　１４：３０
平瀬着　　１７：００　　その後は平瀬温泉（＝銭湯）に直行
　以上、登り５時間、下り２時間半の、ジジババ連の登山としては、登山道の整備も行き届いており、１km毎の立派な道標もあり、安心感を与える格好のコースかと思います。途中すれ違った人達は、名古屋方面からの１泊の登山者が多かったようです。中には、前夜避難小屋で宴会して朝から頂上往復して、下山中のグループにも出逢いました。
但し、今年は雪が遅いのか、雪渓のトラバースが３ヶ所あり、空手でキャラバンもちょっとやっかいでした。特に、登りはいいけど、下りは、経験の少ないかみさんは完全に腰が引けてましたね。スッテプの踏み込みと、バランスを保つのには、革靴とストックが要りようでしたね。アイゼン・ピッケルまでは必要ないけど。
すれ違う人の半数以上は、ストックを所持していました。
　お花は数多くみましたが、名前の判明したのは一部、昔憶えたキヌガサソウ、ニッコウキスゲ、そしてクロユリぐらいで、後は写真と図鑑で判明したものです。室堂の黒百合は印象的でした。
　室堂の小屋小屋が使われていないようで閑散としていた。下る頃には、ガスってきて、霧で煙る賽の河原を行く、御婦人方の後ろ姿は印象的でした。まずは、山行写真日記を参照あれ。

期再見　　２０００．７．７　木津 治男

１１期井上

記念登山から一週間がたちました。皆さんのメールを見ていた母が一言。「私はさぼって登らなかったのではなく、仕事があったから行けなかっただけなのに・・・」そして、「井上家で一番登っているのは私よ！！
だって蓼科山にも登っているんだもん。
五月の立山にも登ったわ。史三さんは足がつっていたけれど。」なあんて、言っていました。

１０月も白山を計画していたのですが、どうやらまたしても仕事で参加不可のようです。残念。（ここまでの文章は母のチェック済み、しかも１０月末まで土日も全部仕事だと付け加えるようにとの命令）

今回の登山で父はまだ体力がありそうだとわかりました。行く前に母から「お父さんが一番心配」と耳打ちされていたのですが、スピードこそないものの、足もつることなく、頼もしい姿でした。きっともっとゆっくり歩いて白山を満喫したかったんだろう・・・

聖子は１０月も山に行きます。７．８．９日に妙高山へいってきます。地図を見てちょっと、大変かな？と思っています。ちなみに今回の白山で姉が初使用した、リュックなどその他は私の誕生日プレゼントだそう。（下りてきてから聞きました）１０月にもう一度紅葉の白山に登りたいな。そして、深田　久弥の百名山写真コンテストに応募しよう。
今回は自信作が何作か撮れました。

山のシーズンが終わったら、今度はスキーだ。

久しぶりなので、練習しようっと。

せいこ

つい最近まで皆さんと長い間音信不通だった我が家が、まめになったのもｅ－ｍａｉｌと私のおかげでしょう。

父・母はすでに今年の山はあきらめ来年のスキーの話をしています。野沢にはうまくいけば、４人でいけるでしょう。しかし、ここ７．８年スキーをしていないのでハード面からそろえなければいけません。１０年前のウェア、１５年前のスキー板。身体だけは最新です。

加藤さんへ
先日、送っていただいたビデオで最新のファッションを参考にさせていただきます。（＾。＾）ＫＵＷＶのＨＰなどをみると、なんて皆さんまめなんだろうと思い、我が父母を振り返りました。そこには、目をそらした二人が・・・（二人の結婚式の写真が先日の掃除で出てきました。焼き増しはしてありましたが、まだ送っていないそう。しかも、記念すべき二人の門出の写真はアルバムではなく、カメラ屋のビニールに入っていました）こんな、両親ですが何卒ご指導、ご鞭撻のほど二人になりかわりまして、よろしくお願いします。

１１期加藤

御嶽山登頂速報（今後、森川より詳報ありの予定）

10/7　快晴、
6：10森川家発（タクシー　近鉄、ＪＲ　バス　ロープウエイ）
9：30七合目着食堂にて山菜そば食す（森川はバスでほろ酔いにてコーヒのみ）
10：40頃登山開始
10：50行場小屋の力餅がうまそうだがパス。
11：30頃八合目女人堂着　小屋にてハヤシライスを食す
13：00出発
途中　行動食の他吉野名物柿の葉寿司を食す。（森川は２９０円の助六寿司パック）
15：00頃九合目覚明堂着
15：30頃頂上ワンデリング（寒い）
17：30頃小屋帰着
晩飯すこぶる悪し。食えるオカズは金平ごぼうと森川の持ってきたふりかけのみ

それでもお茶漬けにして三杯の飯のお替りをしたが。

10/8
5：30起床　小屋の小窓からご来光。
上空晴れ、下界雲海　３６０度の展望

7：00発　二の池、賽の河原、三の池、四の池、最北継子岳までのんびりと縦走
途中バナナ、チョコレート、シュークリームなどの行動食のみにて昼飯抜き

それでも継子岳にて沸かしたドリップコーヒが最高にうまかった。
12：00五の池小屋下山開始
15：00無事濁河温泉着
飯がうまいっ！！　つい、森川がお櫃のお替りをしてしまった。

10/9　曇り　露天風呂快適　朴葉味噌もあり朝飯がうまいっ！
8：40発（バス　実に景色の良い道であった）10：00ＪＲ飛騨小坂着
名物おばあちゃんの五平餅５本食す（森川は旅館の朝飯を食いすぎて１本のみ。）
11：10発（普通列車）13：10頃美濃太田着　名物四季の釜飯食す
13：30頃発（普通）
14：00頃岐阜
14：12（快速）
14：27大垣
14：45（新快速）
15：20米原
15：26（新快速）
17：25西明石
17：30（快速）
17：33大久保
17：50頃我が家無事着

足が痛い割に体重があまりへっていなかった。何故だろう？

11期　森川

御嶽初登頂成功。補足説明。
１．Ｋ氏の食欲
10月７日　5:45味噌汁だけ
10月９日　7:00めし２杯
10:30山菜そばとバナナ２本
10:00五平餅５本
12:30ハヤシライス
13:30釜飯
15:00柿の葉寿司
17:30めし３杯
この馬力で山に登るのだから、同伴者は大変、但し、15分過ぎるとやたらに写真を撮りたがる。御薩で、24枚撮６本使用して、家で調べたら残りは１枚のみ。いくら、食欲の秋でも…。

２．Ｋ氏のナンパ術
（１）その１　10月８日御来光を見に行き、親子の女性をゲット。山小屋から二の池、サイの川原、三の池まで、約３時間デート。
（２）その２　10月９日飛騨小坂の真智で五平餅売りのおばさんゲット。御薩でコーヒー御相伴になる。

３．感想
御嶽は 360度展望もよく、山頂の池巡りは白山とは趣が異なり、花の時期、夏にまた是非行きたい山である。有名な割りにゴミもなく、山道も歩かれた様子もない。四の池のように、水が溜まっていないのに、川として流れ（ロープウェイ山頂駅より見える）滝として落下している。濁河温泉は、国有地なので廻りは自然が残っており、湯の質もよく静かな温泉でした。是非

一度は味わって下さい。
相棒と天候と紅葉と温泉に恵まれ、クリマメの木とシラタマの木の実も味わえた優雅な旅でした。

4．写真参照方

森川です。
井上家ミレニアム登山２０００天気を心配していたのですが無事下山おめでとう。
考えてみれば、雨男の●三さんがいるのだから少々天候が悪くてもあたりまえかな？

今年は暖かいので９月になっても、花が咲いているのでしょう。美しい華を見れるのも、普段の心がけのよさかな。

ところで、お荷物の話しがないが、道具を揃えたところまでは聞いたが父上は本当の登ったのかな？

９／１１（月）東海地方は豪雨にみまわれました。１７時頃近鉄、関西線とも止まっているという話しを聞きすぐ帰ろうと思ったが、雨が強く工場の道路も１０ｃｍ程水が浸かっており少し様子を見ていた。19時頃車で帰る人に金山駅まで送ってもらったら、名鉄、JRとも止まっており、とりあえず、地下鉄で名古屋駅まで行くことにした。地下鉄の駅で同僚に会い話していると、高速バス（高速有料道路）で帰るとの事。
名古屋駅で近鉄がいつになるか分からないとの事で、高速バス乗り場に行くと、凄い列。どの列か確かめに前へ行った時、１時間遅れの「南桑名」行きバスが出るとの事。桑名に５０数年住んでいるが何処か分からない。聞いた所、家から歩いて４０分ぐらいの所。知らない人が多いのか乗る人も２／３程（因みに長島温泉行きは満席で立っている人もいた。）
バスは名古屋市内を通過して名四国道にでるまで１時間強かかったが、下水から逆流して吹き出す噴水、腰まで水に浸かって歩いている人、水に浸かって動けなくなった乗用車を尻目に走り、途中でUターンしたり、２時間で桑名到着。２２時３０分家到着。近鉄もJRもまだ止まったまま。
９／１２（火）朝
近鉄は名古屋ー四日市間で止まったまま。９時ようやく開通したので、会社へ行くこととして、名古屋へ行くが名鉄が動いておらず、また地下鉄経由で会社へ。会社で聞くと約１／３が家へ帰れなかったとの事。１４時にJRの中央線が開通。前日帰れなかった人がおおく、また朝出てこれない人もいるので、15時に帰宅OKとなる。
今回は私としては「ついていた」としかいいようがない。いつまでも、この『つき』が続きますように！

１１期芝田

白山の日は、女子どもが夏休みで旅行に出かけ、私は犬の世話のためにお留守番なのです。

ところで、金沢に戻ってきた津田を誘いだしませんか。工大の教授になって、高尾台に豪邸を構えているのかな？
それにしても、ノンリニアビデオ編集は難しい！

加藤君、
ＶＨＳ（と８ミリ）が届きました。
おもむろに野沢のＶＨＳを見たのですが、すごいじゃないですか！
最大限に学校の機材を起用しましたね。

わたしもたまったデジタルビデオ（シルクロードと欧州旅行が主）を編集しなくっちゃ。
これって、とにもかくにも時間がかかるのですよね。その時間が苦じゃなくて、楽に感じられないととても出来る仕事ではありません。
で、感想を。
・小技（エフェクト）はできるだけ使わず、すなおなトランジションに徹する。
・思いっきりかっとして、簡潔にする。

じゃ、マックＧ３にFinal Cut Proを走らせて、私も挑戦してみるか。

ところで、節子編集長、原稿提出時の写真はjpegでもいいの？

では、白山をお楽しみあれ！

今、名古屋に向かうしらさぎの中。なかなか充実した一日でした。
きのう（３日）は、松本から金沢へバス。奥飛騨の紅葉はしっとり濡れていました。金沢から福井まで来朝、さらに勝山まで京福電鉄で１時間弱。
勝山駅には無料のレンタサイクルがあったので、それを借りることにします。ギアつきが無料とは嬉しい話です。（市役所がスポンサーのようです）。
駅から30分くらいこぐと平泉寺に着きます。夕暮まで境内を散策。平泉寺の村自体も。ゆるく傾斜した道にそって豊富に水が流れ、屋敷も富豪を思わせ、なかなか趣があります。
宿は平泉寺旅館といって、ちょっとした割烹（といっても食堂に近い）の上のフロアーです。特に情緒はありませんが、平泉寺に近いのが取り柄です。
翌日、つまり今朝は６時に起きて谷峠にむかいます。４時間かかるかと心配した道がわずかに２時間。坂が思いのほか緩やかなのでした。途中にはずいぶん廃屋が目立ちます。
谷峠から白峰まではあっという間。資料館と紬のデモを見て、白峰は早々に去ります。下に下りる北鉄バスが１日に３便しかなくなっているのには驚きました。
復路、谷トンネルの少し手前で右手に入る白木峰林道を上がります。しばらく行くと開けて白山がばっちり見えますね。そこにお目当ての「僻村学校」の新しい建物が二つ建っていました。あとは、トンネルをくぐって一路勝山に下るのですが、雑木林の紅葉はなかなかのものでした。
終日快晴。京福電車から振り返れば、白山がばっちり見えました。そして空は夕焼け色に。
以上、高橋治の「さまよう霧の恋歌」の現地検証の旅でした。

１１期長岡

都内では，週半ばからミンミンゼミの声が聞こえ始めました。日々の通勤経路の途上にて，早春の頃には日々彩りを変えていた渋谷道玄坂のケヤキ並木はすっかり濃い緑一色で，ここで意外なことに鳴いています。

また，ここしばらくは，天気が安定しそうで，まもなくの白山でも好天と日焼けが待っていそうな。（^^;）

その折，或いは旧盆の頃に北陸に行かれる方も多いと思いましたので，以下，面白そうな所の道路事情です。実は，先週末に実家（富山県福野）往復の所用時などでの知見です。

・乗鞍岳；ここはご存知の方も多いと思いますが。ちょっと耳寄りの話を。
山頂駐車場脇では，ハクサンイチゲの花盛り。ほかにも，登山道脇の砂礫地でコマクサなどもありますが，観光地故に全般には大したことはありません。今年はどこでも雪が多い中で，ここも例外ではなく，夏スキーの場所も例年に比べて大変な広さです。朝のうち遠望できた白山東面にも，随分の雪渓が見えていました。
ここで，他言無用の，とっておきの場所をご紹介しますと：
５万分１地形図に，肩ノ小屋の東にある宇宙線観測所から，五ノ池・里見岳を廻って畳平駐車場に出る道が記されていますが，（ただし，現地は完全な廃道状態）　観測所の敷地西端から，その方向と思しき方向（かすかな道跡）に進めば，開山の由来を刻んだ石碑などを集めた場所に出，ここから同方向に進めば，雪渓の詰まった窪地に出（その先が５つの池：溶岩堰止め湖），雪渓の所から地形図どおりに右前方に進めば，お花畑の連続となります。ここが，観光客で一杯の乗鞍岳かと驚くような，「秘密の花園」。ハンサンイチゲ，チシマチドリ，コイワカガミ，ハクサンシャクナゲ，コバイケイソウ，ミヤマキンバイ，チングルマ，ちょっと早いがクロユリ，などなど。なお，このルートは，その最上部から駐車場方向へは危険につきお勧めできませんので，往路を戻る必要あり。

・小口川林道から有峰ダム，双六川への大周回コース
ここ２年ほど通っておりませんが，晩秋の紅葉と新雪の頃は本当に良いところです。
東京方面からは，安房峠を過ぎて，双六川を渡る直前に，キャンプ場への案内に従って双六川の谷へ。
数km進んで，広い方の道なりに左方，山吹峠を越えて，森茂谷へ。昔はこの広い一帯が牧場だったものが今は面影もありません。ここから道標沿いに，料金所，トンネル経由で有峰の谷へ。ダム湖東岸の道は，ここ10年ほど閉鎖のまま。西へ向かってブナ林の中，時にカラマツ林中のドライブ。一旦，大多和峠へ上がることをお薦め。ここは，立山から薬師岳までの好展望。ただし，峠から跡津川への道は不通のまま（下の国道で確認）。再び湖畔沿いに戻り，祐延堰堤への道（小口川林道）へ入って，峠越え。このあたり，何ヶ所も展望良好の駐車スペースがあって，有峰盆地のブナ原生林を隔てての立山・薬師岳などが見事。以降は，小口川沿いに常願寺川から富山平野へ。
以上，大変良いところの割には，人の少ない地です。夏のこの時期でも，ブナの原生林など，それなりに自然を楽しめます。

今回，日数が無くて，手取川上流域には行きませんでしたので，この方面は割愛。
なお，話題としては，３年ほど前の災害でずっと不通となっていた新岩間温泉へは開通など。

・白木峰（５万分１地形図名にあり）
富山県八尾町の南の大長谷から林道があって，林道終点の駐車場から徒歩30分で広い笹原の山頂（標高1600mほど）。天気に恵まれれば，能登半島，北アルプス全域，白山などの大展望。（本当は，空気が澄む秋がお勧め。晩春にはスズタケ（ネマガリダケの筍，食用）が沢山）

・医王山
金沢側の見上峠から夕霧峠への道は，３年ほど前からの道路決壊・不通のまま（夕霧峠での表示）。
しかし，実家の富山県側から行ってみたところ，福光町の南の糸谷（スキー場に登ってしまうと，行き止まり注意）から，山頂部の夕霧峠（金沢がよく見える）まで問題なし。ここから北の方へ，国見峠経由で，県境の国道トンネルの所までの林道も可。以上，全線舗装。砺波平野の散村から能登半島まで展望の，一周３時間ほどのコースです。

・五箇山からブナオ峠
３年ぶりくらいで，西赤尾のゲートが開きました。しかし，以前に村役場に聞いたところでは，峠から刀利ダムへは不通のままとのこと。

・庄川上流域
天生峠までは可ですが，峠から河合村へは抜けられません。
大白川の林道は，災害復旧が終わって開通。しかし，時間規制多し。

・同，利賀村方面
最奥の，水無ダム方面から岐阜県へは当分無理。別に，百瀬川の奥（金剛堂山登山口）から，峠越えでダム上流に入ることは出来ます。村自身は，これまでやってきた「世界演劇祭」がつまらぬ事情から中止になって，ひっそり。今頃，蕎麦祭りだったとは思いますが
水無ダムかなり手前から，牛首峠経由で白川村へは，昨年晩秋まで問題なかったものの，廃村記念碑あたりで崩壊不通。

１２期津田

いつも楽しいお便りうれしく拝見しています。約２年前に金沢へ戻って以来、KUWV-OBの皆様にお会いしたいと思いつつ果たせないでいます。
今回もせっかくの機会ですが、８月３～７日は大学の用事で四国、関西へ出張しなければなりません。また今度、ぜひご一緒できれば幸いに存じます。
草々

１５期上馬

７月31日
フェーン現象でここ何日か、暑い暑い金沢です。30日は36.7度、本日は37.3度と今夏最高となりました。なお、輪島では38.1度を記録したそうです。

そんな暑さを避けて、29～30日に赤兎山へ行って来ました。午後に出発して、避難小屋に泊まり、朝帰って来るという計画でした。星空と、夕日、そして白山からの朝日を期待しての山行でした。金沢14:00発。青空の広がる下界とは異なり、白峰から見た白山は頂上部がガスの中でした。登山口16:05着、16:15発。上空は雲の流れが速く稜線はガスの中。ノリウツギとヨツバヒヨドリがたくさん咲ている植林地から、やがてブナの二次林へ。途中、流れに出るたびにタマガワホトトギスが咲いていました。

小原峠から赤兎山にかけては、ぬかるんでいるところが多く、足の踏み場に少し困りました。途中、ブナ林の間から経ヶ岳や大長山、そし

て福井の平野部が見え、ササ原に出てからは、アカモノの実がたくさん目につきました。18:00山頂着、ガスと強風で何も見えず。湿地では、ニッコウキスゲの実とキンコウカの花が目立ちました。また山頂から避難小屋にかけては、木のりっぱな階段や木道が建設中でした。

小屋では、西宮からの男性２人と芦原からの夫婦（いずれも50～60代）と５人で泊まりました。午前中は駐車場が車でいっぱいで、道路にもあふれていたそうです。でも、時間をはずすと静かな山でした。

30日朝も、山の上は霧雨と強風で、あきらめて下山しました。また、日を変えて行こうと思っています。

「花・星・人　ｉｎ南竜」まであとわずかとなりました。

体調がよければ、市ノ瀬からチブリ尾根を登り、別山経由で南竜に入ろうかと考えています。５日の朝５時に市ノ瀬を出発し、ゆっくり登り、南竜には午後３時ころに着く予定です。ただし体調がよくなければ、別当出合から登ります。

もし、同行してもよいという方がおられましたら、連絡してください。

１５期宇野

白山の前日は白峰に入ります。
間所、竹内、鈴木同宿です。
前夜祭やってから行きます。
白山でお逢いしましょう。

１５期坂尻

ようやく秋を実感できるようになりました。

ハッピーマンデー法の成立で、３連休になりのんびり、ゆっくりしています。本当は、学校は７日の土曜は第１週なので休日ではないのを、第２週の１４日と入れ替えるという教育委員会のお達しで３連休をしています。

今年のワンゲルＯＢ行事には、どうやらことごとく日程的な問題で参加できないようです。非常に残念。「お花見」は地区の春祭り、「春の小屋酒場」は親戚に不幸があって、急遽不参加。「夏の白山」は出張で名古屋。「秋の小屋作業」は修学旅行の引率で北海道。近くにいても、今年はどうやら一回も参加できずに終わりそう。いつもそんなに忙しいわけでもでもないのに・・・

一昨日、昨日は「コケ取り」に近くの山へ入りました。「コケ」は能登ではキノコのこと。猛暑とそれに続く暑い９月だったので、キノコの出は例年より一週間以上遅れて、ようやくシーズンイン。シバタケ、ヌノビキ＝サクラシメジ、イッポンシメジ＝ウラベニホテイシメジ、スギヒラタケなどが思わず大量に取れて、なかなか満足のコケ取りでした。次々と遅い方のキノコが登場するので、また出かけようと思っています。

秋の小屋酒場に参加される皆様によろしく。

１５期松林

私事ですが、今年より始めたＰＷ（パーソナル・ウオーキング）「北陸道参勤交代の旅」は、野々市を出発して、富山県の泊まで到達しました。次回で加賀藩領を抜け、親不知を越えて越後に入る予定です。雪が降る前に信州に入りたいと思っているのですが、休み度に一人で出かけることに、女房の風当たりがきつくなっており、思うに任せません。ゴール（お江戸日本橋）の見通しが立たない状況ですので「やまざと」へ寄稿できるのがいつになるかの見通しも立ちません。
悪しからず、ご了承ください。

１５期渡辺

先日、津幡高校の修学旅行で坂尻先生が来札されました。たいへん短い時間ではありましたが、スナックで一献しました。２２時の部屋周りをさぼって飲み続けたので、その後の先生の状況が心配です。

15期　三宅　毅

いつまでも暑い日が続きますね。この四月に東京に単身赴任して半年、やはり家族と離れて暮らすのは寂しいものですね。

仕事も順調な時はいいのですが、会社も含めてまだまだ景気が悪い時期ですので、苦労しております。

最近、身近な人間で体調を悪くする人も多く、健康には気をつけないといけないですね。もう若くないですものね。

涼しくなったら、東京の下町歩きをまた始めようと思っています。

１７期渡辺

この度の水害では我が愛知県西枇杷島町の状況が全国ニュースに流れて一躍有名になってしまったようです。
自宅は物置と車庫が浸水しましたが幸いなことに住宅は浸水を免れました。同期をはじめ皆さんにご心配をおかけしました。
ありがとうございました。
二晩避難生活をしていた時にワンゲル時代の沈澱を思い出しました。違うのは不安の大きさです。シュラフと非常食を持参しましたが「しっかりしているわ」という嫌な視線も感じましたが、災害には備えるしかありません。
行政は非常時には全く機能しなくなります。
OBの皆さんにおかれましてもワンゲルのノウハウを活かして
準備されることをお奨めします。

１７期藤野

ご無沙汰しております。ＵＳ駐在５年目の後半を迎え、そろそろ帰る仕度（心だけですが）を考えている今日この頃です。今回、Yellowstone、Grand　Teton　のﾐｰﾊｰ観光をしてきました。Yellowstoneは日本の地獄谷を大きくしたようなもので、期待はずれ、しかしGrand　Teton　は結構良かったですよ。日本の北アルプスを思い出させる山容でした。有名な墳泉塔、ﾊﾞﾌｧﾛｰ、Grand　Teton、花の写真を添付しました。ご覧下さい。

１８期井上

ご苦労様です。
OB通信で金沢や懐かしき倉谷の様子を知ることができ大変楽しみにしています。
ここのところ、気温の変動があり風邪を引いて

いる人が多いようですので、千葉と金沢の２重生活で体調を壊されないように気をつけて下さい。

１８期大西

ここ大阪は蒸し暑い梅雨が続いています。
暑くとも雨のない夏が待ち望まれます。

さて、この４月、名古屋から大阪に家族ともども引っ越してきました。（転勤は昨年１０月、今年４月まで単身赴任でした）連絡が遅れましたのは、引越しにあわせてプロバイダーを変更したのですが、ケーブルモデムが手に入らないという事で今日までインターネットの利用を待たされたのです。

署名欄に新連絡先を記してあります。

さて、火・星・人　ｉｎ　南竜は何名集まったでしょうか。楽しみにしています。
では、また連絡いたします。

21期　中村　元風

拝啓　残暑厳しい折、いかがお過ごしでしょうか。すでにご承知の方もいらっしゃることかと思いますが、９月15日～17日に、白萩の花が満開の地元大聖寺実性院で行なわれる私の個展につてご案内させていただきます。

かねてから、一生のテーマとして山を描きたいと思ってきました。この度、ホテル百万石さんの御依頼もあり、白山を最初に、日本百名山を題材に作品造りを始めました。今回はその成果を一部を見ていただくことと、永遠のテーマである、古九谷をもとにした今九谷のその後の展開も見ていただければと思います。

何かと忙しい時期かと思いますが、林社中による御煎茶もご用意致しました。是非御高覧いただければ幸いに存じます。

２４期仲村

いつもＯＢ会報「やまざと」拝見させてもらっています。二十年ほど前のことがつい昨日のように思い浮かびます。
毎日の暮らしの中で登山における躍動感の記憶は，忘れがたいものがあるようです。
やまざとに目を通していたら金沢大学ワンダーフォーゲル部のホームページのアドレスが載っていたので気になってアクセスしました。

個人的なことは今度ホームページを開いたのでそちらの方もよかったらみてください。
ホームページアドレス：
http://www.geocities.co.jp/Bookend-Soseki/4263//sartre3room_001.htm
Ｅ-メールアドレス：sartre3@nsknet.or.jp

２６期畠山

６年振りで二つの夏山に行って来ました。一つは白馬岳、大雪渓を滑りに日帰りで。　今年はどこに行っても残雪が多く、白馬尻小屋前から上部標高差１３００ｍ、小雪渓を経て稜線コルまで途切れることなく雪がありました。　岩小屋付近の急斜面の滑降を楽しみに登っていくと、頂上付近は強風でやがて雨が降り出しガスも下りてきて、雪の表面が堅くて下部斜面が見えなくなったので岩小屋付近は一般路を歩いて下りました。　スプーンカットが深くて石が多く、雪面も堅く雨が降っているといった最悪の状況でした。　１０年ほど前、６月にここを滑ったことがあります。　この時は日本海の親不知から栂海新道をスキー担いで登ってきたのですが、雪の状態が良く最高のフィナーレでした。　梅雨期間の降雨によってかなり雪面が荒れてしまうようです。　白馬はメジャーなだけあって、登山者が数珠つなぎで登っていて、滑っている最中いちいち注目されるのには閉口しました。　大雪渓のこの時期の滑降を選んだのが間違いでした。
次は剱岳、１泊２日で長次郎雪渓へ。　クライマーのコールだけが聞こえる静かな左股を詰めて長次郎コルへ。　八峰と源次郎のフェースに囲まれた岩と雪のダイナミックな景色は何度来ても感動的です。　長次郎のコルから熊の岩までの傾斜３５度の大雪面がこの日のハイライトです。　コル直下のクレパス脇の平らな雪面でスキーを履いていざスタート。　雪上訓練をしている学生パーティーの脇を飛ばしていきます。　思えば学生時代にはこんな山行、考えもしなかったと思います。　急な雪渓はピッケルにアイゼン、キックステップで、絶対に滑ってはいけないところ、滑ったら即滑落停止が常識でしたから。　しかし、ロッククライミング同様テクニックがあれば安全に滑降可能なのです。　チンネの岸壁ですら雪がついていれば滑れる人はいると思います。　白馬雪渓に比べてスプーンカットが浅く、日が当たって緩んだ斜面は比較的滑りやすかったのですが、それでも９０ｃｍのショートスキーでは階段を滑り降りるが如く足がぶれるので私の技術ではジャンプターンなどできません。　大きなギャップで飛ばされないように、これを避けるようにして不規則なターンで対処します。　スキーの性能はグレードアップしたものの、技術や体力は低下しているようです。
平蔵谷は剱沢の出合いから一直線にコルまで突き上げています。　以前ここも滑ったことがありますが、上部は４０度程の傾斜で、スプーンカットの雪質ではかなり難しかった記憶があります。　６月頃のザラメ雪ならばジャンプターン可能で快適なかっとび斜面と思います。今後の楽しみです。
雷鳥沢も剱御前小屋のすぐ下まで雪があったのでもちろん滑って下りました。　長次郎に比べれば雪が柔らかく緩やかで快適なウェーデルンでした。春から続いた山スキーシーズンはこれでおしまいです。　以前は秋に涸沢で滑っていましたが、１１月頃に初雪が降るまでスキーは倉庫にしまっておきます。その間、石だらけの堅い雪面でぼろぼろになった滑走面とエッジのチューンアップをしないといけません。　写真を貼付します。　それでは。

41期　長谷川　夏樹

お久しぶりです。この度は、ワンゲルＯＢの心のよりどころ”やまざと”をお送り頂きありがとうございます。現役への連絡係を清水君が受け継いでくれているようで何よりです。

北海道に入植し、エゾシカが家のまわりを走り回っているような生活を送っています。本来なら、ゲル経験をいかして楽しみたいところですが、研究などに追われ余裕が持てず、フラストレーションが溜まる生活をしております。現在のところゲル経験がいかせるのは、お酒の場のみとなっています。

今後、余裕が出ましたら、道東を中心に北海道でゲル的活動をしていきたいと思います。その際は、何らかのご報告ができればと思っています。それでは、今後ともよろしくお願いします。

顧問のひとり言　前田 達男

Summer Camp Training

ワンゲル顧問の前田です。7月23日、白山日帰りで日焼けしてきました。金沢駅発5:30のバスに片町金劇前で乗り、観光新道から室堂、御前峰、エコーラインを経て砂防新道です。市の瀬－別当出合間をシャトルバスが運行されている日には、最終便(17:30)が鶴来まで延長運転されるので、バス利用の日帰りも可能となります。

北アルプス組２パーティの1つが計画書を持ってきました。当初計画では烏帽子岳－船窪乗越－針ノ木岳までヤルというので密かに拍手していたのですが、崩壊地形の話しが効きすぎたのか、雲の平の散策に変更となっていました。断層の割れ目から湧き出してくる船窪テント場のおいしい水の代りに双六－三蓮山腹の湧水も捨て難いといっておきましたが、予定コースは山頂を通っています。

ワンゲル顧問の前田です。金沢大学は先週で講義は終わり、今週からは前期期末試験です。集中講義もあって、、8月上旬も大学に足留めされる学生もいますが、7月末から12日の合宿に出かけるという頼もしい計画書も出てきました。地図を示しての説明に、（現役）ワンゲルもまだまだ捨てたものではないと思いました。

PW &Summer Camp Training

ワンゲル顧問の前田です。遡行計画のＰＷというのも久しぶりですが、出かけるところも私の顧問期間ではなかった所です。

研究室の温度が34℃になったのでパソコン保護のためついにエアコン発動となりました。設定室温は29℃です。普段は風通しをよくして汗をかきかき勉強（昼寝？）です。1泊2日の人間ドックから東京でのクラス会（1960年入学）に出かけていた間に、夏合宿残り２パーティの計画書が届きました。8月5日には1999年度卒業のゼミ生の飲み会、8月25日～27日が恒例の剱岳追悼山行、お盆の雑踏を避けてその間にどこに出かけるか、私の計画書も作らないといけません。そのために白山日帰りで足慣らししたのですから。

PW in autumn

8月25日～27日は恒例の剱岳追悼山行。初日は剣沢、２日目に平蔵のコル（遭難現場）まで行き、３日目に下山という日程です。私は、初日の集合地・立山駅からバスで称名滝手前まで行き、大日岳（大日小屋泊）。奥大日岳経由で剣沢、すでに平蔵のコルから戻っていた蒲原君のご両親ら一行に合流し、剱岳を前に線香を手向けました(実はこの日=8/26は鴨原良太郎君の命日)。26・27日参加のメンバーを加えて皆さんは

剣沢を登り返し、新室堂乗越で室堂に下山ですが、私は剣沢を下りました。実に久しぶりの裏剣歩きです。仙人池小屋泊、池の平幕営、仙人湯小屋泊と選択肢は３つありましたが、今までやったことのない仙人池小屋泊。28日阿曽原小屋経由で欅平、最終便のトロッコ電車で金沢に帰ってきました。

大日岳は、遭難事故さえ起こっていなければＰＷが歩いていたルートです。夕陽の剱岳を見る絶好の位置にありますが、ガスのため朝のシルエットだけで我慢でした。25日(金)、小屋はのびのびと休めたのですが、翌日は団体と頻繁に行き違いです。昔、称名から立山駅まで歩く覚悟で逆のコースをたどったときは（秋分の頃）、ひっそり静かな道だったという印象を持っているのですが、大きくない小屋にこれだけの人達が泊まるとなると大変だなと思いました。

それに比べると、8/28(月)の水平歩道は誰ともすれ違わず、下の廊下の期間以外はこんなものなんでしょうか。そういえば、真砂沢もひっそりしたもの。仙人池小屋のおばさんの話によると、三の窓のテントも近年はまばらにしか見えなくなったとのこと。そのくせ欅平では、あいかわらず団体観光客に座席整理券を占められて、順番待ちでビール飲み。仙人池小屋は、連泊客（高知県の酪農家）に私の２人になりかねないところ、北方稜線を小窓まで歩いてきた北海道のカップルを含む５人が加わり「盛況」。夕食の献立も焼き魚、天婦羅、冷奴もあって豪華、21時の消灯まで話しはつきず、ビールの空き缶ごろごろ。朝陽の裏剱がガスって写真の対象にならなかったことを償ってくれる、ゲミュートリッヒな（居心地のよい、くつろいだ）一晩でした。

「独り言」が長くなりました（実は、独り言よりは寝言を言う方が多いのですが）。大学は夏休み期間ですが、秋山を楽しむというＰＷ計画が出てきました。今年は針の木雪渓も結構雪が残っており、紅(黄)葉にもまだ早く、何をもって「秋の山」とするのか、「？」という気持ちもしないわけではありません。しかし、新雪＆紅葉の10月初旬は後期の開始です。教養部が存在していたときのように「秋休み」がありません。ＰＷ計画を出す積極性の方を評価したいと思います。

禁断の現役部屋

2000年ラオウ伝説　世紀末救世主伝説
　　説きはまさに世紀末！　海を越え伝説は再び…
金沢大学ワンダーフォーゲル部　夏合宿　北海道パーティー
[行先]　北海道・大雪山
[日程]　00年8月7日～8月15日　5泊6日　予備２　非常１
[目的]　・北海道の山々や大自然を体いっぱいに満喫する。
・ 低気圧を連れて本州を離れる。
・ 海を越え北海道で修行してくる。
・ とりあえず怪我無く楽しい山行する。
[コース]
-１日目　金沢====福井====敦賀====東舞鶴----舞鶴港～～～～
０日目　～～～～海上～～～～
１日目　～～～～小樽港----南小樽====札幌====旭川====旭岳温泉++++姿見----旭岳
石室△
２日目　△旭岳石室----旭岳----間宮岳----黒岳石室△
３日目　△黒岳石室----黒岳----黒岳石室----白雲分岐----白雲岳----白雲分岐----
白雲岳キャンプ指定地△
４日目　△白雲岳C指定地----高根が原分岐----忠別沼----忠別沼----忠別岳----
忠別岳キャンプ指定地△
５日目　△忠別岳C指定地----ひさご沼分岐----ひさご沼避難小屋----トムラウシ岳

ひさご沼避難小屋△
６日目　△ひさご沼小屋----化雲岳----第一公園----天人峡温泉====旭川駅
サブコース
△ 旭岳石室----間宮岳----北海岳----白雲岳C指定地
エスケープ
(1) △旭岳石室----姿見++++旭岳温泉
(2) 黒岳石室----７合目事務所++++流星銀河の里
(3) 白雲岳C指定地----白雲分岐----銀泉台
[メンバー] Ｌ 清水健作（理-物３）　　ｓＬ 奥野岳志(工-土建３)　医療
井澤寿予（理-物３）
　　河原一美（教-学校２）　西 大輔(工-人機２)
谷村一成（工-人機２）
[連絡員]
坂本一樹 090-0444-2241
　角谷　誠　090-2833-0904

夏合宿2000　in　北アルプス

[日程] ８月8日～16日（8泊9日）予備３＋非常1
[山域] 北アルプス（上高地→槍ケ岳→新穂高温泉）
[目的] 日本最高の避暑地での快楽生活
[行程]
〈1日目〉金沢 ==== 富山====高山====平湯====上高地----徳沢キャンプ場△1
〈2日目〉△1----蝶ケ岳ヒュッテ△2
〈3日目〉△2----常念岳----常念小屋△3
〈4日目〉△3----大天荘----大天井岳----大天荘△4
〈5日目〉△4----大天荘----燕山荘----燕岳----燕山荘----大天荘△5
〈6日目〉大天荘----ヒュッテ西岳----殺生ヒュッテ△6
〈7日目〉△6----槍岳山荘----槍ヶ岳----槍岳山荘----千丈乗越----双六キャンプ地△7
〈8日目〉△7----双六Ｃ地----笠ヶ岳キャンプ場----笠ヶ岳----笠ヶ岳キャンプ場△8
〈9日目〉△8----(笠新道)----新穂高温泉====高岡====金沢
☆ エスケープ・ルート
(1)燕山荘----合戦小屋----中房温泉
(2)水俣乗越----横尾キャンプ場----上高地
(3)槍岳山荘----槍平小屋----新穂高温泉
(4)双六キャンプ場----弓折岳----新穂高温泉
[メンバー]
Ｌ 小倉 亮（法-法３）ｓＬ 阿納真弓（文-人間３） 山本資治（工-人機２）
日野鋼貴（文-人間2） 吉森幸世（文-人間2） 森本達也（工-機械１）
松山文枝（医-保健１）
[連絡員]
佐藤豪一郎 090-8090-8429 志賀寛人 090-1312-8649
角谷 誠 090-2833-0904

Millennium　アジアの開きパーティ　夏合宿
[目的] 楽しい山行にするとともに精神を向上させる。
　　北アルプスの銀座通りが明石銀座に匹敵するかを見に行く。
[日程] ８月1日(火)～10日(木) ９泊10日 予備３日　非常1日
[行程]
〈1日目〉金沢 ==== 糸魚川 ==== 穂高 --(タクシー)---- 中房温泉（幕営）
〈2日目〉 中房温泉 ---- 合戦小屋 ---- 燕山荘(幕営) ---- 燕岳(往復)
〈3日目〉 燕山荘 ---- 大天荘 ---- 大天井岳 ---- ヒュッテ西岳(幕営)
〈4日目〉ヒュッテ西岳 ---- 水俣乗越 ---- 殺生ヒュッテ ---- 槍ケ岳山荘
(幕営) ---- 槍ケ岳(往復)
〈5日目〉 槍ケ岳山荘 ---- 双六小屋 ---- 双六岳 ---- 三俣蓮華岳 ----三俣山荘
(幕営)
〈6日目〉 三俣山荘 ---- 鷲羽岳 ---- 雲の平キャンプ場(幕営)
〈7日目〉 雲の平キャンプ場 ---- 雲の平山荘 ---- 祖母岳 ---- ピーク
2463.9m（往復）

〈8日目〉 雲の平キャンプ場 ---- 水晶小屋 ---- 野口五郎岳 ---- 野口五郎
小屋（幕営）
〈9日目〉 野口五郎小屋 ---- 烏帽子小屋(幕営) ---- 烏帽子岳（往復）
〈10日目〉烏帽子小屋 ---- 高瀬ダム ---- 七倉山荘
☆ エスケープ・ルート
(1) 大天荘 ---- 燕山荘 ---- 合戦小屋 ---- 中房温泉
(2) ヒュッテ西岳 ---- 水越乗越 ---- 槍沢ロッジ ---- 徳沢 ---- 上高地
(3) 殺生ヒュッテ ---- 槍沢ロッジ ---- 徳沢 ---- 上高地
(4) 槍ケ岳山荘 ---- 槍平小屋 ---- 白出小屋 ---- 新穂高温泉
(5) 三俣山荘 ---- 双六小屋 ---- 鏡平小屋 ---- わさび平小屋 ---- 新穂高温泉
[メンバー]
L 加藤菜就(工-物化３) sL 矢田部 桂（理-物3） 谷上 望(文-人間３)
久原宗仁（文-史２） 福村岳代（教-障教2） 石山晶代（教-養別科）
深作亮太（工-人機１）
[連絡員]
伊藤純司 076-263-8353 090-9900-2817
矢内佑一 076-222-8908 090-1390-9887

2000年夏合宿 南アルプス中南部Party
[目的] 南アルプス中南の3,000m級の山々を縦走する。
[日程] 7月31日(月)～8月12日(土) 11泊12日 予備4日 非常1日
[行先] 南アルプス中南部
[行程]
1日目(7/31) 金沢駅 +++++ 平岡 ==(タクシー)== 易老渡 --- 面平（幕営）
2日目(8/1) 面平 --- 易老岳 --- 光小屋（幕営）--- 光岳(往復)
3日目(8/2) 光小屋 --- 易老岳 --- 茶臼小屋（幕営）
4日目(8/3) 茶臼小屋 --- 上河内岳 --- 聖（幕営）
5日目(8/4) 聖小屋 --- 聖岳 --- 兎岳 --- 中盛丸山 --- 百間洞ノ家(幕営)
6日目(8/5) 百間洞ノ家 --- 赤石岳 --- 荒川小屋（幕営）
7日目(8/6) 荒川小屋 --- 中岳 --- 悪沢岳（往復） --- 高山裏露営地（幕営）
8日目(8/7) 露営地 --- 板屋岳 --- 小河内岳 --- 烏帽子岳 --- 三伏峠小屋(幕営)
9日目(8/8) 三伏峠小屋 --- 本谷山 --- 塩見小屋 --- 塩見岳 --- 雪投沢（幕営）
10日目(8/9) 雪投沢 --- 能ノ平小屋（幕営）
11日目(8/10) 能ノ平小屋 --- 三峰岳 --- 間ノ岳 --- 北岳山荘（幕営）
12日目(8/11) 北岳山荘 --- 北岳 --- 北岳肩ノ小屋 --- 白根小池小屋 ---広河原 ==(バス)== 甲府駅
☆ エスケープルート(1)茶臼小屋 → 畑薙大吊橋→畑薙第一ダム
(2)聖平 → 聖沢吊橋 → 聖岳登山口 → 湛島
(3)百間洞 → 赤石コル → 赤石小屋 → 湛島
(4)荒川小屋 → 赤石コル
(5)三伏峠 → 塩川小屋
[メンバー]
L 西脇幹雄（工-機械3） sL 杉村明慶（教-人環３） 医療 角田幸久（経 ２）
石原 諭（経２） 中川拓哉（理-化１） 竹内雅幸（法１）
[連絡員]
志賀寛人 090-1312-8649
角谷 誠 090-2833-0904

謎めいたＰＷ

万太郎本谷 湯桧曽本谷 遡行計画
[日程] 2000年8月19日～8月22日
[行動予定]
8月19日 (高崎集合)====土樽----取水口-----一ノ滝--@--三ノ滝
@：ビバーク地
8月20日 @----三ノ滝----肩の小屋----土合----武能沢出合@
8月21日 @----十字峡----大滝上----二俣@
8月22日 @----朝日岳----土合
サブコース（8月22日）土合----出合----大滝上----白毛門山----土合
[メンバー表]
リーダー 西脇幹雄（工-機械３） サブリーダー 久原宗仁（文-史２）
３流クライマー 金吉史哉（ＯＢ） グル 佐川貴久（ＯＢ）
斬り込み隊長 笹田竜之（文-史４） 僕らのキャディ 志賀寛人（工-土建４）
見習いクライマー 加藤菜就（工-物化３） みんなのソアラ 山本資治（工-機械２）
[連絡員]
矢田部桂 090-1394-7688 杉村明慶 076-261-3458

2000年 後立山Ｐ・Ｗ

[目的地] 後立山
[目的] 秋の山を楽しむ
[日程] 9月11日～15日
[コース]
１日目 金沢 ### 信濃大町===扇沢---大沢小屋▲(幕営)
２日目 大沢小屋---針の木小屋---蓮華岳---針の木小屋▲
３日目 針の木小屋---針の木岳---赤沢岳---新越山荘---種池山荘▲
４日目 種池山荘---爺ケ岳---鹿島槍ケ岳---爺ケ岳---種池山荘▲
５日目 種池山荘---扇沢===信濃大町 ### 金沢
[サブコース]
３日目 針の木小屋---新越山荘（泊） ４日目 種池から爺ケ岳ワンデリング、種池山荘▲
[メンバー]
L 山本資治（工-人機２） sL 加藤菜摘（工-物化３）
医 谷村一成（工-人機２） 林 司 （理-Ｍ１）
森田善文（工-Ｍ１） 矢内佑一（工-物化４）
角田幸久（経-２） 竹内雅幸（法-１）
[連絡員]
谷上 望（文-人間３）076-232-7867
井澤寿予（理-物３） 076-235-2767

卒業旅行に海外が定番になり、海外研修を目玉に入学案内を作成している学校もあります。若者に、外国は身近になりました。中でもアジアは、安く、民族ルーツが同じゆえの親近感と異文化感が交錯して、人気があります。

夏合宿後から秋休みにかけて、もちろん個人旅行となりますが、インド１、ベトナム２、ネパール２名の現役が、バックパッカーの旅に出ていきました。贅沢かといえば、体力もあり我慢もできて、時間が何とかなる若い時代に、旅はすべきものでしょう。一応それぞれの事情を聞いて、ネパール行きの二人に報告を書いてもらいました。

個人山行が認められるようになってから数年、今はいい意味での「部とは？」の問い直しが始まっているようです。長年もたれることのなかった月例会（昔の月毎の総会）も開催していると聞きました。若いっていいですね！

相棒の清水君が、絶賛の写真。
旅への期待と若さで弾けんばかり。
【ボーダナートにて　矢田部　】

ネパール日記

矢田部　桂

９月１７日

午前２時に金沢駅。夜行特急で京都に着くと六時くらい。その後‘はるか’で関西国際空港まで。すごくいいお天気である。日本でも外国のどこでもいいから山に登りたくなってしまう。はやく山にいきたいなあー。うずうずしてしまうのであった。

１０：３０にロイヤルネパール航空のチケットを受け取り、１２：５５に日本出発。はたして無事かえってこられるだろうか、などと考えながらぼろい機体に身をまかせる。食事は二回でた。うまいうまいとほおばっていたが連れの清水はあまり良くないといった表情。彼は飛行機に乗り慣れている（らしい？）のでよく比較ができるのだ。私にとっては初めての海外なので右も左も分からない超初心者である。悔しいので始終落ち着いたふりをしていよう。

カトマンズのトリブヴァン空港には２０：００に到着。タクシー及びホテルの客引きの群がりを掻き分けて、かねてから予約しておいた現地旅行代理店の車でタメル地区のホテルへと向かう。あたりは電灯もあまりなく薄暗かったが人は沢山いてこんな暗がりでなにかすることがあるのか、とおもった。部屋に案内され、とにかくのどが乾いていたのでビールで清水と乾杯。ぬるくてもおいしいビールがあるんだということを今日この場ではじめて知った。

近くのレストランで遅い夕飯。水牛のモモ（蒸餃子）、ダルバート（日本でゆうところのご飯と味噌汁のような定食のこと）をいただく。かなりおいしくて簡単に感動してしまう自分がかなり恥ずかしく思えてしまう。これからこんなうまいものがたべられるのだ、と明日から楽しみである。

９月１８日

カトマンズの朝は早い。６：００からドタバタと街全体が動きだしている。あまりにうるさくて自然と起きてしまった。軽く食事を済ませた後、旅行代理店にいって今回のトレッキングに必要なチケット、パーミットを手配する。山の地図を買い求めた際、店員がお

つりをごまかそうとするが、あまりに下手なのでばればれである。すこしおもしろかった。この日はいろいろ買い物をしたが、なんちゃって商品が沢山おいてあり、これらもおもしろかった。

夕食はまた、モモと焼きめしをたべる。これまた日本とは違う米であり、大変おいしい。いくらでもたべられそうである。モモはというとそう、金沢で有名な数字が名前にはいっている某餃子店のやつにそっくりである、というとわかりやすいか。

９月１９日

７：００近くのおっさんが何回も何回もセキの大合唱。昨日同様うるさくておきてしまう。予定では今日ルクラに飛ぶことになっていたのだが、数時間またされたあげく飛ぶことはなかった。おかげでテンプー（オート三輪）にのってボダナートへゆくことにする。そこは広く、きれいですばらしいところだった。一人のオジさんにあっていろいろ話した、とはいってもネパール語は全然分からないのだが。もう一人、青年に会って彼にいろいろ案内してもらった。

夕食を食べていると雨が降り出した。はあ、明日のフライトが心配である。これ以上飛べなかったらトレッキングの予定そのものが怪しくなってしまう。

９月２０日

怪しい天候であったが、なんとかイエティ航空は飛んでくれた。ルクラに。８：３０にトリブヴァン空港を離陸して一時間ほど雲の間を潜り抜け、山の斜面を強引にならしたようなルクラ空港が見えてきた。

ルクラは滑走路がかたむいており、変わった空港である。機体からおりてトレッキング客だとわかるやいなやガイドが群がってくる。なかには日本語を話すのもいてそれを聞くと、いかにガイドが必要であるか、などかなり誇張表現していたが特に意地はって必要ないというわけでもなく、いてもいいか、という感じでこの人にガイドをお願いすることにした。名前はニマ。（後にこの名前が生涯忘れられないものになるとはこの時微塵にも思っていなかった）

ニマと打ち合わせをし、１０：００出発。道は歩きやすく、清水のトレッキングシューズよりも私のランニングシューズのほうが合っているようだ。さっさかと軽快に歩いて１５：００にモンジョのロッジに着く。今日はここで泊。そういえば朝からのどが痛む。原因は不明である。うーん心配だ。なんにもないといいが、体調には気をつけよう。それと夕食時にニマにすすめられたどぶろく、かなり酸っぱかったぞ、あしたは下るかもしれない、胃腸関係も心配だ。

９月２１日

６：００起床、ニマが起こしに来るが山で朝早いのに慣れている我々はとっくに起きている。外は昨日にひき続き曇。どんよりしている。

７：００出発。気がつくと昨日ののどの痛みは引いていた。異様に酸っぱいどぶろくも無事わが胃腸は処理してくれたようである。よかったよかった。ん？坂になると清水の足どりが悪い、明らかにばてている。大丈夫かな？

９：２０ナムチェ着。休んでいると日本人に会う。山にはいって初めての日本人。日本語がなつかしい。ここで昼飯を取る、ニマの知り合いの家だ。

１３：００ナムチェ発。これからはだんだんと標高も高くなってきて坂もきつくなってくる、荷物はたいして持ってないのにこんなに疲れるのはやはり標高のせいか？かなりしんどい。体が時間が経つにつれ確実におもくなっていくのが分かる。清水はさっきから黙りこくっている。私以上に疲れているようだ、元気づけようと話しかけてもうわの空。大丈夫かな？

１５：５０タンボチェ着。ロッジにつくと疲労と空腹で体を脱力感が覆っていた。少し頭に違和感がある、頭痛とまではいかないがもしかして高山病？清水も同じ症状を訴えている。もし初期の高山病ならこれから高度を下げなくてはいけない。しかしそうすると目

【ヒマラヤは夏の雨期に雪が積もることになる。この日、雨期が明けたよう。中央、雪煙をあげるエベレス。右、ヌプツェ。】

的地まではいけなくなってしまう。とりあえず頭の違和感は気のせいにしておいて明日の様子をみてから判断しよう。夕食は高山病に効くといわれているにんにくスープとダルバートで栄養をつける。

9月22日

初めての晴。ローツェはじめ360度見渡す限りのすばらしい景色。エヴェレスト確認！ここぞとばかりに激写しまくるわれら日本人約2名。

9：00タンボチェ発。今日はペリチェまで、そこで高度順応1日をとることにする。そこまでは下りもしくは平行移動なのでそんなに疲れることはない（はず）。

10：45パンボチェ着。清水は確実に頭痛を感じはじめている。気のせいではない。しかもたいした道でもないのに妙に疲れやすいみたいである。そこで今日はペリチェは諦めてここで泊。ここで休んで高度順応になればよいのだが…。

ここのロッジのダルバートは大変おいしかったが、小石が入っていて思い切り噛んでしまって歯がかけてしまった。うう。この日、ニマの友人が高山病にかかってヘリを呼ぶという,かなりの重症らしい。あらてめて高山病の恐ろしさを知る。やはり清水はこれ以上高度を上げることは危ない、明日一人で高度を下げることも考える。

9月23日

6：00に起きると今日も快晴である。ちょうど日の出時間で空がなんともいえない幻想的な色をかもし出している。昨日よりも山奥にきているので山が迫っている感じ、あらためて魅入ってしまう。

10：20歩き始めて小1時間ばかりして、清水は体力の限界なのかかなり辛そうな表情で、一人で高度を下げる決心をする。今日の出発地点まで戻ってみると言っている。その後、後ろ髪を引かれながらニマとともにペリチェに向かう。清水よ、俺が戻るまで元気でいてくれ！などと映画の1シーンみたい。私とニマは一応ペリチェまで行き、明日にパンボチェまで下って清水と合流することにする。

11：50ペリチェ着。途中でまた日本人に会った。彼はかなりのネパール通でもう数十回来ているそうだ。福井からいらっしゃっていることもあり、しかも驚いたことにワンゲル部員の一人のご両親をよく知っている、ということでいろいろお話を聞かせてもらう。山や、カトマンズでのアドバイスを沢山いただきました。

9月24日

6：00起床。辺りを散策してみる。きょうもいい朝焼けである。思えば清水は高度が上がるにつれて、体調がおかしくなってきたが自分のほうはというと全く逆で、むしろ高いほうが体に合っているようだ。たしかに空気もうまいし、めしも好みに合っている。

9：00パンボチェに向け下る。パンボチェのロッジには清水が死にそうな顔で待って

いた。これは確実に高山病である。もっと高度を下げなければ！！すぐに今後の打ち合わせをして清水ひとりナムチェまで下ることにする。私はこのパンボチェからアタックできるというタボチェピークに明日行くことにした。その後速攻で下ってナムチェで清水と落ち合うのだ。

清水の下っていく後ろ姿を見ながら、あすの登り～生涯で一番高い標高へどれだけ行けるのか期待と不安の入り混じった気分を味わっていた。その日は夕食をお腹いっぱい食べ、明日に備えるとする。４：００スタートなので早く床に就かなければならないのだが興奮してなかなか寝付けない。

９月２５日

３：３０に起きる、準備を整える。ワンデリング装備だ。４：００発の予定なのにニマは全く起きる気配が無い。起こしにいく。おいっ！おきろ！

外はまだ闇につつまれている。月はでていない。しかし満天の星空がその日の天候を教えてくれた。そっ、それにしても寒い！懐中電灯で照らしながら細い道を歩いて行く。５：３０頃ようやくあたりが明るくなってくきた。が、ガスが立ち込めて山々を拝むことはできない。もしかしてずっとこんななのか？不安が募る。

日本のどんなスキー場よりも急で開けた草原をひたすら登って行く。上に行けば行くほど急になっているのだ。直登しようとしても足首の関節は可動領域をゆうに越えている。斜めに登る。日本でこの位斜度があったら土がみんな流れていってしまうだろうな。この斜度のせいか、酸素の少ないせいか、あるいはどちらのせいかもしれないがどんなにゆっくり登っても鼓動が異様にはやいし、呼吸も乱れる。タンボチェまでの登りも辛かったがこれはもう次元の違う辛さである。ツール・ド・能登のラストぐらいしんどかった。まあ、心配していた頭痛のほうは全然感じなかったのは幸いである。

ピークの近くに着くとそこではもう雲を突き抜けて雲海に浮かぶ山々と今、まさに昇らんとしているご来光を拝むことができた。感無量である。つんと身が締まるような気温の中、この瞬間が間違い無くこの旅のピークであり、もっとも心に刻み込まれた場面である。ただ清水と共にこの地に来られなかったのは残念である。彼は今ごろ下山しながら高山病と戦っているのだ、そう思うと一刻も早く彼の元に戻らなくてはならないという使命感に刈りたてられた。

下りはさすがにはやいもので、気が急いていたせいもあるがナムチェまであと距離にして半分というところまでかっとばしてやってきた。が、そこにいるはずのない清水が道端で座り込んでいる。どうゆうことだ？たしかに眼には光が無くうつろである。彼は動くこともできないほど重度の高山病にかかっていたのだ。後はもう必死で彼を担いで下ろしたことしか頭に無い。とにかく必死だった。ロッジに着いてしばらくするとニマは一人でなにを勘違いしたのか私達に向かって激怒してきた。まったく訳がわからず困ったと同時に呆れてものも言えなかった。なにかお金のことで勘違いをしているらしい。病人がいるすぐ横で大声を張り上げているニマに、なんて非常識な男だろうと腹が立ってならなかった。結局お金を握らせて黙らせる。ほんと疲れる、非常に内容のつまった一日である。

９月２６日

この日でルクラまでいかなくてはならない。なにせ明日の便でカトマンズまで帰るのだから。なんとか清水のお尻をひっぱたきながら元気のまだ戻らない体に鞭を打った。

ルクラについたのはもう辺りは暗くなってからであった。もう２人ともへとへとに疲れていた。まるで血尿が出そうなくらい。今日でガイドのニマともお別れである。残ったガイド料を渡す時にもひと悶着あって、最後まで後味の悪いガイドであった。さっと最後の山食をロッジで食べてから無事到着したお祝いに安いウイスキーを飲む、う、うまい。久しぶりのアルコールはすぐに体中を駆け巡り、疲労を忘れさせてくれた。当然清水は禁酒。調子が戻ったら浴びるように飲ませてあげるから心配しなさんなって

９月２７日

天気は快晴、今日は予定どおりファーストフライトでカトマンズにかえることになる。

晴れ渡る青空の向こうから、久しぶりに聴くエンジン音がここルクラ空港に近づいてくる。一週間程の山生活であったが、いまでは短く感じてしまう。この旅で学んだことは沢山ある、この旅の経験は一生の宝物になるであろう。ここで起きたあらゆる出来事をかみしめながら帰りの機体に乗り込むのであった。

（ちなみにこれは実際に現地で書いたメモを７割くらいそのまま書いています。）

ネパール旅行記

43期　清水　健作

9月17日

ＡＭ２：００、矢内さんに送ってもらい金沢駅へ。いよいよ待ちに待ったネパール旅行の出発である。計画から４ヶ月、実際に準備したのは夏合宿後からだった。良く間に合った気がする。急行北国、特急はるかを乗り継ぎ関空へ。ついたら搭乗手続きをする。空港使用税が2850円もした。12：55分日本を脱出。これまで矢田部はチンプンカンプンって感じ。どうやら、旅の間は優位に立てそうだ。飛行機はＢ７５７ロイヤルネパール航空。はっきり言ってボろい。ラジオすらない。機内食はまあまあだった。けど、生まれてはじめて飛行機に乗る矢田部君にはかわいそ過ぎる。上海に途中立ち寄ったが、グロい清水君のまま上陸。国際線のお酒は無料だからね…。ネパールには10分遅れて18：55に着いた。税関やＶＩＳＡはかなりいい加減。空港から出て、タクシーの客引きとストリートチルドレンに矢田部はかなりくらった様子。僕もインドネシアで昔戸惑ったな。「しみずけんさく様」のカードを見つけガイドの人と合流、ホテルに送ってもらう。「ホテルヒマラヤンビュー」が旅のベースになりそうだ。そのあとは夕食。けっこううまい。ビールがおいしくて飲みすぎてしまった。（頼み過ぎた）シャワーはお湯が出るのでけっこう満足。

9月18日

朝…って言うか早朝にダニと工事の音に起こされる。朝7：00の街へパンを買いに行く。しかし、何処も開店前だったのでホテルに戻りオムレツとチャイを頼む。初めて飲むチャイ。紅茶派の僕には嬉しいくらい美味しい。そのあと、フォーシーズンのＲａｊｉさんに会う。この人は父の友人の友人？らしい。日本にいるときからＥメールを通じて国内線の手配などを依頼していた。パーミットと航空券と宿代２６０ドルを払う。チャイをご馳走になる。朝のよりおいしい。そのあとは、ダルバールからアサン広場まで散歩。疲れたので一度ホテルへもどり、今度はタメル地区へ買い出し。地図とザックカバーを手に入れる。矢田部はノースフェースのフリース。多分偽物。帰ってきてからパーミットを取りに再び街へ。ホント疲れてのでホテルで昼寝。おきてからＲａｊｉと話しをする。明日の飛行機が飛ばないらしい。山域を変えることになった。旅はトラブルがあるから面白い？今夜は飲もう…。夕食はチベット料理やへ。結局は飲まずにライスとカレーとスープモモでＲｓ１００ですます。もしかしたら第七ギョウザの故郷かもしれない、ネパールって。あと、明日のルクラ行きは空港で待ってみる事になった。柿の種とTUBORGビールの組み合せは

【飛行機がとばないと、ホテル代が嵩み、食費を削る羽目になる。山の時間が削られていく。浮かない顔の矢田部君】

GOOD！夕方から雨が強くなった。飛行機大丈夫だろうか？

9月19日

朝10：00に空港へ。しかし、フライトはキャンセル。全くこの国は！！るーずという言葉が良くにあう気がする。Rs200をはらい再びヒマラヤンビューへ。Ｒａｊｉさんに明日の7：00の飛行機を取ってもらう。ABレストランで昼食をとり、郊外へ観光。ボダナートで謎のネパール青年（自称17歳）と友達になる。勝手にヒンドゥー教徒以外立ち入り禁止のエリアに入る。侵入後20秒でガードマンに捕まる。追い出された後その青年と分けの分からんところに連れていかれる。渋滞していていつまで掛かるか分からなかったのでホテルへ帰る。そしたらホテルまで着いてきた。目的がよく分からなくて怖かった。バスの乗り方はよく分かった。夜はアロマレストランへ。スペシャルフライドライスが無茶うまかった。テラスで食べれたのも良かった。また来ようかな？

9月20日

今日は5：30に起きて6：00に空港へ。タクシーの運ちゃん、無茶怖いっす。っていうか滑ってるしさ～。飛行機は1時間半遅れた。半ば諦めていたので飛んだときは嬉しかったね。30分のフライト。到着してからガイドを進められる。リコンファームの事もあったし結局雇う事に。名前は「ニマ」という。7日間だけど11日分払う事に。理由は一般的には11日掛かるらしいコースを7日で以降としているからだ。馬鹿に付き合ってくれてありがとう。10：30に出発。コースガイドでは5時間を3時間で通過。でも犬の方が早かった。ロッジはとても快適。あと、シェルパの家族と一緒に食事をした。とても楽しかった。ところで、お金足りるのか？

9月21日

今日はモンジョからナムチェ、そしてタンボチェまで歩く。あさ、Ｒｓ1300もかかり、少し不安になった。そのためナムチェで＄４０両替した。それからタンボチェへ向かう。さすがに体が重く感じられた。しかし、頭痛等の高山病の症状は無い。一応明日ペリチェで高度順応を取ろうと思う。あと、今朝からネパール製の濁酒がお腹を直撃！正露丸を飲み居間は少し落ち着いたみたいだ。やはり、日本人はビールだね。あと、昨日今日と雨又曇りで気温が低いのでつらい。ロッジのストーブが有りがたかった。ちなみに4日の行程を2日で行った。あとは、下山で時間を稼ごうと思う。

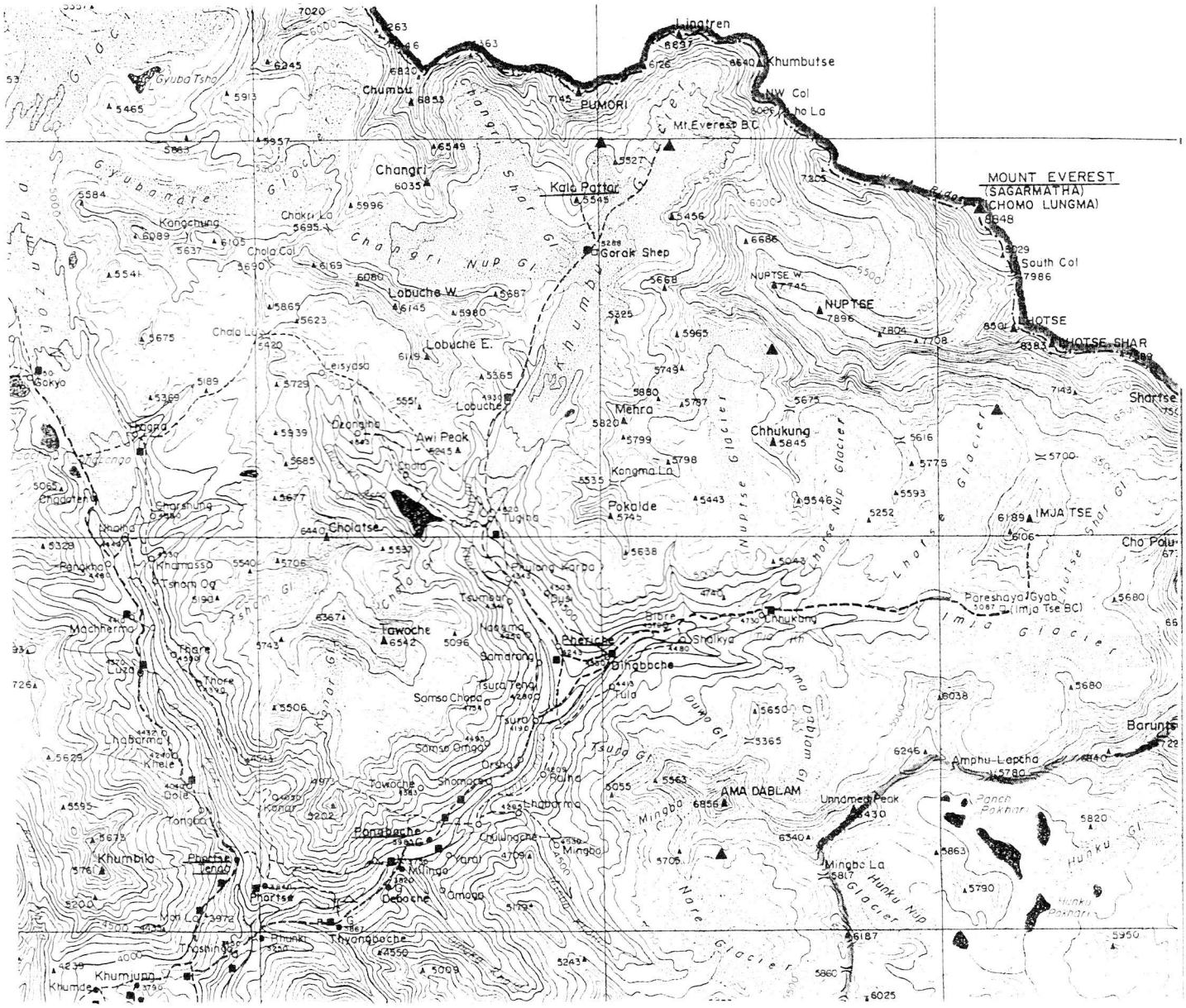
9月２２日

朝、食事をとってるとニマが「ケイ、健さん、Ｃｏｍｅ　ｏｎ.」と言ったので表へ出てみると快晴！そして遠くにはでもはっきりとエベレストが見えた。感動。写真を取りまくる。昨日までの疲労感が飛んだ気がした。今日の行程はペリチェまで。しかし途中のパンボチェで少し頭痛を感じたので、そこで泊まることにした。カラパタまでは厳しくなった。そこで、ニマから近くのタボチェ（６４９０M）*に登らないか？と提案。あしたペリチェへ。すして翌日にパンボチェに戻りさらに翌々日アタックというプランだ。順応日を3日取るわけだしこれなら行けそうに思う。

【貴重な清水君と二人で撮った写真。

＊尚、地図と照合、標高、所要時間から考えて5202ｍＰのことのよう。】

９月２３日
この日はペリチェまで行くつもりでしたが途中でまた頭痛が始まり矢田部と分かれて３日後にナムチェで落ち合う事となった。とりあえず今日はパンボチェのロッジまで戻ることにした。昨日と同じ部屋を取ってもらい、横になった。（後から聞いた話では高山病は寝てしまうと悪くなるらしい。）一度起きてガーリックスープが効くと聞いていたので飲む。また寝たら。寒気がして起きる事に。熱があるらしい。しかも結構高め。変な咳もで出した。とにかく辛い。生まれてはじめて死ぬかも…って気分になった。独りということが余計にその思いを強くした気がする。とりあえず、明日下山するので熱だけは冷まそうとタッパと手ぬぐいを持ち５分歩いて川に水を汲みに行った。頼れるのは自分だけだった。寂しかった。
９月２４日
朝起きてゆで卵２個とお茶チャパティーと言うパンを頼む。パンは半分残した。そして１０００ｍ高度を落とすためにプンギ・ティンガという村を目指す。下っていれば何とも無いが上りが５ｍあれば息が上がり休憩というありさまだった。途中初日のロッジで一緒だったガイドの親友にあう。１０ドルで荷物をやると言い出した。ネパールでの１０ドルは良いお金だがすんなり払うことに。今の自分にとってはものすごく有りがたかった。一緒に話をしながら下った。覚えているのは、この前ガイドした相手が高山病になって自腹で２０００ドルだしてヘリを呼んでやったけど死んだからお金が帰ってこなくて困ってる、と言う話。あとは、下痢で体力が無いときは高山病に掛かりやすいと言う事も言われた。
とりあえず、助けも有り無事つくことが出来た。
９月２５日
朝８時プンギ・ティンガを出発。今日中にナムチェに行かないと矢田部と合流できない。とは言っても１本道なので心配は無いけど。ナムチェまでは６００ｍの上り。昨日同様５分歩いては休憩みたいなペースだった。なんか途中腕時計を見ながら休憩を取っていたら動いていない事に気付く。一体何時かと思い聞いてみると「２時」！！自分の時計は１０時を指していた。一体どれくらい歩いたのか全く分からなかった。そして、体力的に動けなくなっていた。しばらくして矢田部とガイドに追いつかれ僕を見て何でここにおる？って顔をされた。そのあと、近くの村でニマがポーターを２人雇ってきた。もちろん自分を運ぶため。その日のうちにナムチェを過ぎジョッサレ（２８０５ｍ）まで運ばれた。
自分はその時まで事の重大さに気がついていなかったが、ホントに死にかけていたらしい。
９月２６日
飛行機が１日早くなったので、今日中にルクラまで戻る事になった。歩けるとこは歩き、上りとかは矢田部の背中。命の恩人になってしまった。病気で苦しかったけど、矢田部はもっと苦しかっただろう。ルクラの直前の急登では、２日前に荷物を持ってくれた人まで僕を運んでくれ何とか到着。感謝以外に言葉がありませんでした。ささやかな打ち上げのあと、爆睡しました。
９月２７日
朝１番のフライトでルクラを出発。３０分後には懐かしいカトマンズに無事到着。でも少し歩くと息が上がる感じ。まずはじめにＲａｊｉの所へ行きチャイを飲みながら色々あった話をし、その後矢田部が人から聞いてきた「スロベニアゲストハウス」というＲＳ100の宿に泊まった。とりあえず、まだ体が重かった。昼過ぎまでは一人で寝て昼から美味しいダルバート屋にいき食事を取った。少しは食べれるようになってきた。ここで、旅の疲れを癒すべくカトマンズ唯一の温泉？に行って来た。お湯熱過ぎ！シャンプー泡立たない！だまされてる気がした。ついでにアンマをやってもらった。夜はモモとビールで打ち上げ。そのあとは、早めに寝た。
9月28日
この日は土産を買うためにバクタプルという隣町までバスで行った。物価が少し安い。
曼荼羅学校を見学したりした。あと、現地の人と道端でチェスを打ったりした。結果は散々だった。



9月29日

この日はカトマンズで土産を買ったり、あと絵葉書を出した。この日ははじめて矢田部と別行動になった。昼に矢田部お気に入りのダルバート屋で一緒に食べたわかれ、僕はタメルのタクシー乗り場周辺でチェスをやっているおじさん達に混ざって５ゲームほどやった。言葉が通じなくても同じ趣味が有るのは良い事だなと思った。夕飯は「味のシルクロード」という日本食屋へ。味噌汁が一番美味しかったし、衛星版読売新聞があったのでビックリした。日本選手のシドニーでの活躍はこの時知った。ゲストハウスに帰る途中雑貨屋でウイスキーを買い部屋で飲みながら矢田部と今までの思い出話とかで盛り上がった？。

9月30日

いよいよ、今晩日本に発つ。この日はネパールで言う所のお盆みたいな１年で一番大きなお祭りが始まる日で町は凄い静かだった。ダルバール広場で凧を上げている子供たちを見ながらゆっくり過ごした。夕方、昨日楽器を売りつけてきた人の民族音楽のコンサートがあることを教えてもらい聞きに行った。矢田部は疲れてるみたいだったけど、最終日だからか結構印象にに残った。９時に空港に行くと、飛行機が故障して翌朝まで飛ばない事になっていた。おかげで、エベレストホテル（１泊＄２００）にただで停めてもらえた。

よくあさ、７時ごろネパールを出発。本来は夜発が日中になったお陰で窓の向こうにヒマラヤ山脈を一望する事が出来た。

０Ｂ会会計報告

（平成１２年７月１日～平成１２年１１月３０日）

《収入の部》

０Ｂ会費納入	２０６，０００
預金利息	３９５
計	２０６，３９５

《支出の部》

０Ｂ会報（やまざと）No.13 印刷費	２０１，７２０
〃　郵送料	９８，１４０
「花・星・人ｉｎ南竜」ＯＢ会補助	４６，１０５
ＯＢ・現役３年懇親会	１１０，０００
秋の小屋酒場食費	９，６９５
〃　備品代	８，８４７
通信費	４，５４５
文具・備品費	１４，６１４
その他	５，０８５
計	５４８，７５１

《差引剰余金》

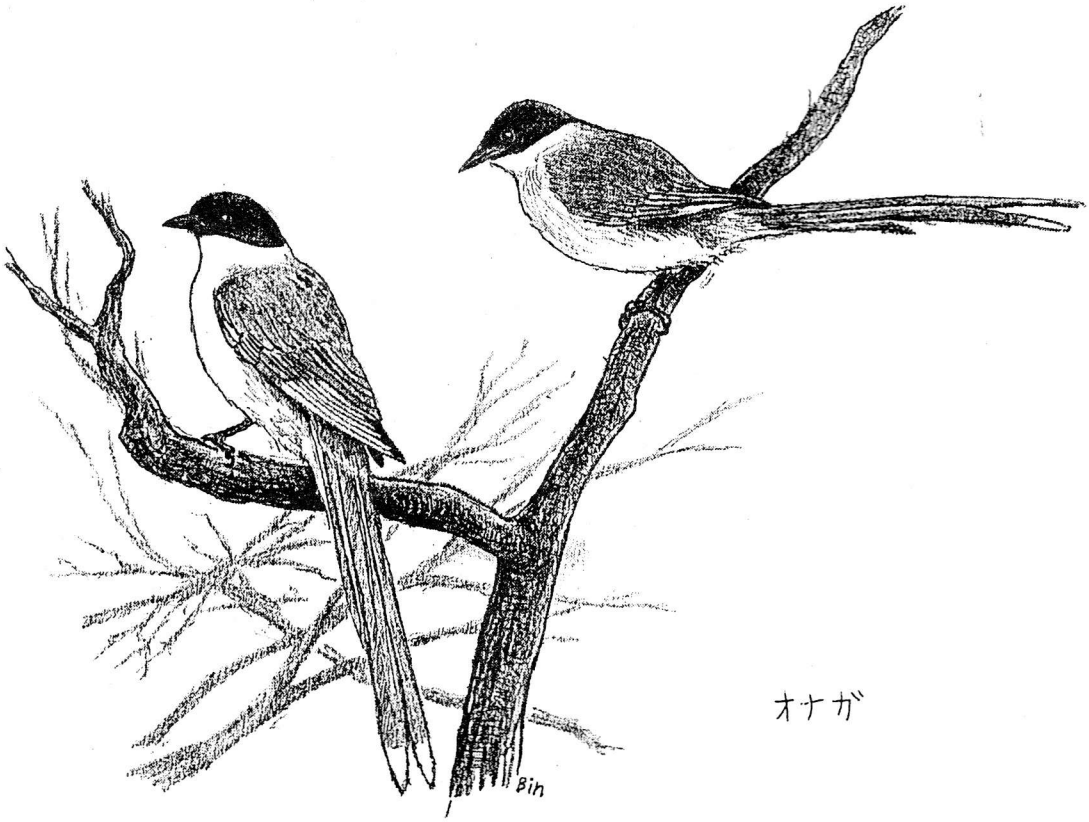
前回（11.12.31現在）繰越金	２，３００，１４１
収入の部	２０６，３９５
支出の部	５４８，７５１
差引合計	１，９５７，７８５

事務局より

＊41期ＯＢより、単年度納入を開始しています。
40期以前のＯＢの方のうち、５年分一括でなかった一部の方につきましては、振込票と納入お願いが同封されています。

＊現在は会費を納入された方に、会報をお届けしています。添付の住所録も、納入された方について、公開のご了解を頂いているの立場をとりました。
あとの方は、原簿には載っていますが、事務局が発送停止以後の確認をしていません。お問い合わせがあれば、停止時点での連絡先をお伝えします。

＊21世紀より、会報は年度に一冊を予定しています。最新情報はホームページをご覧になるか、事務局にお問い合わせ下さい。
臨時全体連絡は、はがき、封書などで行います。



オナガ

ＯＢ会報「やまざと」１４号

発　行　日　平成12年12月　　（’００冬号）
発　行　者　奥名　正啓
編集責任者　舟田　節子
印　　刷　プリントショップ多田

金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
事務局　〒920-0911　石川県金沢市橋場町10－49
☎076-222-9288　（舟田節子）
E-mail settyan-f@muc.biglobe.ne.jp
URL:www02.u-page.so-net.ne.jp/pa2/ma-okuna/kuwv/

奥名会長　E-mail ma-okuna@pa2.so-net.ne.jp
名倉名簿担当　E-mail nag@kso.njk.co.jp

振込口座　郵便局　00780-3-14120 金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会
〃　北国銀行本店　普　223703　金沢大学ワンダーフォーゲル部ＯＢ会